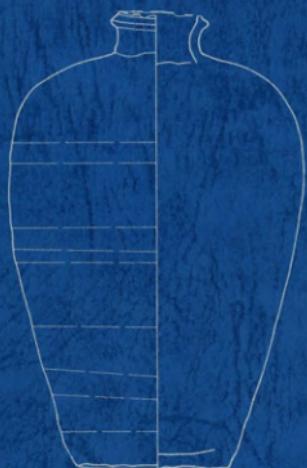


仙台市文化財調査報告書第230集

柳生台畠遺跡

—（仮称）柳生小学校建設関係発掘調査報告書—



1998年

仙台市教育委員会

柳生台畠遺跡

—（仮称）柳生小学校建設関係発掘調査報告書—

1998年

仙台市教育委員会



1・2・4区



34号ピット出土
古瀬戸瓶子

序 文

日頃、仙台市の文化財行政におきまして多大なるご理解、ご協力をいただき、誠にありがとうございます。

柳生台畠遺跡のあります柳生・西中田地区は、近年開通しました都市計画道路「川内－柳生線」と名取川に架かる「太白大橋」により仙台市中心部と直結し、多くの店舗やマンションなどが立ち並び、これに伴い、当地区の人口はここ数年増え続けています。

このため、西中田小学校では地区の児童を一校のみで対処しているのが現状で、多くの児童が長い間にわたりプレハブ校舎による学校生活を余儀なくされるという厳しい状況におかれてています。このような理由から、当教育委員会では柳生地区に小学校を新設する計画を立て、その前段階として学校用地内に所在します柳生台畠遺跡の調査に着手することとなったものであります。

遺跡は昭和57年の土地改良事業の際に発見され、当初は古墳時代と平安時代の遺跡と認識されていましたが、この度の発掘調査の結果、それらに加えて中世の屋敷跡や墓地跡が発見されました、墓地跡は一般庶民が葬られたとみられる土坑墓とよばれるものが密集して発見され、屋敷跡に関係するものとしては古瀬戸の瓶子が完全な形で埋められていたなど、極めて貴重な発見がありました。それらはいまだ十分に解き明かされていない中世という時代を理解する上で重要な発見であると考えられています。

私たちは『温故知新』の言葉のとおり、単にいにしえの人々の暮らしを知るのみならず、調査により得た成果を学校教育や社会全般において多くの市民の皆様が活用することで、皆様の将来の暮らし全般に何かしら役立つことがあるものと考えており、本書がその一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査やこの報告書の作成にご協力を賜りました地元の皆様や関係機関各位に心より感謝申し上げる次第です。

平成10年3月

仙台市教育委員会

教育長 堀 篓 克 彦

例　　言

- 本書は仙台市による、(仮称)柳生小学校建設に伴い、平成9年8月から10年1月にかけて実施した仙台市太白区柳生に所在する柳生台畠遺跡の発掘調査の成果を収録したものである。また本書の内容は既に公表している平成9年11月に実施した柳生台畠遺跡現地説明会の内容に優先するものである。
- 本書の作成作業は文化財調査第一係の佐藤　淳と調査第二係の伊藤孝行が行い、本文執筆・編集は佐藤が行った。なお陶器の鑑定に際しては同課職員の佐藤　洋の協力を得た。
- 検出遺構および出土遺物については次の方々から助言をいただいた。(敬称略)
井上喜久男、飯村　均、千葉孝弥。
- 写真図版1の『名取郡北方柳生村縦図』は仙台市太白区の柳生寺が収蔵するもので、寺の御好意により写真撮影し、掲載させていただいた。
- 調査および報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

- 第1図は国土地理院発行の1/25,000の地形図「仙台南西部」・「仙台東南部」を縮小して使用した。
- 第2図は仙台市都市計画課作成の都市計画基本図(平成5年・1/2,500)、第3図は都市計画図(昭和53年・1/2,500)を縮小して使用した。
- 土層注記に記載している土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1997)に基づいて認定した。
- 写真図版1の空中写真は昭和31年に米軍が撮影したものを使用した。
- 調査に関する平面基準は平面直角座標第X系を使用している。
- 全体図・遺構図

(1) 遺構名については以下の略号を使用し、略号に続く番号は調査時の検出順に付けている。

S I	堅穴住居跡・堅穴建物跡	S K	-土 坑
S D	-溝 跡	S X	-性格不明遺構
S B	-掘立柱建物跡	S A	-柱列跡
P (ピット) -柱穴・小穴			

※掘立柱建物跡については室内整理作業時にピットの組合せから建物を推定復元している。

- 層位名は基本層位をローマ数字、遺構内堆積土層位を算用数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付いている。
- 遺構図内の焼面や柱痕跡などについてはスクリントーンで示した。
- 遺構配置図・溝跡平面図については1/120、他の遺構図については1/60の縮尺を基本としている。

7. 遺物図

- 遺物の法量で()で示した数値は復元値である。
- 土器図中のスクリントーンは黒色処理を示している。
- 遺物図は実寸で作成したものを以下の縮尺で掲載している。

土 器: 1/3、石製品: 1/3、土製品: 1/3、鉄製品: 1/3、剥片石器: 2/3、古錢: 2/3

本文・写真目次

序 文

例言・凡例

本文・写真目次

第1章 はじめに.....	1	第4章 遺物・遺構の検討.....	83
第1節 調査に至る経緯.....	1	第1節 遺物の検討.....	83
第2節 調査要項.....	1	第2節 遺構の検討.....	91
第3節 遺跡の地理的・歴史的環境.....	2	第3節 遺構の変遷.....	99
第4節 調査の方法と経過.....	5		
第2章 調査成果.....	9	参考・引用文献.....	104
第1節 試掘調査.....	9	遺構写真図版.....	105
1. 検出遺構と出土遺物.....	9	遺物写真図版.....	124
(1) 土 坑.....	9		
(2) 溝 跡.....	11		
2. 基本層出土遺物.....	17		
第2節 本調査(1～6区)	17		
1. 基本層位.....	17		
2. 1・2・4区の検出遺構と出土遺物.....	25		
(1) 竪穴住居跡・竪穴建物跡.....	25		
(2) 土坑・陶器埋設遺構ほか.....	29		
(3) 溝 跡.....	55		
(4) 据立柱建物跡・柱列跡・ビット.....	62		
(5) その他.....	65		
(6) 基本層出土遺物.....	66		
3. 3区の検出遺構と出土遺物.....	68		
(1) 溝 跡.....	68		
(2) 小溝状遺構群.....	70		
(3) 基本層出土遺物.....	71		
4. 5・6区の検出遺構と出土遺物.....	71		
(1) 溝 跡.....	71		
(2) 基本層出土遺物.....	71		
5. 遺構確認調査.....	71		
第3章 自然科学分析.....	75		
第1節 リン酸分析.....	75		
第2節 ブラント・オパール分析、 花粉分析.....	78		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

太白区西中田、柳生地区は都市計画道路の開通等に伴い、人口が急増している地区であり、当地区は現在西中田小学校の学区となっているが、西中田小学校は市内でも有数の過密校で、これを仮設の校舎で対応している状況である。このことから地域の強い要望を受け、仙台市教育委員会では平成6年8月に柳生地区に小学校を分離新設することを決定した。

平成7年8月、最終的に選定された約19,000㎡の用地予定地には昭和57年の区画整理工事の際に堅穴住居跡が発見され、新たに遺跡登録した柳生台畠遺跡が所在し、加えて、農業振興地域の農用地であることから、その指定除外の必要性が生じることとなった。また平成8年12月に行われた、文化財課、都市計画課、学校施設課をはじめ、関係各課による立地適正調整会議においては、遺跡範囲は予定地の北半部が中心とみられていたことから、校舎等の建設により遺跡が破壊される部分を予定地南半部にしたいという文化財課の希望もあったが、用地内の各施設の配置上、校舎、屋体、プールなどの施設は用地北側を中心に配置される案が提示された。

当初、学校建設に関わる柳生台畠遺跡の発掘調査は平成9年4月開始の予定であったが、農振除外申請についての許可が平成9年以降となること、用地取得交渉が平成9年1月より開始し、5月をもって終了し、のち仮契約へ移行することとなったこと、また施設配置が未決定なことなどの理由から、当遺跡の発掘調査は平成9年8月より開始することが決定した。

第2節 調査要項

1. 遺跡名称 柳生台畠（やなぎゅうだいはたけ）遺跡

（宮城県遺跡地名登載番号 01363・仙台市文化財登録番号C-363）

2. 調査地 仙台市太白区柳生字台畠

3. 調査主体 仙台市教育委員会

4. 調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査第一係

　　担当職員 佐藤 淳・伊藤孝行

5. 調査期間 平成9年8月1日～平成10年1月20日

6. 調査面積 調査対象面積 約6,500㎡（校舎・屋体・プール・付け替え道路部分）

　　試掘調査面積 約620㎡

　　本調査面積 約1,270㎡

　　遺構確認調査面積 約310㎡（確認のみ）

7. 調査協力 岩岐勝利 名取土地改良区

8. 調査参加者

青木 吉次	浅見 禮子	阿部すえ子	阿部美枝子	阿部みのる	阿部美代寿	阿部 洋子
板橋 静江	井筒 孝子	伊藤 薫	伊藤 清子	伊深みつ子	入間川きみ	遠藤いな子
大久保あき子	大沼みさほ	小田鶴祥子	小野 辰雄	小野寺達重	小畠 和子	加嶋みえ子
菊地 進	工藤きく子	小林 国子	昆野コトジ	斎藤 慶子	佐々木志津子	佐藤とき子
佐藤 利子	佐藤 久栄	佐藤よしゑ	志賀ひろみ	庄子 弘子	須賀 栄子	菅井きみ子
菅井 君子	鈴木 いし	鈴木 峰子	鈴木みよ子	相馬みち子	竹森 光子	多田 葉子

田中さと子 知野 千鶴 千葉 恵子 早坂みつえ 福山 幸子 本郷 正 三浦 貢
山田千代子 目黒 成一 渡辺 純子 渡辺 洋子 渡部 麗子
整理作業参加者
青山 誠子 泉 美恵子 伊藤 幸子 伊藤 房江 佐藤とき子 佐藤 久栄 鈴木 峰子
関谷 栄子 高橋 勝恵 高橋 美香 千葉 恵子 渡辺 純子

第3節 遺跡の地理的・歴史的環境

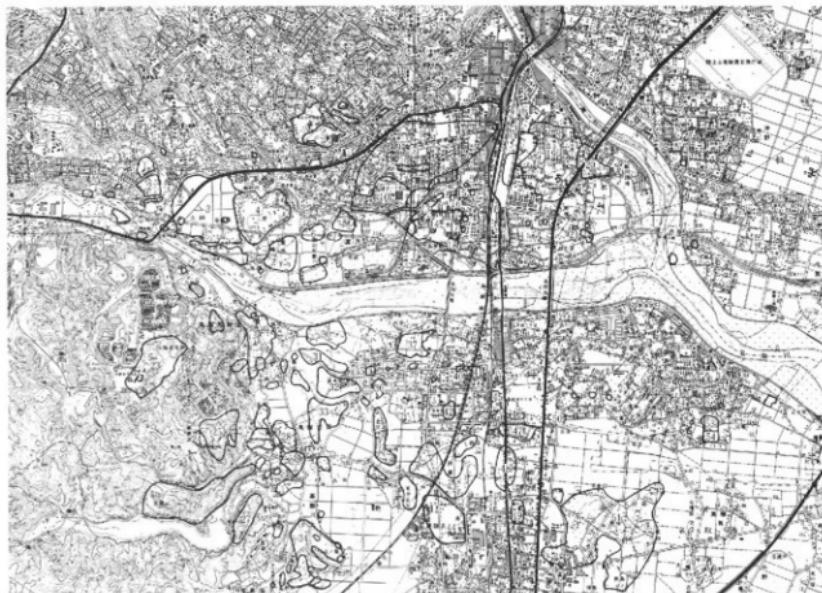
柳生台遺跡は仙台市太白区柳生字台畑に所在し、JR南仙台駅より西へ約1kmの、仙台市でも南端部に位置する遺跡である。遺跡の規模は東西約400m、南北約320mで、標高は10~12mである。遺跡の北側約600mのところには山形県境に源をもつ名取川が東流し、東方約7kmのところで太平洋へ注いでいる。仙台市太白区山田地区と名取市熊野堂地区を過ぎた名取川は川幅を増し、南側では段丘面の形成はみられなくなる。柳生・西中田地区的地形は自然堤防と低湿部が入組んでみられ、低湿部には中小様々な旧河道が確認できる。この状況はさらに東側の太白区中田地区や名取市北部にも及んでいるが、その中でも本遺跡の立地する柳生地区の状況は顕著である。

遺跡周辺をみると、周辺より1m程度高くなっている微高地の間に西及び西北方向から延びる旧河道とみられる低位部が横切っており、現況では微高地部が畑、低湿部が水田という土地利用がなされている。遺跡範囲の東側では旧河道と後背湿地による低湿部が広がっており、この状況は今回の調査対象地内でも確認できる。

調査地内の地形をみると、現在は近年の区画整理により旧地形が改変されているが、本来登録されている遺跡範囲は調査地北端部に僅かに張出した微高地部のみであった。調査の結果、この微高地に沿った南側には東西方向の旧河道がみられ、これは東端部でより広い低湿部となっていく。また調査地南西部ではさらに南に隣接する旧河道とみられる地区との間であることから、北端部ほどの比高差はないが、やや高まった地形となっている。

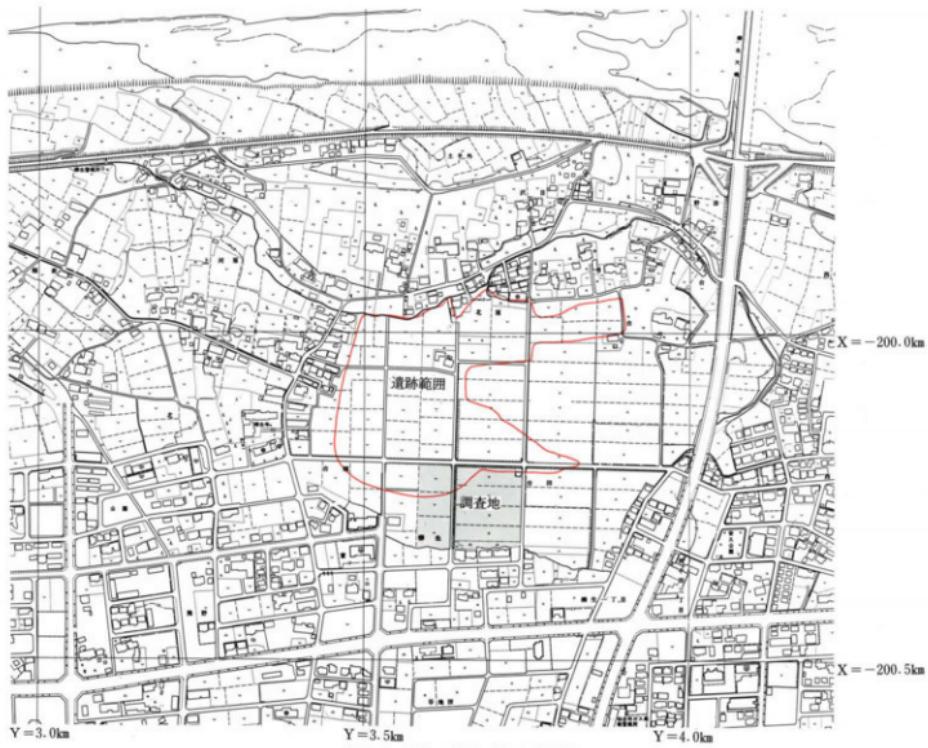
周辺の遺跡を概観してみると、遺跡の分布密度は高く、丘陵部を除いた遺跡の立地はほとんどが微高地上を中心に入りられる。名取川南岸で旧石器時代の遺跡は確認されておらず、また縄文時代においても安久遺跡で後期の遺物が出土するなど僅かである。この傾向は弥生時代になども同様で、自然堤防がより発達し、これらの時代の遺跡数が多い北岸部とは異なり、南半部は名取川による土砂の供給は多分に受けながらも、それ以外の中小河川の流路が一定しないことから、人々の活動が活発になるには、まだしばらくの時間を要するものと考えられる。

次に周辺の主だった遺跡をみてみると、安久東遺跡では弥生時代前期の土器を含む層のほか、古墳時代前期の前方後方形の周溝墓とその周辺には同時期の竪穴住居跡や平安時代の集落も発見されている。中世では15~17世紀の中で新旧二時期の堀によって方形に区画された屋敷跡が発見され、時代を追って遺跡の変遷がとらえられる遺跡である。また西側に隣接する安久遺跡でも平安時代の竪穴住居跡と中世の堀跡が発見されている。栗遺跡は古墳時代末の7世紀を中心とする集落跡で、40軒以上の竪穴住居跡が発見され、『栗園式』土師器の標識遺跡となっている。中田南遺跡は縄文時代から中世までの複合遺跡で、主なものでは古墳時代末から奈良時代前半にかけての竪穴住居跡30軒前後のほか、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡、掘立柱建物跡などが多数発見されている。また鎌倉時代と室町時代の屋敷を囲む溝跡や堀跡が発見され、これらの屋敷跡は当時の有力農民層のものである可能性が考えられている。松木遺跡は本遺跡の南西約400mに位置し、本遺跡との関わりも考えられる遺跡である。中世では鎌倉時代の屋敷跡と考えられる掘立柱建物跡や井戸跡、溝跡が発見された。またここでは近世の建物跡や溝跡、土坑なども発見されており、これらは多量に出土した陶磁器から、16~19世紀のもので、この中で遺構は3時期の変遷があることがわかった。



道 路 名	都 列	立 地	年 代	道 路 名	都 列	別 立 地	年 代
1 北尚道路	集落路	段丘	旧石器·绳文·古墳·古代·近世	28 集束東道路	包含地	冲积地	绳文·弥生·古墳·古代
2 山王上/台造路	集落路	段丘	旧石器·绳文·古代·近世	29 川上道路	包含地	冲积地	绳文·弥生·古代
3 山田赤里道路	集落路	段丘	绳文·古代·近世	30 八ノ口道路	包含地	自然堤防	古代·中世·近世
4 上野瀬道路	集落路	段丘	绳文·古代	31 鹰谷中道路	集落路	山河道	古代
5 三井家瀬路	集落路	段丘	绳文·古代	32 段丘瀬路	集落路	自然堤防	古代
6 游足屋原八角路	集落路	自然堤防	绳文·古代	33 矢須御道路	包含地	冲积地	弥生·古墳·古代
7 游足屋原赤栗路	集落路	自然堤防	绳文·古代	34 今熊野道路	集落路·貝塚	丘陵	绳文·弥生·古墳·古代
8 霧島瀬路	冲积路	冲积带背斜	中世	35 佐久-大通路	集落路	自然堤防	古代·中世·近世
9 霧島瀬路	木田路	後背地带	旧石器·绳文·弥生·古墳·古代·中世·近世	36 田舎瀬路	包含地	自然堤防	古墳·古代
10 山川通路	集落路	自然通路	冲积·弥生·古墳·古代·中世	37 雷門川台烟道路	混合地	自然堤防	古墳·古代·中世·近世
11 下ノ内路通路	集落路	自然堤防	绳文·弥生·古代·中世	38 雷門路	包含地	自然堤防	古代
12 下ノ内路通路	集落路	自然堤防	绳文·弥生·古代·中世	39 雷門東道路	包含地	自然堤防	古代
13 小川坂通路	集落路	自然堤防	绳文·弥生·古墳·古代·近世	40 安久美道路	集落路	混合地	绳文·弥生·古代·中世
14 大野田古群群古群群他	自然堤防	古墳·古代·中世	41 安久美道路	集落路	自然堤防	弥生·古墳·古代·中世·近世	
15 安久美道路	集落路	自然堤防	弥生·古代·中世·近世	42 鹿瀬路	集落路	自然堤防	弥生·古墳·古代
16 大野田麻路	集落路	自然堤防	绳文·弥生·古墳·古代	43 井ノ内道路	集落路	自然堤防	弥生·古墳·古代
17 仁ノ瀬崩路	古墳·集落跡	自然堤防	绳文·弥生·古墳·古代·中世	44 田浦路	包含地	冲积地	绳文·弥生·古墳·古代
18 田浦欲崩路	集落路	自然堤防	古墳·中世	45 前田庄路	船路	自然堤防	中世
19 郡山通路	古墳·水汎海地	自然堤防	绳文·弥生·古墳·古代	46 北瀬路	包含地	自然堤防	古代
20 北前城跡	城塁跡	自然堤防	绳文·弥生·古墳·古代	47 中ノ内南瀬路	集落路·堆积地	自然堤防	绳文·弥生·古墳·古代·中世
21 汐ノ上/工造路	包含地	自然堤防	古墳·古代·中世	48 上ノ内田瀬路	集落路	自然堤防	弥生·古墳·古代
22 小柳(古瀬)通路	城塁跡	丘陵	中世	49 佐目瀬路	包含地	自然堤防	弥生·古墳·古代
23 横糸豆大崩跡	城塁跡	丘陵	中世	50 后川瀬路	木田路	自然堤防	弥生·古代·中世·近世
24 那野町曾智跡	城塁跡	丘陵中腹	中世·近世	51 下余田瀬路	集落路	自然堤防	古墳·古代
25 高畠城跡	城塁跡	丘陵	中世	52 小田中瀬路	集落路	自然堤防	吉備·古代
26 大熊山船跡	城塁跡	丘陵	中世	53 戸ノ内瀬路	集落路·或河路	自然堤防	弥生·古墳·古代·中世
27 丸山城跡	城塁跡	丘陵	中世	54 四方瀬路	集落路·某跡路	自然堤防	古墳·古代·中世·近世

第1図 柳生台畠遺跡周辺の遺跡



第2図 遺跡の位置と範囲（現在）



第3図 遺跡の位置と範囲（区画整理前）

第4節 調査の方法と経過

【調査区の設定】

小学校建設予定地は東西約160m、南北約120m、面積が19,200m²で、の中には校舎とこれと独立して屋内運動場とプールを建設する計画であった。また現在、予定地中央にある市道を西端に移し替えることとなったため、これらの構造物全体が地下遺構を損なう恐れが生じた。しかし調査準備段階での7月時点では市道部分についての位置は確定していたが、建物部分については各々の配置が決定しておらず、唯一提示されたのは調査の必要性がないとみられる校庭部分が予定地南東部ということのみであった。このため当初、調査はまず遺構、遺物の有無を確認するための試掘調査を実施する計画であったことから、試掘区の設定に関しては市道部分に加え、建物配置が予想される北及び西半部全域を対象とすることにより、建物配置に対応せざるを得ない状況となった。

試掘トレンチは長さ15m、幅2.5mを基本とし、1～5トレンチは幅9mの市道部分、6～10トレンチは現市道の西側、11～17トレンチは現市道の東側北半部に合計で17か所設定した。次に試掘結果を踏まえ、より広範囲な調査の必要性があると認められた4つの地区について本調査区を設定した。1区は6トレンチ東側に19×13m、2区は8トレンチを中心22.5×21.5m、3区は14トレンチの西側に14×12.5mの規模で設けたが、4区については当初、11・12トレンチをつなぐ形で東側に拡張する考えであったが、最終的には両トレンチ間が建物配置部分から外れたことから、11トレンチを中心とした22×8mを4A区、12トレンチを中心とした18×6.5mを4B区とし、この間については遺構検出のみに止め、掘り込みは行っていない。以上の調査区とは別に予定地内にポンプ施設2か所と倉庫等の建物が新たに提示されたことから、予定地北西及び北東隅のポンプ施設をそれぞれ5区、6区とした。またこれまでの調査区で検出した溝跡の延長を確認するために、18～29の計12の遺構確認トレンチを従来の調査区間に配置した。これらの規模は任意で、ここでの遺構の掘り込みは行っていない。

【調査の経過】

調査予定地は現況は西半部が畑、東半部が水田となっており、特に畑部分では除去すべき表土が厚いことから、調査はまず重機を使用しての表土剥ぎから開始した。試掘ということもあり、掘削は現耕作土および区画整理前の耕作土の除去に止め、これより下層は人力により掘り下げた。1～10トレンチでは1トレンチ以外で溝跡、土坑等が検出されたが、これらの時期や性格が不明なことから、基本的に試掘時検出の遺構は全て掘り込み、固化している。続く11～17トレンチでは11・12トレンチ検出の溝跡や、小溝状遺構、土坑は掘り込んでいるが、この地区は旧河道上で、水田作土とみられる層や自然層が厚く堆積していることから、後の作業工程上、13～16トレンチについては面積を半分程度に止め、残りは本調査と並行して行うこととした。試掘調査終了時には18～29トレンチでの遺構検出作業を行った。

試掘調査の結果を踏まえて設定した本調査区は1～4区で、調査はまず1・2区を重機により表土除去した後、遺構の検出・掘り込み作業を並行して行った。2区ではV層面での調査終了後、一部に下層調査区を設け、調査を終了したが、1区については北半部はV層面、南半部はII層面で検出した溝跡や多数の土坑を掘り込んだ後、II層水田跡やIII・IV層面でも僅かであるが土坑が検出されたため、これらを掘り込んだ。また南半部ではV層中より竪穴住居跡が検出されたことから、周囲のV層を掘り下げると同時に北側のV層面での段差部分での下層調査を行った。1区調査の終盤には4区に入り、ここではまず4区を縦断する溝跡の検出作業を行った後、4A・4B区の拡張部を含めた溝跡や土坑を掘り込み、V層面を出し、4A区北端部で下層調査を行った。4区と並行して行った3区では、幾つかの溝跡と小溝状遺構が検出され、これを調査した後に北壁際にトレンチ状の下層調査区を設け、基本層位の把握に努めた。5区では溝跡調査の後、東壁際に下層調査を行い、6区では遺構は検出されなかったが、西半部を掘り下げたところ、縄文土器を包含する層がみられたことから一部拡張した。最後に13・15・16トレンチの未掘部分の掘り下げを再開したが、16トレンチで小溝が検出された以外、遺構はみられず、1月20日、これをも

って全ての調査を終了した。

【検出遺構の記録】

調査区及び検出遺構を図化するため、まず調査地内の基準点の設置を㈱アジア航測に委託した。基準点は名取市田高にある国土地理院設置の三等三角点を使用し、ここよりGPSを用いて移設した5つの点を調査地周辺に配した。各試掘トレンチはこの基準点からトレンチ四隅の座標数値を求め、後日復元した。トレンチ内での図化は中央に任意のラインを設定し、これを基に簡易遺り方測量を行った。1~4区の図化にあたっては、同基準点を基に平面直角座標第X系に沿い、1区周間に14点、2区内部に9点、3区周間に14点、4区周間に12点を10ないし5m間隔の座標点を設置した上で、これを基に簡易遺り方測量により1/20及び1/10の構造平面・断面図を作成した他、各区ごとに1/20で基本層位の断面図を作成した。グリットラインは国土座標数値をそのまま呼称し、遺物取上げは各遺構ごとに取上げ、基本層中のものは各区、トレンチごとに行った。

写真による記録は主に35mmカメラにモノクロ、カラーリバーサルフィルムを使用した他、6×7判カメラにモノクロフィルムを併用した。また11月28日には㈱シン技術コンサルに委託し、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、カメラは6×6判でモノクロ、カラーリバーサル、カラーネガフィルムを使用した。

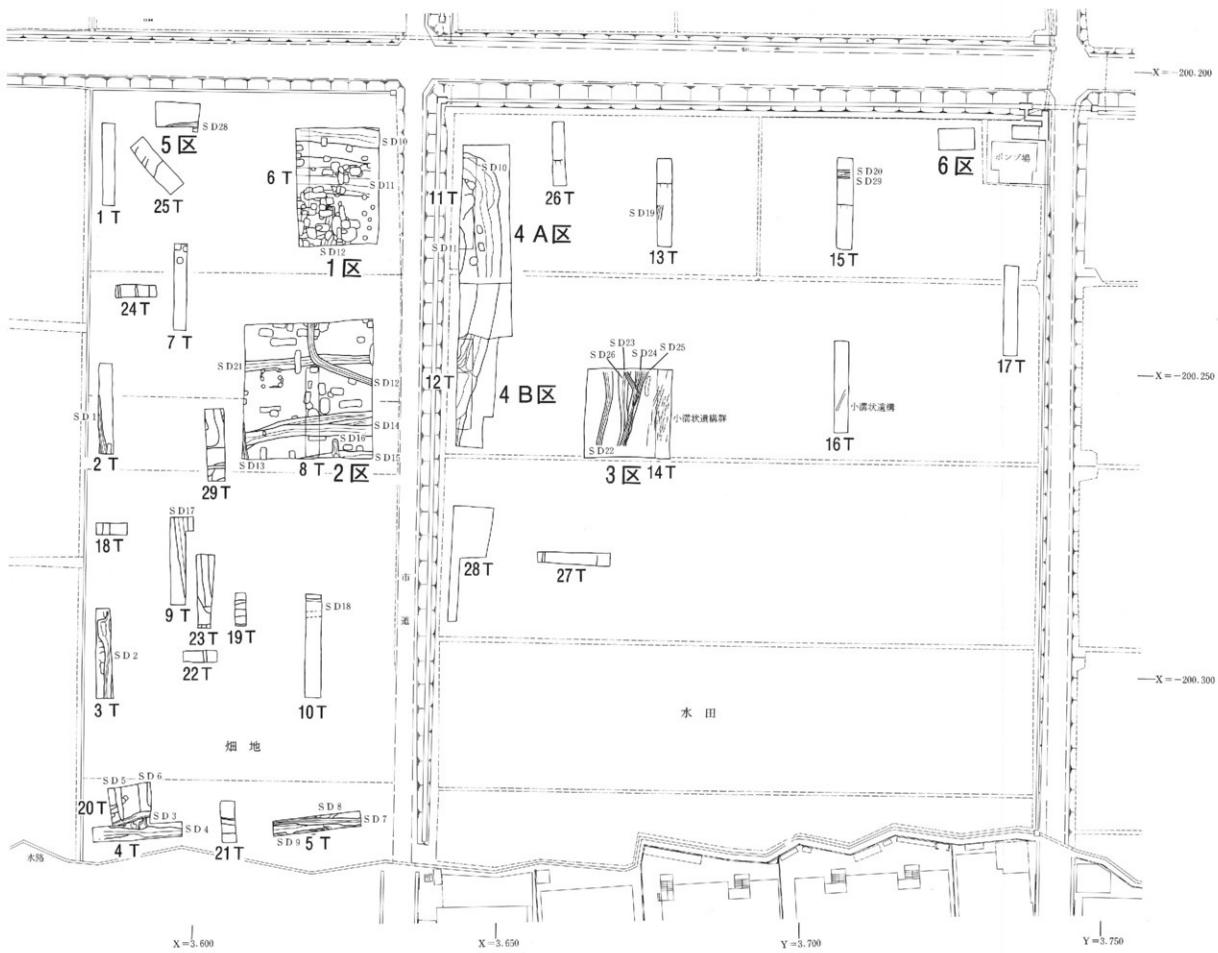
【その他】

1区・4区では水田跡に伴う擬似畦畔が検出された他、東半部のトレンチでは水田作土の可能性のある層が確認され、また3区や16トレンチでは畑跡に伴うとみられる小溝状遺構が検出されたことから、これらを検証すべく、1区・3区・15トレンチ・16トレンチにおいてプランツ・オバール分析試料と3区では花粉分析試料の採取を行い、㈱古環境研究所に分析依頼し、また土坑墓とみられる1・2区の土坑中の土壤を採取し、㈱パリノ・サーヴェイにリン酸の分析依頼をした。

普及啓発作業では1・2・4区で発見された中世の屋敷跡と考えられる遺構群や土坑墓群の資料的価値が高いことから、11月27日には報道発表を行い、11月29日には一般市民を対象とした現地説明会を開催した。

トレンチ番号	規模 (m)	面積 (m ²)	検出遺構	備考
1	13.5×2.2	29.70	なし	
2	15.0×2.4	36.00	SK1・SD1	
3	14.8×2.6	38.48	SK5・6・7・8・9・SD2	
4	14.8×2.4	43.71	SD3・4・5・6	
5	14.7×2.3	36.75	SD7・8・9	
6	14.6×2.2	32.12	SK10・11・12・16・17・18・19・38・123、SD10・11・ピット	本調査1区
7	14.6×2.2	32.12	SK2・5・4	
8	14.7×2.2	32.34	SK13・14・15・20・21・22、SD14、ピット	本調査2区
9	14.5×2.6	37.70	SD17	一部拡張
10	17.1×2.7	46.17	SD18	
11	14.8×2.4	35.52	SD10	本調査4区北
12	14.9×2.4	35.76	SD10	本調査4区南
13	14.5×2.5	36.25	SD19	
14	15.0×2.3	34.50	小溝状遺構群	本調査3区
15	15.0×2.7	40.50	SD20・29	
16	15.2×2.4	36.48	小溝状遺構	
17	15.0×2.3	34.50	なし	

第1表 試掘トレンチ一覧



第4図 調査区位置・遺構全体図

第2章 調査成果

第1節 試掘調査

1. 検出遺構と出土遺物

ここで報告するのは、当初、試掘調査区として設定した17か所のうち、後に本調査区として拡張した6・8・11・12・14トレンチを除いたトレンチにおいて検出された遺構・遺物であり、検出遺構には土坑、溝跡などのはか、焼跡に伴うとみられる小溝がある。

(1) 土坑

SK1 土坑

2T、V層上面で検出し、SD1を切る。形態は溝状を呈する長楕円形とみられるが、堆積土の状況から溝跡とは区別した。規模は長軸180cm以上、短軸67cm、深さ41cm以上である。長軸方向はN-8°-Eである。断面形は舟底状で、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は美濃（志野）産の菊皿が1点で（9図10）、口縁部を打ち欠いたのちに擦っており、また疊付も擦っている。

SK2 土坑

7T、V層上面で検出した。形態は隅丸正方形で、規模は長軸113cm、短軸100cm以上、深さ73cmである。長軸方向はN-5°-Wである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK3 土坑

7T、V層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸119cm、短軸75cm以上、深さ34cmである。長軸方向は不明である。底面はやや中央が窪むがほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK4 土坑

7T、V層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸135cm以上、短軸110cm以上、深さ63cmである。長軸方向は不明である。断面形は舟底状を呈し、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は4層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK5 土坑

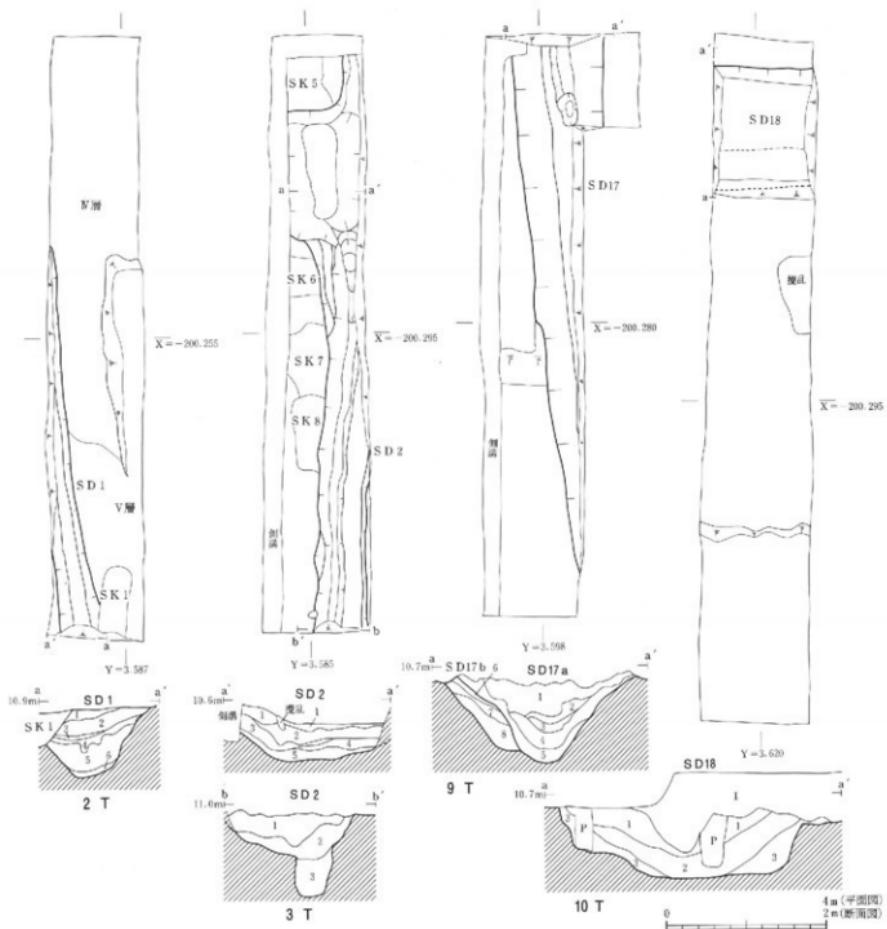
3T、V層上面で検出し、SD2に切られる。形態は一部がややくびれる長楕円形で、規模は長軸415cm以上、短軸125cm、深さ82cmである。長軸方向はN-Sである。底面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器1点がある。

SK6 土坑

3T、V層上面で検出し、SD2に切られる。形態は長楕円形とみられ、規模は長軸120cm以上、短軸100cm、深さ44cm以上である。長軸方向はW-Eである。底面はほぼ平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK7 土坑

3T、V層上面で検出し、SD2に切られる。形態は不整形で、規模は長軸200cm、短軸190cm以上、深さ68cmである。長軸方向は不明である。底面は傾斜があるが平坦で、壁面は一部でオーバーハングしながら直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器1点がある。



サンプル	地盤	塑性	土色	土性	参考	サンプル	地盤	塑性	土色	土性	参考
2 T SD1	1 塗 黄色 YR14/4	シルト	酸化鉄鉱を全層に含む			SD17a	1 粘 黄色 10YR1/4	粘質シルト	酸化鉄鉱を下部に含む		
	2 にふる 黄褐色 10YR4/2	シルト	酸化黄色ブロッケを少含む			2 灰 黄褐色 10YR1/2	シルト	酸化鉄鉱を全層に含む			
	3 にふる 黄褐色 2.5Y4/2	シルト				3 灰 黄褐色 10YR1/2	粘質シルト	酸化鉄鉱を全層に含む			
	4 エリーヴ黄色 2.5Y3/2	シルト	褐色シルトブロッケを多量含む			4 灰 黄褐色 10YR1/2	シルト	酸化鉄鉱を全層に含む			
	5 黄 鳥色 2.5Y3/2	シルト	酸化鉄鉱を全層に多量含む			5 灰 黄褐色 10YR1/2	シルト	層下部に灰色シルトブロッケ、酸化鉄鉱を全層に含む			
	6 黄 鳥色 2.5Y3/2	シルト	黄褐色浮土上に状状に挟む			6 にふる 黄褐色 10YR1/4	粘質シルト	酸化鉄鉱を全層に含む			
3 T SD2 (中央部)	1 塗 黄色 10YR5/4	浮土	ないし褐色シルトブロッケ、塗状鉄鉱を全層に少量含む			7 灰 黄褐色 10YR1/2	粘質シルト				
	2 にふる 黄褐色 10YR5/2	シルト	酸化物アリゴードを少量含む			8 灰 黄褐色 10YR1/2	シルト				
	3 塗 黄褐色 10YR5/2	シルト	酸化鉄鉱を全層に含む			灰 黄褐色 10YR1/2	粘質シルト				
	4 塗 黄褐色 10YR5/2	シルト	褐色シルト上に薄い泥、褐色鉄鉱を少量含む			9 T SD17b	1 黄 黄褐色 10YR5/2	粘質シルト	V層にふる 黄褐色 2.5Y3/2	、黒化鉄鉱を少量含む	
3 T SD2 (南北)	5 塗 黄褐色 10YR5/2	シルト	ないし褐色シルトブロッケを少含む、酸化鉄鉱を少量含む			2 にふる 黄褐色 10YR5/3	砂 貫土	層下部に少い灰褐色鉄鉱上に褐色の浮土となる			
	1 にふる 黄褐色 10YR5/2	シルト	にふる 黄褐色ブロッケを少含む			3 黄 鳥色 2.5Y3/3	砂 貫土	汚水中の黄褐色浮土とその不規則な分布となる			
	2 塗 黄褐色 10YR5/2	シルト	酸化鉄鉱を全層にまばらに含む								

第5図 試掘トレンチ (1)

SK 8 土坑

3 T、V層上面で検出し、SD 2に切られる。形態は橢円形とみられ、規模は長軸205cm、短軸103cm以上、深さ48cmである。長軸方向はN-Sである。底面は平坦で、壁面は南端部で抉られオーバーハングするが、壁面の崩落によるものとみられる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器3点がある。

SK 9 土坑

3 T、V層上面で検出し、SD 2に切られる。調査区壁面を中心とした僅かな検出のため、形態は不明で、規模は長軸280cm以上、短軸27cm以上、深さ20cm以上とみられる。長軸方向は不明である。また堆積土の全体は明らかでないが、確認できる状況から人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

(2) 溝 跡

SD 1 溝跡

2 Tで検出し、検出面は北半部がN層、南半部がV層上面である。調査区南端部でSK 1に切られている。確認長は約10mで、溝幅は断面からみて150cm程とみられるが、北側ではやや狭くなっている。深さは80~90cmである。方向はN-8°-Wである。底面幅は狭く、壁面はそれほど急ではない。堆積土は6層で、全体にブロック土も含むが、最下層は砂質土を層状に挟む層で、自然堆積とみられる。SD 1は南下し、18Tで検出された溝跡や、3 T検出のSD 2に続くものとみられる。出土遺物は無い。

SD 2 溝跡

3 Tで検出し、検出面はV層上面である。調査区北半部でSK 5・9、中央部でSK 6~8を切っている。またこの溝跡は西側に張出す部分がみられる。確認長は約15mで、溝幅は160cm程、張出し部で250cm、深さは1m前後とみられる。方向はN-5°-Eである。断面形は下半部が狭く、上端幅50cm以内で、底面幅は狭く、壁面が直立しているが、上半部は壁面の立上がりが緩やかで、溝全体からみると、東側がテラス状に平坦面を形成している。堆積土は3層で、張出し部分では5層に分層されたが、いづれも自然堆積とみられる。SD 2は南下して4 T、20 Tで検出されたSD 5、或いはSD 6に続き、SD 4に合流するものとみられる。出土遺物は土師器2点、須恵器2点、焼瓦1点がある。

SD 3 溝跡

4 Tと北側の20Tで検出し、検出面はV層上面である。SD 4・5・6を切っている。確認長は約9mで、溝幅は広いところで90cm、深さ20~30cmである。方向はN-74°-Eである。底面幅は狭く、起伏がみられ、壁面は緩やかに立上がりしていく。堆積土は1層で、全体が細砂で占められ、底面には粗砂がみられることから、短時間に埋まった自然堆積とみられる。SD 3は東流して21Tで検出され、重複関係や位置関係から5 TのSD 7に続くものとみられる。出土遺物は須恵器2点、在地産の中世陶器の甕2点、焼瓦1点がある。(9図13)は甕の口縁部破片で、受口状を呈する。

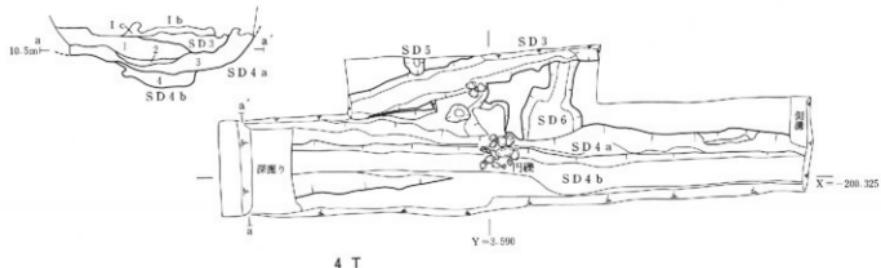
SD 4 a・4 b 溝跡

4 Tで検出し、検出面はV層上面である。SD 3に切られるが、北側でみられるSD 5・6とは接続部の状況からみて、同時存在していたものと考えられる。確認長は約14mで、底面や断面の状況から、古い段階のSD 4 bと、それが一部埋まった後に掘り直したとみられるSD 4 aに分けられる。SD 4 aの溝幅は250cm以上、深さ50~60cm、SD 4 bは幅1m前後、深さは20cm程の残存となっている。方向はいづれもN-88°-W程度である。断面形はSD 4 aは緩やかな舟底状で、底面幅は広く、壁面の立上がりは緩やかである。SD 4 bは下半部のみの残存であるが、底面幅は狭く、壁面は急に立上がるるものである。堆積土はSD 4 aが3層、4 bが下部に粗砂を含む1層のみが確認され、いづれも自然堆積とみられる。SD 4 aは21Tで確認され、5 Tの中でも最も古いSD 9に続くものとみられる。出土遺物はSD 4 aから須恵器1点、在地産の中世陶器の甕など6点、瀬戸・美濃産の小皿1点、

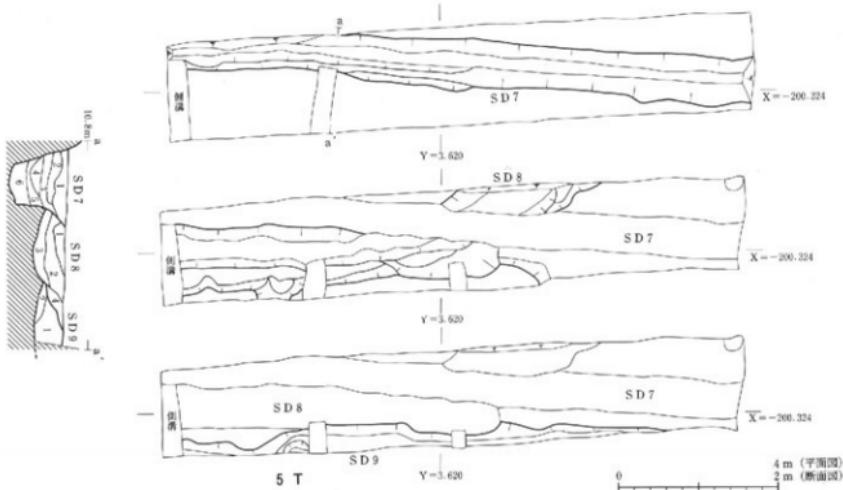
美濃（志野）産の丸皿1点、器種不明の瓦質土器1点、焼し瓦1点がある。（9図11）は底部が欠損している。同1層からは（9図8）が出土しており、底部は削り込んだ基筒底である。

SD 5 溝跡

4 T・20Tで検出し、検出面はV層上面である。SD 3に切られるが、南下してその南端部でSD 4に接続している。確認長は約6.5mで、溝幅は広いところで1m程度であるが、SD 4との接続部ではプランも不明瞭で、浅くなり、幅は広くなりながらSD 4へと統していく。深さ、全体の断面形は不明である。20Tでみた方向はN-5°-Wである。出土遺物は在地産の中世陶器の甕1点がある。



4 T



5 T

ゾン	地	構	位	土	性	備	考	ゾン	地	構	位	土	性	備	考
4 T	SD 3	1	褐	色	10TR4/6	砂土(細)	下部に一部粗粒、低地に礫化鉄屑を含む	SD 7	4	褐	灰	10TR5/1	砂質シルト	礫化鉄屑を全体に少量含む	
		1	れい	黄褐色	10TR5/2	砂質シルト	礫化鉄屑を多量含む		5	灰	褐	10TR5/2	砂質シルト	礫化鉄屑を全体に少量含む	
	SD 4a	2	灰	黄	10TR6/2	砂質シルト	礫化鉄屑を少量含む		6	れい	黄	2.3TR6/4	砂	質	上
	SD 4b	3	褐	灰	10TR6/1	砂質シルト	下部に礫化鉄屑を含み、整化鉄屑を少量含む		1	れい	黄褐色	10TR6/1	シルト	礫化鉄屑を全体に含む	
5 T	SD 5	注	記	た	し			SD 8	2	灰	黄	10TR6/2	砂質シルト	礫化鉄屑を全体に含む	
	SD 6	注	記	た	し				3	灰	黄	10TR6/2	砂質シルト	礫化鉄屑を全体に含む	
	SD 7	1	れい	黄褐色	10TR6/2	シルト	れい・黄褐色シルトゾックを層上に含む		4	褐	灰	10TR6/2	シルト	れい・灰・褐色砂質シルトを隙間に散在する	
SD 9	SD 7	2	れい	黄褐色	10TR6/2	シルト	礫化鉄屑を多量含む	SD 9	1	灰	黄	10TR6/2	砂質シルト	高褐色砂質シルトを隙間に挟む	
	SD 8	3	灰	黄	10TR6/2	砂質シルト	礫化鉄屑を全体に少量含む		2	れい	黄	2.3TR6/4	砂	質	上

第6図 試掘トレンチ（2）

SD 6 溝跡

4 T・20 Tで検出し、検出面はV層上面である。SD 5同様にSD 3に切られるが、南下してその南端部でSD 4に接続している。確認長は約7 mで、溝幅は20 Tで150cm程度一定しているが、SD 3と4との間で幅が狭くなり、再び広がりながらSD 4に取付いている。深さ、全体の断面形は不明である。20 Tでみた方向はN-2°-Wで、SD 5とはほぼ平行関係にある。またSD 6は20 T南東部で東へ分岐するプランが確認されており、これは5 TのSD 8に続く可能性がある。出土遺物は無い。

SD 7 溝跡

5 Tで検出し、検出面はV層上面である。南側ではほぼ平行して東流するSD 8を切っている。確認長は14.5 mで、溝幅は100~120cm、深さは70cm程度である。底面は幅が狭く、壁面は全体に立上がりは急であるが、上半部がやや緩やかになる箇所もみられる。方向はN-85°-Wである。堆積土は6層で、最下層は砂質土だが、全体に粘性が強く、自然堆積とみられる。SD 7はこのトレンチに限っては重複するSD 8・9に比べて溝幅が狭く、深さはあり、断面形状からみても異なるものであるが、この溝が東側にどのように延びるかは不明である。出土遺物は美濃（志野）産の丸皿1点、古鏡1点がある。

SD 8 溝跡

5 Tで検出し、検出面はV層上面である。SD 8はトレンチ中央で交差するSD 7に切られ、また南側に平行して走るSD 9を切っている。確認長は約11mで、溝幅は2 m以上とみられるが、SD 7に切られていることから全体は不明である。深さは全体に浅く、40cmである。断面形は緩やかな舟底状を呈し、壁面へつながる。方向は西半部ではSD 7・9同様に東へ向うが、トレンチ中央部で方向を変え、北東方向へ延びている。またこの屈曲部分から東側に段差がみられ、反対側の立上がりはSD 7に切られ不明であるが、浅いながらも東方向へ向う流れの可能性があることも考えられる。堆積土は4層で、全体にシルト質であるが、南側にみられる4層はシルト質層が数枚、層状に重なる層で、断面形状からみて、溝の掘り直し前に堆積した層である可能性が強い。出土遺物は無い。

SD 9 溝跡

5 Tで検出し、検出面はV層上面である。北側ではほぼ平行して東流するSD 7に切られている。確認長は約12.5 mで、溝幅は南壁が調査区外のため不明であるが、1.5m以上はあるものと推定され、深さは40cm以上とみられる。断面形はSD 8同様に舟底状を呈し、底面に明瞭な平坦面はみられず、壁面はかなり緩やかに立上がるものとみられる。方向はW-Eである。確認できる堆積土は2層で、砂質土を主体としている自然堆積層である。SD 9は4 Tで検出されたSD 4とみられ、SD 4の状況からみると、SD 9は後世の耕作により残存が極めて悪いものとなっているが、溝上半については本来は幅の広く、より深いものであったとみられる。しかしながら、5 TについてはSD 4が新旧2時期に分かれるような状況は確認できなかった。出土遺物は無い。

SD 17 a・17 b 溝跡

9 Tで検出し、検出面はV層上面である。他遺構との重複はみられないが、断面・底面形状からみて、ほぼ同位置に新しいSD 17 aと僅かに西側にずれる古い17 bの新旧2時期があることがわかった。確認長は約13mで、溝幅は約2 m、深さは1 m程度と、溝幅のわりには深いものである。SD 17 aの形状は断面形は底面幅ではなくV字形を呈し、壁面は変化なく立上がって行き、西壁の上半部の一部で傾斜がやや緩やかになっている。SD 17 bについては規模、形状、深さ共に17 aと同様のものとみられるが、詳細は不明である。方向はN-7°-Wで直線的に南へ延びていく。堆積土は17 aが5層、17 bが3層に分層され、全層とも自然堆積とみられるが、特に17 bの最下層については、シルトと粘質シルトの互層となり、長い期間にわたり堆積したものとみられる。SD 17については北側で24 T検出の溝跡と、2区検出のSD 14のいづれかの続きである可能性が考えられる。また溝跡の南側については、東に隣接する23・19 Tでのプラン確認状況から、SD 17は23 T南端部で方向を東へ変えることがわかった。出土遺

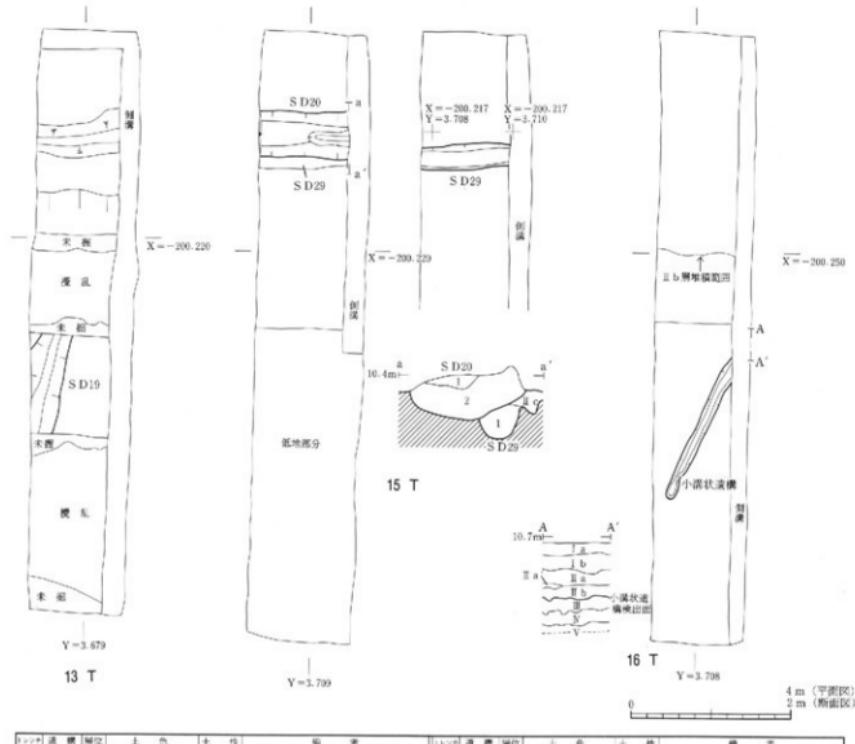
物は土師器 3 点、在地産の中世陶器の壺 1 点がある。

SD 18 溝跡

10Tで検出し、検出面はV層上面であるが、現代の耕作土であるI層を除去中に溝跡の南壁側を掘り過ぎている。他の遺構との重複は2つのピットに切られているが、ピットの性格は不明である。確認長はトレンチ幅の約2.5mで、溝幅は断面からみて約3mであるが、北側により広がる可能性もある。深さは80cm程度である。底面は幅160cmと広く、わりと平坦面となり、壁面は北壁は急に立上がるが、南壁は底面から緩やかに立上がり、中位がテラス状となり、それより上半は急に立上がるものとみられる。このように底面幅の広い溝跡は本調査区にみられるSD10・11などに類似し、他のトレンチ検出の溝跡の形状とは異なる。方向はほぼ東西方向である。堆積土は3層で、2・3層については明瞭な互層となることから、長い期間をかけて埋まっていったものとみられる。出土遺物は無い。

SD 19 溝跡

13Tで検出し、検出面はV層上面である。重複はない。両端部が攪乱を受けていることから、確認長は2.5m程度で、溝幅は北側で75cm、南側で1mと差がある。深さは20cm前後である。断面形は舟底状で、方向はN-12°-Eである。堆積土は不明である。SD19は付近の旧地形が北側から南側へ大きく傾斜する中でも、やや東斜面上に等

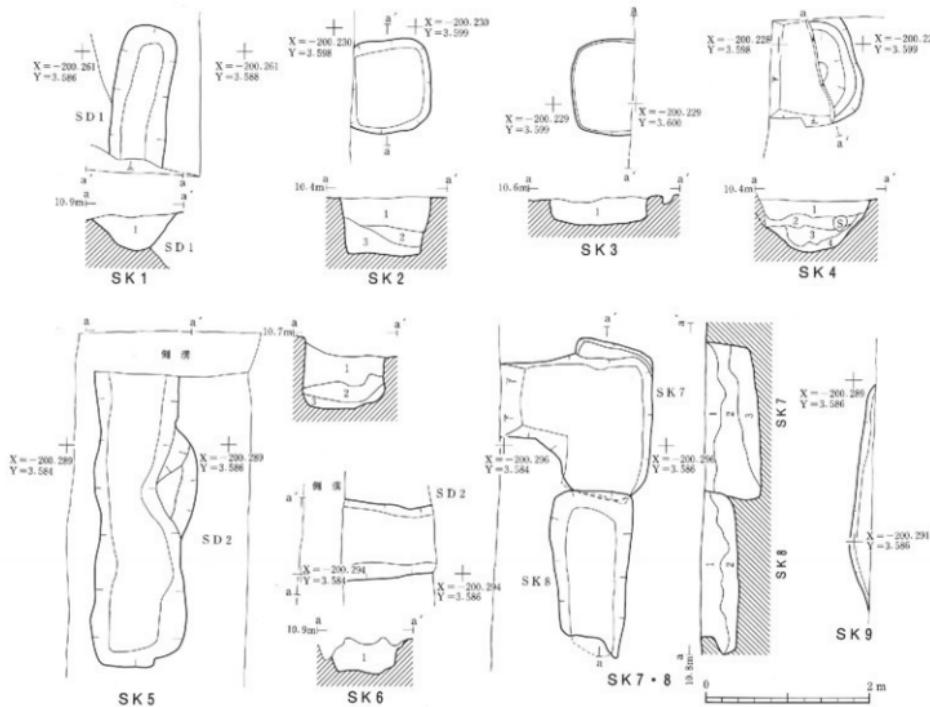


第7図 試掘トレンチ (3)

高線と平行して検出されており、僅かな確認のため、詳細は不明であるが、南側へ向って流れる溝とみられる。ただし北側延長方向の地区についてはこの溝跡は検出されなかった。出土遺物は土師器3点、須恵器4点がある。

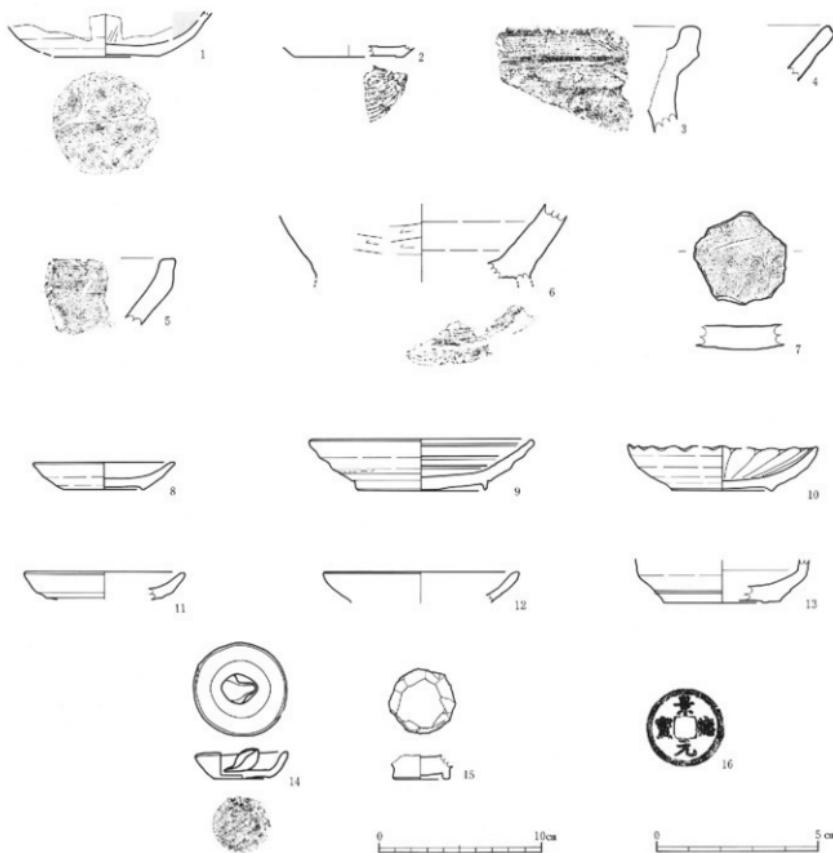
SD 20 溝跡

15Tで検出し、検出面はIIc層上面である。南側ではほぼ平行して走るSD 29を切っている。確認長はトレンチ幅である2.5m程で、幅は110~120cm、深さは50cm以上残存しているものとみられる。底面は平坦面をもたず、壁面との境が不明瞭なまま立上がりいく。方向はほぼ東西方向である。堆積土は2層で、いづれも細砂層で、自然堆積とみられる。出土遺物は須恵器1点がある。



遺構	神位	上色	土性	備考	遺構	神位	土色	土性	備考
SK 1	1	褐色 10YR4/4	褐化粘土で全土に含む		SK 5	1	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	1cm内の1・V層小ブロックを含む
	1	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	V層小ブロックを多量含む		2	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	1層に比べて小ブロックは目立たない
SK 2	2	赤い実褐色 10YR5/4	砂質土	3	赤い実褐色 10YR5/4	砂質土	N・V層小ブロックを少量含む		
	3	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	>>小ブロックの混合層		3	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	1cm内のV層・油画面土ブロックを多量含む
SK 3	1	褐色 10YR5/4	砂質シルト	混合物を少量含む	SK 6	1	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	N・V層小ブロックを含む
	1	褐色 10YR5/4	砂質シルト			2	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	V層大ブロックを多量含む 層下部は堅密に地盤
SK 4	2	褐色 10YR5/4	砂質シルト	V層小ブロックを多量含む		3	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	V層大ブロックを多量含む 層下部は堅密に地盤
	3	赤い実褐色 10YR5/4	シルト	褐色色砂シルトブロックを全体に少量含む		1	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	V・複数小ブロックを含む 褐化粘土を含む
	4	褐色 10YR5/4	砂質シルト	褐色色シルトブロックを含む	SK 9	1	赤い実褐色 10YR5/4	砂質シルト	1cm内の1・V層小ブロックを含む

第8図 試掘トレンチ検出土坑



出土地番号	登録番号	出土地区	出土層位	製造	特徴	時代	内面四輪	外面四輪	形	地図	地図番号
1	34	近T	T	E.C.						I	18-15
2	176	5 T	T	上部瓦質・其の上	縫隙	中世?	直輪	直輪	直輪	21-3	
3	28	4 T S D 3	D	埴輪土	直	- × - × -	内面削落	内面削落	直輪	21-11	
4	157	15 T	C	中杜輪器	直	- × - × -	BC前半-HC後半	口縫沿部がくびれ	直輪	23-10	
5	165	17 T	E	中杜輪器	直	- × - × -	BC後半-HC後半	直輪	直輪	23-8	
6	161	15 T	E C	中杜輪器	直	- × - × -	BC後半-HC後半	直輪	直輪	23-13	
7	151	15 T	E b	中杜輪器	直	- × - × -	BC後半-HC後半	内面削落・高台部欠損	直輪	21-16	
8	34	4 T S D 4	2	中杜輪器	小圓	(69)×(60)×(17)	輪・削落	18C前半	陶器内輪の可動的あり	23-4	
9	147	15 T	E	中杜輪器	直	(100)×(79)×(32)	削落・削痕	全周削落・基部底	直輪	25-5	
10	1	2 T SK 1	1	近杜輪器	直輪	(116)×(62)×27	美濃(志野)	16C末-17C初	内面に2条1列の浅溝があり、底盤下には下部輪郭を彫っている	25-7	
11	29	4 T S D 4	2	近杜輪器	直輪	(100)× - × -	美濃(志野)	16C末-17C初	口縫底部・打欠き削落・高台内にビン跡	25-9	
12	29	5 T S D 7	6	近杜輪器	直輪	(120)× - × -	美濃(志野)	16C末-17C初	天脚・底部削落	25-10	
13	131	2 T	1	近杜輪器?	直輪	(72)× - × -	?	近世?	天脚・底部削落	26-8	
14	176	27 T	1	陶器	直輪直	56×35×15	直	18-19C	直輪・武州西酒・直輪・縫合・物貯用窓・芯受けに復元着	26-7	
15	169	18 T	1	施釉(青白)	直	- × 34	中杜輪器彫刻	13C?	軸承足・施釉打っ込みの内側・高台内削落	26-18	
出土地番号	登録番号	出土地区	出土層位	製造	特徴	時代	地図	地図番号	地図	地図番号	
16	12	5 T S D 7	1	陶器品	直輪	昇龍文	北宋	1094			28-1

第9図 試掘トレンチ出土遺物

SD 29 溝跡

15Tで検出し、検出面はⅤ層上面である。北側でSD 20に切られているが、検出面が異なることから、SD 20とは別の溝跡である。溝跡の立地はSD 20同様に北側微高地の南端部に位置している。確認長は2.5mで、溝幅は50cm前後、深さは40cm前後である。断面形はU字形で、壁面は急に立上がる。方向はほぼ東西方向である。堆積土は1層で、Ⅳ層とみられる粘質シルトブロックを含むが、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

小溝状遺構

16T南半部で検出し、検出面はⅢ層上面である。重複は無い。確認長は約4mで、溝幅は16~35cm、深さは10cm以内の浅いものである。方向はN-25°-Eで、堆積土には基本層であるⅡb層がみられる。このような溝跡の規模、堆積土の状況は3区検出の小溝状遺構群の個々の小溝と類似しており、小溝の数からみると、1条のみの検出ではあるが、いづれの溝跡は同様の性格を有するものと考えられる。また溝跡のみられない16Tの北半部においてはⅢ層上にはⅡa'層が堆積することから、基本的に小溝状遺構はⅡb層との関わりにより形成されたものであると考えられる。

2. 基本層出土遺物

試掘調査では1・4トレンチを除くトレンチから遺物が出土した。

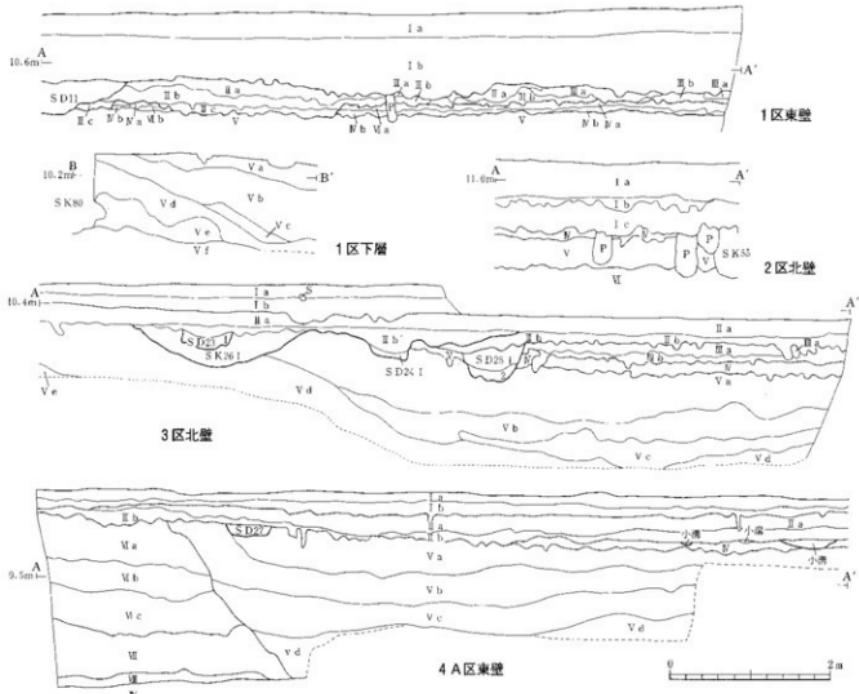
2トレンチではI・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅳ層は須恵器が2点で、中近世の遺物はみられない。(9図13)は堤築の可能性のある鉢か香炉で、全面に灰釉が掛かっている。3トレンチでは鉄滓1点、飯坂岸系の香炉がI層から出土している。5トレンチではI層から土師質土器のⅢ2点が出土し、(9図2)はロクロ成形で底部は回転糸切りである。7トレンチではI・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅳ層は須恵器のみの出土である。9・10トレンチではI層からロクロ土師器が出土したのみである。13トレンチではI・Ⅲ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅲ・Ⅳ層はロクロ土師器のみの出土である。15トレンチではI・Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅱ層からは中世以降の遺物が出土していない。またⅣ層はロクロ土師器のみの出土である。(9図1)はロクロ使用の土師器杯で、内面は黒色処理・ヘラミガキ、底部は手持ちヘラケズリ調整を施している。(9図9)は瀬戸・美濃産の灰釉皿で、疊付を擦っている。(9図7)は在地産の甕で、体部破片の周縁を打ち欠いた円盤の可能性がある。16トレンチではI・Ⅱa・Ⅱa'・Ⅱb・Ⅲ・Ⅳ層から遺物が出土し、Ⅱa層に在地産の中世陶器1点がある以外は全てロクロ土師器・須恵器である。Ⅱa層からは北宋錢とみられる銅錢1枚が出土した。17トレンチではI・Ⅱc・Ⅱd・Ⅲ層から遺物が出土し、これらの中には中世以降の遺物は含まれない。

第2節 本調査(1~6区)

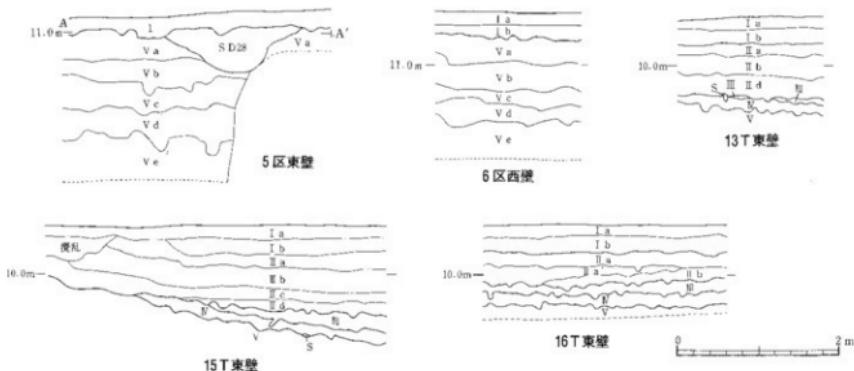
1. 基本層位

調査範囲が広範なことに加え、旧地形の違いによる堆積層の違い、近年の耕作等による堆積層の残存状況の違いなどから、今回の調査区を統一した基本層位で認識することはできなかった。これは主として調査対象地北半部に東西方向の旧河道が存在することに起因すると考えられ、旧河道上に位置する1区や、東側の3・4区、13~17トレンチにおける堆積層の多い状況と、旧河道からそれる西側の2区、1~10トレンチの状況は異なったものとなっている。

このことから、調査を進めるにあたっては、なるべく各区での層の対比を行ったが、最終的には本調査区でも1区、2区と4区の一部に加え、1~10トレンチを原則として同一層位で把握し、これとは別に東半部の中でも旧河道北岸を中心に位置する13・15・17、それに烟跡の存在が確認された14トレンチを含む3区と16トレンチをそれぞ



第10図 基本層位（1）



地 区	位 付	土 色	土 性	備 考	地 区				
					層	土 色	上 性	備 考	
5区東壁	I	黄褐色 10YR4/4	粘重作土		13T東壁	I a	黑 30YR2/1	粘質土	
	I b	灰褐色 10YR5/4	泥化物質を僅かに含む		I b	—	現耕作土		
	V a	黄褐色 10YR4/4	粘重作土		II a	灰褐色 10YR5/4	現耕作の耕土上		
	V b	灰褐色 10YR5/4	泥化物質を僅かに含む		II b	沙質土	上向に漸く粘層の集積あり		
	V c	黄褐色 10YR4/4	泥化物質を僅かに含む		III d	沙質土			
6区西壁	V d	灰褐色 10YR4/3	粘重作土		IV	灰褐色 10YR5/4	粘質土		
	V e	灰褐色 10YR4/3	粘重作土		V	—	下層となる自然帶		
	S D28	—	—		16T東壁	I a	灰褐色 10YR4/4	現耕作土	
	—	—	—		I b	沙質土	層下部に紅褐色・灰褐色シートブロックを含む		
	—	—	—		II a	灰褐色 10YR5/4	砂質土		
13T東壁	—	—	—		II b	沙質土	層下部に紅褐色・灰褐色シート層が認められる		
	—	—	—		III d	沙質土	層下半は色調が薄く、V層に移っている		
	—	—	—		IV	灰褐色 10YR4/3	粘質土		
	—	—	—		V	—	現耕作土		
	—	—	—		16T西壁	I a	灰褐色 10YR4/2	区画整理後の耕土上	
16T東壁	I a	灰褐色 10YR4/2	現耕作土		I a	灰褐色 10YR4/2	層上面に粘化鉄鉱の集積あり		
	I b	—	区画整理前の未耕作土及び耕土。		I b	沙質土	層全体にシアンジン斑を含む		
	V a	灰褐色 10YR4/4	耕作土にシアンジン斑を少量含む		II a	沙質土	層下面に灰褐色・灰褐色シート層が認められる		
	V b	灰褐色 10YR4/2	耕作土にシアンジン斑を少量含む		II b	沙質土	層全体にシアンジン斑を含む 層下部が風化している		
	V c	灰褐色 10YR4/2	耕作土にシアンジン斑を少量含む		III d	沙質土	V層のブロックを巻き上げている 層下部が風化している		
16T西壁	V d	灰褐色 10YR4/2	耕作土		IV	灰褐色 10YR4/2	層下半は色調が薄く、V層に移っている		
	V e	灰褐色 10YR4/2	耕作土		V	灰褐色 10YR4/3	層下部は色調が薄く、V層に移っている		
	—	—	—		—	—			
	—	—	—		—	—			
	—	—	—		—	—			

第11図 基本層位(2)

れ独立した基本層位とした上で調査を進めていった。

まず、全調査区の基本層を概観すると、V層は1区検出の堅穴住居跡を除き、基本的に構造の最終調査面となっている。下層調査でもわかるようにV層は上半は粘性のあるシルト質であるが、下半は砂質土、砂礫となることなどから洪水堆積層とみられ、付近一帯を厚く覆う層となっている。このV層中からは1区で灰白色火山灰層が検出されたのに加え、3区ではVc層から在地の中世陶器が出土し、また5・6区のVd層からは繩文土器がいくつか出土するなど、この層に関しては各区同一時期のものとは理解できない。V層は1~4区及び多くのトレンチに存在するが、地区により土色、土質が異なっている。特に1・2区をはじめ西側のトレンチと東側の低位部での違いは顕著であるが、これらは基本的に同一層とみられる。III層にはぶい、黄褐色の砂質土及び砂質シルトで、1・3・4区の一部と旧河道上にのみ確認できる層である。一部では提供されているような箇所もみられるが、本来はIII層もまたある時期の洪水堆積層と考えられる。II層は西側では1区のみ、東側では各調査区で確認された層で、この層についてIII層堆積後の土地利用の違いにより成因が異なることから、全調査区を同一層として認定していない。

[1・2区ほか]

西側の中でもより多くの堆積層がみられる1区を中心にみてみると、調査区中央の11号溝跡を境に北側では現在の耕作土直下はV層となるが、南側ではII~N層の大別3層、細別7層がみられる。IIa層は南半部全域にみられ、V層ブロックや炭化物・焼土粒を含む状況からみて、人為的に盛られた整地層と考えられる。層厚は層上面が

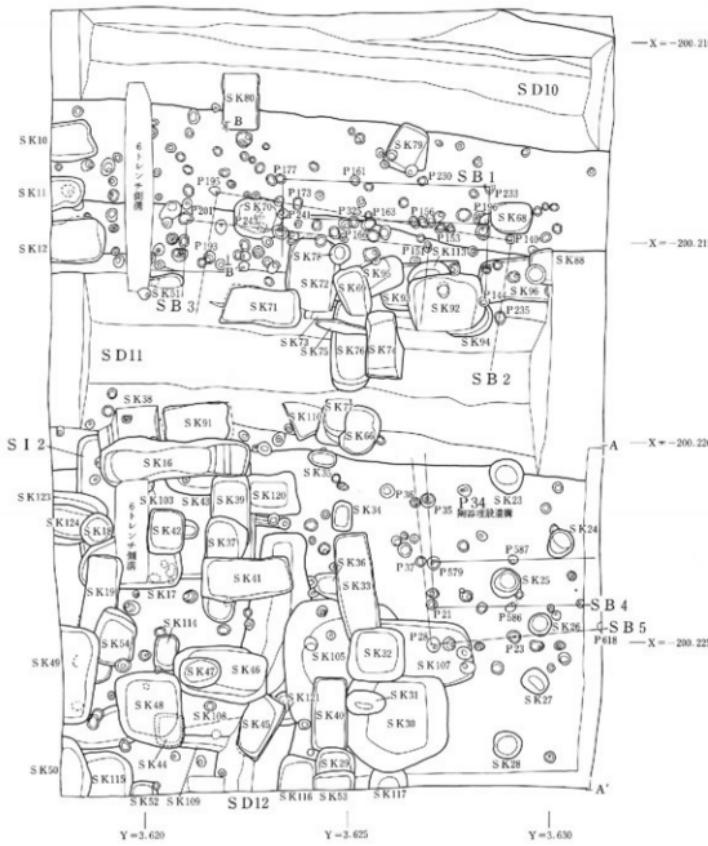
耕作土のため様々であるが、厚いところで30cm以上、薄いところで10cm程度である。堅穴住居跡や一部の土坑を除く大部分の土坑、溝跡はこの層から掘り込まれたものとみられる。II a' 層は西壁近くにのみみられ、II a 層同様に整地層とみられる。層厚は3~18cmと幅がある。断面観察からII a' 層上面においても掘り込まれた土坑、ピットが僅かに確認できることから、ある時期の遺構掘り込み面とみられる。II b 層は灰黄褐色砂質シルトで、層下面に酸化鉄斑の集積層がみられる。南東コーナーを除く南部全域にみられ、下層のII c・N a 層上面にII b 層による段差がみられ、段差の北側はレベルが低くなっていることから、II b 層は水田作土の可能性が強い。層厚は5~20cm程度である。II c 層は北東部分にのみみられる灰黄褐色土で、N a 層ブロックを含んでおり、層厚は5~15cm程度である。この層は色調的にはIV 層に類似するが、南にみられるN 層とのレベル比からみて、N 層が擾拌された層の可能性がある。III a・III b 層はいづれもにぶい黄褐色の砂質土で、南東部を中心とみられる。III b 層については、その北側にII b 層がみられ、両者の底面レベルの差が無いことから、III b 層はII b 層の水田土壤の母材層である可能性があるが、中にはN a 層をブロック状に含む層であることから、本来の成因は不明である。IV 層は1区の南部全域にみられ、黒褐色シルトのN a 層と、灰黄褐色シルトのIV b 層に分けられる。1区東壁側での層厚はいづれも4~10cm程度であるが、西壁側では一部で厚みを増す部分がある。N 層は2区において部分的に僅か残存する以外は、6・8トレンチをはじめ、2・3・7トレンチにおいて確認されており、いづれの調査区においても検出された遺構はこの層面を切っている。V 層は洪水堆積層で、1区北側の高位部での下層調査によると、全体に傾斜しながら南側の旧河道へと落ち込んでいることから、V 層もまた旧河道による低地部へ堆積した層であることがわかる。

【3区ほか】

14トレンチを含む3区及び16トレンチについては、北側に位置する旧河道の中心よりややレベルが高いものもあるてか、1・2区とは異なった層位をみせる。II a 層は付近全域にみられ、水田作土と考えられる。II b' 層は3区北西部の一部にみられる。II b 層は褐色シルトで、V 層上面が西側が高く、東側に傾斜し低くなっていることから、東半部のみにみられる層である。下層のIII a 層上面においてII b 層の入った小溝状遺構群がみられる事から、II b 層については畑作土である可能性が強い。III a・III b 層はいづれもにぶい黄褐色土の砂質シルトで、III b 層は全体にN 層小ブロックを含んでいる。N 層は黒褐色シルトで、層下面が乱れている。V 層上面をみると、3区中央を境に西半部が高く、東側に低く傾斜している地形で、これは北側の13・15トレンチでもみられるような旧河道部分との境に相当するものとみられる。

【13・15・17トレンチ】

調査地北辺に位置する13・15・17トレンチについては、共に旧河道の北岸近くに位置することから、共通の層位を付すことができた。13・15トレンチでは北端部が微高地に位置し、表土下にはV 層がみられるのに対し、南側はV 層上にII~IV 層が厚く堆積している。II a 層は灰黄褐色砂質シルト、層厚は10~20cmで水田作土の可能性が強い層である。II b 層は地区により色調が異なるが、灰黄褐色土砂質シルトである。層厚は22~30cmと全体に厚い。II c 層は15・17トレンチにみられ、灰黄褐色土砂質シルトと褐灰色シルトの互層で、自然堆積層である。II d 層は褐灰色砂質シルトである。III 層はにぶい黄橙色を基調とする細砂層で、層下面が乱れる箇所もある。N 層は黒色及び黒褐色の粘性の強い層で、層厚は10~20cmである。V 層はにぶい黄褐色粘性シルトで、以下V 層は砂層へと移行していく。

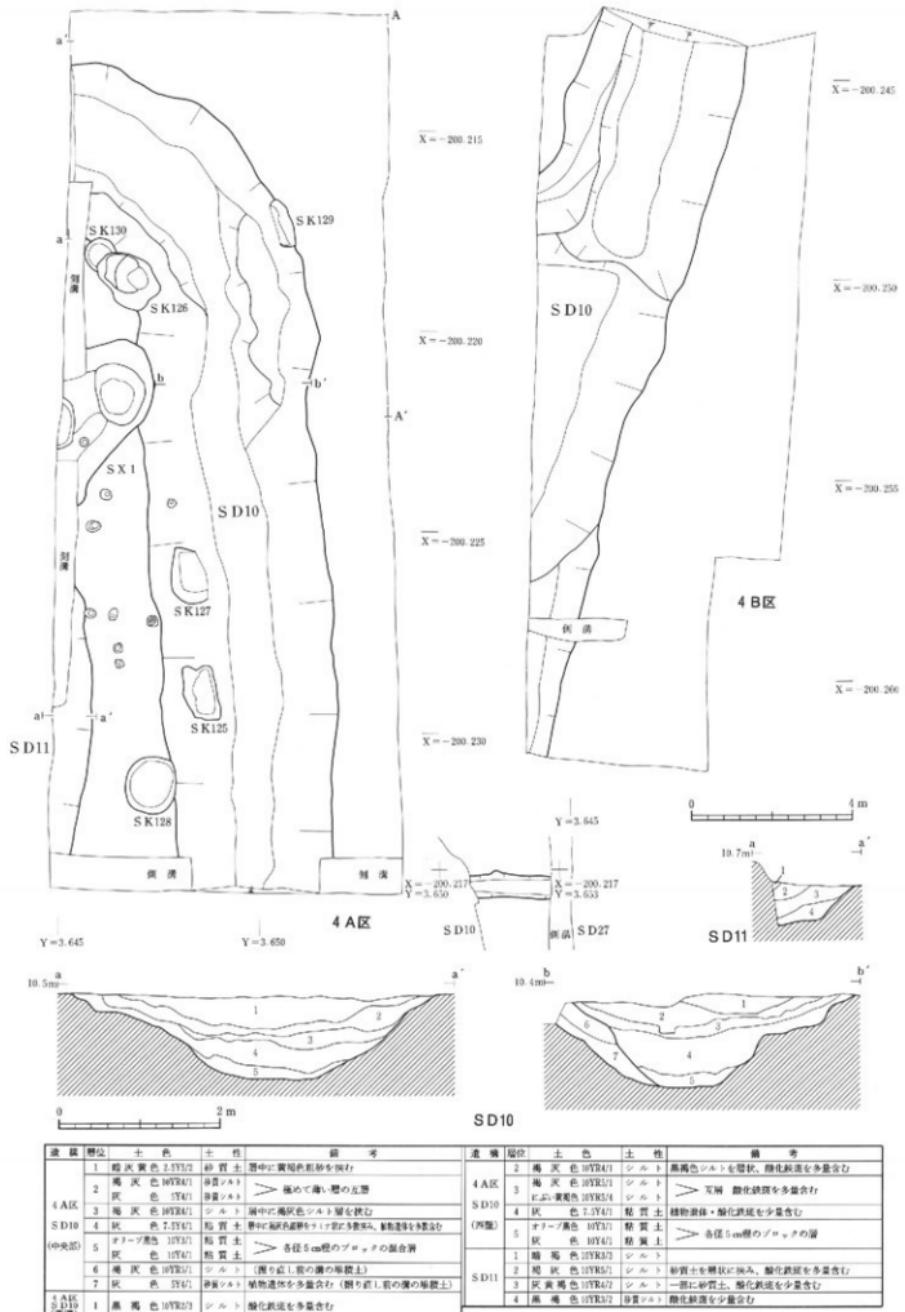


※各遺構のラインの切り合は、新旧関係を示す
但し、SD10・11・12は他の全ての遺構より新しい。

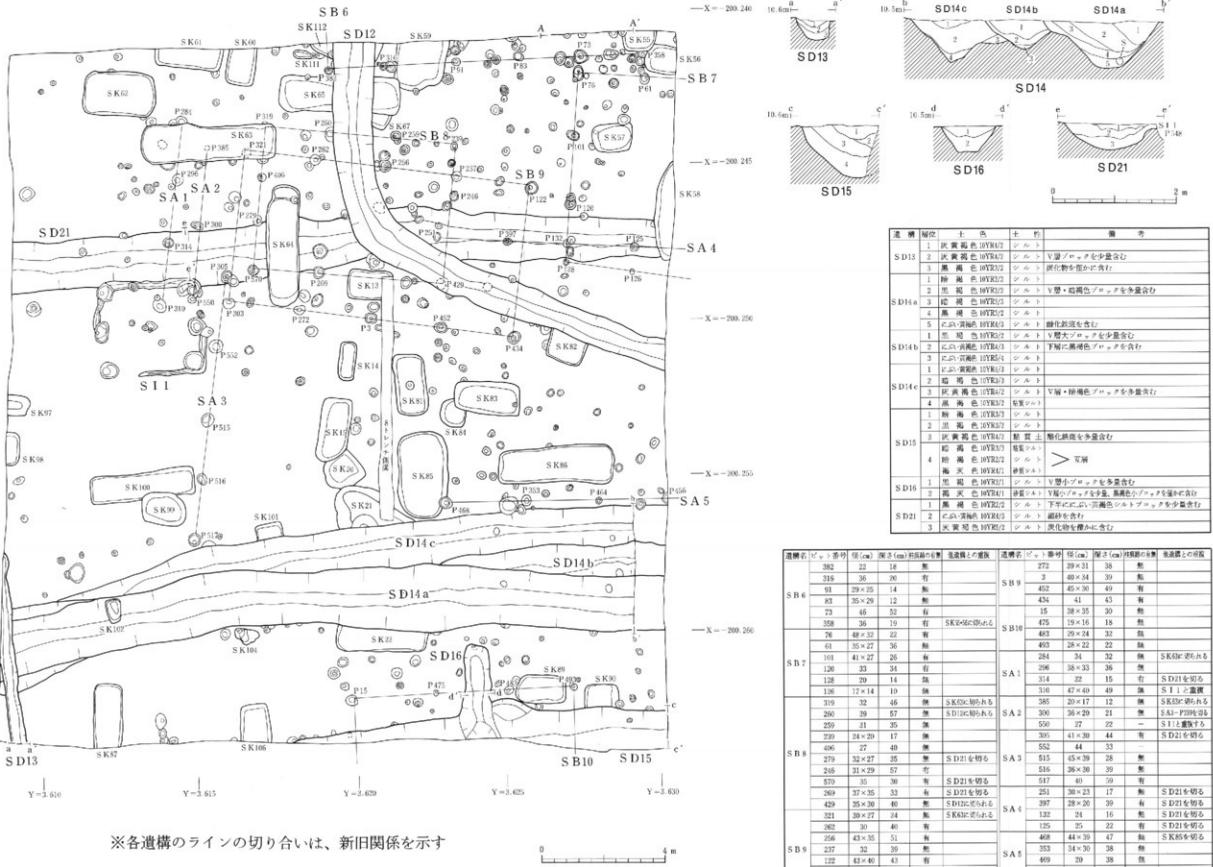


遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱頭部の形別	地盤との重複	遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱頭部の形別	地盤との重複	遺構名	ピット番号	径(cm)	深さ(cm)	柱頭部の形別	地盤との重複
	177	26	30	有			175	29×22	27	有			35	36	30	有	
	161	22	31	有			163	18	24	無			579	34×30	27	有	
	230	23×26	16	有			153	25×20	21	有			587	23	43	無	
	233	30×23	13	無			140	23	16	無			31	26	32	無	
SB1	241	26	41	無	SK101, 106, 105		193	21×17	10	無			586	30×20	38	無	
	235	27	19	無			235	32×25	17	無			36	23	35	無	
	156	27×19	16	無			201	32×30	60	有			37	25	32	無	
	146	33	—	有	SK60, 606, 605		243	25	39	無	SK70C, 706, 605		28	32	60	無	SK102を切る
	144	23	45	—			166	25	15	無			23	32	29	無	
SB2	195	29×29	50	無			151	30×21	17	無			618	12	35		

第12図 1区遺構配置図



第13図 4区造構配置図



第14図 2区透構配置図・SD断面図

2. 1・2・4区の検出遺構と出土遺物

(1) 堅穴住居跡・堅穴建物跡

S | 1 堅穴建物跡

「位置・検出面」2区北西部で検出した。現代の耕作が深く、削平が著しいことから、V層中での検出であった。本来は掘り方を伴った堅穴状のものであったと想われる。

〔重複〕土坑や溝との重複は無かったが、幾つかのピットと重複している。但し S I 1 の柱穴や周溝との重複からみたピットとの新旧関係は不明瞭であった。

[形態・規模・方向] 周溝からみた規模は東西にやや長い方形で、規模は東西360cm、南北310cm程度のものとみられる。深さは掘り方が無いことから不明である。方向はN-5°-Wである。

「堆積土」残存せず、不明である。

[壁面] 残存せず、不明である。

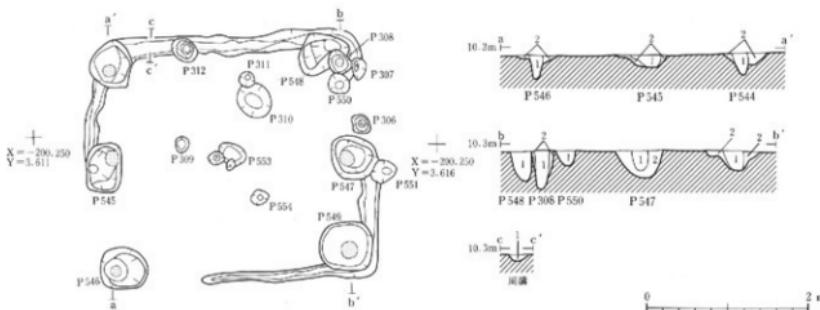
〔床面〕周溝や柱穴の残存状況からみて、床面はかなり削平されているものとみられる。貼床があったかどうかは不明である。

【柱 穴】S I 1 の周溝範囲内に検出されたピットは多かったが、これらの中でも S I 1 に伴うものとみられるピットはP544~549の6つがある。P544、545、546は西壁際の周溝と重複して検出された。形態はP544と546がほぼ円形、P545が椭円形気味である。規模は掘り方径が60cmと大きいが、深さは残存が悪く、15cm程度である。P547、548、549は東壁際にやはり周溝と重複して検出された。形態は円形、楕円形である。規模はP549の掘り方径が65cmと最も大きく、深さも西壁際の3つに比べ、深いものである。またP548を除く5つに柱痕跡が確認された。

【周溝】断続的ではあるが、東西南北の各面にみられる。北側の周溝は広い所で幅25cm程度で、これに比べて南側は狭い。断面形は底面近くのためか壁面は緩やかである。深さは北側で10cmを測るにすぎない。

〔その他〕S-1に付隨するようなカマドや炉などの焼面、或いは土坑などの内部施設はみられない。

〔出土遺物〕柱穴、周溝からの出土遺物は無い。



通 標	土 色	土 種	耕 作	產 墓	樹 品	土 色	土 種	耕 作
P546	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	(往復耕)	P528	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	(往復耕)	(往復耕)
	2 黑 色 土 HY4/2	シルト	輪種地ブロッカを多量含む		2 黒、灰 黑 土 HY3/2	シルト	輪種地ブロッカを多量含む	(往復耕)
P545	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	輪種地ブロッカを多量含む、輪種地ブロッカを少量含む	P547	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	輪種地ブロッカを多量含む	(往復耕)
	2 从 黑 色 土 HY4/2	シルト	輪種地ブロッカを多量含む、輪種地ブロッカを僅に含む		2 黑、灰 黑 土 HY3/2	シルト	輪種地ブロッカを多量含む	(往復耕)
P544	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	(往復耕)	P549	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	イソハゼの根でかき合む	(往復耕)
	2 黑 色 土 HY3/2	砂質土	アサヒノキの根でかき合む		2 黑、灰 黑 土 HY3/2	シルト	輪種地ブロッカを多量含む	(往復耕)
P548	1 黑 色 土 HY3/2	砂質土	(往復耕)		黑 土 黄 土 HY3/2	シルト	輪種地ブロッカを多量含む	(往復耕)

第15圖 S I 1 壓穴建物跡

S I 2 壑穴住居跡

【位置・検出面】 1区南西部で検出した。V a 層上面では不明瞭であったことから、全体に掘り下げたところ、V 層中でプランを確認した。住居内堆積土中には灰白色火山灰を含む V a 層がみられることから、検出面は V b 層とみられる。

【重複】 II b 層上面の検出の SK16・17・18・19・37・38・39・41・42・43・91、II c 層上面検出の SK20、N 層上面検出の SK123・124に切られているが、S I 2 より古い遺構は無い。

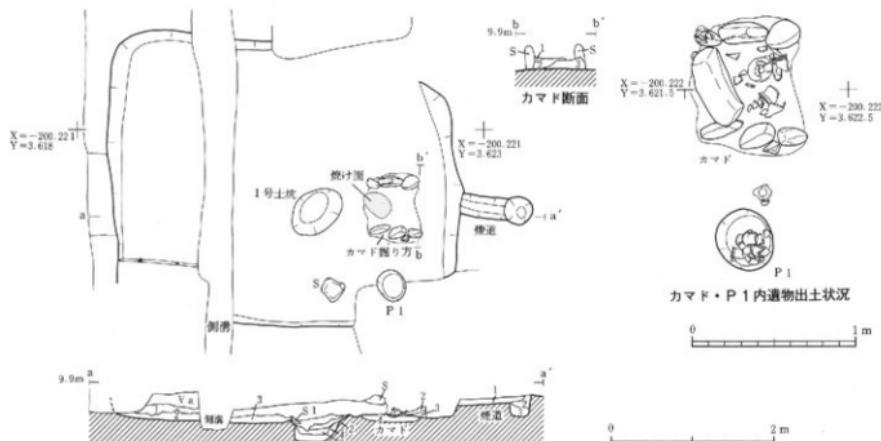
【形態・規模・方向】 形態は東西にやや長い隅丸長方形で、規模は東西435cm、南北355cm、深さは残存の良い箇所で35cmである。方向はほぼ正角に向っている。

【堆積土】 5層が確認された。最上層は灰白色火山灰をブロック状に含む V a 層とみられ、この層は基本層として住居外にも堆積している。またその下の1~3層は住居掘り方内ののみの堆積土で、4層はカマド部分の掘り方内堆積土である。V a 層中にみられる灰白色火山灰は明瞭な層を形成してはいない。1~3層は粘性が強いV層に類似した層で、2層中には底面近いこともあって、焼土ブロックを多量含む箇所もみられた。火山灰を挟んだ上下の堆積層については、洪水などにより埋没したものである可能性が強い。

【壁面】 土坑により失われているところ以外は全体に確認された。東壁は残りが良く22cmで、わりと急な立上がりであるが、他の壁面については検出作業時にプランが不明瞭なことから多少削り過ぎたこともあってか、10cmも無く、特に西壁は僅かな残存状況であった。

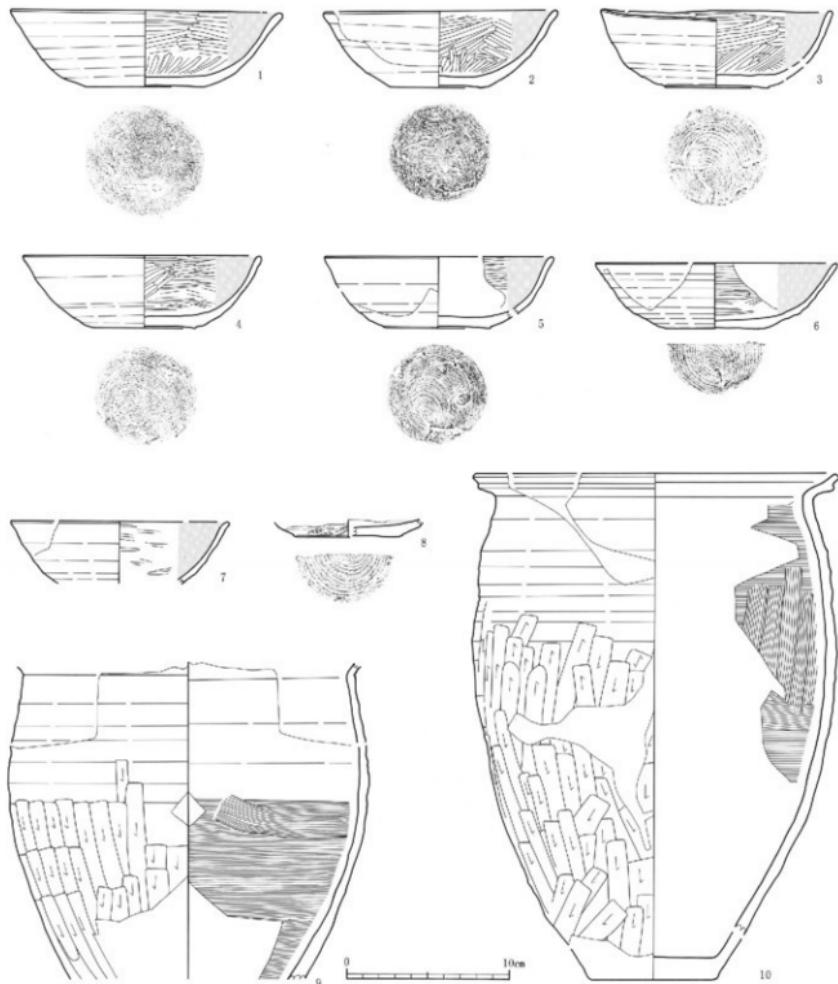
【床面】 V層中を床面としており、貼床は認められない。全体に傾斜はなく、平坦である。

【柱穴】 カマドの南側にピット1つを検出した。径は長軸40cm、短軸34cmのもので、柱痕跡は無く、中には土師器壺と甕がみられた。位置的なことからも柱穴の可能性も考えられるが、遺物の状況からみて、住居に付随する土



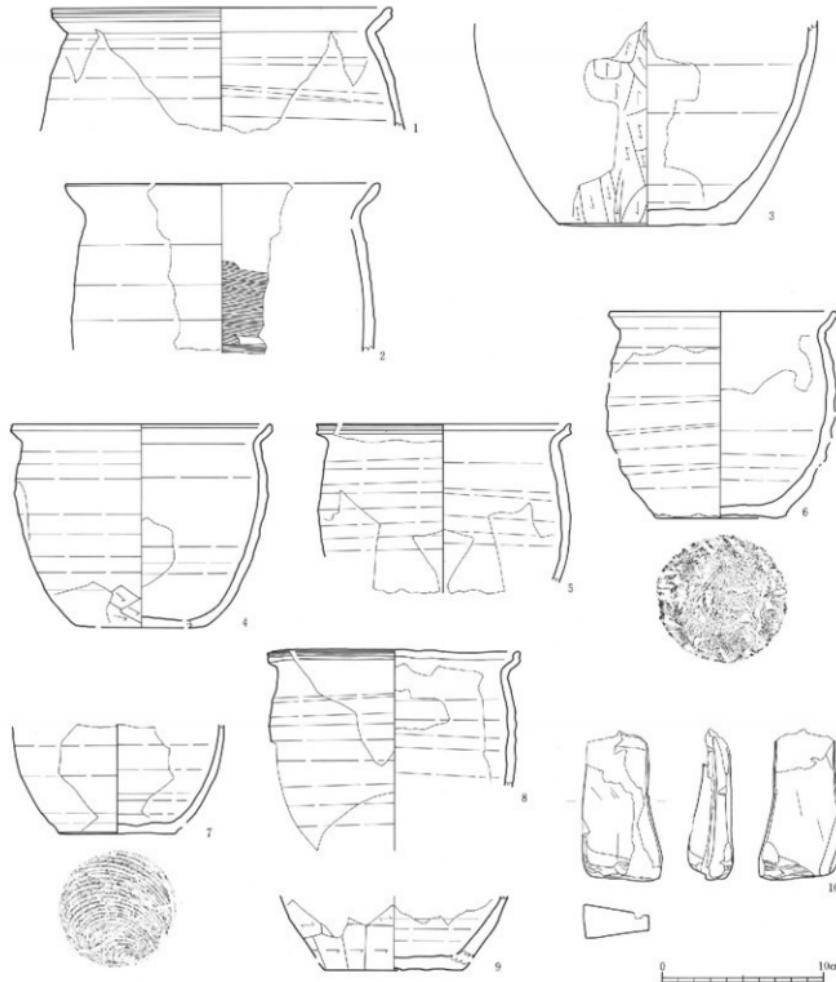
層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
住居 掘り方	1 黒 色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	1号土坑	3 黒・灰褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む
	2 灰・灰褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	4 黑・褐褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	
	3 黑 色 HYRS5	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	5 黑・褐褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	
1号土坑	4 黑・褐褐色 HYRS2	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	6 黑・褐褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	
	5 黑・褐褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	7 黑・褐褐色 HYRS4	粘土質	炭化物・焼土粒を少量含む	

第16図 S I 2 壑穴住居跡



遺物番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	形状	寸径(直径・最深部)	外表面質	内面質	底面質	備考	類型	参考文献番号
1	2	S 1-2		土師器	杯	166×72×48	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	18-7
2	10	S 1-2	カマド底床	土師器	杯	143×60×48	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	田代木口ヨー		1	18-9
3	1	S 1-2	1	土師器	杯	142×60×48	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	田代木口ヨー		1	18-6
4	9	S 1-2	灰塗	土師器	杯	145×62×45	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	18-8
5	18	S 1-2	P 1 地耕土	土師器	杯	(145)×60×(45)	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	18-11
6	17	S 1-2	P 1 地耕土	土師器	杯	(130)×(60)×(45)	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	18-10
7	8	S 1-2	3	土師器	杯	(134)×××	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	18-12
8	15	S 1-2	1号土坑3測	土師器	杯	—×(60)×—	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	18-13
9	12	S 1-2	カマド底床	土師器	甕	—××	セクタロナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ		1	19-4
10	4	S 1-2	1	土師器	甕	224×—×(314)	セクタロナ・褐色・ハラミナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ	セクタロナ・褐色丸足・ハラミナ		1	19-1

第17図 S 1-2 出土遺物 (1)



出所番号	出発番号	出土地区	出土部位	種別	DII・共通・基盤(㎜)	外観概要	内面形状	供用測定	備考	模型・写真図版番号
1	11	S12	カマド底面	土器部	甕 (206) × - × -	ロクロナド	凹面・フタナド→ロクロナド	-	I	19-3
2	7	S12	3	土器部	甕 (192) × - × -	ロクロナド	ロクロナド→ヘラナド	-	I	19-2
3	16	S12	1号土器底上	土器部	甕 - × (110) × -	ロクロナド	ヘラケズリ	I	20-2	
4	14	S12	1号土器3層	土器部	甕 (162) × (80) × 125	ロクロナド→曲面?・ヘラケズリ	ロクロナド	ヘラケズリ	II	19-6
5	6	S12	3	土器部	甕 (156) × - × -	ロクロナド	-	I	19-7	
6	3	S12	1	土器部	甕 (141) × 78 × 125	ロクロナド	凹面・切り	II	19-5	
7	5	S12	2	土器部	甕 - × 72 × -	ロクロナド	凹面・切り	II	20-4	
8	19	S12	P1 地盤上	土器部	甕 (150) × - × -	ロクロナド	-	II	20-1	
9	13	S12	1号土器2層	土器部	甕 - × 86 × -	ロクロナド→ヘラケズリ	フタナド・窓・ヘラケズリのもの	ヘラケズリ	-	20-3

出所番号	出発番号	出土地区	出土部位	種別	特徴	大きさ・重さ(㎜・g)	備考	写真・図版番号	
10	1	S12	2	石製品	石器	(30) × 30 × 3 (113)	一端底欠損 物面裏方形	-	27-6

第18図 S12出土遺物(2)

坑の可能性もある。

【周溝】確認されなかった。

【カマド】東壁に付設されている。カマド本体はやや長めの円礎を左袖に3つ、右袖に4つを床面より立て、袖部の芯材としている。また最前列の左右の袖石にまたがって乗る形で、長さ50cm、幅20cm程の大型の礎があり、これは床面から13cmほどの高さにあったことから、本来はカマド焚口上部に渡した天井石であり、カマド内への土砂流入後に幾分落ちた可能性が考えられる。但し、奥の袖石と東壁との間は30cm程もあり、この部分については礎はみられず、床面にはカマド掘り方のプランは延びていないことから、本来この部分には礎は組まれなかつたものと推定される。カマド底面には手前寄りに40×25cmの範囲で焼面がみられ、土師器环と甕が数個体みられた。カマド掘り方は幅85cm、奥行き65cm、深さは10cm程で、周壁は緩やかで、袖石はその壁際に配置されていた。カマド内堆積土は住居全体にみられる2・3層が同様に流入しており、床面上に目立った焼土・炭化物層はみられない。

廻道は長さ90cm、幅26cm、深さ8cmで、奥に向かって緩やかに傾斜し、上っていくが、先端部はピット状に窪み、径は34cm、深さは25cmである。堆積土は3層に分層されたが、炭化物粒を少量含むのみで、壁面についても焼面はみられない。

【その他】カマドの西側の住居中央寄りに土坑を1基検出した。梢円形で、長軸72cm、短軸51cm、深さ30cm程である。壁面は急で、底面は平坦である。堆積土は4層で、全層に炭化物、3層中に焼土ブロックを少量含んでいる。

【出土遺物】土師器231点、須恵器31点、砥石1点がある。土師器の出土地点は1～3層中が111点、カマド底面が26点、1号土坑が43点、ピットが35点などとなっている。

土師器は全てロクロを使用しており、(17図1～8)は杯で、内面調整は全て黒色処理、ヘラミガキが施されている。底部切離し調整は(3～6・8)が回転糸切り無調整で、(1)は切離し不明で、手持ちヘラケズリ調整、(2)は回転糸切りのち周縁にヘラケズリが施される。(17図9・10、18図1～9)は甕で、(18図4～8)は中型、(17図9・10、18図1～3・9)はやや大型である。破片資料のため全体は明らかでないが、内外面の調整は外側がヘラケズリ、内面がヘラナデのもの(17図10)、外側のみヘラケズリのもの、(18図3・4・9)、ロクロ調整のち無調整のもの(18図5～8)などがある。底部は回転糸切り無調整のもの(18図6・7)、ヘラケズリ調整のもの(18図3・4・9)がある。

(2) 土坑・陶器埋設遺構ほか

SK10 土坑

6T(1区)、V層上面で検出した。形態は梢円形とみられ、規模は長軸112cm以上、短軸96cm、深さ35cm以上である。長軸方向はN-86°-Eである。底面は平坦で、壁面はやや緩やかに立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器3点がある。

SK11 土坑

6T(1区)、V層上面で検出した。形態は梢円形とみられ、規模は長軸80cm以上、短軸85cm、深さ27cm以上である。長軸方向はW-Eである。底面はやや起伏があり、壁面は緩やかに立上がるものとみられる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、渥美産の中世陶器の甕か壺1点がある。

SK12 土坑

6T(1区)、V層上面で検出した。形態は梢円形とみられ、規模は長軸132cm以上、短軸110cm、深さ72cm以上である。長軸方向はN-88°-Eである。底面はやや起伏があるが平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器6点がある。

SK13 土坑

8T(2区)、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸150cm、短軸92cm、深さ41cmである。長軸

方向はN-86°-Wである。底面は平坦で、壁面はやや急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK14 土坑

8T(2区)、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸123cm、短軸55cm、深さ60cmである。長軸方向はN-6°-Eである。底面はやや高低差があるが平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK15 土坑

8T(2区)、V層上面で検出し、SK20を切っている。形態は不整長方形で、規模は長軸204cm、短軸102cm、深さ62cmである。長軸方向はN-8°-Eである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK16 土坑

6T(1区)、IIa層上面で検出し、SD11に切られ、SK38・39・43・91を切っている。形態は隅丸長方形で、規模は長軸370cm、短軸120cm、深さ89cmである。長軸方向はN-88°-Eである。底面はほぼ平坦で、東側長軸端部が段状になる可能性がある。壁面は直立するが、長軸側の下端はやや緩やかに立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器5点、產地不明の陶器の壺とみられるもの1点、鉄滓11点がある。

SK17 土坑

6T(1区)、IIa層上面で検出し、SK19・42に切られ、SK18を切っている。形態は不整梢円形で、規模は長軸250cm、短軸130cm以上、深さ41cmである。長軸方向はN-85°-Eである。底面は平坦で、壁面は底面際はやや緩やかだが、上部は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器2点、土師質土器の皿1点、鉄滓4点があり、鉄滓のうち1点は碗形滓とみられる。(30図4)は土師質土器の皿で、小破片であるがロクロ成形で、底部に丸みを持っている。

SK18 土坑

6T(1区)、IV層上面で検出し、SK17に切られる。形態は円形で、規模は長軸82cm、短軸80cm、深さ31cmである。底面は狭く、やや平坦で、壁面は急である。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は鉄滓5点がある。

SK19 土坑

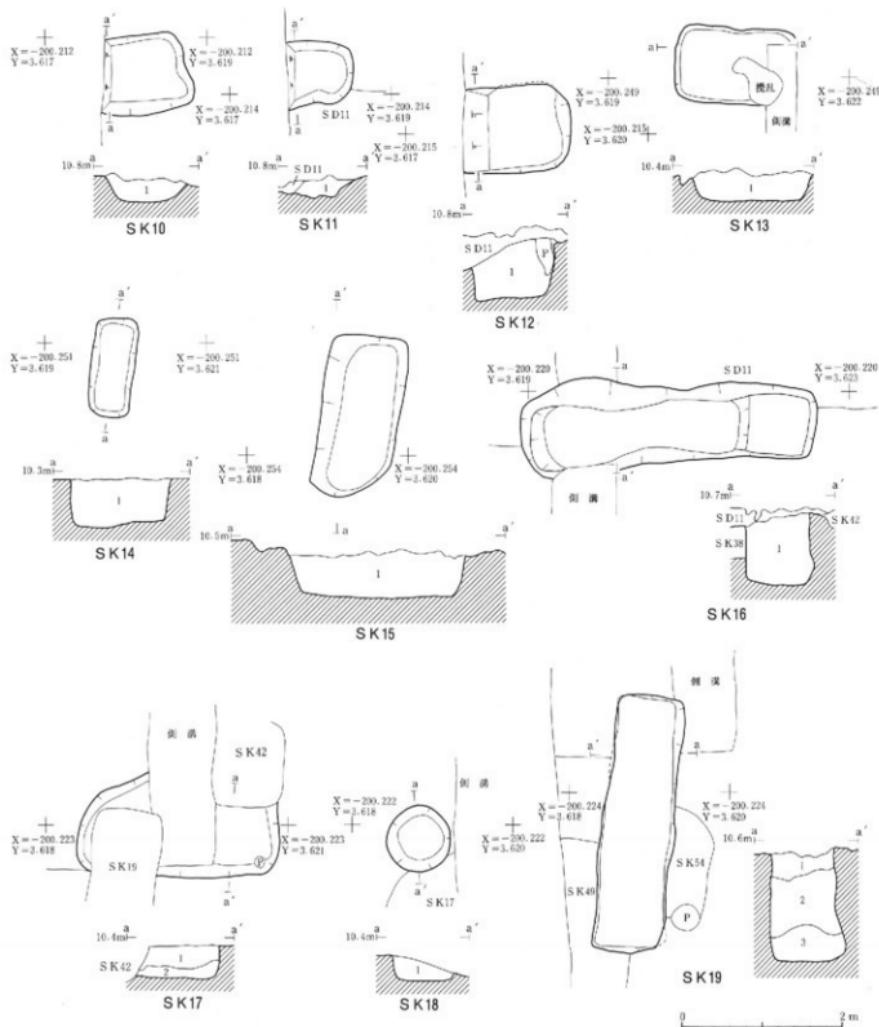
6T(1区)、IIa層上面で検出し、SK49・54に切られ、SK17を切っている。形態は長方形で、規模は長軸320cm、短軸90cm以上、深さ140cmである。長軸方向はN-5°-Eである。底面は傾斜があるがほぼ平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、須恵器5点、刀子1点がある。

SK20 土坑

8T(2区)、V層上面で検出し、SK15・21を切っている。形態は隅丸方形で、規模は長軸120cm、短軸106cm以上、深さ63cmである。断面形は摺鉢状で、底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は3層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK21 土坑

8T(2区)、V層上面で検出し、SD14cに切られ、SK20を切っている。形態は不整形で、規模は長軸265cm以上、短軸175cm、深さ40cmである。長軸方向はN-51°-Wである。断面形は舟底状で、底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は3層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。



第19図 SK (1)

地層	岩相	上色	土性	特徴	地層	岩相	上色	土性	特徴		
SK10	1	褐色	褐色	HVR4/4 砂質シルト	無機物質を少量、深2cm内のV層ゾックを多量含む	SK17	2	褐色	褐色	HVR4/4 シルト	炭化物ゾック・鐵素鉄・鉄酸小クリックを少量含む
SK11	1	褐色	褐色	HVR4/2 シルト	無機物質を少量、深2cm内のV層ゾックを多量含む	SK18	1	灰褐色	灰褐色	HVR4/2 シルト	炭化物ゾックを少量含む
SK12	1	褐色	褐色	HVR4/2 シルト	無機物質を少量、深2cm内のV層ゾックを多量含む	2	灰褐色	灰褐色	HVR4/3 砂質シルト	柱状・薄層化構造を示す	
SK13	1	褐色	褐色	HVR4/4 砂質シルト	V層大・小クリックを多量含む	3	灰褐色	灰褐色	HVR4/6 砂質シルト	柱状・薄層化構造を示す	
SK14	1	褐色	褐色	HVR4/4 砂質シルト	V層大・小クリックを多量含む						
SK15	1	褐色	褐色	HVR4/4 砂質シルト	V層大・小クリックを多量含む						
SK16	1	褐色	褐色	HVR4/4 砂質シルト	無機物質を少量、深2cm内のV層ゾックを多量含む						
SK17	1	褐色	褐色	HVR4/3 シルト	無機物質を少量、深2cm内のV層ゾックを多量含む						
SK18											
SK19											

SK22 土坑

8T(2区)、V層上面で検出し、SD14aに切られる。形態は長方形で、規模は長軸305cm、短軸95cm、深さ73cmである。長軸方向はN-87°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はクロロ土師器1点、須恵器1点、中国龍泉窯系の青磁碗とみられるもの1点がある。

SK23 土坑

I区、IIb層上面で検出し、SD11に切られる。形態は円形で、規模は長軸86cm、短軸82cm、深さ24cmである。底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK24 土坑

I区、IIb層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸70cm、短軸66cm、深さ28cmである。底面は狭く、壁面は急に立上がる。堆積土は2層で、1層は縦に細長い層であるが、柱痕跡とは異なる。人為堆積とみられる。出土遺物はクロロ土師器1点がある。

SK25 土坑

I区、IIb層上面で検出した。形態は円形で、規模は径73cm、深さ39cmである。底面は狭く、壁面はやや急に立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK26 土坑

I区、IIb層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸60cm、短軸55cm、深さ7cmと残存状況は悪い。底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK27 土坑

I区、IIb層上面で検出した。形態は梢円形で、規模は長軸70cm、短軸59cm、深さ23cmである。長軸方向はN-44°-Wである。底面は狭く、壁面はやや急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はクロロ土師器1点、釘1点がある。

SK28 土坑

I区、IIb層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸70cm、短軸68cm、深さ22cmである。底面は狭く、壁面はやや急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK29 土坑

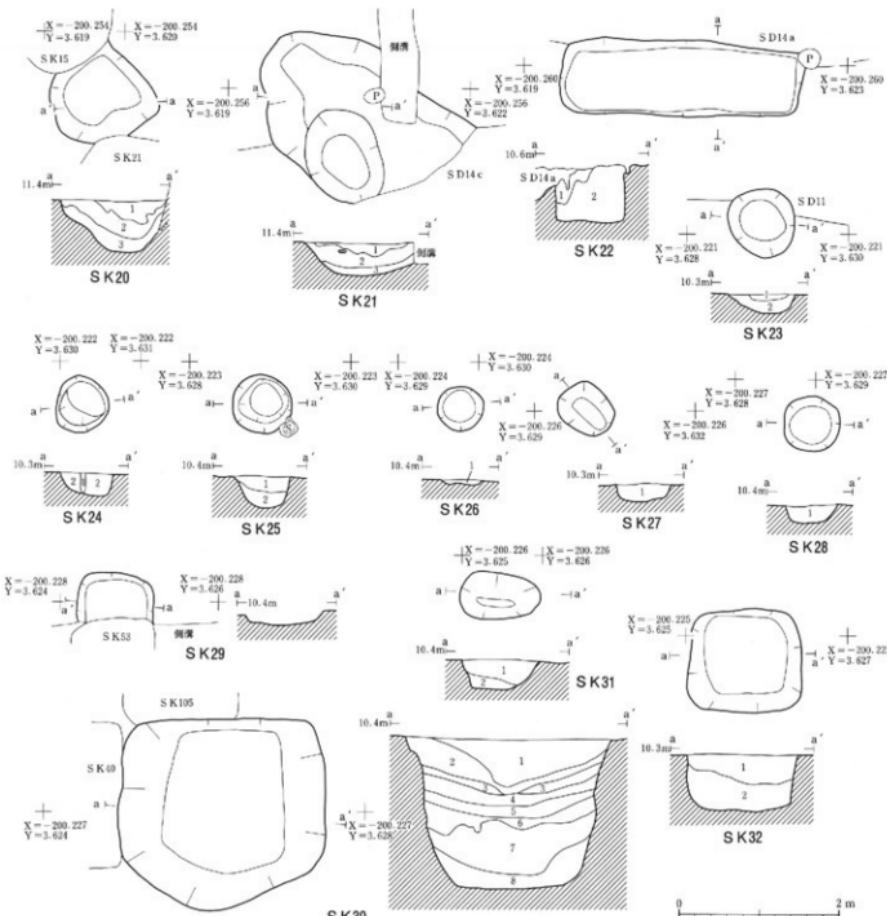
I区、IIa層上面で検出し、SK53に切られ、SK40・116を切っている。形態は不明で、規模は長軸96cm以上、短軸75cm以上、深さ15cm以上である。底面はほぼ平坦で、壁面は残存が悪く不明である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK30 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK31・32に切られ、SK40・105・107・117を切っている。形態は五角形で、井戸跡の可能性が考えられる。規模は長軸255cm、短軸240cm、深さ185cmである。底面もやはり五角形を呈し、平坦で、壁面は全体に急に立上がる。堆積土は8層で、このうち最下層の8層と6層がシルト質層を挟む自然堆積層であるのに対し、7層が壁面の崩落層、5層より上層が人為堆積とみられることから、井戸としての機能停止後に埋め戻されたものとみられる。出土遺物はクロロ土師器2点、須恵器1点、在地産・常滑産・渥美産の中世陶器の甕が各1点、石核1点、土製品1点、鉄滓1点がある。(30図2)は常滑産の甕とみられ、底部付近のみの残存である。

SK31 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK30・40を切っている。形態は梢円形で、規模は長軸100cm、短軸60cm、深さ37cmである。長軸方向はN-83°-Wである。底面は狭く、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は2層で、人為堆積と



第20回 SK (2)

みられる。出土遺物はロクロ土師器1点、渥美産の中世陶器の壺とみられるもの1点がある。

S K 3 2 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK30・33・105・107を切っている。形態は隅丸方形で、規模は長軸140cm、短軸130cm、深さ70cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器13点、須恵器4点、瀬戸産の中世陶器の壺か瓶1点、土師質土器の皿1点がある。

S K 3 3 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK32に切られ、SK36・105・107を切っている。形態は長方形で、規模は長軸270cm以上、短軸95cm、深さ78cmである。底面は平坦で、壁面は直立する。長軸方向はN-9°-Wである。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器17点、須恵器2点がある。

S K 3 4 土坑

I区、IIa層上面で検出した。形態は梢円形で、規模は長軸75cm、短軸47cm、深さ25cmである。長軸方向はN-1°-Eである。底面は狭いが平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、須恵器2点がある。

S K 3 5 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SD11に切られる。形態は梢円形で、規模は長軸70cm、短軸43cm、深さ12cmである。長軸方向はN-82°-Wである。底面は狭いが平坦で、壁面は残存が悪いため不明である。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 3 6 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK33に切られる。形態は梢円形とみられ、規模は長軸75cm以上、短軸65cm、深さ21cmである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。長軸方向はN-83°-Wである。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点がある。

S K 3 7 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK41に切られ、SK39を切っている。形態は不整梢円形で、規模は長軸265cm、短軸103cm、深さ42cmである。長軸方向はN-2°-Eである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器2点、須恵器1点、砥石2点がある。

S K 3 8 土坑

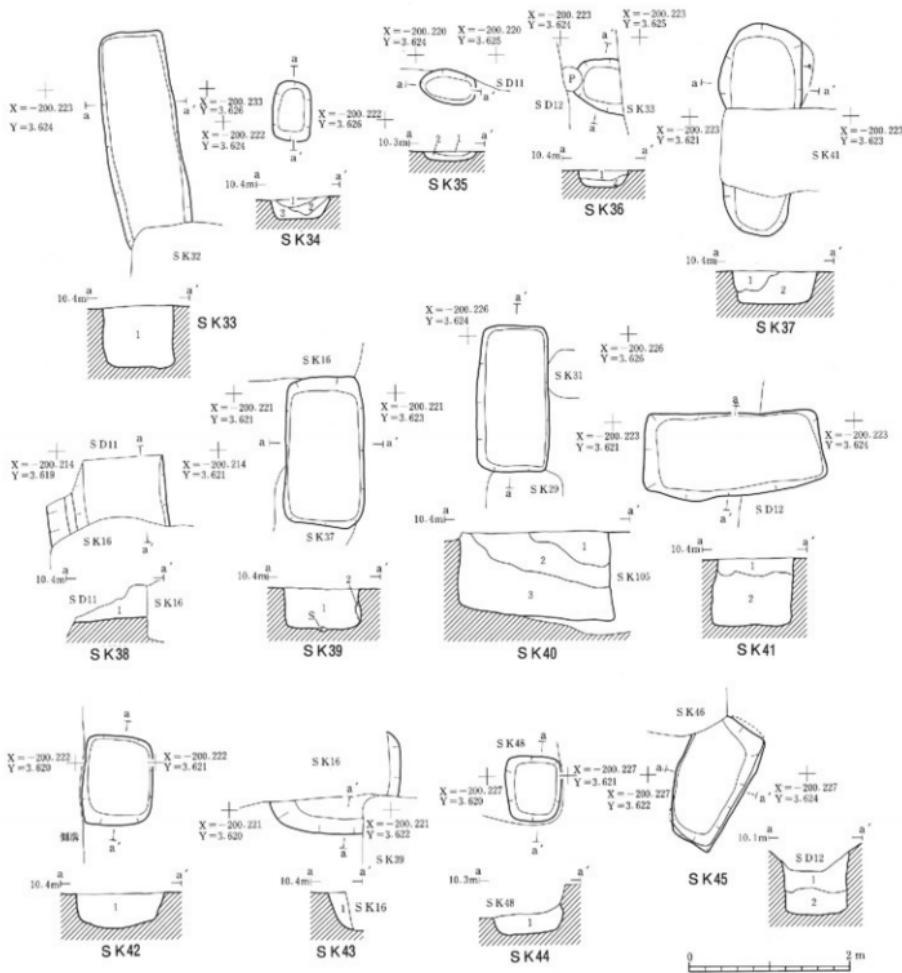
6T(1区)、IIa層上面で検出し、SD11・SK16に切られる。形態は不明で、規模は長軸150cm以上、短軸95cm以上、深さ40cm以上である。確認できる限りでは底面は平坦で、壁面は急とみられ、西壁側に段がみられる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 3 9 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK16・37に切られ、SK43を切っている。形態は長方形で、規模は長軸190cm、短軸98cm、深さ50cmである。底面は平坦で、壁面は直立する。長軸方向はN-Sである。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器13点がある。

S K 4 0 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK29・31に切られ、SK30・105を切っている。形態は長方形で、規模は長軸185cm、短軸90cm、深さ111cmである。長軸方向はN-Sである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。各層の違いは明瞭で、層は全体に北側に向って傾斜しているのがわかる。出土遺物は縄文土器1点、ロクロ土師器3点、須恵器1点、古銭1点がある。



地 帯	層位	土 色	七 性	特 標	地 帯	層位	土 色	七 性	特 標
S K33	1	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	炭化物を僅か・主・主・主・主層/シルトを含む	S K39	2	赤褐色・黄褐色 HYR2/4	シルト	V層の崩落層・滴水ゾーンを少量含む
	2	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	炭化物・熱土被を少量含む	S K40	1	赤褐色・黄褐色 HYR2/4	シルト	炭化物・熱土被を含む、V層ゾーンを主に含む
S K34	2	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	炭化物を層状に含む		2	褐 色 HYR4/4	シルト	炭化物・V層内のみ、V・2層/ノ・2層を含む
	3	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	炭化物・V層内のみ、V・2層/ノ・2層を含む	S K41	3	赤褐色・黄褐色 HYR2/3	シルト	炭化物・V層内のみ、V・2層/ノ・2層を含む
S K35	1	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	炭化物・熱土被を僅かに含む	S K42	2	褐 黄色 HYR2/4	粘土シルト	炭化物・V層内のみ、V層内・V層外を含む
	2	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	V層小ブリッケを僅かに含む	S K43	1	赤褐色・黄褐色 HYR2/4	シルト	炭化物・V層内のみ、V層内・V層外を含む
S K36	1	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	炭化物・V層内・V層外を含む	S K44	1	赤褐色・黄褐色 HYR2/3	粘土シルト	炭化物を僅か、V層内のみのV層内・V層外を含む
	2	褐 色 HYR2/4	シルト	炭化物・V層内・V層外を含む	S K45	1	褐 色 HYR2/4	シルト	炭化物を僅か、V層内のみのV層内・V層外を含む
S K37	1	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	1cm厚V・1・V層/シルトを含む、熱土被・V層内・V層外を含む		2	赤褐色・黄褐色 HYR2/4	シルト	炭化物を僅か、V層内のみのV層内・V層外を含む
	2	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	シルト	1cm厚V・1・V層/シルトを含む、熱土被・V層内・V層外を含む					
S K38	1	褐 色 HYR2/4	粘土シルト	炭化・V層内・V層外を含む					
S K39	1	赤褐色・黄褐色 HYR1/2	砂質シルト	炭化・V層内・V層外を含む					

第21図 SK (3)

S K 4 1 土坑

1区、II a層上面で検出し、SD12に切られ、SK37を切っている。形態は長方形で、規模は長軸220cm、短軸110cm、深さ85cmである。長軸方向はN-87°-Eである。底面は平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハンプする。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器12点、須恵器2点、中国龍泉窯系の青磁碗1点、古銭1点がある。(30図5)は青磁碗の口縁部破片である。

S K 4 2 土坑

1区、II a層上面で検出し、SK17を切っている。形態は長方形で、規模は長軸112cm、短軸88cm、深さ43cmである。底面はほぼ平坦であるが、緩やかな湾曲をもち、壁面は直立気味である。長軸方向はN-3°-Eである。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 4 3 土坑

1区、II a層上面で検出し、SK16・39に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸160cm以上、短軸125cm以上、深さ47cm以上である。SK16に大部分を切られるために底面状況は不明で、壁面は残存部分からみると急に立上がる。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、鉄滓1点がある。

S K 4 4 土坑

1区、II a層上面で検出し、SK48に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸82cm、短軸70cm、深さ26cmである。底面は平坦で、壁面は直立気味である。長軸方向はN-1°-Eである。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は古銭2点がある。

S K 4 5 土坑

1区、II a層上面で検出し、SD12・SK46に切られ、SK108を切っている。形態は長方形で、規模は長軸160cm、短軸90cm、深さ77cmである。長軸方向はN-27°-Eである。底面は壁際を除きほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器2点がある。

S K 4 6 土坑

1区、II a層上面で検出し、SD12・SK47・48に切られ、SK45・108・114を切っている。形態はやや隅丸の長方形で、規模は長軸232cm、短軸140cm、深さ169cmである。底面は壁際を除きほぼ平坦で、壁面は直立し、一部オーバーハンプする。長軸方向はN-85°-Wである。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。土坑が深く掘込まれているためか、堆積土は地山である砂質土が主体となっている。出土遺物は底面より刀子1点がある。

S K 4 7 土坑

1区、II a層上面で検出し、SK46を切っている。形態は梢円形で、規模は長軸102cm、短軸75cm、深さ41cmである。長軸方向はN-83°-Eである。底面は狭く舟形状で、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 4 8 土坑

1区、II a層上面で検出し、SK44・46・108・109・114を切っている。形態は不整形で、規模は長軸190cm、短軸160cm、深さ40cmである。長軸方向はN-2°-Wである。底面は平坦で、緩やかに立上がりながら急な壁面となっている。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器4点、古銭3点がある。

S K 4 9 土坑

1区、II a層上面で検出し、SK19・54を切っている。形態は隅丸長方形とみられ、規模は長軸240cm、短軸95cm以上、深さ40cm以上である。長軸方向はN-8°-Eである。底面は平坦で、断面からみた壁面はかなり緩やかに立上がるもので、他の土坑とは様相を異なる。堆積土は1層で、人為堆積とみられるが、全体に混入ブロックは目立たない。出土遺物はロクロ土師器1点、在地産の中世陶器の鉢とみられるもの1点がある。

SK50 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK115を切っている。形態は不明で、規模は長軸150cm以上、短軸75cm以上、深さ174cm以上である。確認できる限りでは底面は平坦とみられ、壁面は直立する。堆積土は6層で、人為堆積とみられ、4・6層間に混入するブロック土による堆積土の違いが明瞭である。出土遺物はロクロ土師器2点、土師質土器の皿と不明品が各1点ある。

SK51 土坑

I区、V層上面で検出し、SD11に切られる。形態は不明で、規模は長軸85cm以上、短軸40cm以上、深さ21cm以上である。底面状況は不明で、壁面は直立するものとみられる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK52 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK115を切る。形態は不明で、規模は長軸68cm以上、短軸36cm以上、深さ35cm以上である。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK53 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK29・116を切る。形態は不明で、規模は長軸103cm以上、短軸47cm以上、深さ127cm以上である。底面は断面形をみる限りは平坦ではなく、壁面は上半部で直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK54 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK49に切られ、SK19を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸148cm、短軸102cm、深さ51cmである。長軸方向はN-12°-Eである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK55 土坑

2区、V層上面で検出し、SK56を切る。形態は不明で、規模は長軸108cm以上、短軸66cm以上、深さ64cm以上である。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK56 土坑

2区、V層上面で検出し、SK55に切られる。形態は長方形で、規模は長軸105cm以上、短軸90cm以上、深さ56cmである。長軸方向はN-81°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK57 土坑

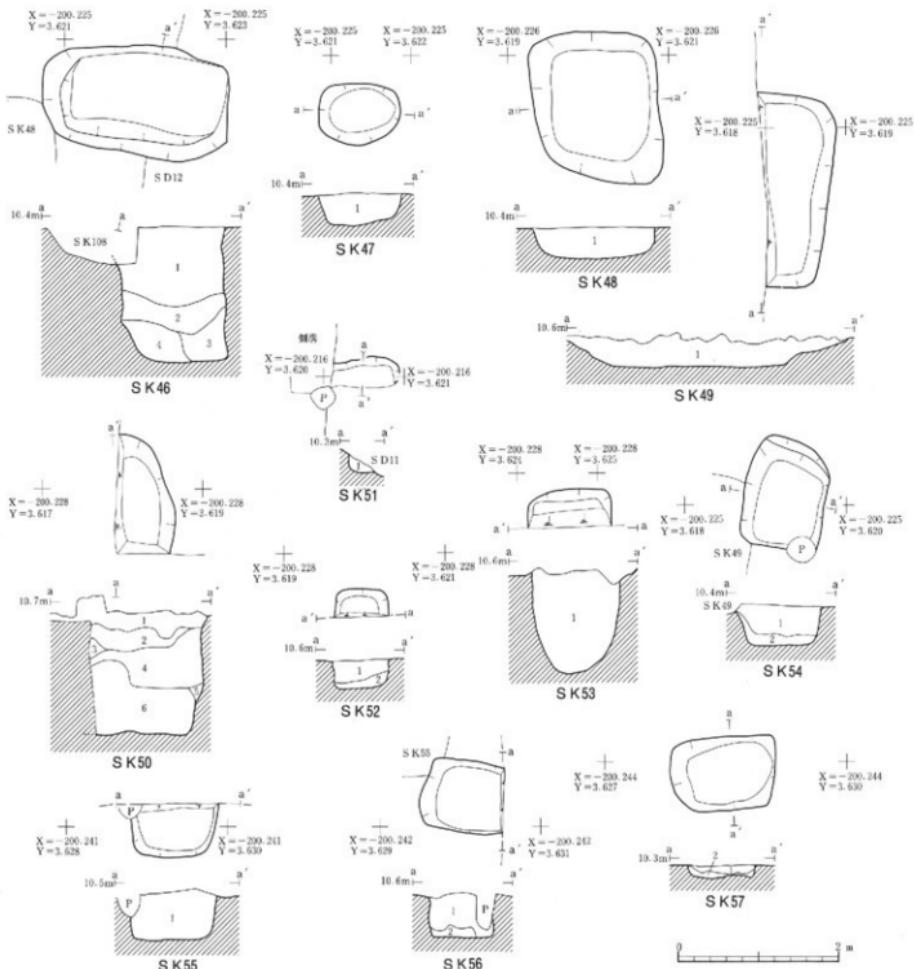
2区、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸132cm、短軸90cm、深さ16cmである。長軸方向はN-85°-Eである。底面は多少の起伏があるが、全体に平坦で、壁面は急に立上がるものとみられる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK58 土坑

2区、V層上面で検出し、SD21を切る。形態は不明で、規模は長軸335cm以上、短軸65cm以上、深さ125cm以上である。底面状況は不明で、壁面は直立気味に立上がる。堆積土は5層で、人為堆積とみられる。この土坑は全体形は不明であるが、規模のわりには他の土坑形状とは異なったものである。出土遺物は須恵器2点、在地産の中世陶器1点がある。

SK59 土坑

2区、V層上面で検出し、SK65に切られる。形態は不明で、規模は長軸170cm以上、短軸155cm以上、深さ102cm以上である。長軸方向はN-6°-Eである。底面は多少の起伏と傾斜があり、壁面は直立する。堆積土は3



第22回 SK (4)

層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 60 土坑

2区、V層上面で検出し、SK 61を切る。形態は長方形で、規模は長軸116cm以上、短軸94cm、深さ68cmである。長軸方向はN-9°-Eである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は土師器1点がある。

SK 61 土坑

2区、V層上面で検出し、SK 60に切られる。形態は長方形とみられ、規模は長軸220cm、短軸70cm以上、深さ54cmである。長軸方向はN-84°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立し、長軸東側端部で段が付く可能性があるが、断面のみの観察のため定かではない。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器3点がある。

SK 62 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸232cm、短軸140cm以上、深さ40cmである。長軸方向はN-86°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器4点、土師質土器の皿1点がある。

SK 63 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸435cm、短軸123cm、深さ24cmである。長軸方向はN-88°-Eである。底面は平坦で、壁面は急であるが上半部は不明である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、須恵器1点がある。

SK 64 土坑

2区、V層上面で検出し、SD 21を切る。形態は隅丸長方形で、北側長軸端部が段状になる可能性がある。規模は長軸390cm、短軸106cm、深さ60cmである。長軸方向はN-1°-Eである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器6点がある。

SK 65 土坑

2区、V層上面で検出し、SD 12に切られ、SK 59・67を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸397cm、短軸118cm、深さ54cmである。長軸方向はN-87°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 66 土坑

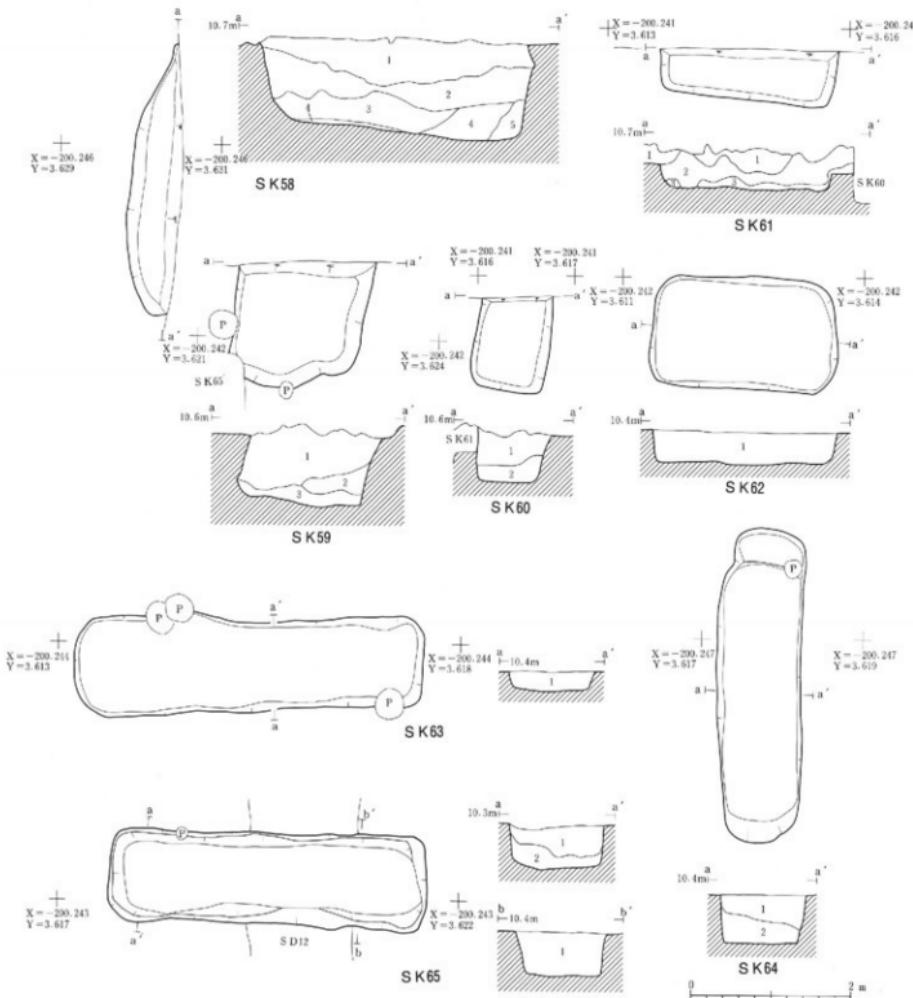
1区、V層上面で検出し、SD 11に切られ、SK 77を切る。形態は楕円形で、規模は長軸125cm、短軸97cm以上、深さ65cmである。長軸方向はN-12°-Eである。底面は起伏があり、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられるが、底面上の2層は黒褐色粘性シルトの薄い層で、自然堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器2点がある。

SK 67 土坑

2区、V層上面で検出し、SD 12・SK 67に切られる。形態は不明で、規模は長軸71cm以上、短軸52cm以上、深さ23cm以上である。底面は狭く平坦で、壁面は直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 68 土坑

1区、V層上面で検出した。形態は楕円形で、規模は長軸103cm、短軸77cm、深さ42cmである。長軸方向はN-88°-Eである。底面は壁際は傾斜があるがほぼ平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。底面近くに炭化木が数本みられたが、壁面及び底面に焼け面は認められず、また堆積土中に焼土もみられないことから、これらは自然炭化したものとみられる。出土遺物は無い。



地塊	層位	土	色	土	性	層	方
SK58	1	黑	褐	色	10YR3/2	1	黑褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/2	2	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
	3	黑	褐	色	10YR3/2	3	黑色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
	4	暗	褐	色	10YR3/2	4	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
SK59	1	暗	褐	色	10YR3/2	1	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/2	2	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	3	暗	褐	色	10YR3/2	3	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
SK60	1	灰	黃褐色	10YR3/3	1	灰褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む	
	2	褐	黃褐色	10YR3/3	2	褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む	
SK61	1	暗	褐	色	10YR3/2	1	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/2	2	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
SK62	1	暗	褐	色	10YR3/2	1	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/2	2	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
SK63	1	暗	褐	色	10YR3/2	1	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/2	2	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
SK64	1	暗	褐	色	10YR3/2	1	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/2	2	暗褐色シルト・泥褐色シルト・泥色シルト小ゾロッタを少量含む
SK65	1	黑	褐	色	10YR3/2	1	灰化物を少量、暗褐色シルト・泥褐色シルト小ゾロッタを多量含む
	2	暗	褐	色	10YR3/4	2	暗褐色シルト・泥褐色シルトを少量含む

第23図 SK (5)

SK69 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11に切られ、SK72・76・95を切る。形態は長方形で、規模は長軸130cm以上、短軸79cm、深さ20cmである。長軸方向はN-20°-Wである。底面は平坦だが南側に向って傾斜し、壁面は直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK70 土坑

1区、V層上面で検出した。形態は隅丸方形で、規模は長軸118cm、短軸100cm、深さ23cmである。長軸方向はN-85°-Wである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK71 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK72に切られる。形態は長方形で、規模は長軸200cm、短軸95cm、深さ110cmである。長軸方向はN-85°-Wである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は繩文土器1点、ロクロ土器4点、在地産の中世陶器の甕1点、古鏡1点、釘1点がある。

SK72 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK69・78に切られ、SK71・73を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸157cm以上、短軸130cm、深さ69cmである。長軸方向はN-6°-Eである。底面は平坦であるが、北側に向ってやや傾斜する。壁面は直立し、北壁はオーバーハングしながら立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土器2点、在地産の中世陶器の鉢1点、古鏡1点、鉄滓1点がある。

SK73 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK69・75・76に切られる。形態は不明で、規模は長軸85cm以上、短軸50cm以上、深さ19cm以上である。底面は僅かの残存とみられ、壁面ともに形状は不明である。堆積土は1層で、人為堆積の可能性がある。出土遺物は無い。

SK74 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11に切られ、SK75・76を切る。形態は長方形で、規模は長軸170cm、短軸90cm、深さ104cmである。長軸方向はN-3°-Wである。底面は中央がややくぼみ、壁際は傾斜し、多少の起伏もみられあまり平坦ではない。壁面は南壁以外は直立する。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。4層は掘り方底面に予め敷かれた層である可能性が強い。出土遺物は須恵器1点がある。

SK75 土坑

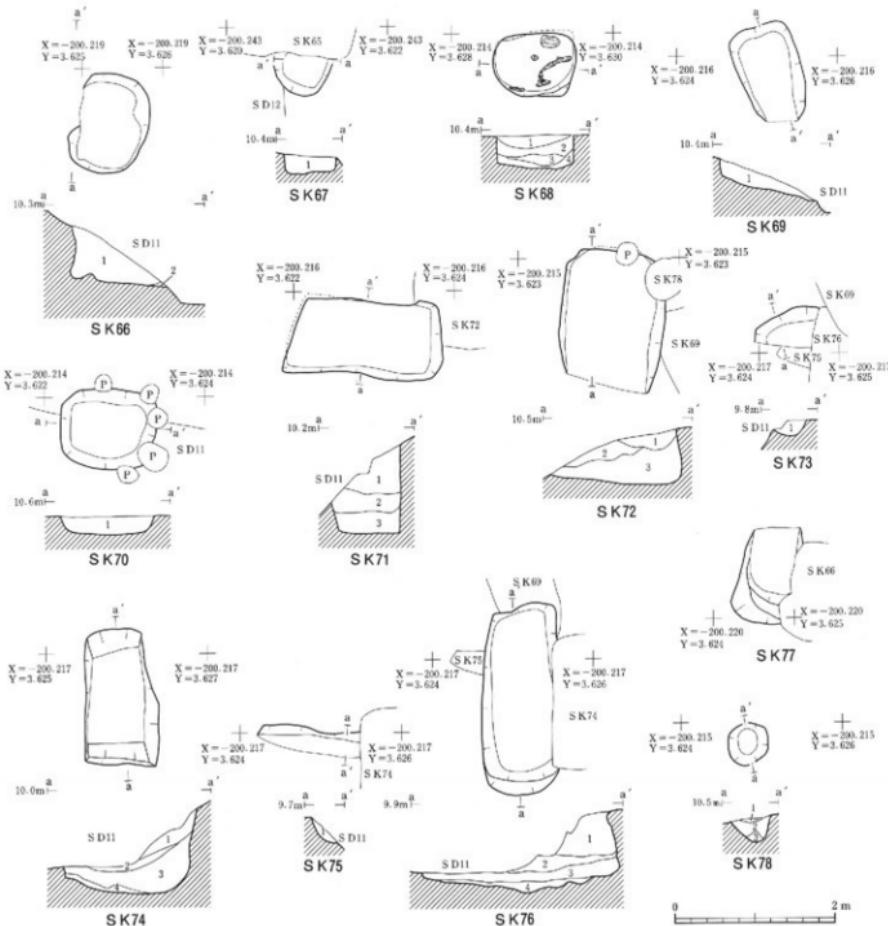
1区、V層上面で検出し、SD11・SK74に切られ、SK73・76を切る。形態は不明で、規模は長軸130cm以上、短軸33cm以上、深さ31cm以上である。残存が極めて悪く、底面状況は不明であるが、壁面はほぼ直立して立上がるものとみられる。長軸方向はN-82°-Wである。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は中国龍泉窯系の青磁碗とみられるもの1点がある。

SK76 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK69・74・75に切られ、SK73を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸240cm、短軸95cm以上、深さ100cmである。長軸方向はN-3°-Wである。掘り方底面は全体に平坦であるが起伏が著しく、4層上面は平坦である。壁面は直立し、北壁はオーバーハングして立上がる。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。平坦面を形成する4層はSK74同様に、予め掘り方底面に敷かれた層とみられる。出土遺物は無い。

SK77 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK66に切られ、SK110を切る。形態は隅丸長方形とみられ、規模は長軸122cm以上、短軸65cm以上、深さ82cmである。底面はほぼ平坦で、壁面は急で、南壁には段がみられる。長軸方向はN-8°-Eである。堆積土は不明である。出土遺物は無い。



第24図 SK (6)

SK78 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11に切られ、SK72を切る。形態は円形で、規模は長軸53cm、短軸51cm、深さ33cmである。断面形はU字形で、壁面はやや急に立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK79 土坑

1区、V層上面で検出し、SD10に切られる。形態は長方形で、規模は長軸119cm、短軸105cm、深さ47cmである。長軸方向はN-27°-Eである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK80 土坑

1区、V層上面で検出し、SD10に切られる。形態は長方形で、規模は長軸143cm以上、短軸86cm、深さ101cmである。長軸方向はN-Sである。底面は平坦で、壁面は直立し、底面との境が明瞭である。堆積土は3層で、人為堆積とみられるが、底面には自然堆積層とみられる薄い黒褐色シルト層がみられる。出土遺物は鉄製品1点がある。

SK81 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸199cm、短軸102cm、深さ38cmである。長軸方向はN-7°-Wである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は2層で、1層については人為堆積とみられるが、2層はV層の砂質土を層状に挟む自然層とみられる。出土遺物は無い。

SK82 土坑

2区、V層上面で検出し、SD12に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸153cm、短軸134cm、深さ44cmである。長軸方向はN-20°-Eである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK83 土坑

2区、V層上面で検出し、SK84を切る。形態は隅丸長方形で、規模は長軸214cm、短軸109cm、深さ23cmである。長軸方向はN-84°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立するものとみられる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK84 土坑

2区、V層上面で検出し、SK83に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸87cm、短軸83cm、深さ26cmである。長軸方向はN-9°-Eである。底面はやや傾斜し、壁面は直立する箇所と緩やかに立上がる箇所がある。堆積土は2層で、1層については人為堆積とみられるが、2層は底面上にみられる自然層とみられる。出土遺物は無い。

SK85 土坑

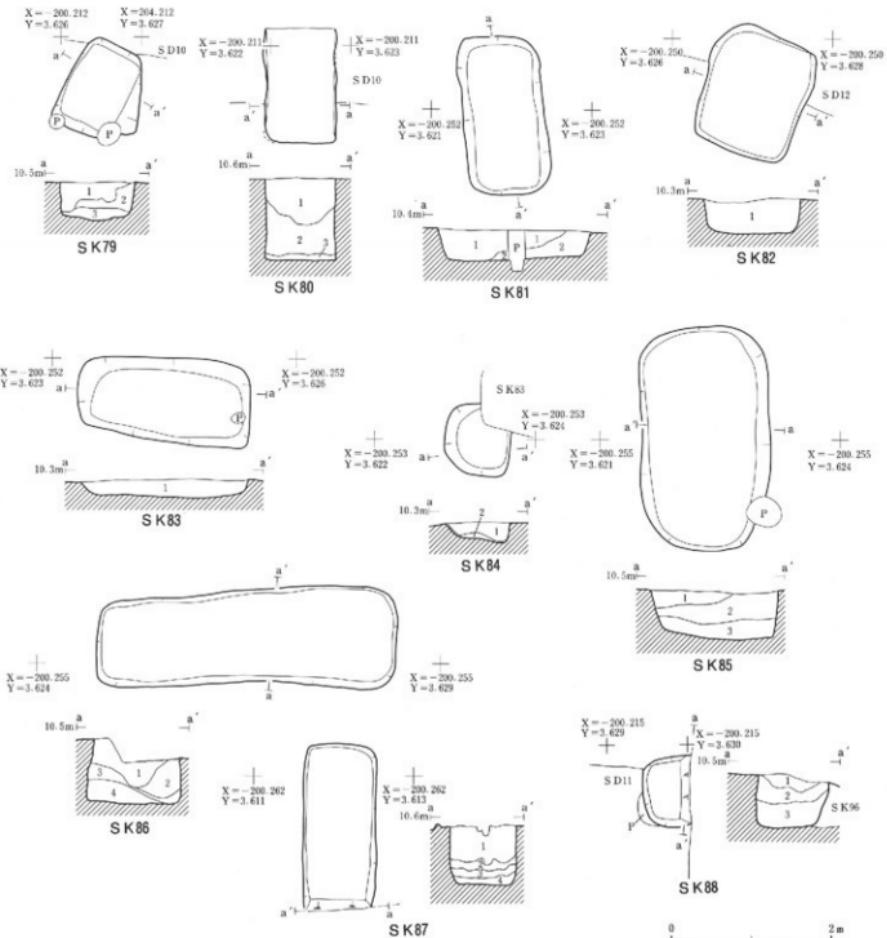
2区、V層上面で検出した。形態は梢円形で、規模は長軸279cm、短軸161cm、深さ57cmである。長軸方向はN-3°-Wである。底面はやや傾斜はあるが平坦で、壁面はかなり急に立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土顎器2点がある。

SK86 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸372cm、短軸125cm、深さ80cmである。長軸方向はN-88°-Eである。底面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK87 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は長方形で、規模は長軸206cm以上、短軸92cm、深さ74cmである。長軸方向はN-2°-Eである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。



第25図 SK (7)

SK 8 8 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11に切られ、SK96を切る。形態は不明で、規模は長軸90cm以上、短軸60cm以上、深さ67cm以上である。底面はほぼ平坦で、壁面は直立気味に立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられるが、他の土坑に比べてブロックが極めて少ない。出土遺物はロクロ土師器2点、土製品1点、鉄滓1点がある。

SK 8 9 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は隅丸長方形で、規模は長軸164cm、短軸90cm、深さ84cmである。長軸方向はN-88°-Wである。底面はやや起伏はあるが平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 9 0 土坑

2区、V層上面で検出し、SD15に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸111cm、短軸98cm、深さ40cmである。長軸方向はN-89°-Eである。底面はやや平坦気味な舟底状で、壁面はやや急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器4点、常滑窯の中世陶器の甕1点がある。

SK 9 1 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK16に切られる。形態は長方形で、規模は長軸156cm、短軸100cm、深さ102cmである。長軸方向はN-85°-Eである。底面は平坦で、壁面はオーバーハング気味に直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられ、3層は壁面の崩落層とみられる。出土遺物は古銭1点の他、層上半の1層中から内外面の漆の被膜のみが残存する漆器の椀が出土したが、この土坑に伴うものではないとみられる。

SK 9 2 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11に切られ、SK93・94・113を切る。形態は方形で、規模は長軸184cm、短軸144cm以上、深さ62cmである。長軸方向はN-86°-Eである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立し、底面との境が明瞭である。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 9 3 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11・SK92・95・113に切られる。形態は隅丸方形で、規模は長軸182cm、短軸117cm、深さ140cmである。長軸方向はN-87°-Eである。底面はほぼ平坦で、壁面は直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられ、3層については予め掘り方底面に敷かれた層とみられる。出土遺物は無い。

SK 9 4 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11、SK92・93に切られる。形態は梢円形で、規模は長軸121cm、短軸90cm、深さ41cmである。長軸方向はN-85°-Wである。底面は壁際が傾斜するがほぼ平坦で、壁面は残存部分ではやや緩やかに立上がる。堆積土は4層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 9 5 土坑

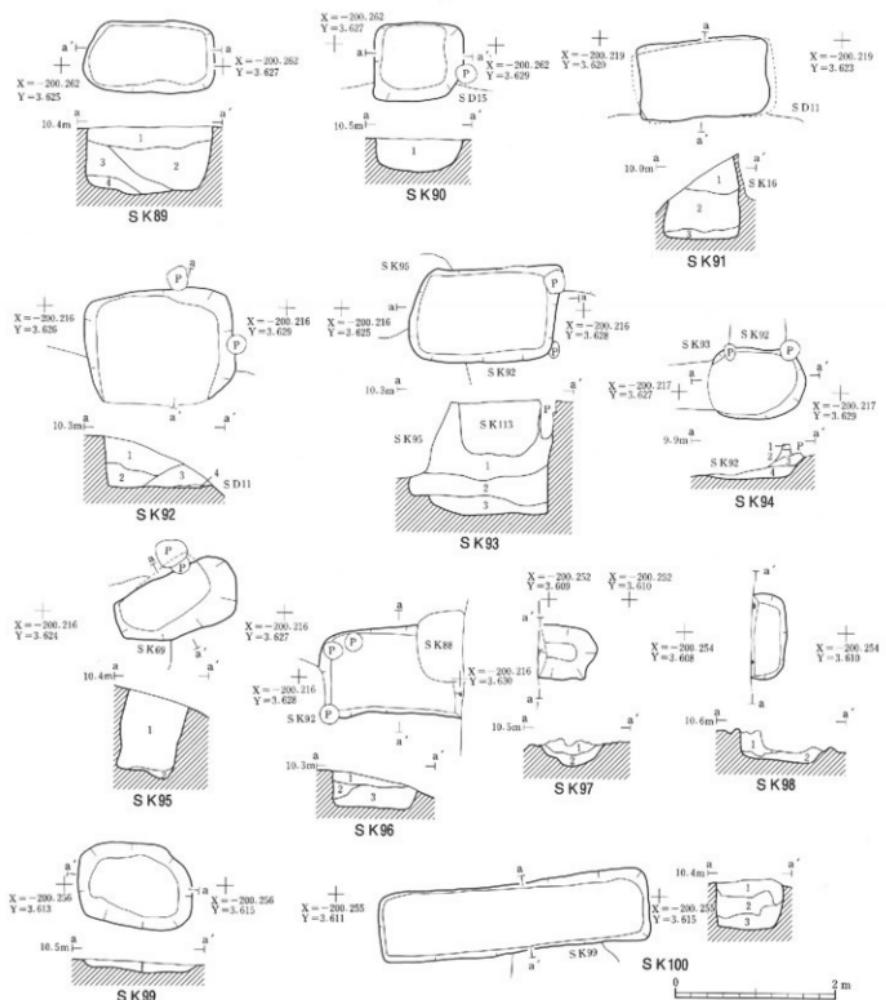
1区、V層上面で検出し、SD11、SK69に切られ、SK93を切る。形態は梢円形で、規模は長軸158cm、短軸81cm、深さ98cmである。長軸方向はN-61°-Eである。底面はやや起伏があるが平坦で、壁面は全体に南側に傾斜しながら直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 9 6 土坑

1区、V層上面で検出し、SD11、SK88・92に切られる。形態は長方形で、規模は長軸180cm以上、短軸109cm、深さ44cmである。長軸方向はW-Eである。底面は平坦で、壁面はほぼ直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK 9 7 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は梢円形とみられ、規模は長軸73cm以上、短軸66cm、深さ32cm以上である。長



遺構	部位	上色	土性	備考	遺構	部位	土色	土性	備考
SK89	1 黑 色	107R3/2	砂質土	V層 特異物を含む	SK94	1 黒 色	107R3/2	砂質土	酸化鉄斑を少量含む
	2 深紅褐色	107R4/2	砂質土	暗紅色小ブロッケを少量含む		2 黒 色	107R3/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	3 深紅褐色	107R4/2	砂質土	暗紅色小ブロッケを多量含む		3 黒 色	107R3/2	シルト	V層ブロッケをほとんど含まない
	4 深紅褐色	107R4/2	砂質土	暗紅色小ブロッケを極端に含む		4 深紅褐色	107R3/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
SK90	1 灰 黑褐色	107R4/2	砂質土	V層 特異物を含む	SK95	1 深 黄褐色	107R4/2	砂質土	炭酸塩物を含む、1cmのV層ブロッケを多量含む
	2 灰 黑褐色	107R4/2	砂質土	炭酸塩物を、V層ブロッケを多量含む		2 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケをやや多く含む
	3 灰 黑褐色	107R4/2	砂質土	炭酸塩物をシートゾーンで多量含む		3 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内でV層ブロッケをやや多く含む
SK92	1 灰 黑褐色	107R4/2	砂質土	炭酸物、粘土物を含む、1cmのV層ブロッケを多量含む	SK96	1 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内でV層ブロッケをやや多く含む
	2 灰 黑褐色	107R4/2	砂質土	炭酸物、粘土物を含む、1cmのV層ブロッケを多量含む		2 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内でV層ブロッケをやや多く含む
	3 灰 黑褐色	107R4/2	砂質土	炭酸物、粘土物を含む、V層ブロッケを多量含む		3 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内でV層ブロッケをやや多く含む
SK93	4 深紅褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む	SK97	1 にじみ黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを含む
	5 黑 色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		2 にじみ黄褐色	107R4/2	シルト	V層ブロッケをほとんど含まない
	6 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		3 にじみ黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
SK94	1 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む	SK98	1 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	2 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		2 浅 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	3 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		3 にじみ黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
SK95	1 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む	SK99	1 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	2 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		2 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	3 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		3 にじみ黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
SK96	1 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む	SK100	1 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	2 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		2 深 黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む
	3 深 黄褐色	107R4/2	粘土質	粘土物、V層ブロッケを少量含む		3 にじみ黄褐色	107R4/2	シルト	1cm内のV層ブロッケを少量含む

第26図 SK (8)

軸方向はN-84°-Wである。底面状況は不明で、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK98 土坑

2区、IV層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸106cm以上、短軸44cm以上、深さ35cm以上である。長軸方向はN-1°-Eである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK99 土坑

2区、V層上面で検出し、SK100を切る。形態は橢円形で、規模は長軸148cm、短軸106cm、深さ12cmである。長軸方向はN-77°-Wである。底面は壁際で傾斜があるがほぼ平坦で、壁面状況は不明である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK100 土坑

2区、V層上面で検出し、SK99に切られる。形態は長方形で、規模は長軸336cm、短軸86cm、深さ62cmである。長軸方向はN-84°-Eである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK101 土坑

2区、V層上面で検出し、SD14cに切られる。形態は方形で、規模は長軸100cm、短軸85cm、深さ65cmである。長軸方向はN-11°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土器2点、須恵器1点、常滑産とみられる中世陶器の壺か壺1点がある。(30図3)は体部破片で、台形を呈し、側面が全体に磨耗していることから、砥石に転用されたものと考えられる。

SK102 土坑

2区、V層上面で検出した。唯一溝跡より新しい土坑で、SD14aを切っている。形態は橢円形で、規模は長軸76cm、短軸49cm、深さ14cmである。長軸方向はN-10°-Wである。底面は緩やかな舟底状で、境が不明瞭なまま壁面が緩やかに立上がる。堆積土は2層で、2層は炭化物層である。この土坑は一般に焼土土坑と呼ばれるものであるが、出土遺物が無かったことから、性格は不明である。

SK103 土坑

1区、IIb層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸40cm以上、短軸15cm以上、深さ22cm以上である。底面は緩やかな舟底状で、壁面も緩やかに立上がる。堆積土は3層で、3層は基本層IIb層が焼けたものである。残存が悪く詳細は不明である。出土遺物は無い。

SK104 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は不整形で、規模は長軸82cm、短軸49cm、深さ49cmである。長軸方向はN-70°-Wである。底面は狭く、壁面は約45°の角度で立上がる。堆積土は2層で、人為堆積の可能性がある。出土遺物は無い。

SK105 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SD12・SK30・32・33・40に切られる。形態は不整円形で、規模は長軸300cm、短軸300cm、深さ129cmである。底面はほぼ円形で、中央部が低く、壁際は傾斜する。壁面は約60°の角度で全周して立上がる。堆積土は6層で、5層は自然堆積であるが、上半部は人為堆積で、井戸跡の可能性がある。底面近くには人頭大の円碟が数個まとまって検出された。出土遺物はロクロ土器36点、須恵器5点がある。

SK106 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は長方形で、規模は長軸125cm以上、短軸100cm以上、深さ84cm以上である。長

軸方向はN-6°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は5層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 1 0 7 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK30・32・33に切られ、SK105を切る。形態は長方形で、規模は長軸230cm以上、短軸155cm以上、深さ66cm以上である。長軸方向はN-88°-Wである。底面は平坦で、壁面はオーバーハングしながら直立する。堆積土は6層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点、須恵器3点、土師質土器の皿1点、刀子とみられるもの1点がある。

S K 1 0 8 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SD12・SK46・48に切られ、SK109を切る。形態は不明で、規模は長軸160cm以上、短軸110cm以上、深さ41cm以上である。底面は平坦とみられ、壁面は残存部分をみる限りは急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積の可能性がある。出土遺物は無い。

S K 1 0 9 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SD12・SK48・108に切られる。形態は不明で、規模は長軸120cm以上、短軸30cm以上、深さ16cm以上である。底面は平坦とみられ、壁面は残存部分をみる限りは急に立上がる。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 1 1 0 土坑

I区、V層上面で検出し、SD11・SK77に切られる。形態は不明で、規模は長軸105cm以上、短軸85cm以上、深さ65cm以上である。長軸方向はN-23°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。また底面にはむしろ状の敷物の痕跡らしきものが確認された。出土遺物は無い。

S K 1 1 1 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は橢円形で、規模は長軸58cm以上、短軸26cm、深さ16cmである。長軸方向はN-79°-Wである。底面は狭く、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

S K 1 1 2 土坑

2区、V層上面で検出し、SD12に切られる。形態は不明で、規模は長軸240cm以上、短軸62cm以上、深さ89cm以上である。底面は平坦であるが壁際は緩やかに傾斜し、壁面は急に立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点がある。

S K 1 1 3 土坑

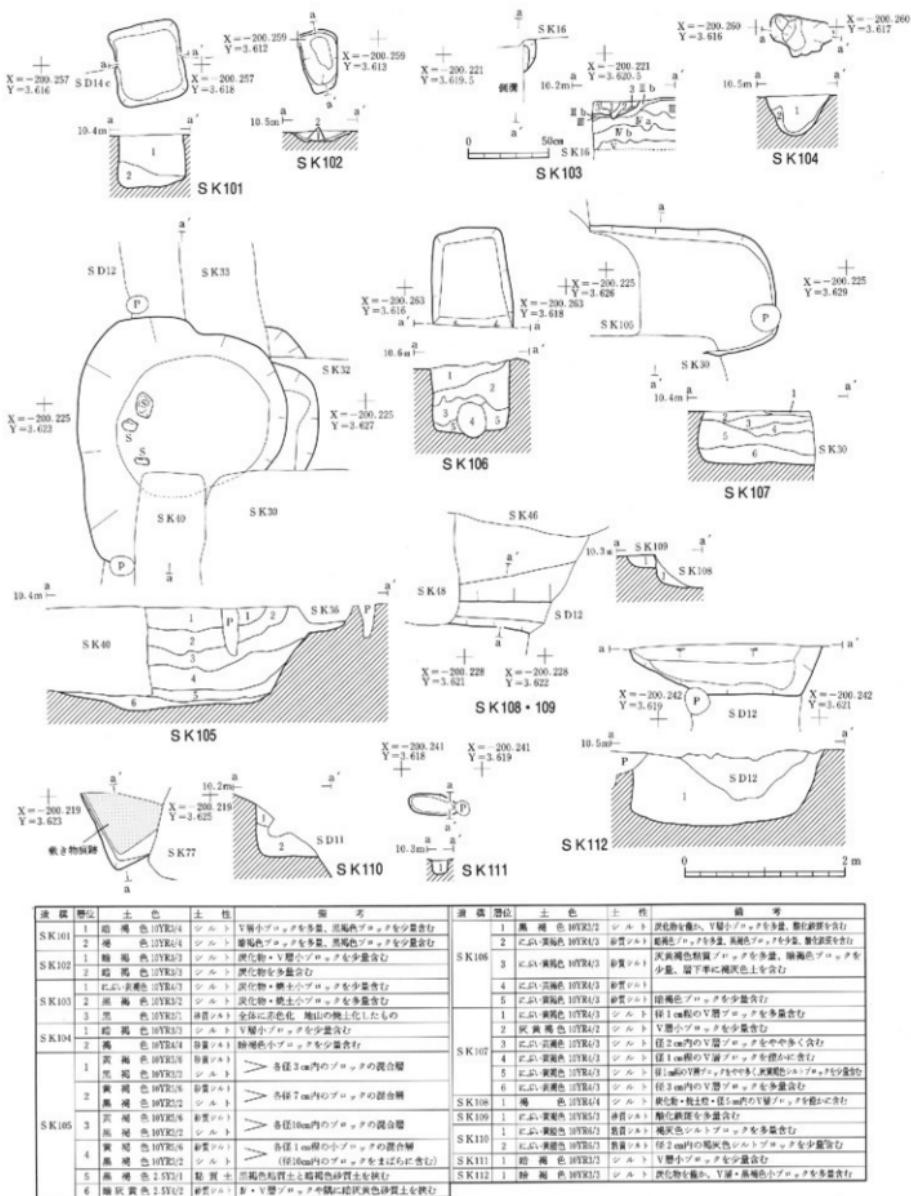
1区、V層上面で検出し、SD11・SK92に切られ、SK93を切る。形態は不明で、規模は長軸105cm以上、短軸35cm以上、深さ70cm以上である。長軸方向はN-75°-Eである。底面は残存が少なく不明で、壁面は下半部はやや緩やかだが、上部は直立する。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点がある。

S K 1 1 4 土坑

1区、IIa層上面で検出し、SK46に切られる。形態は橢円形で、規模は長軸86cm、短軸59cm、深さ35cmである。長軸方向はN-8°-Eである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は2層で、1層は人為堆積層で2層は底面上にみられる自然層とみられる。出土遺物は無い。

S K 1 1 5 土坑

1区、IIa層上面で検出し、SK50・52に切られる。形態は不明で、規模は長軸120cm以上、短軸112cm以上、深さ92cm以上である。底面は平坦で、壁面は直立し、一部でオーバーハングする。堆積土は5層で、人為堆積とみられるが、最下層の5層は壁面の崩落層とみられる。出土遺物は鉄滓1点がある。



第27図 SK (9)

SK116 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SD12・SK29・53に切られる。形態は不明で、規模は長軸103cm以上、短軸90cm以上、深さ109cm以上である。長軸方向はN-5°-Eである。底面はやや傾斜するが平坦とみられ、壁面は直立気味に立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は鉄滓1点がある。

SK117 土坑

I区、IIa層上面で検出し、SK30に切られる。形態は不明で、規模は長軸95cm以上、短軸50cm以上、深さ124cm以上である。底面は狭く、平坦面はみられず、壁面は下半部でやや緩やかに立上がり、上半部は直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK118 土坑

I区、IIa層上面で検出した。断面のみの確認のため、形態は不明である。規模は長軸190cm以上、短軸は不明、深さ50cm以上である。断面のみからみると、底面は平坦で、壁面はやや緩やかに立上がるものとみられる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物はクロロ土師器1点がある。

SK119 土坑

2区、V層上面で検出した。形態は円形で、規模は長軸68cm、短軸61cm、深さ44cmである。断面形はV字形で、明瞭な底面はみられない。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器2点がある。

SK120 土坑

1区、IIc層上面で検出した。形態は長方形で、規模は長軸134cm、短軸106cm、深さ55cmである。長軸方向はN-87°-Eである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は4層で、1~3層は人為堆積とみられるが、最下層の4層は暗褐色シルトの自然層とみられる。出土遺物は無い。

SK121 土坑

1区、III層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸110cm以上、短軸65cm以上、深さ26cmである。底面は傾斜はあるが平坦で、壁面は上半部がやや緩やかに立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK122 土坑

1区、V層上面で検出した。形態は不明で、規模は長軸165cm以上、短軸110cm以上、深さ22cmである。長軸方向はN-80°-Eである。底面は平坦で、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は2層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土師器1点がある。

SK123 土坑

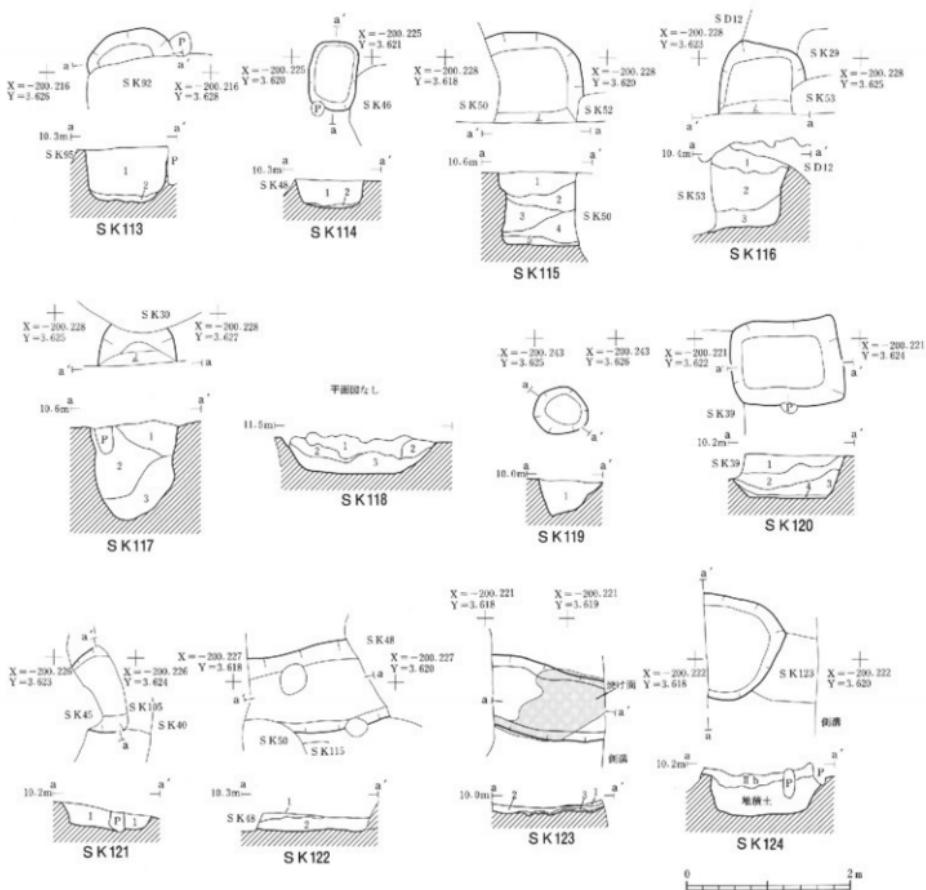
1区、IV層上面で検出し、SK124を切る。形態は橢円形とみられ、規模は長軸140cm以上、短軸90cm以上、深さ20cmである。長軸方向はN-79°-Wである。短軸側の断面形状は底面はやや平坦だが、壁際では傾斜し、壁面は残存が悪いために不明である。堆積土は3層で、最下層の3層は焼土層である。堆積土中からは鉄滓や鍛造剥片が多く出土した。

SK124 土坑

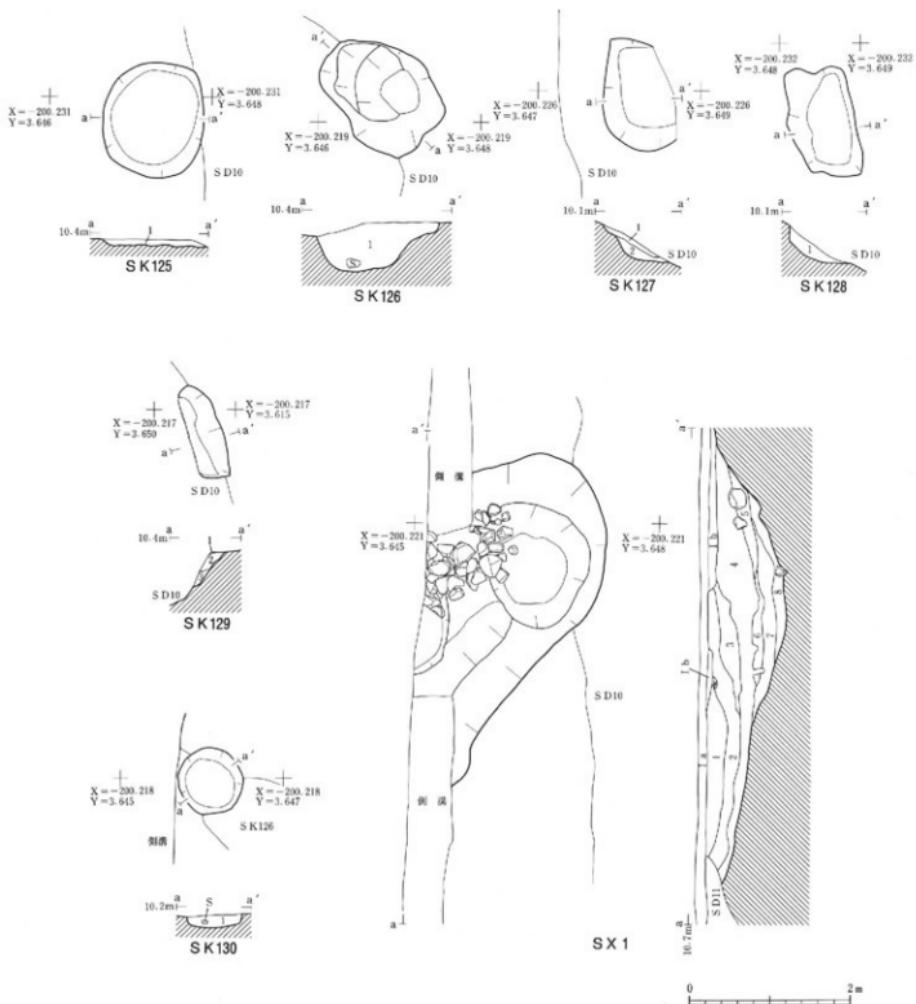
1区、V層上面で検出し、SK123に切られる。形態は不明で、規模は長軸130cm以上、短軸100cm以上、深さ53cmである。底面は平坦で、壁面は急に立上がる。堆積土は不明である。出土遺物は繩文土器1点がある。

SK125 土坑

4A区、IIc層上面で検出し、SD10に切られる。形態は円形で、規模は長軸144cm以上、短軸124cm以上、深さ8cmである。長軸方向はN-21°-Eである。底面は平坦で、壁面は残存が悪く不明である。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

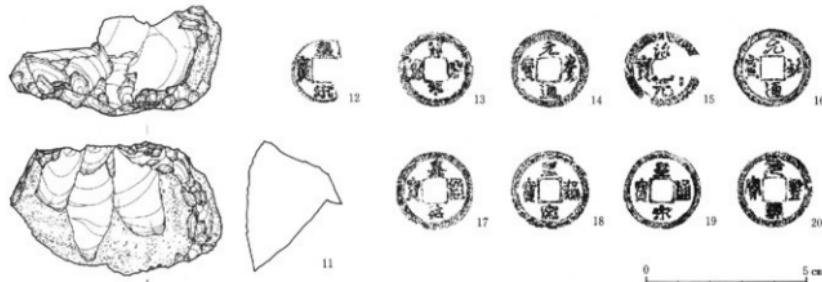
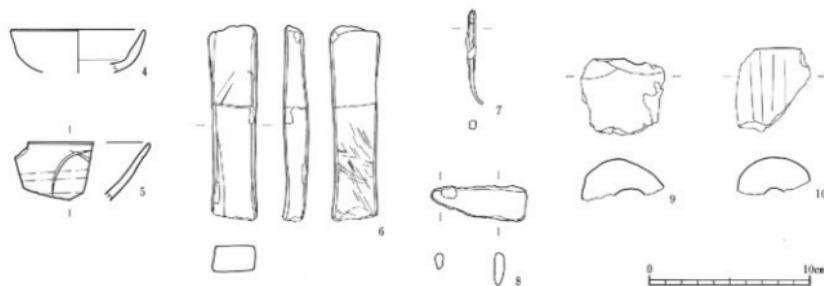


第28回 SK (10)



第29図 SK・SX

地塊	場所	土色	土性	編 号
SK125	1 海 底	灰 色 HY24/1	シルト	無鉄化ドロップ・褐色小ブロックを少量、無鉄化物を多量含む
SK126	1 黒 黄 色 HY24/2	黒 色	シルト	無鉄化物・V端小ブロックを多量、無鉄化物を少量含む
SK127	1 黑 黄 色 HY24/2	シルト	無鉄化物を少量含む	
SK128	2 黑 黄 色 HY24/2	黒 色	シルト	無鉄化ドロップ・V端と鉄化物層を呈する状況
SK129	1 黑 黄 色 HY24/2	黒 色	シルト	無鉄化ドロップ・V端と鉄化物層を呈する状況
SK130	1 黑 黄 色 HY24/1	シルト	シルト	無鉄化物を少量含む
	2 黑 黄 色 HY24/2	黒 色	シルト	無鉄化物を少量含む
SX1	1 黑 黄 色 HY24/4	黒 色	シルト	無鉄化ドロップ・褐色小ブロックを多量含む
	2 黑 黄 色 HY24/5	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む
	3 黑 黄 色 HY24/6	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む
	4 黑 黄 色 HY24/7	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む
	5 黑 黄 色 HY24/8	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む
	6 黑 黄 色 HY24/9	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む
	7 黑 黄 色 HY24/10	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む
	8 黑 黄 色 HY24/11	黒 色	シルト	無鉄化物を僅かに含む



回収番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	名稱	寸法(直径×厚さ)mm	外因調整	内面調整	底面調整	備考	類型	参考文献番号
1	29	1区 SK 1	堆積土	土器部	漆器	—	—	—	—	—	—	18-5
2	8	1区 SK 30	堆積土	土器部	漆器	—	—	—	—	—	—	24-1
3	22	1区 SK 104	堆積土	土器部	漆器	—	—	—	—	—	—	24-2
4	6	6 T SK 17	1	一般堆积物	陶	(84) × × ×	13CL16	ロクコ風形 全体磨拭	—	—	21-1	
5	12	1区 SK 41	堆積土	土器部	漆器	—	—	14C	運転文	—	—	20-13
回収番号 登録番号 出土地点 出土層位 種別 名稱 寸法(直径×厚さ)mm 重量(g) 古材 備考 参照文献番号												
6	2	1区 SK 37	1	石製品	石製品	32(23-31)×13-16	(97)	—	—	—	—	27-7
7	2	1区 SK 27	1	新製品	劍	— × (5.5) × (4)	(4.3)	西周後段 斷面切削曲がり 直面長方形	—	—	—	22-13
8	9	1区 SK 107	新製品	刀子	刀子?	— × (22) × (6)	(6.3)	先秦器	—	—	—	22-12
9	1	1区 SK 39	堆積土	土器部	土器品	七瓣	— × —	(15)	—	—	—	27-1
10	2	1区 SK 88	堆積土	土器部	土器品	土瓣	— × —	(13)	—	—	—	27-2
回収番号 登録番号 出土地点 出土層位 種別 名稱 寸法(直径×厚さ)mm 重量(g) 古材 備考 参照文献番号												
11	1	1区 SK 30	堆積土	陶片	石器	41×66×20	67.0	追跡研究	自然出埋存	—	—	22-5
回収番号 登録番号 出土地点 出土層位 種別 名稱 製造者 時代 制造年 類別 備考 参照文献番号												
12	1	1区 SK 49	3	銅製品	銅鏡	慈宋造質	北宋	1036	欠損	—	—	28-2
13	2	1区 SK 41	堆積土	銅製品	銅鏡	一元質	—	—	—	—	—	28-12
14	3	1区 SK 44	1	銅製品	銅鏡	元慶造質	北宋	1078	—	—	—	28-8
15	4	1区 SK 44	1	銅製品	銅鏡	慈宋造質	北宋	1064	欠損	—	—	28-7
16	5	1区 SK 48	堆積土	銅製品	銅鏡	元祐造質	北宋	1085	—	—	—	28-10
17	6	1区 SK 49	堆積土	銅製品	銅鏡	夏祐造質	北宋	1056	—	—	—	28-5
18	7	1区 SK 48	堆積土	銅製品	銅鏡	皇帝造質	北宋	1034	—	—	—	28-3
19	8	1区 SK 71	堆積土	銅製品	銅鏡	聖宋造質	北宋	1034	—	—	—	28-4
20	9	1区 SK 72	堆積土	銅製品	銅鏡	元祐造質	北宋	1075	—	—	—	28-9

第30図 SK出土遺物

SK126 土坑

4 A区、II c層上面で検出し、S X 1に切られ、SK130を切る。形態は不整形で、規模は長軸160cm、短軸123cm、深さ60cmである。長軸方向はN-49°-Wである。上端に比べて底面は狭く、壁面は途中に平場をもちながら緩やかに立上がる。堆積土は1層で、人為堆積とみられる。出土遺物はロクロ土器2点、在地産の中世陶器の鉢1点がある。

SK127 土坑

4 A区、V層上面で検出し、SD10に切られる。形態は橢円形で、規模は長軸136cm、短軸90cm以上、深さ46cmである。長軸方向はN-7°-Wである。底面は平坦で、壁面は緩やかに立上がり、一部に段がみられる。堆積土は2層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK128 土坑

4 A区、V層上面で検出し、SD10に切られる。形態は不整形で、規模は長軸137cm、短軸84cm、深さ46cmである。長軸方向はN-10°-Wである。底面は平坦で、壁面は底面から緩やかに立上がるが、上半部は直立する。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は中国龍泉窯系の青磁碗1点がある。

SK129 土坑

4 A区、V層上面で検出し、SD10に切られる。形態は不明で、規模は長軸121cm、短軸42cm、深さ43cm以上である。長軸方向はN-17°-Wである。残存状況が極めて悪いため、底面状況は不明で、壁面は約45°で立上がる。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SK130 土坑

4 A区、II c層上面で検出し、SD10に切られる。形態は不明で、規模は長軸121cm、短軸42cm、深さ43cmである。長軸方向はN-17°-Wである。底面は平坦で、壁面は直立する。堆積土は3層で、人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

SX1 不明遺構

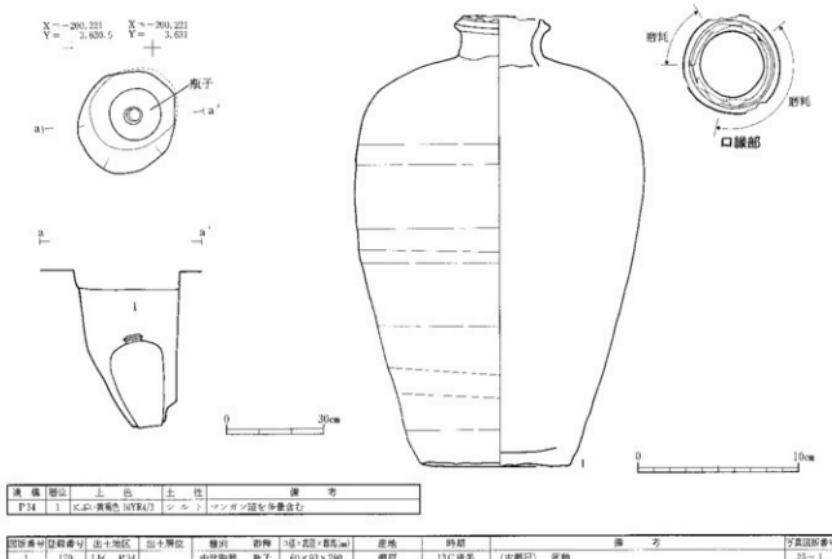
4 A区、II a層上面で検出し、SK126を切る。形態は不整形で、規模は長軸400cm以上、短軸230cm以上、深さ86cm以上である。底面は先端部の円形のプランに溝状の底面が接続する形をみせ、壁面は緩やかに立上がる。堆積土は8層で、多少のブロック土は混入するが、基本的に全層とも自然堆積とみられる。この遺構については形状・堆積土からみて溝跡の端部の可能性も考えられるが、これと隣接するSD10・11との関係は不明である。出土遺物は土器14点、在地産の中世陶器の鉢1点、砥石1点、古銭1点がある。(30図1)は非ロクロの土器の器台で、台部、脚部とも欠損し、外面はヘラケズリが施されている。

P34 陶器埋設遺構

1区II a層上面で検出した。SD11の南側に位置し、直接的な重複関係はないが、他の遺構の状況からSD10に切られているものと考えられる。当初、P34は他のピット同様に柱穴の可能性が考えられていたことから、柱痕跡の確認作業を行ったところ柱跡は検出されず、さらに掘り方南半分を掘下げたところ、検出面より約20cm下で口縁部が開口した状態の壺とみられるものを確認した。さらに壺の埋設状態をみるためにピット南側を大きく掘下げ、その断面状況をみると、古瀬戸の瓶子(31図1)が完全な形で、10°程度傾いてはいるが、ほぼ正立して据えられていることがわかった。

ピットの掘り方は直径が約30cmのほぼ円形で、東及び北側の壁は直立するが、底面近くに段がみられ、南側は上半部が急で下半部がやや緩やかになっている。検出面からの深さは48cmで、底面径は10cmと狭くなる。埋設土はにぶい黄褐色シルト質の単層で、他の多くの土坑のような明瞭なブロック土の混入はみられないが、人為堆積と考えられる。

瓶の底部はピット底面から1cmほど下がっていたことから、ピット底面に置かれたものが自重により沈んだものとみられる。内部に遺物は全くみられず、本来内部に何も納められていないかったか、或いは何らかの固体か液体が残らなかったのかは不明である。また器内に埋土の流入がみられなかつたことから考えると、瓶の口は蓋のようなもので塞がれていたが、それが後に腐り、上部の埋土は固化し、器内に流入することなく今日に至ったものと推測される。しかしながら断面観察では口縁部上に蓋の痕跡らしいものは確認できなかった。掘り方は上半部が後世の削平によりかなり失われているとみられ、瓶は穴の直径からすれば深く掘られた小穴の中に納められていたものと考えられる。



第31図 P34 陶器埋設遺構

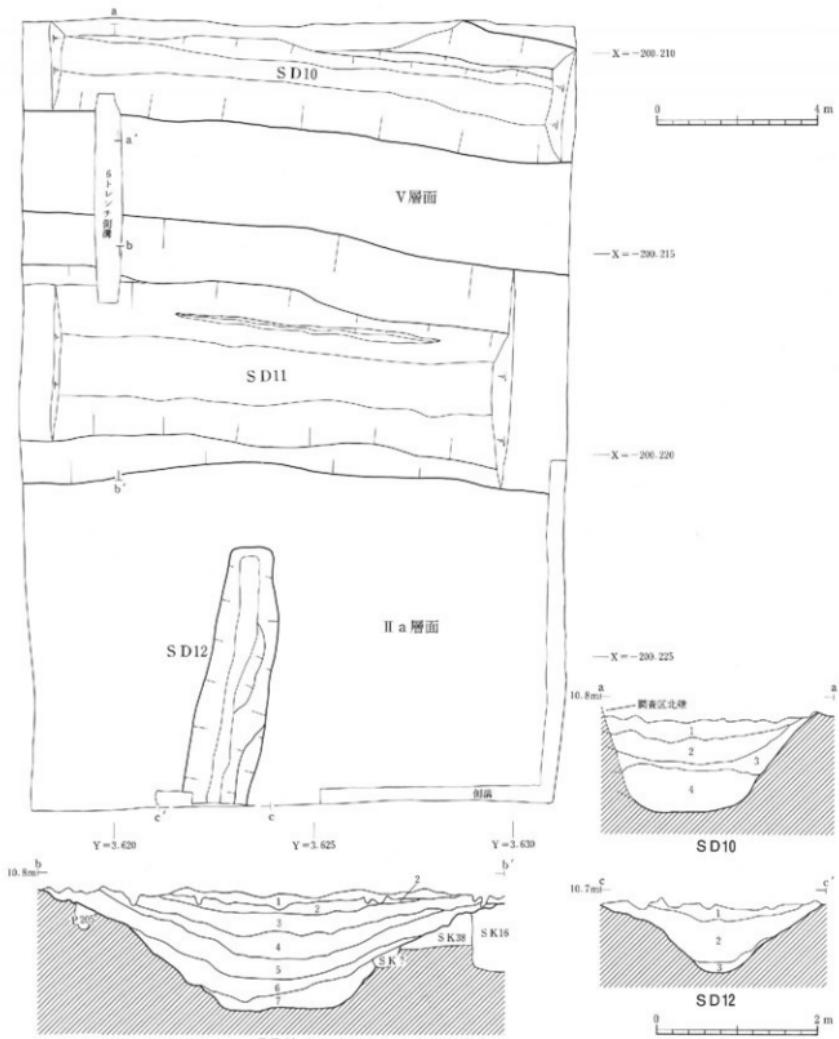
(3) 溝跡

S D 10 溝跡

1区北端部と4A区において幅のほぼ同じ溝跡を検出したが、これらは方向性、形状から同一のものとみられる。

1区での検出面はV層上面で、1区の中でも北半部の微高地上に位置している。重複はSK79・80を切っており、溝跡より新しいものはみられない。方向はN-82°-Wの東西方向で、確認長は約14mである。溝幅は北壁全体が調査区外となることから、詳細は不明であるが、1区東壁断面からみると約3m程である。底面幅は50~100cmで、深さは110~120cmである。壁面は50~60°程で立上がり、途中に段などはみられず、底面は壁面との境は不明瞭であるがほぼ平坦である。堆積土は4層で、全体がシルト質で、4層は粘質シルトと砂質シルトの互層となるなど、いづれの層とも自然堆積土とみられる。

4A区では中央部では検出のみに止めたが、これより北側と南側において溝跡を掘込んでいる。4A区での検出面は微高地となる北端部ではV層であるが、それより南側ではIIa層上面である。重複は4A区検出の全ての土坑



地質層位	土色	土性	備考	地質層位	土色	土性	備考
SD10	1 淡黄褐色 HYR5/2	シルト	全体にマツガニ層を含む。一部薄手の泥とぶつ。薄褐色ブロッカを含む。	4 淡黄褐色 HYR5/1	粘質シルト	層面上に薄い淡褐色ブロッカ。全体にマツガニ層を含む。	
	2 淡黄褐色 HYR5/2	シルト	全体にマツガニ層を含む。鉄鉻斑を多量含む。	5 淡灰褐色 HYR4/1	粘質シルト	層面上に薄い淡褐色ブロッカ。鉄鉻斑を含む。全体にマツガニ層を含む。	
	3 淡灰褐色 HYR4/1	シルト	全体に鉄鉻斑層を含む。	6 淡黄褐色 HYR4/2	シルト	薄い淡褐色鉄鉻斑層を複数か持む。全体にマツガニ層を含む。	
	4 淡灰褐色 HYR4/1	粘質シルト	層下半は全体に褐色がかったり。粘質シルトと砂質シルトとの互層となる。	7 淡黄褐色 HYR4/2	粘質シルト	薄い淡褐色鉄鉻斑層を複数か持む。全体にマツガニ層を含む。	
SD11	1 淡灰褐色 HYR5/2	シルト	高褐色シルトブロッカを含む。	1 黑色 HYR4/4	粘質シルト	薄い淡褐色鉄鉻斑層を複数か持む。	
	2 淡灰褐色 HYR5/2	シルト	全体に鉄鉻斑層を含む。	2 淡灰褐色 HYR4/1	粘質シルト	淡褐色鉄鉻斑層を複数か持む。薄いV層ブロッカを多量含む。	
	3 淡灰褐色 HYR5/2	シルト	全体にマツガニ層を含む。	3 淡灰褐色 2 SY4/2	シルト	V層ブロッカを少量含む。	

第32図 1区SD

を切っており、溝跡より新しいものは認められない。方向は北側ではほぼ南北方向で、北端部では緩やかに西へカーブしながら1区へと続いており、南側ではN-20°-Eとやや方向が西側を向いている。4区全体での確認長は約44mであるが、これが4B区南端部でどのように延びるのかは不明である。溝幅は400~440cmで、ほぼ一定しており、底面幅は北端コーナー部で約170cmと広めなのに対して、60cmと狭くなる箇所もみられる。深さは100~120cmである。壁面は1区に比べて30~40°と緩やかで、一部にテラス状の段がみられ、底面は平坦である。南側の底面には溝方向と直交する土手状の高まりがあり、これを境に底面が分断される箇所がみられる。ここから溝跡の一部が西側へ分岐する様子もみられるが、調査区外のため詳細は不明である。また南端部では溝跡全体がやや西よりも曲っていく様子がみられるのに加え、その一部は浅くなりながらも南下している感のある箇所もみられる。堆積土は場所により異なるが、北端部西壁では5層で、最下層はブロック土の多く混入した層であるが、いづれも自然堆積土とみられる。また北半部では7層が確認され、1層は砂質土で、この層は溝跡全体に広くみられ、溝が僅かな窪みとして残存していた際に、多くの土砂が一時期に流入したものとみられる。5層はやはりブロック混じりの溝底面の層である。6・7層は溝跡西壁にみられる層であるが、1~5層との比較から、これらは当初、掘った溝に堆積したもので、SD10は後に掘り直されていることが考えられる。このような状況は南側の土層観察でも確認できた。

出土遺物は繩文土器4点、弥生土器1点、クロ土器56点、須恵器9点、土師質土器の皿1点、白石窯系とみられる中世陶器の小壺1点、在地産の中世陶器の甕19点、鉢7点、美濃（志野）産の菊皿1点、瀬戸・美濃産とみられる小皿1点、大堀相馬産の小杯1点、筒形碗1点、中国龍泉窯系の青磁碗3点、茶臼1点、石臼1点がある。

(33図6)は須恵器の高台付杯で、底部は回転ヘラケズリのち高台部を貼付けている。(33図12・13、34図1)は在地産の甕で、(12)は体部破片の周縁を打ち欠いた円盤の可能性がある。(34図2・5)は鉢で、(2)は高台があり、鉄分の噴出しが著しい。(33図10)は白石窯系とみられる小壺で、内外面とも体部ナデのち口縁部にクロナデを施している。(34図6)は瀬戸・美濃産とみられる小型丸皿で、底部は削り込んで基底底で、高台部の釉を拭き取っている。(34図9~11)は青磁の碗である。以上の中世とみられるもの他に埋土上半からは(34図8)のような志野の菊皿など、近世の遺物が僅かに出土している。

SD11 溝跡

SD10同様に1区と4A区で検出したが、4A区では壁面の僅かな検出であった。

1区での検出面は北岸が激高地部のV層上面で、南岸は低位部に堆積するIIa層上面で、溝跡はV層面でみれば70~80cmの比高差のある地形の境に掘られていることがわかる。重複は他の全ての土坑・ビットを切って検出されており、これより新しい遺構は全く確認できない。またSD10との直接的な重複は認められない。方向はN-82°-WとSD10と同方向を向いている。確認長は13.5mで、溝幅は壁面上端でかなり緩やかになるが、断面からみると640cmとかなりの幅をもっている。底面幅は110~150cmで、深さは140cmとSD10に比べても深い。壁面は下半部では45°程の立上がりをみせるが、上半部はかなり緩やかなものとなる。壁面には特に目立ったテラス状のものはみられないが、北壁側の下半部には長さ660cmにもわたり、幅10~30cmの狭い段状の抉りがみられる。底面は壁面との境はわりと明瞭で、ほぼ平坦である。堆積土は7層で、全てシルトか粘質シルトであるが、4層については層上半に、いわゆる黄橙色土が多量混入することから、SD11は下半部が自然堆積した後に人為的に埋め戻されたものと考えられる。

4A区での検出面はIIa層上面で、ごく一部の検出であるが、ビットを切っている。方向は東側に位置するSD10とほぼ平行して走る南北方向とみられ、このことからSD11はSD10の内側を重複すること無く巡る溝とみられる。1区での両溝間の幅は約2.5mで一定しているが、4区においては1.7~2.7mとばらつきがあり、全体にやや狭い傾向がある。4A区での確認長は7.5m程である。溝幅は不明で、壁面は確認できる限りでは途中に段をもっ

ている可能性がある。底面状況は不明である。堆積土は4層で、1区でみられたような人為堆積とみられる層は確認できず、全て自然堆積土とみられる。

出土遺物は縄文土器2点、ロクロ土師器52点、須恵器5点、土師質土器の壺4点、在地産の中世陶器の甕9点、鉢3点、渥美産の壺4点、瀬戸産の瓶子1点、中国産の白磁とみられるもの1点、砥石1点、鉄鍋の底部分とみられるもの1点がある。(34図3・4)は在地産の鉢で、口縁部は直線状で、(4)の口縁端部には凹線が巡る。(35図1)は鉄鍋の底部から体部立上がり部分とみられ、底部径は15cmほどと推定される。

SD12 溝跡

1区南部と2区北東部で検出した。

1区での検出面はIIa層上面で、重複は他の全ての土坑・ピットを切っており、これより新しい遺構は無い。方向はN-10°-Eで、1区でのSD10・11に直交する方向を示している。確認長は6.5mで、溝幅は北端部が110cmである以外は180cm程で一定している。底面幅は25~50cmと狭く、深さは80cm程である。壁面は下半部に比べ上半部の傾斜が緩やかで、底面との境は不明瞭である。堆積土は3層で、大部分を占める2層中にはIV・V層ブロックを多量含んでいることから、溝が自然に埋まり切る前に人為的に埋められた可能性が強い。

2区での検出面はV層上面で、重複は1区同様、溝跡より新しい土坑・ピットは無い。溝跡は1区からのつづきがほぼ南北方向で6mほど南下した後に、南北方向にN-67°-Wの角度でコーナーをもって屈曲しており、約10m確認されている。溝幅は90~120cmで、底面幅は25~40cmである。壁面は1区に比べやや急に立上がり、上半部の緩やかな傾斜は上部が削平されているためか、みられない。SD12は北端部ではSD11の手前2m程の箇所で止まるが、これが2区の東側でどのような延びをみせるかは不明である。

出土遺物はロクロ土師器28点、須恵器1点、土師質土器の壺1点、在地産の中世陶器の鉢とみられるもの1点、瀬戸産の折沿深皿1点、中国産の白磁とみられるもの2点がある。(33図2)はロクロ使用の土師器坏で、内面に黒色処理やヘラミガキを施している。

SD13 溝跡

2区南西部で検出し、検出面はV層上面である。SD14を切っている。確認長は約6mで、溝幅は50cm、底面幅は10~15cm、深さは35cm程である。方向はN-5°-Wで、直線的に延びている。壁面はわりと急に立上がり、底面は平坦で、その境は明瞭である。堆積土はシルト質土の3層で、いづれも自然堆積層とみられる。出土遺物は無い。

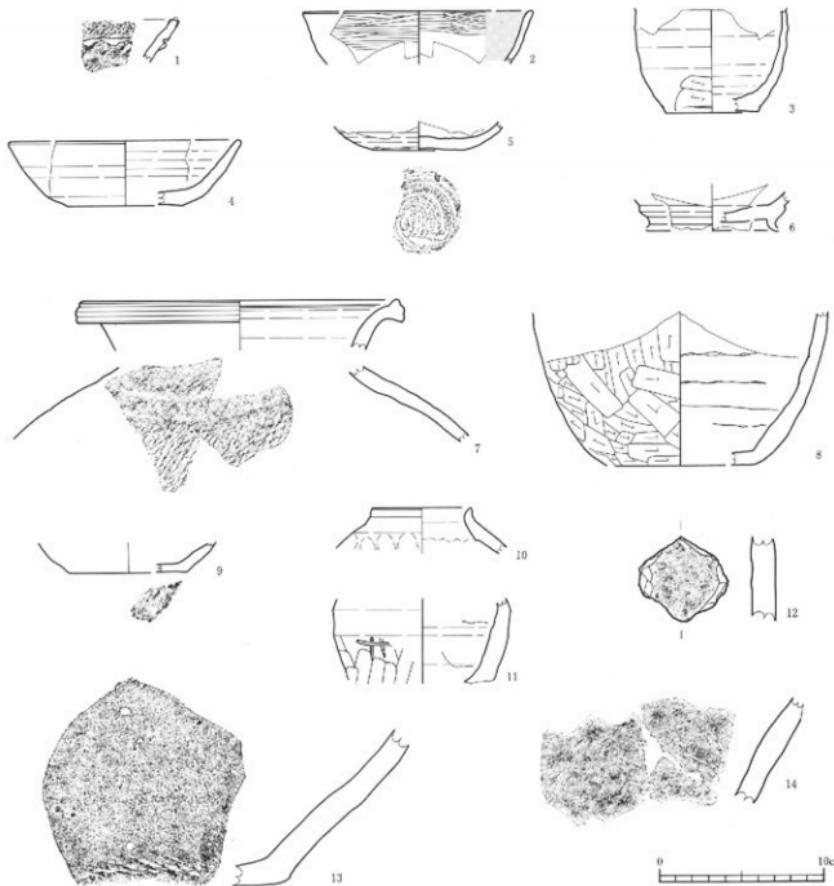
SD14a・b・c 溝跡

2区南部で検出し、検出面はV層上面である。SK21・22・101やピットを切っているが、SK102やいくつかのピットに切られている。今回検出された溝跡で土坑などに切られるのはこの溝跡のみである。

SD14には3時期の変遷が確認でき、南側のものが最も新しいSD14a、中央のものが14b、そして北側のものが最も古い14cで、三者は2区東側では多少の重複をもって並列しているものが、西側ではほとんど部分で重複している。しかしながら、これらはほぼ同規模のものが同様の方向性をもつことからみても、目的を同じくした溝の改修などによる変遷と考えられよう。方向はSD14aが東半ではほぼ東西方向なのが、西半ではやや南に向いている。確認長は約21.5mで、全体が把握できるSD14aをみると、溝幅は180~210cm、底面幅は30~50cm、深さは70cmとSD14b・cに比べ最も深い。壁面の立上がりは45°程度で、一部に段がみられる。溝幅についてはSD14cが14aとはほぼ同様であるが、14bは不明で、深さは14bが約45cm、14cが約65cmとなっている。

堆積土は14aが5層で、そのうち2層がV層や暗褐色土のブロックを多量含む人為堆積の可能性がある。また14b・cについても一部にブロックを含む層がみられるが、基本的に自然堆積とみられる。

出土遺物はSD14aがロクロ土師器111点、須恵器33点、在地産の中世陶器の小壺1点、常滑産とみられる甕2



実測番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	基盤	外側調査・文様	内面調査・文様	備考	形質図版番号		
1	4	4a区 S D16	5	割生土器	塗小器	口部:指板、口縁部:LR織文、口唇部下手:文交斜文状、腹底:輪文		ナゲ	18-3		
2	21	2区 S D12	1	土蜘蛛	耳	(140) × - × -	ミクシテラ・ハーフ・ミガキ	ミクシテラ・ハーフ・ミガキ	1 18-14		
3	24	2区 S D14a	3	土蜘蛛	小型	- × (58) × -	ミクシテラ	ミクシテラ	II 20-5		
4	23	2区 S D14a	板模上	直筒器	耳	(142) × (70) × 41	ロクロナツ	ロクロナツ	- 20-8		
5	26	2区 S D21	2	直筒器	耳	- × (54) × -	ミクシテラ	ミクシテラ	- 20-7		
6	20	1区 S D10	1	直筒器	直筒	- × (50) × (30) × -	ロクロナツ	ロクロナツ	- 20-9		
7	22	2区 S D14a	1	直筒器	耳	(200) × - × -	ミクシテラ・ロタヌキ	ミクシテラ	表面合成	- 20-13	
8	21	2区 S D14a	1	直筒器	耳	- × (92) × -	ロクロナツ・ハーフ・ミガキ	ロクロナツ	ハーフミガキ	表面合成	- 20-12
0 10cm											

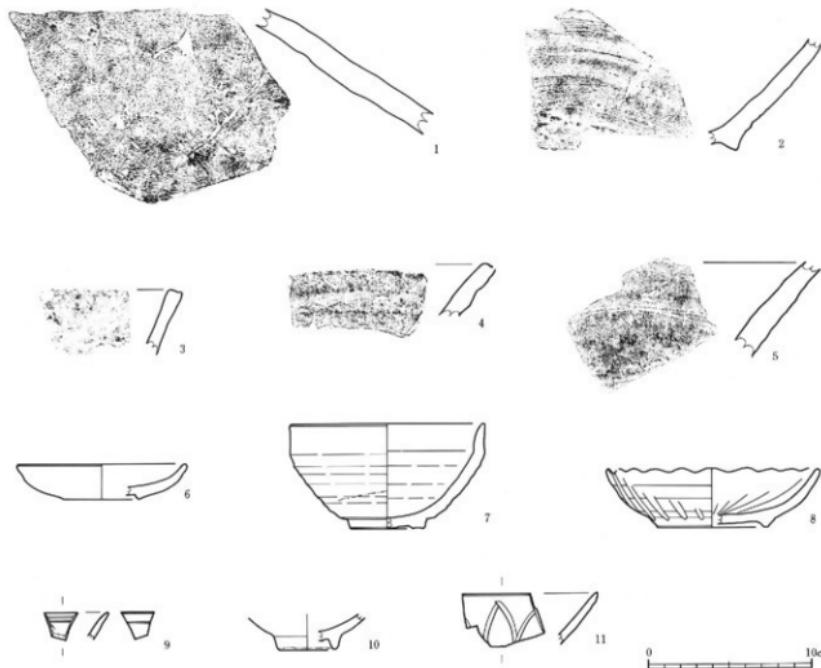
実測番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	基盤	外側調査・文様	内面調査・文様	備考	形質図版番号
9	177	1区 S D10	4	土蜘蛛	直	- × (70) × -	ミクシテラ	ミクシテラ	21-2
10	58	4区 S D10	4	小直筒器	小直	(60) × - × -	ミクシテラ・IC型II	ミクシテラ・IC型II	21-9
11	102	2区 S D14a	4	小直筒器	小直	- × - × -	新地(白石窯系)	新地(白石窯系)	21-10
12	67	4区 S D10	直筒土	直筒土	直	- × - × -	ミクシテラ・IC型II	ミクシテラ・IC型II	21-15
13	43	4区 S D10	1	小直筒器	直	- × - × -	在地	在地	21-12
14	76	1区 S D11	3	小直筒器	直	- × - × -	ミクシテラ・IC型II	ミクシテラ・IC型II (S D11+5 D12? 梱合)	21-14

第33図 SD出土遺物（1）

点、産地不明の中世陶器の壺1点で、SD14cがロクロ土器4点、須恵器6点、瀬戸産の平碗1点、台石1点がある。(33図3)はロクロ使用の土器の小型壺で、体部下端と底部に回転ヘラケズリが施されている。(33図4)は須恵器杯で、底部は回転糸切りである。(33図7)は須恵器壺で、残存する頸部から体部上半にかけて全体に繩叩き目がみられる。(33図8)は体部下半のみの残存で、外面・底面にヘラケズリが施される。(33図11)は白石窯系の小壺で、体部のみの残存であるが、外面にはヘラ描きによる記号状のものがあり、内面には鉄分が広範囲に付着している。

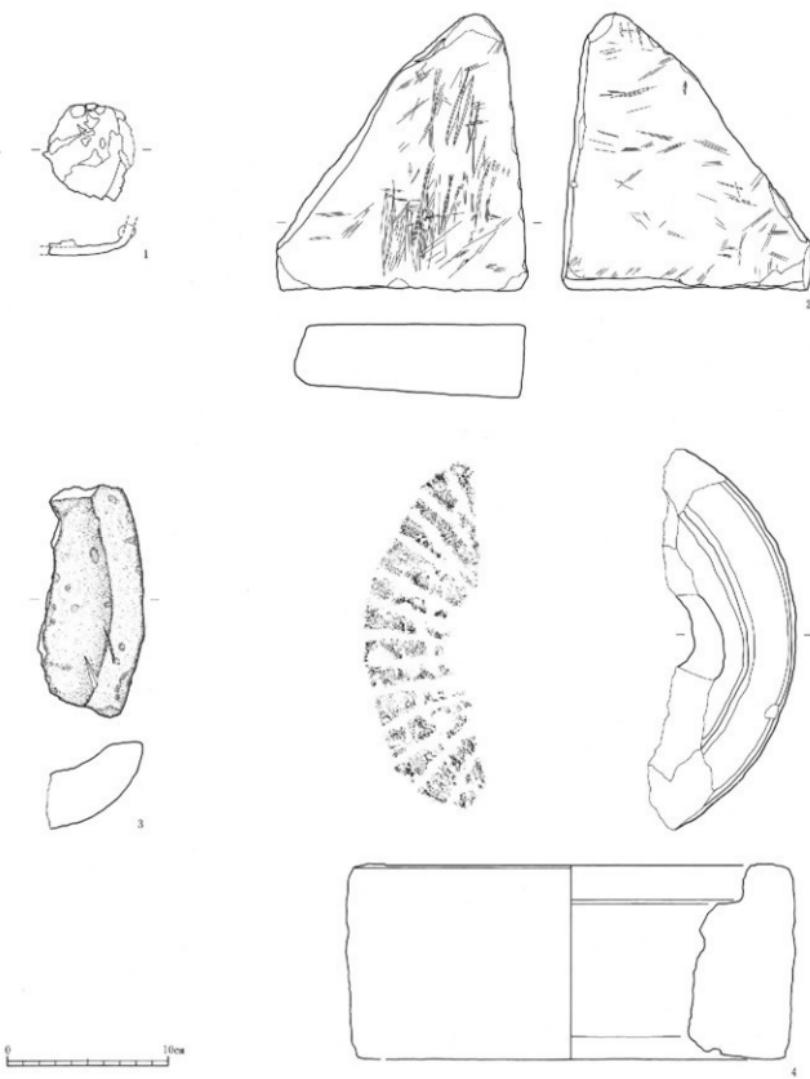
SD15 溝跡

2区南端部で検出し、検出面はV層上面である。SK89・90やいくつかのビットを切っている。また検出当初、SD16と直交して重複しているものとみられたが、両者の堆積土に違いがみられないことから、同時に存在してい



試験番号	登録番号	出土地名	出土位置	形状	断面	直径・底径・高さ(mm)	产地	時期	備考	写真回数番号
1	53	1区	SD19	壺	縦	—×—	在地	13C前～14C後	(他のSD19出土品や《区域Ⅱ層と混合》)	21-13
2	45	4区	SD19	壺	縦	—×—	在地	13C後	(区域Ⅱ層と混合)当面あり、基盤下部剥離ヘラケズリ 鉄分の埋出あり	23-12
3	85	1区	SD19	壺	縦	—×—	在地	13C前～14C後		23-9
4	75	1区	SD11	壺	縦	—×—	在地	13C前～14C後	白峰窯跡の跡跡	23-5
5	63	4区	SD19	壺	縦	—×—	在地	13C前～14C後	内面剥離	23-11
6	41	1区	SD19	壺	縦	—×—	在地	13C前～14C後	米字？ 半腰け 口縁剥離欠損 基盤底、凸部の難純取り？	25-2
7	105	2区	SD15	壺	縦	—×—	在地	13C後	説明？ レバ？ 出し輪高台	25-6
8	70	1区	SD19(堆積土上部)	近世鉢形	縦	—×—	在地	13C後	台面内にヒン跡、混込に古跡	25-8
9	42	1区	SD19	壺	縦	—×—	中国龍泉窯系	13C後～14C前	鉄分文	26-16
10	55	4区	SD19	壺	縦	—×—	中国龍泉窯系	13C後	高台部剥離、鏡片當柱	26-17
11	56	1区	SD19	壺	縦	—×—	中国龍泉窯系	13C後～14C	(13区Ⅰ層と混合) 錫分文	26-14

第34図 SD出土遺物(2)



出土地番号	登録番号	出土地区	出土層位	形状	質地	大きさ(幅×奥行き)mm	重量(g)	備考	写真登録番号
1	7	1区 S D11	4	鉄製品	鉄鋼	長さ×幅×厚さ1mm	(39.3)		27-15
2	8	2区 SD1C	半腰土	石製品	石英	1120×1551×36-81	(1641)	青黄面に多数の擦痕あり 一倍鏡用	27-9
3	5	1区 S D10	2	石製品	石英		(497)	(T字型)	27-11
4	6	4区 SD10	5	石製品	石英	直径280×高さ121mm	(2696)	(L字)厚さ25mm	27-19

第35図 S D出土遺物(3)

た可能性が強い。確認長は約12mで、溝幅は130cm以上、深さは80cm以上とみられるが、南壁側が未検出であることから、全体規模は不明である。但し堆積土の状況からみると、溝幅、深さはSD14と同等規模とみられる。方向はN-85°-Eである。確認できる限りでは、壁面はやや緩やかに立上がりるが、底面状況は不明である。堆積土は4層で、最下層の4層は互層で、自然堆積の状況をみせる。

出土遺物は瀬戸・美濃窯の天日茶碗があり（34図7）、鉄軸で削り出し輪高台のものである。

SD16 溝跡

2区南端部で検出し、検出面はV層上面である。SD15に取り付く溝跡である可能性が強い。確認長は約3mで、溝幅は80~90cm、底面幅は30~50cm、深さ40cmである。方向はほぼ南北方向である。壁面は直線的に立上がり、底面との境は明瞭である。底面はSD15と未重複部分ではほぼ平坦であるが、重複箇所では傾斜して低くなっている。堆積土は2層で、1層についてはブロック土を多量含むことから、途中で埋められている可能性がある。またSD16の北端は急に立上がり止まっており、その先のSD15との距離は僅かであり、かつて両者は重複或いはSD16の急な止まりからみて、同時存在していたとも考えられる。出土遺物は無い。

SD21 溝跡

2区北半部で検出し、検出面はV層上面である。SD12・S11・SK58・64やいくつかのピットに切られている。確認長は約21mで、溝幅は120~170cm、底面幅30~70cm、深さ約40cmである。方向はN-86°-Eの東西方向である。壁面は緩やかに立上がり、底面との境は全体に不明瞭で、底面は平坦面をもたず、他の溝跡とは形状が異なっている。また堆積土についても3層が確認されたが、全体に明るい色調で、粘性が少なく、やはり他のものとは明確に異なっている。堆積土に埋め戻された形跡はみられない。

出土遺物はロクロ土顎器27点、須恵器6点がある。（33図5）は須恵器环で、体部下端はヘラケズリ、底部は回転糸切りである。

SD27 溝跡

4A区で検出し、検出面はVa層上面である。西側でSD11に切られている。確認長は約2mで、溝幅は55~60cm、底面幅25~35cm、深さ28cmである。方向はほぼ東西方向である。底面は平坦で、壁面との境は明瞭であるが、残存が悪く、壁面状況は不明である。堆積土は黒褐色粘土質シルトの1層のみである。出土遺物はロクロ土顎器8点がある。

（4）掘立柱建物跡・柱列跡・ピット

今回の調査では1区で239個、2区で368個、4区で9個のピットを確認した。1区では土坑同様にSD10・11によう数多くのピットが失われているとみられ、このため検出箇所は南半部と両溝間に限られ、特にSD11の北岸に集中していることがわかる。検出面はIIa・IIb層がほとんどであるが、本来は全て整地層であるIIa層面より掘り込まれているものとみられる。2区では北半部が南半部に比べて密度が高く、中でも北東部ではピットが集中する箇所もみられる。ピットはSD12・14などSD21以外の溝跡に全て切られており、検出面はV層面である。

掘立柱建物跡や柱列跡の認定にあたっては、一部のものは調査中のピットの組み合わせが可能であったが、最終的には調査終了後、平面図上で検討により決定している。これにより復元できた掘立柱建物跡は10棟、堀跡または櫛跡とみられる柱列跡は5列であるが、中にはあくまでも推定復元の域を出ないものもあり、また調査区端検出のものについては両者間の判別が難しいことを予め述べておく。

SB1 掘立柱建物跡

1区、SD10とSD11の間で検出した。東西3間、南北2間以上の東西棟と推定され、梁行間でも柱間が大きく異なることから、北側に扉のついた建物跡と考えられる。規模は桁行5.1mで柱間が160~180cm、梁行2.85mで柱間が205cm、扉部分の出が85~100cmで、南側はSD11により失われている。扉部分の柱穴と身舎北辺の柱穴との大

きさの違いは特に認められない。方向はN-2°-Eである。S B 2・3と重複しているが新旧関係は不明で、他にP146がSK68に、P241がSK70に切られている。出土遺物は無い。

S B 2 挖立柱建物跡

1区、S D10とS D11の間で検出した。東西4間、南北1間以上の東西棟と推定される。規模は桁行7.4mで柱間が175~205cm、梁行1.9m以上で柱間が185~190cmで、南側はS D11により失われている。方向はN-10°-Eである。S B 1・3と重複しているが新旧関係は不明である。出土遺物はP235から繩文土器片が1点出土した。

S B 3 挖立柱建物跡

1区、S D10とS D11の間で検出した。東西方向に4つのピットが並ぶ柱列跡であるが、おそらくは南側がS D11により失われた東西3間、南北1間以上の建物跡と推定される。規模は桁行6.0mで柱間が185~210cmで、方向はN-7°-Eである。S B 1・3と重複しているが新旧関係は不明で、他にP243がSK70に切られている。出土遺物は無い。

S B 4 挖立柱建物跡

1区南東部で検出した。東西2間以上、南北2間以上の建物跡と推定され、南側1間分の柱間が短いことから、南に廂が付くものと考えられる。規模は桁行4m以上で柱間が160cm、梁行2.65m以上で柱間が195cmで、廂部分の出が105~115cmで、北側がS D11により失われているものと推定される。廂部分の柱穴と身舎南辺の柱穴との大きさの違いは特に認められない。方向はN-2°-Wである。S B 5と重複しているが新旧関係は不明である。出土遺物はP31から須恵器片が2点出土した。

S B 5 挖立柱建物跡

1区南東部で検出した。東西2間以上、南北2間以上の建物跡と推定される。規模は桁行4.2m以上で柱間が200~220cm、梁行3.55mで柱間が150~200cmで、北側がS D11により失われているものと推定される。方向はN-7°-Wである。S B 4と重複しているが新旧関係は不明で、他にP28がSK107を切っている。出土遺物は無い。

S B 6 挖立柱建物跡

2区北東端部で検出した。東西方向に6個の柱穴が並び、東西5間以上、南北は不明の東西棟と推定されるが、柱列跡の可能性もある。規模は桁行10.15m以上で柱間が200~210cmで、東西列からみた方向はN-3°-Wである。南西部でS D12と重複しているが、おそらくはこれより古いとみられ、他にP358がSK55・56に切られている。出土遺物はP358から土師器片が2点出土した。

S B 7 挖立柱建物跡

2区北東部で検出した。東西2間以上、南北3間の東西棟と推定され、規模は桁行6.15mで柱間が190~220cm、梁行の柱間が215~220cmである。方向はN-4°-Eである。南側でS D21と重複しており、おそらくは溝跡より新しいものと考えられる。出土遺物は無い。

S B 8 挖立柱建物跡

2区北半部で検出した。東西3間、南北3間の東西棟で、規模は桁行6.0mで柱間が195~210cm、梁行4.5mで柱間が140~160cmである。方向はN-5°-Eである。S B 9と重複しているが新旧関係は不明である。東辺と南辺の検出できなかった柱穴各1個は、それぞれS D12、SK13に切られているものとみられ、他の重複関係はP260・429がS D12に切られ、P319がSK63に切られ、P279・570・269がS D21を切っている。出土遺物はP246から土師器片が1点出土した。

S B 9 挖立柱建物跡

2区北半部で検出した。東西3間、南北3間の東西棟で、規模は桁行9.2mで柱間が225~240cm、梁行4.9mで柱間が160cm程度である。方向はN-7°-Eである。S B 8と重複しているが新旧関係は不明である。西辺南側と東



第36図 ピット出土遺物

辺北側の各1個の柱穴は検出できなかったが、おそらくは建物はSD21より新しく、東辺南側のものについてはSD12により失われているものとみられる。他にはP321はSK63に切られている。出土遺物は土器片がP321から2点、P256から1点、P122から須恵器片が1点出土した。

S B 1 0 挖立柱建物跡

2区南東端部で検出した。東西方向に4個の柱穴が並び、東西3間、南北は不明の東西棟と推定されるが、柱列跡の可能性もある。規模は桁行7.1mで柱間が210~270cmとばらつきがあり、東西列からみた方向はN-3°-Wである。SD15・16と重複するが新旧関係は不明である。出土遺物は無い。

S A 1 柱列跡

2区北西部で4個の柱穴が南北方向に並ぶのを検出した。長さは6.0mで柱間が190~210cm、方向はN-7°-Eである。P284がSK63に切られ、P314がSD21を切り、P310がS I 1と重複している。並びからみて東側にあるSB8・9の西側につくられた痕跡などの可能性がある。出土遺物は無い。

S A 2 柱列跡

2区西北部、SA1とSB9の間で3個の柱穴が南北方向に並ぶのを検出した。長さは4.9mで柱間が250~240cm、方向はN-6°-Eである。P385がSK63に切られ、P300がP299を切り、P550がS I 1と重複している。SA1同様、SB8・9の西側の区画施設である一方、P385はSB9の北辺延長上、P550は南辺延長上に半間ほど離れていることから、SB9西側の扇部分の可能性もある。出土遺物は無い。

S A 3 柱列跡

2区西半部、SD21とSD14の間で5個の柱穴が南北方向に並ぶのを検出した。長さは8.6mで柱間が北側2間が各230cm、南側2間が各200cmで、方向はN-6°-Eである。北端のP305がSD21を切っており、また南端ではP517の南側にSD14があることから、もう1間分延びる可能性もある。出土遺物は無い。

S A 4 柱列跡

2区東部で4個の柱穴が全てSD21を切って東西方向に並ぶのを検出した。長さは6.4mで柱間が195~230cm、方向はN-87°-Wである。柱列はSB8・9と重複しており、さらに西側へ1間および東側へも延びる可能性もある。出土遺物は無い。

S A 5 柱列跡

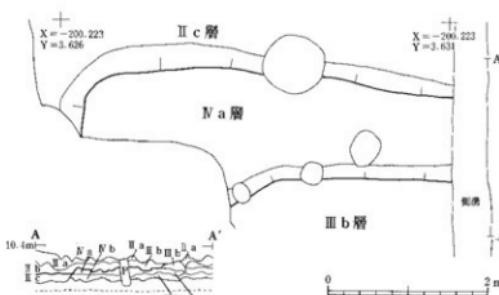
2区南東部で4個の柱穴が東西方向に並ぶのを検出した。長さは7.2mで柱間が220~260cm、方向はN-89°-Eである。P468がSK85を切っており、柱列はさらに西側へ1間および東側へも延びる可能性もある。出土遺物は無い。

(5) その他

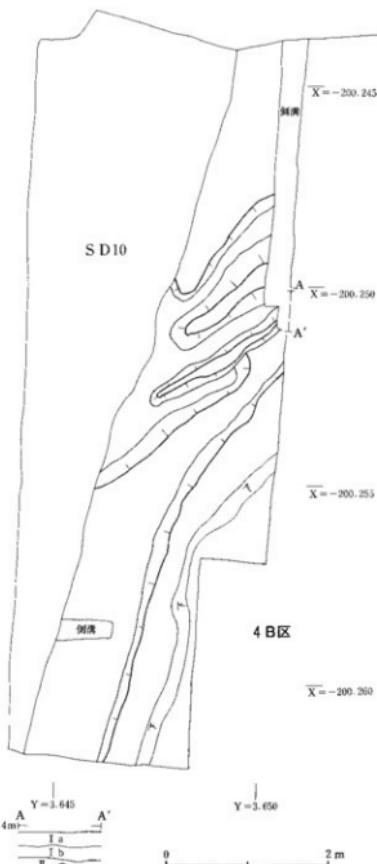
[1区Ⅱ b層水田跡]

南東部でⅡ a層を除去したところ、北側には灰黄褐色砂質シルトのⅡ b層面、南側がにぶい黄褐色砂質土のⅢ b層面が明瞭な違いをもって検出された。次にⅡ b層を除去したところ、Ⅲ b層との境には高さ7cm程の段差がみられ、Ⅱ b層下にはⅣ a層が顔を出す状況となった。またこのⅣ a層面においてはさらに北半でⅡ b層が残ることから、これを完全に取り去ると、下にⅡ c層が検出され、ここにおいても東西方向に走る段差が検出された。段差は7・8cm程の高さである。いづれの段差ともほぼ東西方向で、南側のものは確認長2.8mで、西側でやや南へカーブし、北側のものは東西が4.5mで、やはり西側が南へ折れ、コーナーをもつ形状である。段差自体は直立することなく、各層の上面はⅢ b・Ⅳ a・Ⅱ c層とも小さな起伏はあるがほぼ平坦で、Ⅳ a層面に僅かな北方向への傾斜がみられる。1区東壁の状況から考えると、このいづれの段差もⅡ b層が水田作土である場合の水田区画の一部とみられ、可能性としては両段差間にかつて作土を積み上げた畦畔が存在し、これより南側ではⅢ b層がみられることから、耕作は行われず、北側では畦畔底面レベルより深く耕作が及んでおり、この場合畦畔は今回確認された東西方向のものがほぼ同様の幅で南へ折れるL字形をしていたものと考えられる。またもう一つの考えとしては、畦畔が南側段差の南のⅢ b層上に作られ、それは後に整地作業時に失われ、これより北側に水田が広がっていたと考えられ、この場合、北側の段差はある時期に深度の異なる耕作がなされることによって生じた可能性がある。また東壁断面をみると、SD11と近接する箇所にⅡ b層上面が他よりも高まりをみせ、層厚も増す部分がみられたが、これを平面的に畦畔として検証することはできなかった。

Ⅱ b層は1区南半部の低位部全域にみられるが、1区内では他の遺構により改変され、畦状プランなどの確認はできなかつたのに加え、2区では現代の耕作によりⅣ層より上の層が削平されており、この水田の南及び西側への広がりは不明である。



第37図 1区Ⅱ b層水田跡



第38図 4B区Ⅱ b層水田跡

II b 層からの出土遺物は縄文土器 1 点、ロクロ土師器 10 点、須恵器 1 点、渥美産の甕 1 点、用途不明の土製品 1 点がある。

[1 区 II c 層による段差]

II b 層水田跡の北側段差より北には II c 層が堆積し、II b 層と段差を共有している。また東壁断面では S D11 と近接する箇所に IV a・IV b 層が残存し、これらの層は自然堆積層とみられることから、II c 層についても水田作土である可能性も考えられるが、これらを平面的に検証することはできず、また II c 層中からイネのプラント・オバールは検出されなかった。

II c 層からの出土遺物はロクロ土師器 11 点、須恵器 1 点がある。

[4 区 II 層水田跡]

4 B 区の S D10 東側の地区の II 層を多少下げたところ、ほぼ中央部で V 層が帯状に北東 - 南西方向へ延びるのを確認した。V 層は自然堆積層で、II 層下面が著しく乱れることから、このプランは II 層を作土とした水田による V 層面での擬似畦畔と考えられる。このプランは確認長が約 4 m、方向は N - 30° - E、幅が 40~60 cm で、高さは 10 cm 以上のもので、南西部で終息し止まっている。さらに周囲の II 層を下げるに、この北側に 40 cm 程離れて、ほぼ同方向で幅が 80~130 cm 以上の同様のプランが平行してみられ、これら 2 つの擬似畦畔とみられるものの北側と南側にはさらに 30~130 cm の幅をもった溝状のプランを挟んでやや高い平坦面が広がっている。

全体の状況からみてこれらのプランは II 層水田面が西側で低く、東側で高い状況で、これらの境となる今回の南・北端部の段差上端には本来、畦畔があった可能性が考えられる。このことから当初検出した擬似畦畔については、東側のレベルの高い V 層面を北東方向へ延びる 3 条の水路状プランが存在し、各水路間に残る土手状の高まりであったものと考えられる。水路底面での V 層レベルによる流水方向は特定できなかった。

ここにみられる II 層は北側の 4 A 区においては確認できず、そこで II 層は S D10 堆積土上半にみられる洪水堆積層であることから、可能性としてはこの土壤を後に水田作土としていることも考えられる。

II 層からの出土遺物は無かった。

(6) 基本層出土遺物

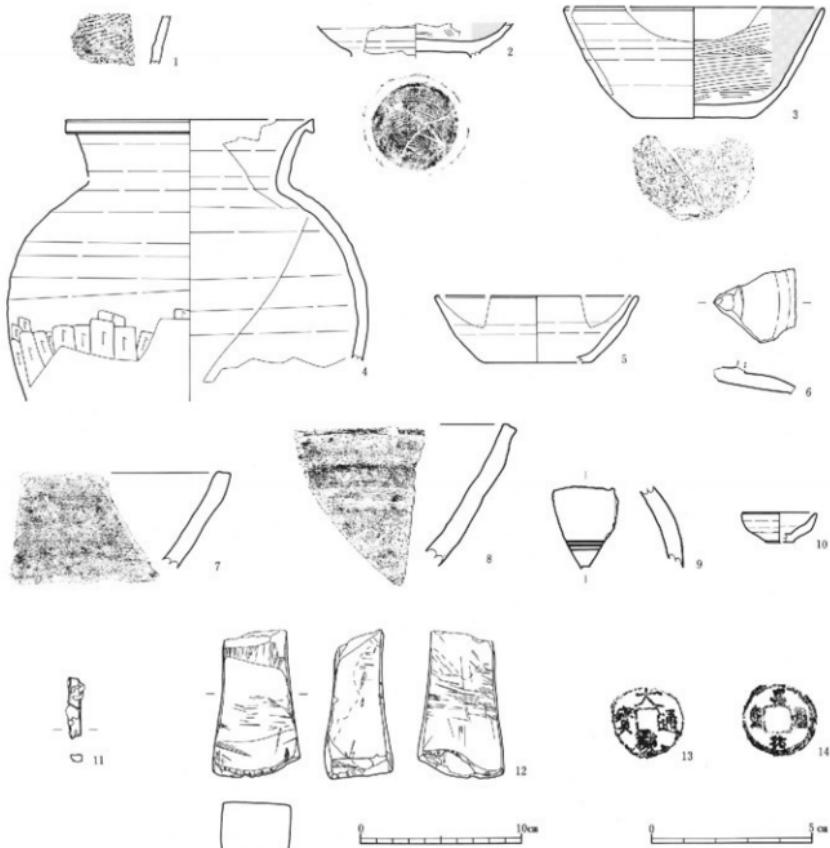
ここでは本調査区 1・2・4 区出土の遺物に加え、これと重複する試掘トレンチ出土のものも含んでいる。遺物の数量については後の集計表に記載している。

1 区では III a 層を除く全ての層から遺物の出土がみられた。土師器は全層にみられるほか、中世陶器は I・II a・II b 層に限られる。整地層で遺構検出面である II a 層からは中世以降の遺物の出土はない。III 層以下では縄文土器、ロクロ土師器、須恵器が出土している。IV a 層の土師器の一部は 2 号竪穴住居跡堆積土中のものである可能性がある。また II a・II b 層から鉄滓が各 4 点、IV 層から釘が 2 点出土している。(38 図 4) は須恵器の甕で、口縁端部の断面が三角形で、体部下面下半にはヘラケズリが施される。(38 図 2) はロクロ土師器の高台付杯で、口縁、高台部が欠損している。内面は黒色処理・ヘラミガキが施され、底部は回転糸切りのちに高台部を貼付けている。

(38 図 10) は瀬戸・美濃産の小杯で、鉄釉で体部下半・底部が露胎である。(38 図 9) は古瀬戸の瓶子か壺の肩部破片である。

2 区では後の耕作による削平が著しいことから、I 層と IV・V 層面からのみの出土である。V 層面からの遺物は全て土師器で、ほとんどはロクロを使用したものであるが、僅かに塙釜式期のものが含まれている。(39 図 3) はロクロ使用の土師器杯で、器高があり碗状のものである。内面は黒色処理・ヘラミガキ、底部は手持ちヘラケズリ調整を施している。(39 図 5) は須恵器杯で、底部は不明である。(39 図 6) は須恵器蓋で、径は不明でリング状のつまみである。

4 区でも全層から遺物の出土があり、II a・II b 層からは中世陶器が出土しているが、IV 層以下では縄文土器、



試験番号		出土地点	出土層位	種別	特徴	表面調査・文様	内部調査・文様	備考	平成24年度番号
1	3	4a区		Eb	土器類 土器底 底面	体形: L.R.横文	ナダ		
試験番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	特徴	外山彌生	内山彌生	備考	型式 平成24年度番号
2	31	1区	Va	土器類	直筒形 口縁部	(D9.5×H5.5cm)	ヨクロナダ+直筒形	ヨクロナダ+直筒形	- 15-19
3	23	2区	V層上面	土器類	直筒形	(16.2×H6.0cm)	ヨクロナダ	ヨクロナダ+直筒形+ヘリ:ナギ	- 15-16
4	20	1区	Ec	土器類	直筒形	(15.5)××-×	ヨクロナダ+直筒形+ヘリ:ナギ	ヨクロナダ	- 20-11
5	36	2区	I	直筒形	直筒形	(12.0×H6.0×14.0)	ヨクロナダ	ヨクロナダ	- 20-6
6	29	2区	I	直筒形	直筒形	-×-×-×-×	ヨクロナダ	ヨクロナダ	- 20-10
試験番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	特徴	内山彌生	外山彌生	備考	型式 平成24年度番号
7	127	4区	Ea	中空陶器	直筒形	(D9.5×H6.0cm)	UC器下-HC器下	胎土中に白色斑状体を含む	- 23-2
8	139	11下	I	中空陶器	直筒形	-×-×-	UC器下-HC器下	○種底膨ら出し	- 23-6
9	115	1区	Ea	中空陶器	直筒形	-×-×-	UC下	13-14C (古墳四) 水輪	- 24-16
10	109	1区	I	中空陶器	小筒	(40)×(16)×19	断面・直筒	鉢形 胎の凹凸切り 体削下平底削輪胎	- 25-3
試験番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	特徴	重量(g)	備考		平成24年度番号
11	10	1区	E	鉢類	丸筒形	×(7)×(4)	(3.5)	夷崎断面深 口由長方形	- 27-14
12	9	1区	Ea	鉢類	扁平	(30)×(9)×(4)	(29.0)	夷崎断面深 口由長方形 一部剥落	- 27-8
試験番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	特徴	重量(g)	備考		平成24年度番号
13	14	14下	Ea	漆器類	漆器	大腹近底	北朝	1107 №13+15+16と密着して出土。欠損	- 28-11
14	15	14下	Ea	漆器類	漆器	基底直立	北朝	1056	- 28-6

第39図 基本層出土遺物

土師器、須恵器のみの出土である。(39図1)は弥生土器である。(39図7)は在地産の鉢で、口縁部が僅かに内傾し、胎土中には名取川流域出土の土器に特徴的にみられる白色珪酸体を含んでいる。

3. 3区の検出遺構と出土遺物

(1) 溝 跡

S D 2 2 溝跡

3区西半部で検出し、検出面はV d層上面である。他遺構との重複は無いが、溝跡上部のII a層下面で溝跡の西際に段差がみられることから、この溝跡はII a層により形成された何らかの区画に沿って掘られたものである可能性が強い。確認長は12.5mで、溝幅は中央部の広いところで105cm、南端部の狭いところで70cmで、北端部は溝自体は狭いが、東側に浅くテラス状になり、105cmを測る。底面幅は20~30cmで一定し、深さは30cm前後である。方向は南半部がN-12°-Eであるが、北側で僅かに西方向へ屈曲している。底面レベルは全体にはほぼ同じである。壁面はやや急に立上り、底面はほぼ平坦で、その境は明瞭である。堆積土はシルト質の1層のみで、砂質土を層状に幾層か挟むことから、自然堆積とみられる。

出土遺物は須恵器2点がある。

S D 2 3 溝跡

3区中央部で検出し、検出面はV a層上面である。S D 24・25・26と重複しており、いづれの溝跡をも切っている。確認長は13.4mで、溝幅は60~90cm、底面幅15~35cm、深さ25~45cmである。方向は北部で屈曲していることから、北側がN-40°-Wで、南側はN-13°-Eである。底面レベルは北側が低くなっている。壁面は緩やかな箇所とやや急な箇所があり、底面についても北半部が幅広で平坦なのに対し、南側は狭くなっている。また屈曲部を挟み、その底面両側には約4mにわたり、径が25~10cm程の不整形の窪みが列状に多数みられる。これについては溝を掘る際の跡などの痕跡とみられる。堆積土は2層で、いづれも自然堆積とみられる。

出土遺物はロクロ土師器7点がある。

S D 2 4 溝跡

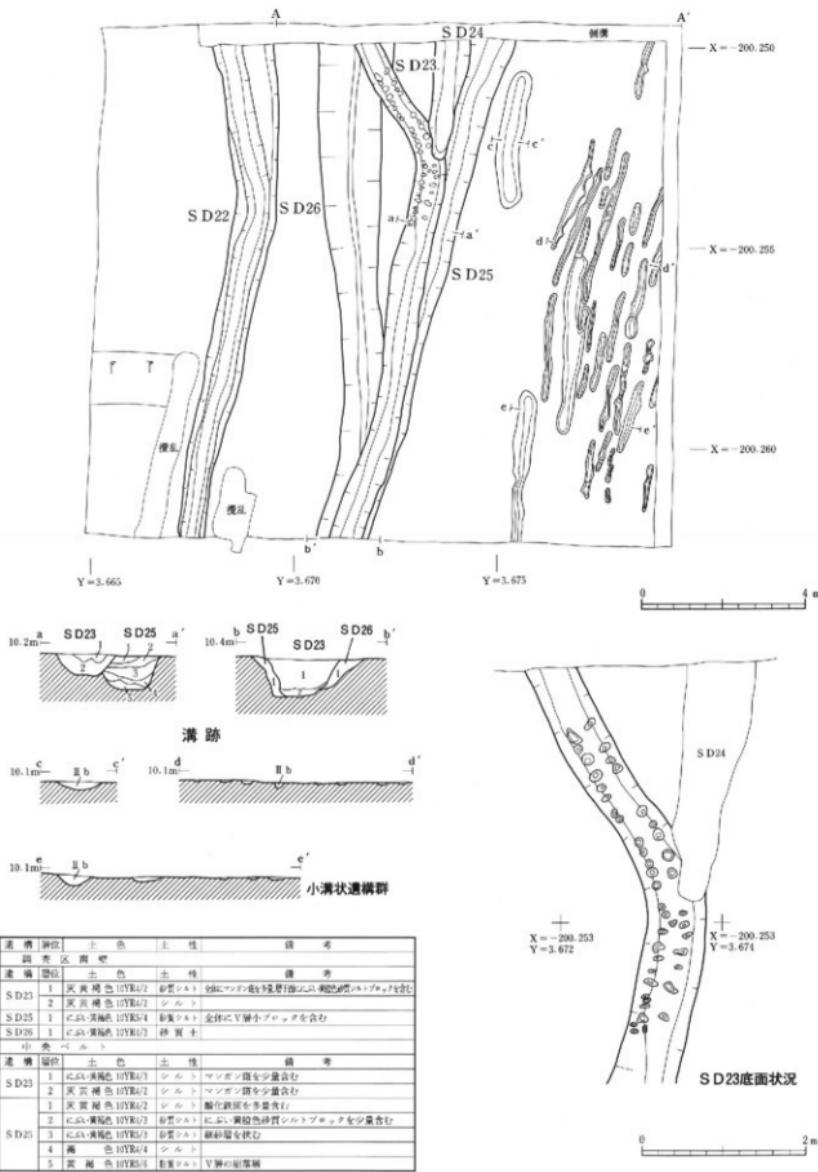
3区北端部で検出し、検出面はII b層上面である。平面プランの重複と、堆積土中に入る基本層からみて、S D 24はS D 23に切られるが、S D 25を切っていることがわかる。確認長は3.4mで、これより南側はS D 23・25とほぼ同位置で南下するとみられる以外に、S D 23同様に堆積土中にII b'層が入ることから、S D 24はS D 23の屈曲部に接続する溝である可能性も考えられる。溝幅は断面からみると壁面の急な部分については65cm程とさほど広くはないが、これより上半はかなり緩やかに立上り、250cmにもなる。底面はわりと平坦で、深さは35cm程である。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。

出土遺物はロクロ土師器4点がある。

S D 2 5 溝跡

3区中央部で検出し、検出面はIII a層上面である。S D 23・24に切られるが、南端部で重複するS D 26との関係は不明である。確認長は13.3mで、溝幅は北端部で75cm、底面幅30cm、深さ45cm程であるが、南半部は不明である。方向はN-16°-Eで、3区で検出した他の溝跡と異なり、直線的に延び、底面レベルは北側が低くなっている。堆積土は5層で、底面上にはV層の崩落土がみられるが、いづれも自然堆積とみられる。

出土遺物はロクロ土師器13点、須恵器2点がある。(41図1)はロクロ使用の土師器杯で、内面は黒色処理・ヘラミガキ、外面はヘラケヅリ、底部は回転糸切りのち手持ちヘラケヅリ調整である。



第40図 3区遺構配置図・断面図

SD 26 溝跡

3区中央部で検出し、検出面はV a層上面である。SD 23に切られる。確認長12.5mで、溝幅は北端部が190cmと最も広く、中央部が100cmと狭くなっている。底面幅は全体に狭く、深さは45cm程である。方向はほぼ南北方向であるが、北半部は西へ、南半部は東へやや張り出し、蛇行気味である。底面レベルは北側が低くなっている。壁面は緩やかに立上がり、底面との境は不明瞭な舟底状を呈する。堆積土は砂質シルトの1層で、短期間に埋まったものとみられる。

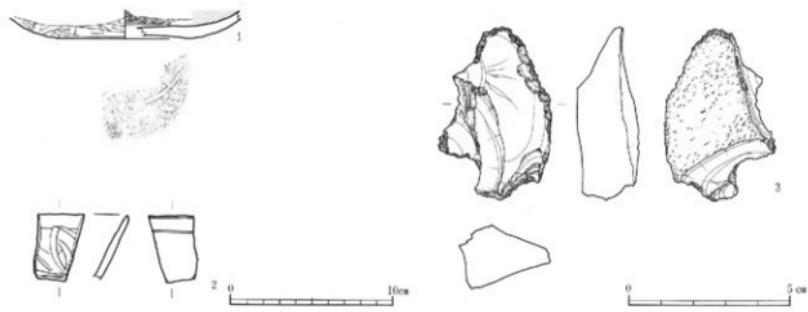
出土遺物はクロロ土師器4点がある。

(2) 小溝状遺構群

3区東半部のⅢ層及びⅣ層上面で検出した。小溝は南北方向で、3区全体でみると、西半部のV層面がレベルが高いのに対し、東半部は低く、ここにはⅡ b、Ⅲ a、Ⅲ b、Ⅳ層が堆積する状況で、小溝はこのレベルの低い地区にのみみられる。断面観察の結果、小溝はⅢ a、Ⅲ b層上面を中心Ⅱ b層が溝状に落込んでおり、Ⅱ b層により形成されたものと判断される。

小溝群は東半部の中でも北及び南側にはみられず、その範囲は南北約10m、東西3mで、東側への延びは不明である。方向は一部でややカーブ気味のものはあるが、N-10°-E前後ではば揃っており、これと異なる方向のものはみられず、また互いに重複するものもない。小溝は長いものでは7mを測り、断続的に続くものが多い。溝幅は大きいもので34cm、小さいものは10cmにも未だ、深さも2~14cmとばらつきがあり、概して浅いものである。底面は狭く、部分的に深くなる箇所が多数みられるなど、平坦ではない。各小溝間の幅は、広いところでは30cm程であるが、大部分は5~20cmで、相互が近接している印象を受ける。各小溝の南及び北端部は特に削っている様子はない。またSD 25の東側には長さ340cm、最大幅60cmのわりには深さが10cmの浅い溝状のものが1条みられるが、堆積土からみて、これについても小溝の一つであるものと考えられる。

小溝状遺構群の性格としては、畑における耕作痕跡の可能性が強いものと考えられ、その場合、畑の耕作土とみられるのはⅡ b層である。しかしながら今回Ⅱ b層上面においては歯跡など、畑跡に関するような層面上での遺構の確認はできなかった。これはさらに上層のⅡ a層の性格によるところが大きい。これら小溝状遺構群については3区の中でも低位部のみにみられること、また堆積土中にⅡ b層類似のⅡ b'層が入るSD 23、24との関係につい



第41図 3区出土遺物

ても考える必要性がある。

Ⅱ b層からの出土遺物はロクロ土師器13点、中国龍泉窯系の青磁輪花碗1点がある。

(3) 基本層出土遺物

3区ではほぼ全ての層から遺物の出土がみられた。ほとんどはロクロ土師器で、洪水堆積層とみられるV c層中から在地産の中世陶器が出土している。(41図2)は青磁の輪花碗で、割花文の体部が直線的に立上がるものである。

4. 5・6区の検出構造と出土遺物

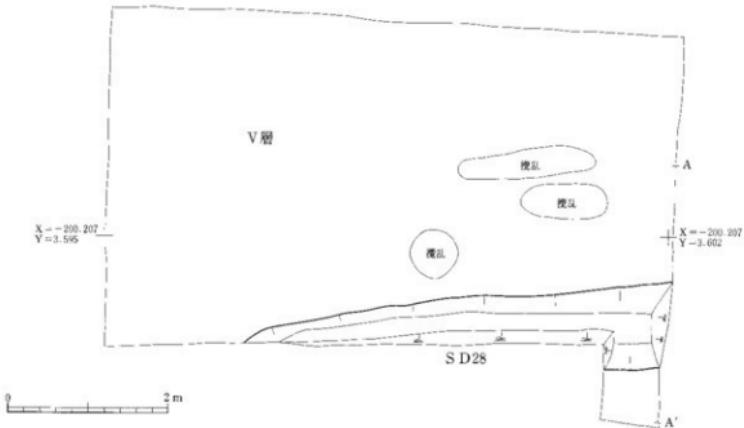
(1) 溝 跡

SD28 溝跡

5区南端部で検出し、検出面はV a層上面である。重複は無い。確認長は5.3mで、溝幅170cm、深さは50~60cmで、底面は丸みをもち、壁面はかなり緩やかに立上がる。方向は東半はほぼ東西方向であるのが、西半ではやや南寄りに向かっている。堆積土は1層で、自然堆積とみられる。出土遺物は無い。SD28の東西での延びは不明で、南側に隣接するSD10との関わりも不明である。

(2) 基本層出土遺物

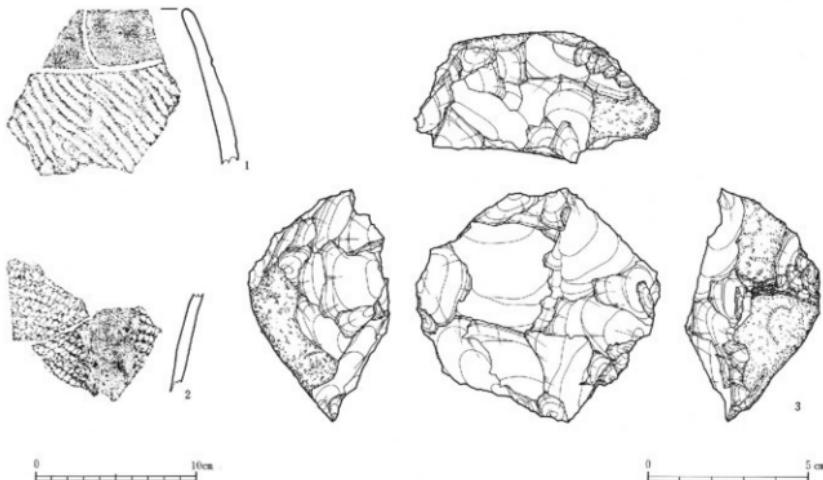
5・6区ともV c・V d層から縄文土器の出土があった。これらの層は同一層かどうかは不明であるが、量的にはいづれもV d層からが多い。また5区V c層、6区V d層から石核が1点づつ出土している。5・6区は調査区北端に位置し、地形的には微高地に位置することから、この地域を中心に縄文時代の遺物包含層が形成されているものと考えられる。



第42図 5区SD平面図

5. 遺構確認調査

今回の調査では、本調査区1~6区や試掘トレンチとして設定した1~17の各トレンチの他に、これらの調査区で検出された主として溝跡の行方を確認するために、18~29の計12の遺構確認トレンチを設定し調査を行った。こ



第43図 基本層出土遺物

これらのトレンチでは隣接する調査区から延びる溝跡や、幾つかの土坑状プラン、自然地形などが検出されており、基本的にこれらの掘り込みは行っていない。

18 トレンチ

2 トレンチと3 トレンチの間に設定し、面積は 10.2m^2 である。V層面で南北方向の溝跡1条を検出した。幅は110~130cmで、2 トレンチのSD 1、3 トレンチのSD 2と同一の溝跡とみられる。出土遺物はクロロ土器1点、土師質土器の鉢1点、中国龍泉窯系の青磁碗1点があり、(9図15)は碗の高台部周辺を打ち欠いて何かに転用したものとみられる。

19 トレンチ

9 トレンチと10 トレンチの間に設定し、面積は 10.5m^2 である。V層面で南半部に東西方向の2条の溝跡の重複、北半部にも同方向の溝跡を1条検出した。幅は南半部の新しいもので115~130cmである。この溝跡は9 トレンチのSD 17、10 トレンチのSD 18と同一か、また古い方の溝跡は23 トレンチの南北方向の溝跡である可能性もある。出土遺物は坂板岸窯系の插鉢1点がある。

20 トレンチ

4 トレンチ北側にその拡張区として設定し、面積は 35.0m^2 である。V層面で南北方向の溝跡2条、東西方向の溝跡1条と、SD 3の延長部分、土坑状プラン3基を検出した。南北方向の溝跡は4 トレンチのSD 4に取り付く同時存在の溝跡とみられ、西側のSD 5は幅70~110cmで、3 トレンチSD 2の続きとみられる。また東側のSD 6は幅150cm前後で、SD 4に接続すると同時に一部は東側に折れ、5 トレンチのSD 8或いはSD 9に続くとみら

れる。

2 1 トレンチ

4 トレンチと 5 トレンチの間に設定し、面積は 16.6m²である。V 層面で中央に重複する 2 条の東西方向の溝跡、南端に幅 150cm 以上の東西方向の溝跡を検出した。中央のものは 4 トレンチの SD 3、5 トレンチの SD 7 と同一で、南端のものは 4 トレンチの SD 4、5 トレンチの SD 8 或いは SD 9 と同一のものとみられる。

2 2 トレンチ

9 トレンチ南側に設定し、面積は 11.4m²である。V 層面で 幅 40~55cm の南北方向の溝跡を 1 条検出した。この溝跡は 23 トレンチ南端で僅かに確認できる。

2 3 トレンチ

9 トレンチと 10 トレンチの間に設定し、面積は 30.2m²である。V 層面で 9 トレンチ検出の SD 17 が東へ折れる部分を 9・19 トレンチ同様、新旧 2 時期をもって確認した。またこれより古い幅 100~120cm の南北方向の溝跡を 1 条検出したが、この北側への延びは不明である。出土遺物は土師質土器の皿 1 点がある。

2 4 トレンチ

7 トレンチの西側に検出し、面積は 14.3m²である。N・V 層面にまたがり、南北方向の 2 条の溝跡を検出した。西側のものは幅 250cm 前後で、東側のものは前者と平行しており、幅は 200cm 前後である。これらの溝跡は北側の 25 トレンチでもほぼ同規模の 2 条の溝跡がみられることから、これらとの連続性が考えられる同時に、南側では 9 トレンチの SD 17 に続く可能性がある。出土遺物は在地産の中世陶器甕 2 点、美濃（志野）産の皿 1 点、肥前産の染付碗 1 点がある。

2 5 トレンチ

1 トレンチと 1 区の間に設定し、面積は 30.9m²である。V 層上で 2 つの溝跡が平行しながらカーブしている箇所を検出した。幅はいづれ 200cm 前後の同規模のものである。これらはトレンチ内では 2 つに分かれているが、東側の 1 区ではほとんど重複した形で SD 10 となるものとみられ、また南側では 24 トレンチの 2 条の溝跡へ続くものと考えられる。

2 6 トレンチ

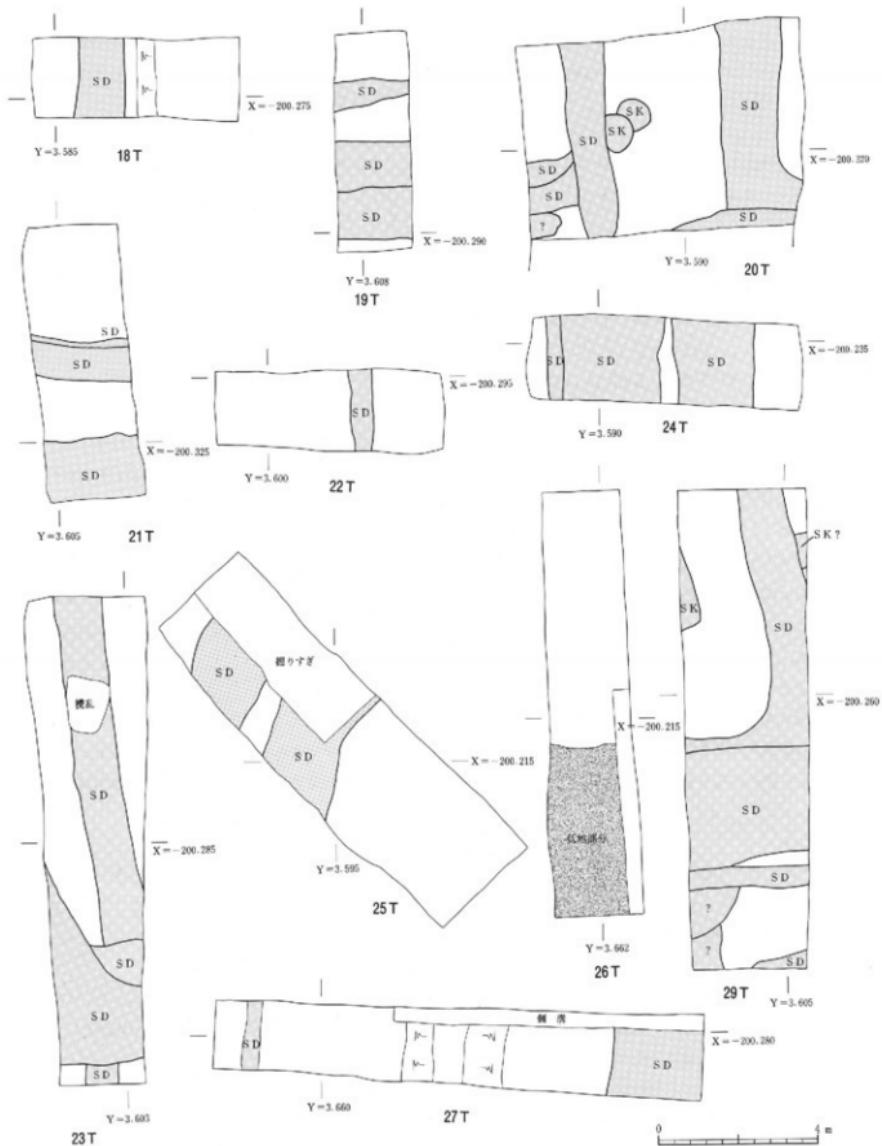
4 区と 13 トレンチの間に設定し、面積は 21.2m²である。V 層上面で精査したところ、中央よりやや南側において II 層の堆積範囲が確認されたことから、この部分については 13・15 トレンチでもみられるように南側半分が旧河道部分で、その境には比高差のある傾斜面となっていることが判明した。出土遺物はロクロ土師器 5 点、須恵器 1 点がある。

2 7 トレンチ

3 区南側に設定し、面積は 23.6m²である。V 層面で、東端に南北方向の溝跡 1 条を検出した。幅は不明で、この溝跡は 3 区で検出された溝跡のいづれかに連続している可能性がある。出土遺物は提燒の灯明皿 1 点で（9 図 14）、底部に何らかの敷物の圧痕がみられ、芯受に煤が付着している。

2 9 トレンチ

2 区西側に設定し、面積は 35.7m²である。V 層面で東西方向の溝跡を 2 ないし 3 条、南北方向の溝跡 1 条、土坑条プランをいくつか検出した。中央の東西方向の溝跡は幅 2~3 m 程で、これは東側で 2 区の SD 17 に連続しているものとみられる。また南北方向の溝跡は南下して一部は西側に折れる形をみせるが、同時にトレンチ外で東へ折れて、SD 17 の方向へ曲がる可能性もある。



第44図 遺構確認調査－遺構平面図

第3章 自然科学分析

第1節 リン酸分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

柳生台畠遺跡は、名取川により形成された自然堤防上を中心に立地する。これまでの調査により、古墳時代から平安時代の遺構・遺物が検出されている。今回の調査は遺跡の範囲の南端に当たり、中世の土坑墓群や建物跡、旧河道などが検出されている。このうち、土坑墓では古鉄や陶磁器片が出土しているが、人骨は確認されていない。

そこで、土坑墓やその他の土坑に遺体埋納に関する情報を得るために、土坑覆土を対象としたリン酸分析を実施することとした。リン酸は人骨に多量に含まれる成分であり、さらには分解した遺体のリン酸成分が土壤中に含まれるアルミや鉄と結合して難溶性のリン酸化合物を形成するためにリン酸の濃度が確認しやすい。特に黒ボク土やロームのようにリン酸と結合しやすいアルミや鉄が多い土壌では遺体の痕跡を確認する成果が大きいが、還元環境下では流亡することから注意が必要である（竹迫ほか、1980など）。

1. 試料

調査対象は、土坑9基（SK12、SK61、SK87、SK93、SK94、SK98、SK110、SK116、SK117）である。土坑墓とされるSK12、SK61、SK87、SK93、SK110は隅丸長方形を呈する。これらの土坑墓は、微高地縁辺から低地部にかけて構築されている。重複する遺構が見られることから墓域として継続され、遺物の少ない点から一般庶民層が村落の共同墓地としていたと推定されている。なお、SK110の底部には敷物の痕跡が認められており、焼成痕のある土坑が見られないことから、むしろなどを敷いて土葬としたと考えられている。試料は、土坑底部とその直下の地山および底部に近い土坑覆土の3点をセットに採取されているが、SK110では土坑底部と直下の地山の2点が採取されている。

また、SK94とSK98は土坑墓以外の可能性もある土坑とされる。SK94はSK93などの土坑墓と考えられる遺構より以前に構築されたものと考えられる。また、SK98は2区西壁で確認されている。試料は、いずれも土坑底部とその直下の地山および底部に近い土坑覆土の3点をセットにして採取された。

SK116とSK117は、ともに1区南壁に認められた遺構である。試料は、土坑底部とその直下の地山および底部に近い土坑覆土の3点をセットにして採取されている。

これらの対照試料として、基本土層Ⅱa層・Ⅱb層・Ⅱc層およびV層より土壤試料が採取された。

今回は、これら30点を分析試料として用いた。

2. 分析方法

分析では、土壤標準分析・測定法委員会編（1986）、土壤養分測定法委員会編（1981）、京都大学農学部農芸化学生教室編（1957）、農林水産省技術会議事務局監修（1967）、ペドロジスト懇談会（1984）などを参考にした。以下に、その行程を示す。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.0mmの籠を通して通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105°C、5時間）により測定する。風乾細土試料1.00gをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸（HNO₃）5mLを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）10mLを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mLに定容して、ろ過する。今回は、リン含量をリン酸（P₂O₅）濃度として測定する。ろ液の一定量を試験

管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量 (P_2O_5 mg/g) を求める。

3. 結果

結果を表1に示す。基本土層および土坑墓は土色の色相はほとんどが2.5Y系である。基本土層のリン酸含量は、V層で $2.14 P_2O_5$ mg/g、II層の各層で 3.0 mg/g 前後である。

一方、土坑墓とされるものはリン酸含量が $2.0 P_2O_5$ mg/g 前後であり、SK87とSK93を除いて下位ほど含量が少なくなる傾向が見られる。SK87とSK93では、地山でリン酸含量が高い。また、SK94では底部、SK98は底部上位の覆土でリン酸含量が高い。SK116とSK117は、下位ほど含量が少くなる傾向が見られる。ただし、いずれも基本土層と比較して低い傾向にある。

表1 土坑のリン酸分析結果

試料名	土性	土色	P_2O_5 (mg/g)	備考
1 2 3 4	I a層 I b層 I c層 V層	CL S i CL CL HC	2.5Y3/1 黒褐色 2.5Y3/2 黑褐色 2.5Y3/2 黑褐色 10YR4/3 白い黒褐色	3.01 3.66 2.82 2.14
	SK12 5 6 7	CL L i C HC	2.5Y3/2 黑褐色 2.5Y1/1 黑褐色 10YR4/4 黑褐色	2.12 2.18 1.96
	SK61 8 9	L i C CL	2.5Y3/3 暗オーブ褐色 2.5Y3/3 暗オーブ褐色	1.41 1.35
	10 11 12 13	L S CL SL S	2.5Y4/3 暗オーブ褐色 2.5Y3/3 暗オーブ褐色 2.5Y4/3 暗オーブ褐色 2.5Y4/3 暗オーブ褐色	0.90 1.19 0.92 1.15
14 15 16 17	SL HC 地山 S	10YR4/4 暗オーブ褐色 5Y4/1 灰 10YR4/4 黑褐色	2.16 1.49 2.98	
	18 19 20 21	HC HC 地山 L i C	2.5Y3/1 黑褐色 2.5Y3/2 黑褐色 2.5Y3/3 暗オーブ褐色 2.5Y3/3 暗オーブ褐色	1.72 1.67 1.27 0.93
	22 23 24 25	L S HC 地山 L i C	2.5Y4/3 暗オーブ褐色 2.5Y4/2 暗灰 2.5Y5/2 暗灰 2.5Y3/3 暗オーブ褐色	0.79 1.28 0.70 2.16
	26 27 28 29 30	地山 L i C 地山 SL 地山	2.5Y3/0 暗オーブ褐色 2.5Y4/3 暗オーブ褐色 2.5Y4/3 暗オーブ褐色 2.5Y4/3 暗オーブ褐色 2.5Y4/4 暗オーブ褐色	1.70 1.20 2.77 2.02 1.11

注. (1) 土色: マンセル色色系に準じた新版標準土色貼 (農林省農林水産技術会議監修、1967) による。

(2) 土性: 土壌調査ハンドブック (ペドジスト、農業会編、1984) の野外判別による。

S: 砂土 (粘土 0~5%、シルト 0~5%、砂 85~100%)

SL: 砂質土 (粘土 0~15%、シルト 0~35%、砂 65~85%)

L S: 粘質砂土 (粘土 0~15%、シルト 0~15%、砂 85~95%)

S i CL: シルト質粘土 (粘土 15~25%、シルト 45~65%、砂 0~40%)

CL: 粘土質土 (粘土 15~25%、シルト 20~45%、砂 3~65%)

L i C: 粘質土 (粘土 25~45%、シルト 0~45%、砂 10~55%)

HC: 硬質土 (粘土 45~100%、シルト 0~55%、砂 0~55%)

4. 考察

土坑試料のうち土坑墓とされるものは、SK87とSK93を除いて下位ほど含量が少なくなる傾向が見られた。また、墓以外の土坑の可能性もあるとされるSK94では底部、SK98は底部上位の覆土でリン酸含量が高く、SK116とSK117では下位ほど含量が少なくなる傾向が見られた。また、土坑墓とそれ以外の土坑のリン酸含量に明確な差は認められないとともに基本土層と比較して低い傾向にあり、土坑墓の覆土中にはリン酸の富化は認められないと判断される。

基本土層および土坑墓の覆土および地山のほとんどが2.5Y系の土色であり、非常に弱いながらも還元作用の影響を受けていることがうかがえる。また、SK93については土色の色相が5Y系であることから、強還元状態下にあったことが推定される。さらに今回の分析結果では土坑底面よりもむしろその上位の試料がリン酸含量が高い傾向がみられる土坑が多い。これより、とくにSK93ではリン酸成分の流失が促進され、他の土坑墓についても流失しやすい状態が生じたことが考えられる。そのため、遺体が埋葬された土坑でも、覆土に遺体の痕跡が残りにくかったと推定される。なお、SK93では化学成分を保持しにくい砂土により構成される地山でリン酸含量が高くなっている。直上の土坑底部より流下したリン酸成分が濃集したものと考えられるが、その要因は土壤の理化学性を調査していない現段階では明確にならない。

今回の分析調査では、中世の墓域に構築された土坑墓を含む土坑について、リン酸含量から遺体の埋葬の検証を試みたが、遺体の痕跡を確認するに至らなかった。今後、リン酸成分だけでなく、腐植の影響を考慮するための有機炭素含量測定（腐植含量測定）やリン酸吸収計数の測定も併せて実施することが有効であり、より詳細に検討できると考えられる。

＜引用文献＞

- 土壤標準分析・測定法委員会編（1986）土壤標準分析・測定法、354 p., 博友社.
土壤養分測定法委員会編（1981）土壤養分分析法、440 p., 養賢堂.
京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第1巻、411 p., 産業図書.
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定、ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」、156 p., : p.39-40.
竹迫 紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆（1980）神谷原遺跡への土壤学的アプローチ、神谷原 I, p.412-416.
八王子市門田遺跡調査会.

第2節 プラント・オパール分析、花粉分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

柳生台畠遺跡の発掘調査では、1区で水田耕作層とみられる土層が、3区で小溝状遺構（畠跡）が検出された。そこで、プラント・オパール分析からこれらにおける農耕の可能性について検討を行うとともに、花粉分析を行い堆積環境についても検討した。

2. プラント・オパール分析

(1) 試料

調査地点は、3区の14トレンチ東壁、15トレンチ東壁、16トレンチ東壁と1区東壁のAポイント、Bポイント、Cポイントの6地点である。

分析試料は、3区の14トレンチ東壁では上位よりにぶい黄褐色シルト（II a層）、褐色シルト（II b層）、にぶい黄褐色砂質シルト（III b層）、黒褐色シルト（IV層）の4点、15トレンチ東壁では上位より灰黄褐色砂質シルト（II a層）、にぶい黄褐色砂質シルト（II b層）、灰黄褐色砂質シルトの上部と下部（II c層）の4点、16トレンチ東壁では暗褐色シルト（II a'層）の1点、1区東壁のAポイントでは、上位より灰黄褐色シルト（II a層）、灰黄褐色砂質シルト（II b層）、灰黄褐色砂質シルト（II c層）、にぶい黄褐色粘性シルト（V層）の4点、Bポイントでは、上位より灰黄褐色砂質シルト（II b層）、黒褐色シルト（IV a層）、灰黄褐色シルト（IV b層）、にぶい黄褐色粘性シルト（V層）の4点、Cポイントでは、上位よりにぶい黄褐色砂質土（III a層）、にぶい黄褐色砂質土（III b層）の2点の計19試料である。

このうち、3区14トレンチ東壁のIII b層上面で小溝状遺構が検出されており、1区のII b層では水田耕作層の可能性が考えられていた。

(2) 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）
- 2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレベラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞（葉身にのみ形成される）に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）を同定の対象とし、400倍の偏光顯微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が400個以上になるまで行った。これはほぼプレベラート1枚分の精査に相当する。

検鏡結果は、計数値を試料1g中のプラント・オパール個数（試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブの個数の比率を乗じて求める）に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単

位: 10-5 g) を乗じて、単位面積で層厚 1 cmあたりの植物体生産量を算出した。各植物の換算係数は、イネは2.94、キビ族(は)8.40、ヨシ属は6.31、ウシクサ族は0.75、タケ亜科(数種の平均値)は0.48である。

(3) 分析結果

同定された分類群は、イネ、キビ族(ヒエ属型)、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属型)、シバ属、タケ亜科である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1に示した。

(4) プラント・オパール分析から推定される農耕

稻作跡の検証や探査を行う場合、仙台平野ではイネのプラント・オパールが試料 1 gあたりおよそ3,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。また、プラント・オパール密度にピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくく、密度が基準値に満たなくても稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。以上のことを基準に各層における稻作の可能性について検討を行う。

14トレングチ東壁では、II a層、II b層、III b層、IV層においてイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層準において稻作が行われていた可能性が考えられる。このうち、II a層ではプラント・オパール密度が5,000個/g弱と高い値であることから、本層準については耕作層であったと判断される。なお、IV層ではヒエ属型とみられるキビ族が2,900個/gと比較的高い密度で検出された。ただし、ヒエ属とキビ属には硅酸体形状の近似するものがあること、また栽培種と野生種については両者を識別することはほとんど困難であることなどから、本層準においてヒエの栽培が行われていた可能性は考えられるものの、野・雑草である可能性も否定できない。仮に、ここでヒエが作付けられていたとするならば、イネも若干ながら検出されていることから、輪作の可能性が想定でき興味深い。

15トレングチ東壁では、II a層とII c層よりイネのプラント・オパールが検出された。このうち、II a層ではプラント・オパール密度が10,200個/gと非常に高い値であることから、本層準については耕作層であった可能性が極めて高いと判断される。また、II c層でも上部で5,300個/g、下部で3,600個/gといずれも稻作跡の判断基準値である3,000個/gを上回っていることから、本層準についても稻作跡である可能性が高いと考えられる。

16トレングチ東壁では、II a'層について分析を行った。その結果、イネのプラント・オパールが2,600個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、本層準で稻作が行われていた可能性が考えられる。

I区の東壁では、II a層、II b層およびIII a層よりイネのプラント・オパールが検出された。したがって、これらの層準において稻作が行われていた可能性が考えられる。このうち、II a層ではプラント・オパール密度が5,000個/g弱と高い値であることから、耕作層であった可能性が高いと判断される。

なお、本遺跡では、全体に乾いた環境の指標となるタケ亜科が優勢であり、湿地の環境の指標となるヨシ属はI区東壁BポイントのII b層とIV b層でわずかに検出されたのみで、他からは検出されていない。したがって、本遺跡はV層堆積時からII a層堆積時にかけては概ね乾いた環境であったと推定される。またのことから、これらの層準で営まれた稻作が水田稻作であったならば、その水田は地下水位の低い乾田であった可能性が想定される。ただし、IV層ではイネの密度が低く、ヒエ属型とみられるプラント・オパールが検出されているうえ、ウシクサ族(ススキ属)も高い密度であることから、畠稻作であった可能性も考えられる。

3. 花粉分析

(1) 試料

試料は、柳生台烟遺跡の3区14トレングチのII b層、III b層、IV層の3層準であり、主に茶褐色から黒褐色を呈する粘土で構成される陣成堆積物とみなされる。

(2) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にし、試料に以下の順で物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9:1濃硫酸のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。

5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。

6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500 rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨ててという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとし、所有の現生標本との対比を行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974、1977）を参考にし、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類した。ただし、個体変化が大きいことや類似種があることなどからイネ属型とした。なお、今回はイネ属型は検出されなかった。

(3) 結果

1) 分類群

出現した分類群は、樹木花粉3、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉4、シダ植物胞子2形態の計10である。これらの学名と和名および粒数を表2に示す。以下に出現した分類群を示す。

〔樹木花粉〕

ハンノキ属、クリーシイ属、ブナ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科—イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、セリ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

单条溝胞子、三条溝胞子

2) 花粉群集の特徴

II b層、III b層は花粉がほとんど検出されなかった。IV層も検出数は少ないが、ヨモギ属とイネ科がやや多い傾向を示す。

(4) 花粉分析から推定される植生と環境

IV層の花粉群集の特徴から、周辺はヨモギ属やイネ科の草本の優勢な植生であり、ヨモギ属の好むやや乾燥した陽当たりの良い環境であったと推定される。II b層、III b層ではほとんど花粉が検出されず、乾燥した環境下での分解が考えられる。以上から、柳生台畠遺跡一帯はやや乾燥した環境であったと判断され、IV層ではヨモギ属とイネ科の草本が主に分布していた可能性が推定された。

4.まとめ

柳生台畠遺跡においてプラント・オバール分析と花粉分析を行い、稲作をはじめとする農耕の検討ならびに堆積環境の推定を試みた。その結果、3区14トレンチの花粉分析から、N層はヨモギ属などの生育する陽当たりの良い環境であり、III b層やII b層は乾燥した環境であったと推定された。プラント・オバール分析から3区のII a層、II b層、III b層さらにN層、1区のII a層、II b層およびIII a層において稲作が行われていた可能性が認められた。とくに、3区のII a層、1区のII a層については耕作層であった可能性が高いと判断された。また、3区のN層については畠跡である可能性も示唆された。

参考文献

- 金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原、新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法、角川書店、p.248-262.
- 島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態、大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集、60 p.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追求のための基礎資料として—、考古学と自然科学、20、p 81-92.
- 中村純（1973）花粉分析、古今書院、p.82-110.
- 中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として、第四紀研究、13、p.187-193.
- 中村純（1977）稲作とイネ花粉、考古学と自然科学、10、p.21-30.
- 中村純（1980）日本産花粉の標識、大阪自然史博物館収蔵目録第13集、91 p.
- 藤原宏志（1976）プラント・オバール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9、p 15-29.
- 藤原宏志（1979）プラント・オバール分析法の基礎的研究（3）—福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ (*O. sativa* L.) 生産総量の推定—、考古学と自然科学、12、p 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オバール分析法の基礎的研究（5）—プラント・オバール分析による水田址の探査—、考古学と自然科学、17、p 73-85.

表1 柳生台烟遺跡のプラント・オパール分析結果

検出箇度 (単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	14トレンチ				15トレンチ				16トレンチ	
	II a	II b	III b	V	II a	II b	II c-1	II c-2	II a'	
イネ	48	6	6	7	102		53	36		26
キビ族 (ヒエ属)				29						
ヨシ属										
ウシクサ族 (ススキ属など)	18	12	6	65	15	7	12	14		13
ジバ属					7					
タケ亜科	119	105	113	115	109	43	65	129		90

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

分類群 / 試料	1.40	0.18	0.17	0.21	3.90		1.37	1.05		0.76
	(イネ科)	0.49	0.06	0.06	0.07	1.05	0.55	0.37		0.27
キビ族 (ヒエ属)					2.41					
ヨシ属										
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.22	0.15	0.07	0.80	0.18	0.09	0.15	0.18		0.16
タケ亜科	0.57	0.51	0.54	0.55	0.53	0.21	0.31	0.62		0.43

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	Aポイント				Bポイント				Cポイント	
	II a	II b	II c	V	II b	II a	II b	V	II a	II b
イネ	49	18			6					22
キビ族 (ヒエ属)					6					
ヨシ属					7					
ウシクサ族 (ススキ属など)	22	18	20		6	19		9		
ジバ属										
タケ亜科	27	42	48	64	13	39	20	79	22	7

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

分類群 / 試料	1.45	0.53		0.19					0.64
	(イネ科)	0.51	0.18		0.07				0.22
キビ族 (ヒエ属)									
ヨシ属					6.40		0.43		
ウシクサ族 (ススキ属など)	0.27	0.22	0.25		0.08	0.24		0.11	
タケ亜科	0.13	0.20	0.23	0.31	0.06	0.19	0.10	0.58	0.10
									0.03

表2 柳生台烟遺跡における花粉分析結果

学名	分類群	和名	14トレンチ		
			II b型	III b型	V型
ArboREAL pollen		樹木花粉			
Alios		ハンボク属		1	1
Castanea crenata - Castanopsis		クリ・シイ属			3
Fagus		ブナ			1
ArboREAL + Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉			
Moraceae - Urticaceae		クワ科-イクサ科			1
Nonarboreal pollen		草本花粉			
Gramineae		イネ科		1	9
Apidoteae		セリ属			1
Asteroidae		キク属		1	1
Artemisia		ヨモギ属		2	16
Pteris spore		シダ植物孢子			
Monocolpate type spore		单条裸孢子	1		1
Trilete type spore		三条裸孢子		1	
ArboREAL pollen		樹木花粉	0	1	5
ArboREAL + Nonarboreal pollen		樹木・草本花粉	0	0	1
Nonarboreal pollen		草本花粉	1	3	27
Total pollen		花粉總數	1	4	33
Unknown pollen		未同定花粉	0	0	0
Pteris spore		シダ植物孢子	1	1	1

第4章 遺物・遺構の検討

第1節 遺物の検討

今回の調査では本調査および試掘調査で検出された遺構や基本層中から、縄文土器、弥生土器、非ロクロ土器、ロクロ土器、土師質土器、瓦質土器、中近世陶器、中近世磁器の土器類のほか、瓦、土製品、石製品、剥片石器、鉄製品、銅製品、木製品などの遺物が出土した。しかしながら、各時期の遺構の重複が著しいことから、遺構内出土遺物についても必ずしもそれが遺構時期を示すものとはなり得ない場合が多い。また土器類以外の遺物については時期の不明なものも多いことから、ここでは土器類を中心に時代別にみていくこととする。

1. 縄文・弥生時代の遺物

縄文土器

縄文土器は合計で98点出土した。このうち北端敷高地部に位置する5・6区の下層調査区からの出土は78点で、残りは後世の遺構堆積土からの出土である。下層調査での内訳は、5区Vd層が8点、6区Vc層が15点、Vd層が53点、Ve層が2点で、6区V層中からの出土が目立っている。

体部文様では隆線区画の文様が13点、沈線区画の文様が4点で、残りは地文のものである。時期は中期後半から後期初頭のものがあり、中でも中期末葉のものがやや多く見受けられる。また土器は6区のVc～d層の各層から出土があったが、層位別による時期の違いは特にみられなかった。

弥生土器

弥生土器は2点出土した。(33図1)は口縁部下間に交互刺突状文がみられる壺か甕で、他の体部資料と共に弥生時代後期の天王山式期のものとみられる。

2. 古墳時代の遺物

ロクロ使用の土器以外にも僅かではあるが非ロクロのものが認められる。図示したものは4a区SX1から出土した器台である(30図1)。これは受部、脚部は欠損しており、両部は貫通し、孔径は1cmほどである。全体に磨滅が著しく、受部外面にヘラケズリが認められる。脚部は円錐状に広がるとみられ、くびれ部下1cmに窓窓が認められる。器台は東北地方の土器編年第一段階である古墳時代前期の塙釜式にのみみられ、後続する中期の南小泉式には消失することから、この時期のものとみられる。また2区V層上面や13トレンチ各層などから甕や壺の破片が少量出土している。これらは外面にヘラナデ、内面にヘラナデやハケメがみられ、器台同様、塙釜式期のものとみられる。

3. 古代の遺物

古代の遺物とみられるものには、土器、須恵器がある。土器は全てその製作にロクロを使用していることから、平安時代のものと考えられる。土器は2号住居跡から多く出土しているが、他に多くの土坑、溝跡、基本層などから出土している。しかしながら住居跡以外の大部分は、共に出土する中近世の遺物からみて後に流入したものとみられる。

土器

壺 全てロクロを使用しており、内面は黒色処理の後にヘラミガキが施されている。

I類：体部はやや緩やかに内湾気味に立上がり、口縁端部が僅かに外反する。器厚は体部中位が薄く、口縁部付近がやや厚くなるもの(17図1～8)、(33図2)、(9図1)。

口縁径は134～166mm、底径60～72mm、器高41～48mmで、底／口=0.39～0.46、高／口=0.27～0.34である。これらには口縁径がやや大きいもの(17図1・6)がある。底部切離しは回転糸切りとみられ、のち無調整のもの(17図3～6・8)、ヘラケズリ調整を施すもの(17図1・2)(9図1)がある。また(33図2)は外面にヘラミガキ

が施されている。

Ⅱ類：底径が82mmと大きく、口縁径、器高は不明であるが、体部がやや緩やかに立上がる大型の杯（41図1）。

底部切離しは回転糸切りで、後に体部下端と共に手持ちヘラケズリが施される。

Ⅲ類：体部が直線的にやや急角度で立上がるもの（36図1）（39図3）。

口縁径、底径、器高ともI類に比べて大きく、（39図3）は器高69mmで、高／口=0.43、底／口=0.47と、口縁径に対する底径の割合が大きい。いづれも底部切離しは不明で、（36図1）は後に外面下端と共に回転ヘラケズリ、（39図3）は手持ちヘラケズリが施される。

遺物番号	出 土 地		法 量 (mm)		比 率		再調整・底部切離し		類型
	遺構・区	層位	口縁径	底径	器 高	底径／口径	器高／口径	体 部	
1	S I 2	1層	142	64	48	0.45	0.34	回転糸切り	I
2	S I 2	1層	166	72	48	0.43	0.39	不明→手持ヘラケズリ	I
8	S I 2	3層	134						I
9	S I 2	床面	145	62	45	0.43	0.31	回転糸切り	I
10	S I 2	カマド	143	60	48	0.42	0.34	回転糸切り→周縁ヘラケズリ?	I
15	S I 2	1号土坑	60					回転糸切り	I
17	S I 2	P 1	152	60	41	0.39	0.27	回転糸切り	I
18	S I 2	P 1	140	64	45	0.46	0.32	回転糸切り	I
21	S D 12	1層	140				外面部ガタ		I
27	S D 25	埋土	82				外面部下端ヘラケズリ		II
28	2区	P 58	70				外面部下端回転ヘラケズリ		III
33	2区	V層上面	162	76	69	0.47	0.43	不明→手持ヘラケズリ	II
34	15T	E C層	64					不明→手持ヘラケズリ	I

第2表 土師器杯

(法量は破片復元値も含む)

高台付杯 1点のみ図示した（39図2）。

ロクロを使用し、内面は黒色処理後ヘラミガキ、底面は回転糸切りの後に高台を取付けている。体部上半が欠損しているが、杯I類同様の形状、法量のものと推定される。

甕 全てロクロを使用している。

I類：口縁径に比べ、器高が大きい・長胴形の大型のもの（17図9・10）（18図1～3）。

全体の法量のわかるものは少ないが、口縁径190～230mm程度、器高250～310mm程度のものである。口縁径と体部最大径はほぼ同じか僅かに口縁径が大きいが、（18図1）は体部径の方が大きい。調整は外面が体部中位から下が主に綻位のヘラケズリ、内面がヘラナデを施しているが、（17図10）は回転力を利用したハケメ状のもの後にヘラナデがみられ、（17図9）は体部下半に横位のヘラナデがみられる他、ヘラナデを施さないものもある。

II類：口縁径に比べ、器高が小さいか、ほぼ同じのやや小型のもの（18図4～8）。

口縁径141～162mm、器高126～128mmで、I類に比べ器厚が薄く、（18図8）は口縁部が受口状となっている。調整はロクロナデの後にほとんどは無調整であるが、（18図4）は外面下端にヘラケズリが施される。また（18図6・7）は底部切離しが回転糸切り無調整である。

III類：小型の甕（33図3）。

口縁部形状、径、器高は不明で、底径は58mmである。調整はロクロナデの後、外面下端や底部に回転ヘラケズリが施される。

本遺跡出土の土師器のほとんどは、その製作時にロクロを使用していることから、前述の土師器編年の表ノ入式に位置づけられる。以下では当形式の中でも器形や製作技法上の変遷が把握できる杯について、杯・甕がまとめて出土した2号住居跡出土資料についてみていく。

2号住居跡出土の土師器杯で図示したものは8点あり、これらは全てI類である。出土した土師器はロクロ調整

を行っており、非ロクロのものは含まれない。表杉ノ入式の変遷を考える上で重要な要素となる底部切離しや再調整については、回転糸切りで無調整が5点、底部周縁にヘラケズリを施すものが1点、切離し不明で底部全体に手持ちヘラケズリを施すものが1点ある。また体部外面下間にヘラケズリを施すものはみられない。法量の計測可能なものの平均をみると、口縁径は146mm、底径63mm、器高45mm、底径／口径は0.43、器高／口径は0.31である。なお2号住居跡では土師器甕で図示したものは11点あり、これらも全てロクロを使用している。その他に共伴するものとして須恵器甕（39図14）があるが、須恵器の出土は僅かで、甕類で全体をうかがうものは無く、また赤焼土器はみられない。

2号住居跡の堆積土中には10世紀前半頃に降下したとみられる灰白色火山灰が一部層状に堆積するのが確認された。周辺の遺跡で住居跡内にこの火山灰が確認されたものには中田畠中遺跡1・2号住居跡、元袋Ⅲ遺跡19号住居跡、松木遺跡1・2号住居跡、四郎丸館跡1号住居跡などがあり、いづれもその年代を10世紀前半かそれ以前のものとしている。中田畠中、元袋Ⅲ遺跡では甕底部の切離しが確認できるもの全てが回転糸切りで、再調整されるものに比べ無調整のものが主体を占める点はI類と同様であるが、口縁径に大きな違いはないが、底径が小さく、口縁径に対する底径の割合が小さく、器高が大きいことがわかる。またこれらの遺跡では一定量の赤焼土器が共伴している。以上の特徴から、本遺跡2号住居跡のものは中田畠中遺跡1・2号住居跡、元袋Ⅲ遺跡19号住居跡出土土器より古い要素をもつものと考えられる。松木遺跡1号住居跡は甕の全てに再調整が加えられ、非ロクロの甕が共伴しており、2号住居跡では再調整と無調整の両者がみられ、甕は全てロクロのものであることから、両者には時期差があるものとみられ、1号住居跡は本遺跡2号住居跡より古く、2号住居跡はほぼ同様の時期のものとみられる。両住居跡とも赤焼土器はみられない。

この他の遺跡で土師器甕に同様の特徴をもつものとしては、中田南遺跡N群土器は底部切離しが回転糸切りで無調整のものを主体とし、共伴する須恵器甕では回転ヘラ切りが僅かに残ることから、これらは多賀城のD群土器に含まれ、9世紀後葉のものとしている。伊古田遺跡では2号住居跡出土の再調整のあるものをⅢa群土器、ほか多数を占め、底径／口径の平均が0.39で再調整の無いものをⅢb群土器として、前者を9世紀後半、後者を10世紀初頭としているが、再調整や法量でみると、本遺跡は両群の中間に位置するものとみられる。

2号住居跡出土土器については共伴する須恵器や赤焼土器などがほとんどなかったことから、土師器甕のみでの検討となつたが、平安期の一般集落においては土師器、須恵器、赤焼土器の出土比率がその遺跡の立地、性格により様相を異にするといわれることから、本遺跡2号住居跡で土師器が大部分を占め、赤焼土器が含まれない状況は、時期差のみに起因するものではないものとみられる。2号住居跡出土の土器群の年代は火山灰が降下した10世紀前半を下限として、火山灰の堆積状況に加え、遺跡の立地からみて、降下時期と大きな時期差を設定することには多少無理があるものと考えられることから、その時期については10世紀初めを中心とする時期に求めることが適当であると考えられる。

2号住居跡以外の甕はI類（9図1）、II類（41図1）、III類（36図1）（39図3）の全てが底部に再調整がみられ、（41図1）が回転糸切りによるものとわかる以外は切離しは不明である。全体形がわかるものが少ないと認め詳細は不明であるが、（41図1）（36図1）は底部同様に体部下端にもヘラケズリ調整がみられ、再調整からみると、これらの甕については2号住居跡出土のものよりは古い傾向を示す。しかしながらII類は大型、III類は器高のあるものとしてI類と区別したことから、再調整の違いが時期差によるものか或いは器形に関係するのかは不明である。

須恵器

土師器に比べ出土量が少なく、全体形が復元可能なものは限られる。計8点を図化したが、2号住居跡出土のものは1点のみであった。

环（33図4・5）（39図5）

（33図4）は口縁径に対する器高が低いもので、底部は回転糸切り無調整、（39図5）は器高が高いものである。

（33図5）は体部外面下端にヘラケズリが施され、底部は回転糸切り無調整である。

高台付环（33図6）

口縁部径、器高は不明で、高台部径は80mmである。环底部は回転ヘラケズリの後に高台部を貼付けている。

甕（33図7・8）（39図4）

（33図7）（39図4）は全体が大きく膨らむ球胴形を呈する。（33図7）は大型のもので、口縁部から体部上半の残存であるが、外面全体に繩目の叩きによる成形、調整作業が行われている。（39図4）は中型のもので、体部外面下半に継ぎのヘラケズリが施されている。

蓋（39図6）

1点のみの出土である。器径は不明で、リング状のつまみを有する。つまみ部径は70mm程度である。

4. 中・近世の遺物

（1）土師質土器

19点出土している。内訳は皿が17点、鉢が1点、不明1点である。ほとんどがロクロ成形によるもので、手づくりと判別できるものは無い。皿で底部切り離しが回転糸切りのものが6点あり、再調整はみられない。全てが小破片のため、全体形のわかるものが無いことから、これらの時期を特定することはできない。

（2）瓦質土器

4TのSD4aから器種不明品、15TのIIa層から鉢が出土しており、いづれも16世紀かそれ以降のものとみられる。

（3）陶 器

中世陶器が116点、近世陶器が24点出土している。

在地（白石窯系）

県南部白石市周辺の窯のものとみられる在地産の小壺がSD10・14aから2点出土している。いづれも色調は黒色系で、（33図11）は内面に鉄分が広く付着し、外面にはヘラ記号のようなものが描かれている。時期は13世紀後半から14世紀前半のものとみられる。

在地（その他）

ほぼ県内の窯で生産されたとみられる無釉陶器で、調査で出土した中世陶器の半数以上を占めている。器種は甕が50点、鉢が28点、不明3点で、出土地区はSD4・10・11など溝跡からの出土が多く、特にSD10・11からの出土が目立っている。全てが小破片で全体形を復元できるものは少ないが、甕は口縁部が受口状を呈し、大型のものは無く、中型が主である。鉢は体部から口縁部にかけての形状がほぼまっすぐに立ち上がるものと、口縁部付近で内傾するものがあるが、いづれも口唇部は平坦面を形成している。前者の中には口唇部に沈線状のくぼみが巡っているものも3点ほどみられる。

鉢については内面が摩耗しているものがほとんどであるが、甕においても内面が摩耗し、平滑となっているものが12点ほどみられる。また鉢の底部に断面が低平な二等辺三角形を呈する高台が取り付くものが2点みられる。これらは体部下半に回転ヘラケズリを施し、鉄分の噴出しがみられるものがある。宮城県と境を接する福島県梁川町の八郎窯跡群では片口鉢で高台のあるものと無いものが同一の窯で焼かれており、片口鉢は高台のあるII類から無高台のIII類への変遷がみられている。この流れは常滑と同様な形式的変遷を辿るとみられることから、本遺跡のものについても無高台の鉢に先行するものである可能性が強い。またこれらの窯跡については八郎窯跡群を中心とする地域に求めることも可能であるが、定かではない。

在地産の甕や鉢の年代についてはこれまでの年代観の通り、13世紀後半から14世紀前半と考えられ、高台を持つ鉢については13世紀前半頃の年代を与えることができるものとみられる。

この他には甕の体部破片周縁を打ち欠き、成形したとみられる陶製円盤とみられるものが2点出土している。

常滑

常滑産とみられるものは9点あり、内訳は甕が4点、不明4点である。(30図3)は体部の小破片であるが、側面が全周して摩耗していることから、砥石に転用されたものとみられる。時期についてはほとんどが体部破片であることから不明である。

渥美

渥美産とみられるものは9点あるが、全て体部小破片である。内訳は甕が2点、壺が5点、不明2点である。時期については多くは12世紀から13世紀前半あたりのものとみられる。

瀬戸

古瀬戸とみられるものは8点あり、内訳は皿2点、瓶子2点、碗2点、不明2点である。全て灰釉で、皿は折縁の深皿で14~15世紀のものとみられる。碗は平碗で、(36図2)は1区P47からの出土である。底部は削り出し輪高台で、体部下間にヘラケズリを施している。時期は15世紀あたりのものとみられる。

瓶子は2点出土しているが、不明のものの中にも瓶子である可能性のものもある。(39図9)は1区IIa整地層のもので、肩部のみの残存であるが、3条の沈線が巡っており、13~14世紀のものとみられる。

(31図1)は1区P34から出土したほぼ完形の瓶子である。器高28cm、体部最大径は18cmで、口縁部、頸部径とも5cm程度で、高さは2.5cmと低めである。肩部の張りはあるが全体にまるみを帯び、体部は直線的である。頸部には隆帯が巡っている。外面はロクロ調整されるが、内面は粗くナデられているのみである。体部は無文で、外面全体と底部、頸部内面に灰釉が厚くかけられ、釉は浅黄色で、全体に質入が著しい。口唇部が数か所で剥落し、全周して摩耗している。この瓶子は古瀬戸編年で前期様式に位置づけられ、年代は13世紀後半のものとみられる。(註1)

瀬戸・美濃

瀬戸・美濃産とみられるものは7点あり、内訳は皿4点、鉢1点、碗1点、小壺1点である。(9図8)はSD4aの2層から出土した小皿で、全面施釉の筈筒底で、16世紀前半のものとみられる。(34図6)は1区SD10の2層から出土した小型丸皿で、灰釉とみられるものの高台部分を拭きとっており、16世紀中頃のものとみられる。

(34図7)は2区SD15堆積土中から出土した天目茶碗で、底部は削り出し輪高台で、16世紀後半のものとみられる。(9図9)は15Tの1層出土の皿で、やや時期が下って17世紀代のものとみられる。

美濃(志野)

志野とみられるものは5点あり、全て皿である。内訳は菊皿2点、丸皿3点で、出土遺構は2TのSK1、4TのSD4a、5TのSD7、4A区のSD10の上半層からのものがある。時期はいづれも16世紀末から17世紀初めにかけてのものとみられる。

唐津

唐津とみられるものは15Tの1層から碗か鉢の小片が1点出土しているのみで、16~17世紀にかけてのものとみられる。

岸窯系

福島市飯坂に所在する窯跡で焼かれたとみられるもので、3TのI層から香炉、19TのI層から擂鉢とみられるものが出土している。いづれも17世紀のものとみられる。

大堀相馬

大堀相馬は7点出土しており、内訳は碗が5点、小壺1点、不明1点である。遺構からの出土品は4A区のSD11

上半層から小壺と筒形碗が出土しており、これらを含めた遺物の時期は18世紀かそれ以降の年代が与えられる。

十一

堤焼は6点出土しており、全て基本層1層からのものである。内訳は灯明皿1点、擂鉢1点、不明4点で、時期は18~19世紀のものとみられる。

(4) 磁 器

中世とみられる磁器が13点、近世とみられる磁器が5点出土しており、前者は全て中国産である。

中国龙泉窑系

中国的龍泉窯系のものとみられる青磁が12点出土している。全て小破片で、碗類が11点、不明1点である。碗類の文様は劃花文が3点、蓮弁文が3点、無文とみられるものが1点で、時期は劃花文のものが12世紀後半から13世紀前半、蓮弁文のものが13~14世紀のものとみられる。(9図15)は体部を打ち欠いた露胎の高台部で、別の何かに転用したものとみられる。

中国自研

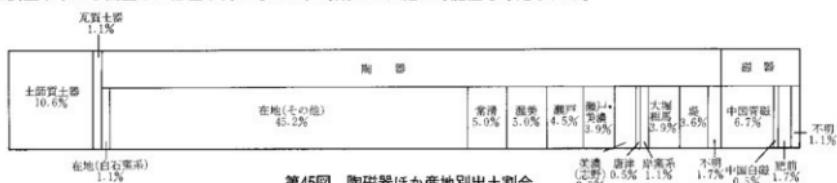
中国産の白磁の皿の小片が1点出土している。これは3区SD12の1層からのもので、15世紀のものとみられる。

四

肥前磁器は3点出土している。いづれも表土層からのもので、青磁の香炉1点、染付皿1点、菊花文の染付碗1点で、いづれも17~18世紀のものとみられる。

產地不明

产地不明のものが2点出土している。いづれも中国産の白磁の可能性もあるが定かでない。1点は1区S D11の堆積土下半から出土した器種不明のもので、時期は15世紀の可能性も考えられる。



第45図 陶磁器ほか産地別出土割合

		产地	皿	甌	鉢	壺	小壺	瓶	罐	小杯	香炉	擂钵	灯明皿	不明	合計	
土郎貢土器		17			1									1	19	
瓦質土器					1									1	2	
在地（白石窯系）									2						2	
中世	在地（その他）		50	28										3	81	
	常滑		4		1									4	9	
	瀬美		2		3									2	9	
	熊戸		2						2	2				2	8	
	鶴戸、笠森		4		1					1	1				7	
近世	美濃（尾野）		5												5	
	唐津													1	1	
	伊賀系														2	
	大樹相馬								5	1				1	7	
	堤													1	4	
	不明		1	1	1										3	
近世	中國・笠原系青磁									11					1	12
	中国白磁	1													1	
	肥前														1	
	薩摩付	1								1					2	
不明		1													1	
合計		31	57	32	7	2	2	20	2	2	2	2	1	21	179	

第3表 陶磁器ほか器種別集計

第45図は陶磁器ほかの中近世土器の産地別出土割合を示したもので、また第3表はそれらを器種別に示したものである。これらの遺物はⅢA期からⅣ期にかけてのものである。この中で中世前半段階のⅢA期を中心とする時期の陶磁器をみると、合計129点のうち在地産のものが7割を占め、常滑、瀬美が7%、古瀬戸が僅か、中国磁器が9%で、在地産の占める割合が高く、これは市内の鎌倉期とされる城館、屋敷跡での割合と比較しても極めて高い値といえる。松木遺跡Ⅱ期は鎌倉時代の有力農民層の屋敷跡と考えられており、ここでは在地産のものが6割と最も多いのは本遺跡と同様の傾向を示すが、これに次いで常滑が3割近くの出土を見せ、これに対し古瀬戸や中国磁

出土地	出土件数	十郎賀				在地				常滑				瀬美				古瀬戸				中国				青白磁				肥前				伊賀				合計			
		土	粘	砂	石	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地	地
SK1	1																																				1				
SK11	1																																				1				
SK16	1																																				1				
SK17	1																																				1				
SK22	1																																				1				
SK30	1																																				3				
SK31	1																																				1				
SK32	1																																				2				
SK41	1																																				1				
SK49	1																																				1				
SK50	2																																				2				
SK58	1																																				1				
SK62	1																																				1				
SK71	1																																				1				
SK72	1																																				1				
SK75	1																																				1				
SK90	1																																				1				
SK101	1																																				1				
SK107	1																																				1				
SK125	1																																				1				
SK128	1																																				1				
SX1	1																																				1				
SD3	2																																				2				
SD4a	1																																				9				
SD5	1																																				1				
SD7	1																																				1				
SD10	1																																				35				
SD11	3																																				21				
SD12	1																																				5				
SD14a	1																																				4				
SD14c	1																																				1				
SD15	1																																				1				
SD17a	1																																				1				
P34	1																																				1				
P47	1																																				1				
1K	1																																				7				
1Kz	1																																				2				
1Kb	1																																				1				
2K	1																																				5				
3K	1																																				2				
3Kz	1																																				1				
3Kc	1																																				1				
4K	1																																				2				
4Kb	1																																				1				
1Kzレンサ	1																																				3				
3Kzレンサ	1																																				1				
5Kzレンサ	1																																				1				
6Kzレンサ	1																																				2				
7Kzレンサ	1																																				2				
8Kzレンサ	1																																				1				
17zレンサ	1																																				1				
17dレンサ	1																																				2				
18zレンサ	1																																				1				
19zレンサ	1																																				1				
23zレンサ	1																																				1				
24zレンサ	1																																				4				
27zレンサ	1																																				1				
合計	19	2	2	81	9	9	8	7	5	1	2	7	6	3	12	1	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	179				

第4表 陶磁器ほか出土地別集計

器の割合が小さいことから、常滑産陶器の流通度合の高さが指摘されている。また非日常性をもつとされる土師質土器はそのほとんどが時期不明であるが、中近世土器の1割程度で、14~15世紀の城館跡が発見された南小泉遺跡第16次調査での土師質土器の突出した出土割合とは様相を異にするものといえる。

Ⅲ C期、Ⅳ期の中世後半から近世初頭にかけての遺物としては、瀬戸・美濃産の皿を中心とした7点と、美濃(吉野)産の皿5点のほか、15世紀代の古瀬戸、唐津、岸窯系のものが僅かにみられるにすぎない。この時期の屋敷は掘跡以外の遺構が不明確であることもあってか、出土量からみる限り、Ⅲ A期に比べ極めて少ないものとなっている。

(5) 瓦

焼し瓦が4点出土している。平瓦2点、丸瓦1点、不明1点である。出土遺構は3TのSD2、4TのSD3、4aで、近世のものとみられる。

(6) 土製品

S K30と88より土錘片が1点づつ出土したが、古代のものである可能性もある。

(7) 石製品

S I 2で砥石1点が出土した以外では、砥石6点、石臼1点、茶白の下臼1点、台石1点が出土した。石臼と茶臼はSD10から出土しており中世のものと考えられるが、砥石については古代に含まれる可能性のあるものもある。

遺 務 区、トレゾナ	出土層位	凡	土 製 品		石 製 品		洞 片 石 雷			鉄製品けか				銅製品 古鏡	木製品 漆器類	
			土錘	不明	砥石	石臼	茶臼	石臼	石標	剝片	刀子	勺	鍋	不明		
S 1 2					1										11	
S K16															4	
S K17															5	
S K18																
S K19											1					
S K27												1				
S K30		1								1					1	
S K37			2													
S K40															1	
S K41															1	
S K43															3	
S K44															2	
S K46											1					
S K48															3	
S K71												1			1	
S K72															1	1
S K80															1	
S K88		1													1	
S K91															3	1
S K107												1				
S K113															1	
S K116															1	
S X1				1											1	
S D 2		1														
S D 3		1														
S D 4 a		1														
S D 7															1	
S D10					1	1										
S D11				1											1	
S D14 c							1									
P 277			1													
P 565															3	
1区	B a			1											4	
1区	B b			1											4	
1区	V															
1区	V b									1						
2区	H a						1									
2区	V c							1								
6区	V d							1								
3トレゾナ	T														1	
11トレゾナ	T					1										
13トレゾナ	T	1														
14トレゾナ	II a														4	
16トレゾナ	II a														1	
合 计		4	2	2	7	1	1	1	1	3	2	3	4	1	2	35
														17	1	

第5表 出土遺物集計（土器類を除く）

(8) 鉄製品

刀子3点、釘4点、鍋1点、不明2点が出土しており、これらは中世のものとみられる。また1区のうち10基の土坑とT区Ⅱa・Ⅱb層、3TのI層から鉄滓が少量出土している。これらは後に流入したものとみられ、古代のものである可能性もある。

(9) 銅製品

銅鏡が17点出土した。銭貨名のわかるものは11点で、これらはいづれも北宋銭である。出土数の多いところはSK48が3点、SK44が2点、14TのⅡa層が4点であるが、14T出土のものは4枚が貼りついた形で出土している。

(10) 木製品

S K91堆積土中より漆器碗が出土した。木質部は腐食し無く、漆の被膜部分のみの残存で、内面の赤色漆と外側の黒色漆が密着した状態での出土であったことから、時期等については不明であるが、土坑の堆積土中のものであることから、中世の遺物とみられる。

(注1) 勝利戸市埋蔵文化財センター設立5周年記念シンポジウム『古窯戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通～』により提示された御年による

第2節 遺構の検討

1. 壱穴住居跡・壹穴建物跡

壹穴住居跡（S I 2）

I区、Vb層上面で平安時代で10世紀初め頃の壹穴住居跡を1軒検出した。規模等は前述の通りであるが、東壁にカマドや煙道が付設され、土坑、ピットが各1基みられた以外は床面上に明確な柱穴、周溝はなく、貼床も確認されなかった。カマドは袖部分に円窓を合計7つ立て並べ芯材とし、この上を粘土により被覆したものとみられる。周辺の遺跡で同期の住居跡の幾つかにおいても、河原石を袖内に埋め込んだものがあるが、特に大型の窓を数個並べたものは名取川を挟んだ北岸の船渡前遺跡や赤石地区の相ノ原遺跡などにみられる。

検出面であるVb層は洪水堆積層で、住居内にも同様の層が10世紀前半に下降したとされる灰白色火山灰を層状に挟んだ状態でみられた。住居の立地としては北側に広がる微高地の低地部にあたり、この場所は洪水の際にはよく水を被る状況にあったとみられる。また住居が自然堆積による砂質層により覆われているにもかかわらず、検出面であるVb層での残存が極めて悪いのは、後の洪水等による作用の可能性も考えられる。

今回検出された壹穴住居跡は1軒のみで、I区以外でやや微高地となっている2・3区や多くのトレンチにおいても検出されていない。加えて住居跡以外の遺構で同期と断定できるものは皆無に等しい。昭和57年の当地区の区画整理工事の際に本調査区北側の微高地上で平安時代とみられる数軒の住居跡が発見されていることから、集落の中心はこの微高地上で、S I 2はその南端部に位置するものと考えられる。このことからもこの住居が何故に低位部側につくられたのかは不明である。

壹穴建物跡（S I 1）

S I 1は削平が著しく、存在していたであろう掘り方はおろか、床面も旧状をとどめていないとみられ、検出は周溝と幾つかの柱穴で行われた。これは構造的にみて壹穴住居跡とは異なり、中世の壹穴建物跡と考えられる。

柱穴は四隅と東西壁の中程にあり、全て壁面に接している。検出段階での周溝との新旧関係は不明瞭であった。これは柱穴埋土と周溝埋土が同時に埋められている可能性も考えられ、周溝が柱穴に分断される状況からみて、この周溝は壁面を板状の材などにより押さえるためのものとみられる。

仙台市内で同様の構造をもった壹穴建物跡は養種園遺跡、宮沢遺跡、王ノ壇遺跡などで発見されている。養種園遺跡S I 01は一部のみの検出であったが、柱穴が西辺側4個がみられ、端部のものは深く、中間部が浅くなっている。側壁は裏込め土とみられるものがあり、貼床がみられた。遺構の性格としては鍛冶工房跡とみられるSB01と

同時存在し、16世紀のものと考えられている。富沢遺跡第66次調査では貼床のある浅い堅穴を伴う掘立柱建物跡(SB2)が発見され、一部に周溝状のものがみられた。年代は16世紀とみられるが、性格は不明である。王ノ塙遺跡では4棟確認され、このうち2棟が規模的にも本遺跡のものに類似している。これらに周溝はみられないが、壁面に接するように配置された柱によって側板などをおさえていたものと考えられる。またここでは張出し部があるやや大きめの建物跡床面に鍛冶にかかるとみられる焼け面がみられ、他の建物跡も何らかの工房的性格を有していたものと考えられており、12~13世紀の年代が与えられている。

これらの検出例からみてSI1はこの調査で発見された中世の屋敷跡を構成するもの一つと考えられ、ⅢA期とみられるSA2の柱穴に切られることから、SA2と関連するSB9より古いとみられるが、これについてはⅢA期内での変遷と考えられる。SI1の用途を連想させる遺物の出土はなかったが、隣接する掘立柱建物跡とは異なる性格を有していたものと考えられる。

2. 土坑

(1) 土坑の分類

土坑は130基が検出された。これらはほとんどが1・2区に集中してみられるものであるが、その他には4区や幾つかのトレンチにおいて散在する状況であった。これらの土坑は規模、形状、堆積土の状況から次のように分類される。(分類は全体規模のわかる土坑のみを行っている)

I類：堆積土が人為堆積か人為堆積の可能性のあるもの（この中には人為堆積か不明なものも含まれるが、ブロック土が混入することからここに含んだものもある）

A類－小型のもの

B類－中型のもの

C類－大型のもの

これらはさらに形態により次のように細分される。

1類－円形、方形など 2類－長方形、橢円形

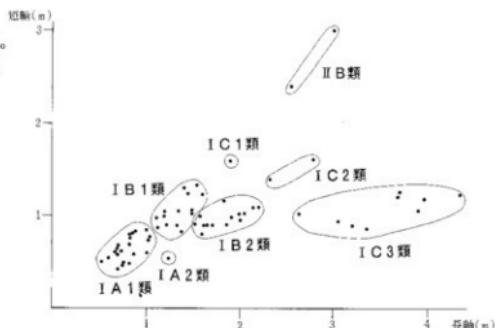
3類－短軸に対し長軸の割合の大きい長方形、橢円形

II類：堆積土が自然堆積とみられるもの

A類－小型のもの

B類－大型のもの

III類：その他



類型	長軸(cm)	短軸(cm)	長軸/短軸	土坑
I A 1	53~103	43~85	1.00~1.66	23・24・25・26・27・28・31・34・35・44・47・68・78・84・101・104・114・130
I A 2	123	55	2.15	14
I B 1	111~166	83~134	1.07~1.65	32・42・54・57・70・79・82・90・94・99・120・125・126
I B 2	150~220	81~117	1.56~2.10	13・15・39・40・41・45・71・74・81・83・89・91・93・95
I C 1	190	160	1.21	48
I C 2	232~279	140~161	1.65~1.73	46・62・85
I C 3	263~435	86~126	2.55~3.90	16・19・22・37・63・64・65・86・100
II A	68~127	61~175	1.02	18・20・21・43・98・109・119・127・128
II B	255~300	240~300	1.00~1.06	39・105
III				102・103・123

第46図、第6表 土坑の規模(1、2、4区計測可能なもの)

I類

計測が可能な土坑以外のものも加えると、検出した土坑の多くはI類に属する。

A類—小型のものであることから、検出したもの以外にも他の土坑により失われているものもあるとみられる。規模はほとんどが1m以内で、形状は円形、橢円形を主体とする。壁面は直立することなく、底面は舟底状のものが多い。1区では密集せず、特に南東部では中・大型の土坑ではなく、1類が6基程度みられる状況である。主な重複はSK47がC2類のSK46を切り、SK114がSK46に切られている。2区ではA類は少なく、南部に幾つかみられるにすぎない。

B類—全体形がわかるもの以外にも、調査区際に一部のみが検出されたものも多く含まれる可能性がある。B1類は正方形を基調としている全て隅丸のものである。B2類は隅丸の長方形基調で、橢円形のものはない。いづれもほとんどが壁面がほぼ直立し、底面は平坦である。特にB2類は底面と壁面の境が明瞭で、角張ったコーナー部をみせる。またいくつかのものは壁面がオーバーハングしている。IB類についてはその形状に強い規格性がみられ、特にB2類は長軸／短軸比率が1.5～2.0の長方形でまとまっている。分布は1区ではいづれとも北端部と南東部を除く地区に近接、重複してみられ、特に溝跡に埋されているものも考えると、本来はより多く存在していたものとみられる。2区ではB2類が中央部にいくつまとまる以外は散在している。他の土坑との重複はSK32・54・99のB1類がそれぞれ形態的に特徴のあるC3類を切っている。B2類はSK39・91がC3類に切られる。またSK40が自然堆積層と人為堆積層により構成される大型のIII類土坑を切っているのが注目される。

C類—1区南部と2区全体にみられるが、A・B類に比べ検出数は少ない。SK46・62・85はC2類で、かなり隅丸の形状を呈するが、壁面は直線的で、長方形を基調としている。SK46はC1類のSK48に切られている。C3類はB2類と共に形状の規格性が強いもので、長軸は長いもので4mを越えるのに対し、短軸は狭い隅丸の長方形である。分布は1区では南部に3基、2区では全体に7基ほどがみられ、長軸方向は東西或いは南北方向を向いている。C3類間での重複はなく、SK33は大型のSK107やIII期の井戸とみられるSK105を切っている。

II類

この中にはIIa層より下層で検出したものも含まれている。

A類—形状、規模とも様々で、その用途も特定できない土坑である。

B類—SK30・105は他の土坑に比べて大型で、深さや形状からみて井戸の可能性が考えられる。SK105はIIa層面検出の遺構で最も古く、IB2類のSK40やIC3類のSK33に切られている。SK30・105は井戸としての機能が果たせなくなった後に埋められ、後にこの地区に多数の土坑が作られている。

III類

III類としたものはSK102・103・123の3基がある。SK102は2区でほとんどの土坑より新しいSD14を切る焼土土坑で、1基のみの検出であり、遺物もないことから何を焼成したのかは不明である。SK123は堆積土中に焼土や小廐滓、鍛造剥片が多数みられることから、鍛冶に関わる遺構とみられる。また検出面は異なるが、近接してにかしらの炉跡の可能性のあるSK103がみられるが、性格は不明である。

(2) 土坑墓について

[土坑墓の特徴]

調査で検出された130基の土坑のうち、そのほとんどが1・2区に密集している。1区ではV～III層面で確認された土坑を除いたものは、IIa層あるいはその堆積範囲の及ばないV層上面でのもので、2区では上層が削平されていることもあり、V層上面での検出である。土坑の多くは明瞭な人為堆積層かその可能性のあるもので、これら

の土坑は以下のような共通した特徴がみられる。

1. 堆積土中に地山層（V層）を主としたブロックが多量混入している。
2. 堆積土下部（土坑底面）に自然堆積層がほとんどみられず、土坑を掘った直後に埋め戻している。
3. 土坑の平面形の多くは方形を基調としており、中でも長方形のものが主体を占める。
4. 壁面が直立し、底面が平坦で、後世の削平を考慮すると本来深いものが多い。

このような特徴以外にもいくつかの土坑では底面に土を入れ、平坦にしているものがある他、SK110では底面に籠状の敷き物の痕跡が確認されている。

以上のような特徴がみられる土坑は墓とみられ、土葬の埋葬形態をとった土坑墓と考えられる。墓坑内からの骨片などの出土はみられず、堆積土層と周辺土壤のリン酸分析の結果からもこれらを墓と裏付けることはできなかつたが、この地区的土質からみて骨などが残存する環境になかったものとみられる。また以上の要件を満たす土坑の全てが土坑墓と断定することはできない。これらの中にはⅢA、ⅢC、Ⅳ期の屋敷跡に伴い、屋敷の変遷により埋め戻された土坑の存在も十分考えられる。そして土坑の形状や規模等から考えるならば、I類の中でも土坑墓の可能性の強いのはSK40、41、71、74、91などに代表される中型のB類とSK46に代表される大型のC類の一部と考えられる。またこれらの中でも全体形がわかるもの以外に、一部のみの検出の土坑が数多くあることから、土坑墓と認定し得る基準はあくまでも主観的判断の域を出ない。

短軸長に比べ長軸長が極めて長いのが特徴であるC3類土坑は1区で3基、2区で7基ほどが検出されている。このような土坑は福島県の早稲田古墳群や近年数多くの墓坑が発見された栃木県の田間東道北遺跡や横倉宮ノ内遺跡などでも多くみられ、墓の一形態とされている。本遺跡のC3類についても上記のような特徴が認められることから墓の可能性がある。またこの土坑はSK16と64で一方の長軸側端部に1段のみであるが階段状の段がみられるが、削半状況からみて、段数はこれより多かった可能性もある。土坑墓との切り合いは、1区SK16はB2類のSK38・39・91を切っている以外、土坑墓の可能性の強い土坑との切り合いはみられない。このことから長方形・橢円形のB2類はC3類に先行するものである可能性もあり得るが、これが墓域全体の傾向性を示すかは不明である。

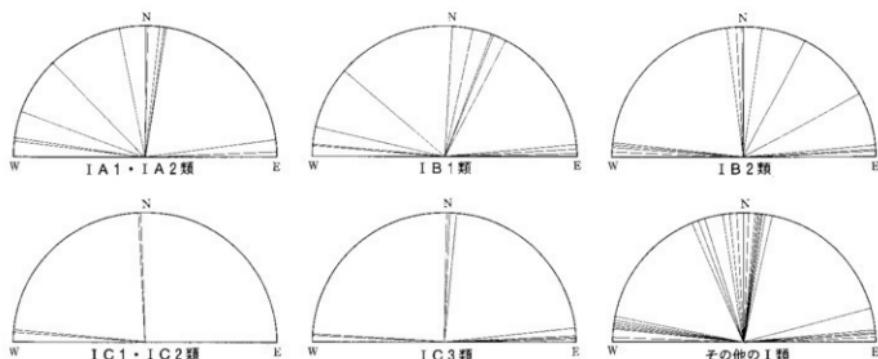
〔出土遺物〕

いくつかの土坑からは中世陶磁器の小破片が出土しているが、これらは底面近くからのものではなく、土坑墓群が中世前半の屋敷を構成する遺構群を廻して造られていることを考慮すると、土坑墓内に副葬されたものかは疑わしい。但し陶磁器類以外では1区SK46、91より刀子、SK71より釘が出土し、SK40、41、44、48、71、72、90からは渡来銭である北宋銭が出土しており、特に銭については全出土数に対する土坑墓内出土割合が極めて高いことからみて副葬品である可能性は高いといえる。北宋銭のうち出土数が多いのは「皇宋通寶」が4枚で、「元豐通寶」と「嘉祐通寶」が2枚のほかは1枚づつの出土である。県内で発見された一括出土の渡来銭の内訳をみると、「皇宋通寶」と「元豐通寶」についてはほとんどの出土地で多くの枚数が認められており、これは全国的傾向と一致するものといえる。

〔方向性〕

土坑の長軸方向でみた方向性はI類のほとんどのものが、東西あるいは南北方向を向いており、それから外れるものは少ない。IB類では東西と南北方向のものはほぼ同じ割合であるが、SK45・95は北東を向いている。また大型で橢円形のC2類は2基が東西、1基が南北方向で、C3類は6基が東西、5基が南北方向と、同等の割合でみられる。SK45・95をはじめ、SK69・110などの方向性の傾くものは全て土坑墓の密集する1区にあり、散在する2区ではみられない。このことから土坑墓を造るにあたっての方向決めは本来、東西あるいは南北を基準とし、当初造られるものはこれによるものとみられるが、これに続くものについては先行するものとの位置的関係からこの限りではなかったと考えられる。墓坑の方向性については隣接する館や道と密接な関係をもつ例があることも指

摘されているが、本遺跡の場合は先行する屋敷との間にこのような関係を認めることはできなかった。



第47図 土坑（I類）の主軸方向

[立地と分布]

土坑墓は1区に最も集中しており、これに比べ2区ではやや密度は薄いことから、墓域の中心はこの1区を中心とする地域であったものと考えられる。他には2・3・7Tや4区において土坑が検出され、このうち3Tの土坑は全てが人為堆積であることから墓である可能性が強い。これらの立地は1区北半部が最も高い微高地に位置するのに対し、それ以外はやや低く、中には旧河道上に立地するものもあるなど、墓を造るにあたっては特に微地形にとらわれなかつたものとみられる。土坑墓をまとまりとしてみた場合、1区では北半部と南西部においてまとまる箇所がみられるが、2区ではそのような状況は認められない。このような1区の状況はこの墓域の中でも家族や血縁によって結ばれた人々により構成された墓群である可能性がある。また墓域全体をみて、土坑墓の規模や形態の違いによる分布に違いは認められず、形態的に特徴のある細長いC3類と長方形のB2類との位置関係に規則性を認めることはできなかった。

1区南東部には土坑墓が全くみられない。ここには小型で円形の土坑が数基存在する以外は、ⅢA期の掘立柱建物跡と古瀬戸瓶を納めた小穴があり、墓が造られ始めた頃にはこれらの遺構はすでに目に見ることはできない状況にあったとみられるが、墓域の中心近くにあるこの空白域は、前代の情景が何らかの形で造墓作業を行った人々の意識の中に残された結果生じた故のことと理解することもできる。

[時期]

土坑墓の時期を決め得る陶磁器類の出土は皆無といって良い状況である。但し出土した銭貨は全て北宋銭であり、「永樂通寶」など一般に15世紀に多く流通する明銭の出土はみられなかった。土坑墓群が造られる前のⅢA期屋敷跡の下限が14世紀中頃で、この地が墓域としての機能を失った後に造られたⅢC期屋敷跡が15世紀を中心とする時期に求められることから、土坑墓は14世紀後半から15世紀前半にかけて営まれ続けたものと考えられる。

[土坑墓の性格]

被葬者を考えるにあたっては、墓の構造に加え、副葬されるものから判断するのが一般的であるが、前述の通り、検出された土坑墓からの陶磁器類の出土は基本的に皆無といって良く、数基において北宋銭の副葬が認められたにすぎず、墓の副葬品としてはかなり貧弱な感じを受ける。埋葬形態をみると幾つかの土坑底面に錐状のものを敷いたり、底面に土を入れ直し平坦にする作業を行ったものもみられるが、基本的には素掘りの土坑内に遺体をそのまま

ま埋葬していたとみられ、今回発見されたものの中には西隣の松木遺跡や名取川を挟んだ北岸の王ノ壇遺跡にみられる火葬墓や同じ土坑墓でも中に棺を納めたものが1基もみられない。したがって本遺跡のような土坑内直葬で、副葬品が少ない状況を考えるなら、この被葬者は階層の低い一般庶民で、墓地は村落内における地区単位の共同墓地的性格のものであったろうと考えられる。

次に先行する中世前半段階の屋敷跡（ⅢA期）との関わりをみると、前述の通り、土坑墓の一部において屋敷を構成した遺構があった地区を故意に避けて造っている可能性があることを考えると、墓全体の適地においては屋敷の廃絶後に、この地を十分に意識した上で行われた可能性が強いといえる。このことは聖なるものと結縁するという人々の意識を反映しているともいえ、その地がある意味での聖地である必要性があったとの考え方もできる。事実、このような土坑墓群が成立する以前には城館や寺院、武士や寺院の墓地が営まれていた例が数多くみられるとしている。仙台市内をみても南小泉遺跡では溝跡に区画された14世紀前半の屋敷が廃絶した後に墓地が造られ、その後、16世紀前半にその屋敷を再び改修し利用した後に再度、地下式坑を伴う墓地が成立したという変遷が考えられている。これも上記のような屋敷と墓地の関係を示す例かもしれない。

古代にあっては庶民の葬送は野山や河原に遺棄する方法が一般的であったが、中世になると造墓層が拡大し、定まった地区に集団的に墓地を営むようになったとされている。東国においてこれが一般化するのは14世紀に入ってからのこととされ、関東ではこの時期の大規模な集団墓地が数多く発見されている。宮城県内で中世のものとされる土坑墓の検出は少なからず認められるが、これがまとまって共同墓地の形態をみせる調査例はほとんど無い。このことから、14世紀後半から15世紀前半を中心とした本遺跡の例は珍しく、それがかつ、この地域の有力者層の屋敷跡との関わりをもって検出されたことで、当時の一般庶民とその上に立つ階層との関係をうかがい知ることができるとして貴重な例といえる。

3. 陶器埋設遺構

I区IIa層上面で検出したP34は、直径が30cmほどの小穴の中に古瀬戸の瓶子が埋設された遺構である。中世において陶器は経塚や墳墓において絆や火葬骨を入れる容器として使用される例が多く、中でも常滑や渥美産の三筋壺などは全国から出土し、宗教用具としての性格が強いとされている。福島県桑折町大桙遺跡では古瀬戸瓶子が藏骨器として使用され、13~14世紀の伊達氏に関わりのある墓とみられている。また本遺跡の西約2.5kmに位置する大門山地区は熊野信仰に関わる中世の墓所、供養所として知られ、近年、石組集石墓群や常滑産の甕を石組で囲んだ埋絆施設が発見されている。このような状況の中、遺構の周囲には多くの土坑墓が発見されたことから、当初、埋設された瓶子は墓地の一角にあった土坑墓とは異なる墓に納められた藏骨器などの可能性が考えられた。

しかしながら、取り上げた瓶子の内部に骨片などはみられず、藏骨器に使用される壺類は口縁部が打ち欠かれる例が多いとされるが、出土瓶子についてはそのような事は無かった。また瓶子自体の年代は13世紀後半とみられ、伝世品が埋設された可能性も否定できないが、土坑墓により構成された墓地の年代はこれより下るものである。遺構の周辺をみると、この遺構より東側に位置するものは少なく、時期、性格とも不明な小型の円型土坑が数基や、埋設遺構と重複してSB4と5、それに幾つかのピットがあるにすぎず、この地区に土坑墓はみられない。SB4と5はⅢA期の屋敷跡を構成していた遺構で、鎌倉時代のものと考えられる。出土した瓶子についてもまた同様の時期のものであることから、この遺構はⅢA期の屋敷跡に関わるものとみられる。

瓶子の出土状況は、屋敷内で使われたであろう壺や甕など、日常品としての本来の用いられ方をしたものではなく、非日常的な用具として土中に納められたものとみられる。このような状況から、その性格として考えられるものの一つに土中に埋設した地鎮具など、祭祀的性格をもつものが考えられる。この遺構は単独で存在したと考えられると同時に、SB4や5の柱穴になったり、柱列線上に位置するものではないが、両建物内に位置していることから、これらの建物跡との関連性も考えられるところである。但し調査地が狭く、埋設遺構を含む遺構全体の状況

が明らかでないことから、この周辺に別の建物跡や埋設遺構に関係する別遺構が存在する可能性も否定出来ないため、その性格について断言することはできない。

当時、瀬戸産の瓶子などは在地産の陶器とは異なり、一部の富裕者層しか入手できなかつたとみられる。このようなものを墳墓や経塚以外の目的で埋設したとみられる例はあまり無く、このことは屋敷の居住者層を考える重要な要素であると同時に、当時の信仰や、信仰の用具としての役割を担つた陶磁器という観点から考える上で貴重な資料といえる。

4. 溝 跡

本調査区や多くの試掘トレンチから溝跡が検出された。この中には各調査区間で異なる溝跡名を付けたものがあるが、同一の溝跡であるものも含まれている。これらの溝跡については幅が広く、堀と呼ぶにふさわしいものもあるのに対し、小規模なものもある。以下では各溝跡間に時期の違いがみられるのはもちろんのこと、その性格においても違いがみられることから、複数の調査区にわたり確認されたまとまりのある溝跡ごとに、その時期、性格等について考えていく。

(1) 平安時代の溝跡

2区北半部で検出した東西方向のS D21は他の溝跡がほとんどの遺構より新しいのとは対照的に、S D12をはじめ、土坑や多くのビットに切られている。出土遺物はロクロ土器と須恵器のみで、これより新しいものを含まないことから、I期の平安時代の溝跡と考えられる。堆積土中にはS I 2にみられる灰白色火山灰は確認できず、住居跡との関係は不明である。

(2) 中世後半の屋敷を区画する溝跡

中世後半段階の屋敷の外側を巡るとみられる溝跡にS D11・12・14b・14cが考えられる。S D11は1区で東へ延びたものが、4A区において南側に折れ曲がる部分を僅かではあるが確認している。これが南進してどの溝跡につながるかが問題としてあったが、S D14の南側に並行して走るS D15の存在や出土遺物の検討から、S D11はS D14と同一時期のものと考えられる。但し1区でみる限りS D11は掘り直しなどの改修による溝内の時期的な変遷がみられないのに対し、S D14はa～cの3条の新旧関係をもち、各々の規模もS D11に比べ、幅が狭く浅いものである。また1・2区で確認されたS D12は規模的には小さいが、1区においては北側でS D11の南側で止まり、2区ではコーナー部をもつ区画溝と考えられる。2区東側での延びは不明であるが、1区S D11との位置的な関係からみて、この時期の屋敷内をさらに区画する溝跡である可能性が考えられる。

溝跡の出土遺物で量的に多いのは在地産の中世陶器であるが、その他には渥美や常滑の製品もいくつかみられる。しかしながら最も新しい遺物をみると、S D11では1区の下半層より15世紀の中国産白磁の可能性のあるものが1点出土しており、S D12では同様の皿や14～15世紀とみられる古瀬戸の折縁深皿が出土している。またS D14の中でも古い14cから15世紀の可能性のある古瀬戸の平碗が出土している。したがって量的には多くを占める13世紀後半から14世紀前半の在地産のものについては、この溝跡を伴つた屋敷の時期のものではなく、これより古い遺構に所在していたものが後に流入したものと考えられる。

(3) 中世後半～近世初頭の屋敷を区画する溝跡

中世後半から近世初頭段階の屋敷の外側を巡るとみられる溝跡はS D10・15・17・18が考えられ、S D16はS D15に付随する溝跡とみられる。S D10は1区でS D11の外側を東西方向に延び、これが東側では4A区において南へ折れ、4B区を経て西側へ方向を変える大溝である。S D10は2区におけるS D15に続き、さらに西進するものと考えられる。また1区西側での状況は25Tにおいて並行して南へ折れる2条の溝跡が確認され、その南側でも同様の状況が24Tで確認されている。1区では確認できなかったが、S D10は4区において大きく2時期の重複が認められることから、25・24Tの溝跡についてはS D10の西辺部分であるものと考えられる。全体を通して、S D10と11

の直接的な重複関係はみられないが、両者の位置的関係から、この2つの溝跡は同時期のものとは考え難く、出土遺物や1区S D11の堆積土上半層にはブロック土混じりの人が堆積土がみられることから、S D10はS D11が完全に埋まり切る前に掘られたものである可能性がある。さらに17Tで南へ向かう溝跡が23Tで方向を東へ変え、19Tを経て18Tへ至ることが確認されている。このように溝跡が他の溝跡に接続することなく折れ曲がる状況は、後述する水利関係の溝跡とは異なり、これらもまたこの時期の屋敷のさらに南側を区画する南辺の堀跡の可能性が強い。しかし今回の調査では17Tの溝跡の北側でのS D15や24T検出のS D10との関係や、18Tより東側での状況を把握することはできなかった。S D16はS D15と同様の堆積土で、S D15に取り付く形をとり、S D14の手前で止まっている。また2区西側の29Tでは東西方向の新しい溝跡に切られる形で北側へ延びる溝跡が確認されている。これらの状況からS D14 aについてはこの時期のもので、S D16はS D15と14 aの間の通路状の部分を仕切るものと考えることも可能であるが、3時期の変遷をもつS D14の東への延びが不明なことから、断定はできない。

S D10の出土遺物で最も多いのはS D11同様に在地産の陶器で、中国産の青磁もいくつかみられるが、これもまた溝跡の時期を示しているものではない。堆積土の上半部には16世紀中頃の瀬戸・美濃産の小型丸皿や、16世紀末～17世紀初めの志野の菊皿、さらに4 A区で18世紀以降の大堀相馬の小杯と筒形碗が出土している。またS D15からは瀬戸・美濃産の天目茶碗がみられ、これは16世紀後半のものである。

文政年間につくられた『名取郡北方柳生村繪図』では1区から4 A区にかけてとみられる地区において、畠地の中に東西方向の細長い水田区画が描かれているのがわかる。のことから、S D11は近世初頭にはほぼ埋まり、堀としての機能は失っていたが、江戸後期にはその僅かに残った畠地を利用して水田が営まれていたことがわかり、S D10出土の16世紀以降の遺物についてはこのような状況の元で混入したものと考えられる。

(4) 水利に関わるとみられる溝跡

調査区西辺には南北方向のS D1・2・5・6があり、これらは南辺で東西方向に走るS D4に取り付いている。S D4は2時期の重複をもち、S D3と共に東側の5 TでS D7～9につながるとみられる。出土遺物はS D4 aでは16世紀以降とみられる瓦質土器や、16世紀前半とみられる瀬戸・美濃産の小皿がある。またS D7では志野の丸皿がみられ、これらより下るものはみられない。前述の柳生村繪図には南北方向の溝跡は描かれてないが、東西方向のものについては南側の「雷囲」と本遺跡の所在する「臺囲」との字界の堀としての記載がある。以上のことから、これら一連の溝跡については掘られた時期は明らかでないが、S D4にみられるように改修を行なながら西辺の南北方向のものは19世紀初めまでには埋まり、南辺の東西方向のものは幾度の変遷をみせながらも現在調査区南辺に位置する整理された水路になったことがわかる。

5. 据立柱建物跡・柱列跡

(1) 1区

1区の据立柱建物跡はS B1～5で、これらはいづれもⅢ C期のS D11に切られる形で北側と南側に分かれて位置している。各柱穴からの遺物は全く無い。S B1と3は桁行3間、S B2は4間で、柱穴の重複は無く、方向も多少異なるが、互いが重複し、敵高地から南側低地の整地作業が行われた地区へ展開している点で一致しており、同時期内での建替えと考えられる。またS B4は南側に扉が取り付く点がS B5とは異なるが、両者はやはり同位置を保っていることから、これらもまたいづれかが建て直されているものとみられる。

他の遺構との重複はS B1がSK68・70に、S B3がSK70に切られており、これらの土坑はⅢ B期に属するとみられる事から、S B1～3はⅢ A期のものと考えられる。またS B5はSK107を切っている。SK107はいづれもⅢ A期の井戸とみられるSK105を切り、SK30に切られる人為堆積の土坑であるが、S B4・5とS D11の関係をみた場合、両建物跡ともⅢ A期の中での変遷と考えられる。1区においてはⅢ A期の遺構はⅢ B期の土坑群をはじめ、Ⅲ C・Ⅳ期の溝跡群により多く壊されていることから、遺構の構成を把握することは難しいといえる。

(2) 2区

2区の掘立柱建物跡はSB 6～10、柱列跡はSA 1～5である。この中でⅢB期とみられる土坑との重複をみると、SB 6がSK55・56に、SB 8と9がSK63に切られ、SA 1と2もSK63に切られる。SB 6はSD12と重複しており、SB 8・9は切られることから、これらの遺構はⅢA期のものと考えられる。またSA 1・2はSB 8・9の西側に位置し、建物に付随する可能性があり、SA 2についてはSB 9の西側廂の可能性もある。SA 2の南端の柱穴は中世の竪穴建物跡とみられるSI 1の柱穴と周溝を切っており、ⅢA期内での変遷として、SA 2を伴ったSB 9や8の後にSI 1が作られたものとみられる。

6. 水田跡・畑跡

(1) 水田跡

水田土壤の可能性のあるものは、1区Ⅱb層、Ⅱc層、4区Ⅱ層があり、このうち1区ではいづれも層面上で段差、4区では擬似畦畔が検出された。

1区Ⅱb層水田跡は1区北側微高地の南の旧低地部に広がるものとみられるが、2区においては後世の天地返しにより失われているものとみられる。4区Ⅱ層水田跡はSD10堆積土の上半にみられる洪水堆積による砂質土層を耕作しており、北側の4A区には確認できない。出土遺物は1区Ⅱb層より土師器のほか、渥美産の甕が出土しているのみで、4区Ⅱ層中からの出土は無い。1区Ⅱb層も砂質土層であることから、1区Ⅱb層と4区Ⅱ層は同一時期に堆積したもので、水田跡についても同時期の可能性がある。これらの時期は1区Ⅱb層が中世前半ⅢA期の整地により埋められていることから、これより以前の中世前半段階（ⅢB期）のものと考えられる。この他、プラント・オーバル分析結果から水田土壤の可能性のあるものとして、14TⅡa層、15TⅡa層・Ⅱc層、16TⅡa'層などがある。ここでは水田遺構は検出されなかったが、区画整理前の水田耕作により畦畔等が失われたとみられる。これらの時期は15TⅡb層から18世紀以降の大堀相馬の碗、Ⅱc層から16世紀の瓦質土器とみられる鉢が出土しており、中世後半以降のものとみられる。

(2) 畑跡

3区東半部と16Tにおいて小溝状遺構群が検出されている。これらは畑を耕作する際に生じた耕作痕と考えられることから、両区Ⅱb層がかかつての耕作土であったものと考えられる。3区Ⅱa層からは12世紀後半から13世紀前半とみられる中国産青磁碗が出土しているが、下層のⅤc層より在地産の中世陶器が出土していることから、畑跡の時期は13世紀以降で、近世の遺物が無いことから、中世の畑跡と考えられる。

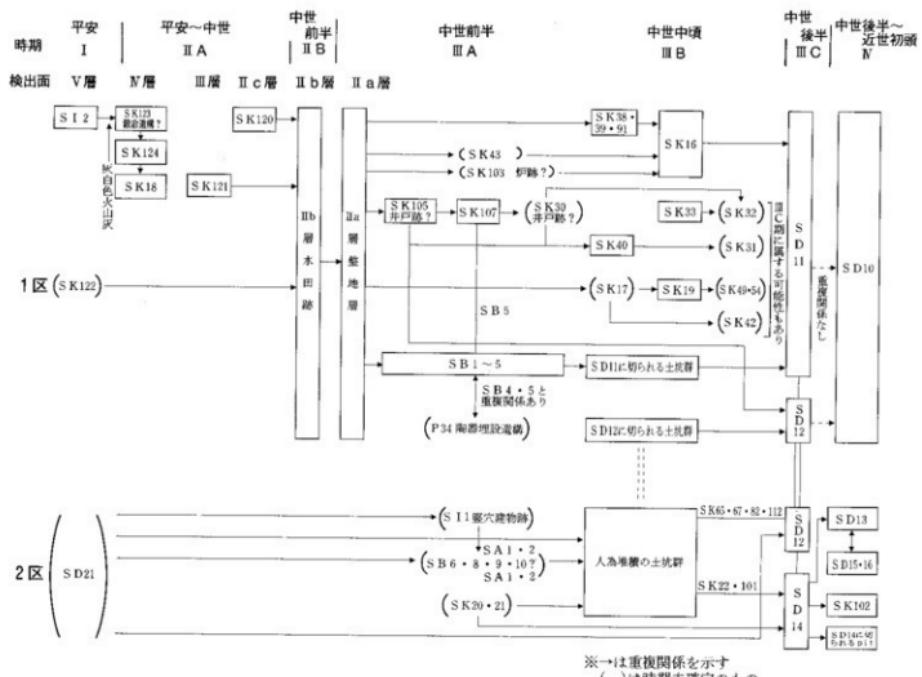
小溝状遺構群のみつかった3区、16Tはその北側で僅かに地形が低くなり、調査区北端部ほどではないが南に広がる微高地に位置し、低地部には広がらないとみられる。3区では数条の溝跡を境に西側の標高が高くなるが、西側に位置する屋敷跡や墓地跡との位置的、時期的関係は不明である。

第3節 遺構の変遷

調査で出土した遺物の中には繩文土器、弥生土器、古墳時代の土師器なども含まれている。これらの時期の遺構は今回確認できず、主に調査区北側の微高地を中心と展開しているものとみられる。ここでは遺構の確認された平安時代から近世初頭にかけての本地区の遺構の変遷を考えていくこととする。時期の区分にあたっては時代を追ってⅠ～Ⅳ期の大きな変遷があったものと理解し、その中でも遺構の種別に違いがみられたⅢ・Ⅳ期については細分している。

1. I期（平安時代）

1区はV層上面検出のSI 2竪穴住居跡とSK122、2区はSD21がこの時期のものと考えられる。SI 2は出土土器や堆積土中の灰白色火山灰からみて10世紀初め頃とみられるが、SD21との関連は不明である。過去の調



第48図 遺構変遷図（1・2区）

査例から北側に同期の集落跡が存在する可能性が高く、S I 2はその南端部に位置するものとみられる。名取川南岸の柳生・西中田地区で10世紀前半の住居跡が発見された遺跡に松木遺跡や安久東遺跡があり、本遺跡を含めた住居跡はかつての中小河川による浸食を免れた微高地に立地しており、周辺地区にはこれらの遺跡以外にも同期の居住域が点在しているものとみられる。

2. II A期 (平安時代~中世前半)

灰白色火山灰層下後に堆積したN~IIc層上面で検出された土坑がある。遺構・基本層中から中世の遺物はみられないが、3区V層より在地産の中世陶器が出土しており、この上層のN層と1区V層が同一層かが不明なことから、以上の土坑群の時期を限定することができなかった。SK123は鍛冶遺構とみられ、出土した鍛造剥片や鍛冶津からみて、鍛錬鍛冶である可能性があるが定かではない。また周囲に竪穴や建物跡は検出されておらず、他に鍛冶に関わるよう遺構は無いことから、II A期構成上での鍛冶遺構の性格は不明である。

3. II B期 水田跡 (中世前半)

1区II b層水田跡や4区II層水田跡がある。水田跡の広がりは明らかでないが、おそらくは北側微高地と14・16Tの位置する南側微高地に挟まれた地区に展開していたものと考えられる。1区II b層からは渥美産の甕が出土しており、III A期屋敷跡との関係からみて鎌倉時代前半に埋められたものと考えられる。

4. III A期 屋敷跡 (中世前半)

当該期の主な遺構は、1区ではSK105、107、30、S B 1~5、P34と、これらをつくる際の基礎作業となる

整地層があり、2区ではS I 1堅穴建物跡、S B 6・8~10、S A 1・2などがある。

1区南半部は旧河道上とみられる低地部で、SK105、107、30はそこに盛られた整地層上から掘り込まれている。SK105、30は土坑の形状、堆積土からみて井戸であった可能性があり、いづれも堆積層上半が埋め戻されている。またこれらと重複するSK107もやや大型で底面が平坦で浅いものだが、やはり人為的に埋められたものとみられる。SB1~3は南半部はSD11に廃されており、検出面はV層で、微高地から低地部の整地層上にまたがって展開している。SB1~3には3時期の変遷がある。SB4・5、P34は直接の重複はみられない。瓶子を埋設した小穴が単独で存在したと考える他に、掘立柱建物跡内に埋設したものとも考えられる。1区同様に2区においても掘立柱建物跡、柱列跡の重複に加え、その前に堅穴建物跡が存在したとみられる。

遺構群の重複関係をみると、これらは全て3時期程度の変遷があったものと考えられる。しかしながらこれらが同様の小変遷を辿ったかは不明で、特に2区においては後世の削平によってか、整地層が確認できなかったことから、1区遺構群と共に機能していたかは断定できない。

以上のことから、これらの遺構群は中世前半にあったとみられる屋敷を構成するものと考えられ、溝跡などの区画施設は検出されなかったことから、周囲に堀を巡らせたものではないと考えられる。また屋敷の範囲や中心部分の特定はできなかった。但し屋敷の立地を考えた場合、少なくとも北側微高地側が適地とみられることから、本来、屋敷の中心部分は北側にあり、遺構群はその南側を構成していた可能性もある。

調査ではⅢc・N期の屋敷に伴う溝跡から中世陶器が出土している。中でも最も多く、在地産の甕や鉢は13世紀後半から14世紀前半のもので、これらは本来、このⅢA期の屋敷跡に伴う遺物と理解される。他にも13世紀後半の古瀬戸の瓶子をはじめ、13世紀前半の在地のもの、12~13世紀前半の渥美産の壺や甕、中国産青磁などの遺物が出土しており、これらもまたこの時期に帰属する遺物であると考えられる。以上のことから、屋敷はその始まりを鎌倉時代前半に求めることが可能で、数度の変遷をしながら14世紀中頃までは存続したものと考えられる。

5. III B期 墓地跡（中世中頃）

土坑墓群を構成する土坑は人為堆積によるI類土坑の中でもB類とC類のはほとんどと考えられ、一部のA類もこれに含まれる可能性がある。

墓域の中心は1区周辺とみられるが、これより北側と西側の未調査部分、特に北側は居住域としても良好な地形であることから、屋敷跡同様に今後注目すべき地区といえる。西・南側への広がりは1区より南西へ70m離れた3Tで土坑墓の可能性のある土坑群が検出されていることから、これが墓域の端なのか、或いは別群なのかは不明である。

土坑墓という埋葬形態や副葬品が極めて少ないとみて、これらの墓に葬られた人々はこの地域に居住した一般庶民と考えられ、墓地は14世紀後半から15世紀前半を中心におこなわれたものとみられる。墓地は後にはば位置を同じくして造られたⅢC期屋敷跡によりほぼ全域が壊され、以後、これに続くN期屋敷跡が廃絶した後も、江戸後期の絵図中に墓を確認することができないことから、この地が再び墓地となることは無かったとみられる。

6. III C期 屋敷跡（中世後半）

当該期の主な遺構はSD11・12・14があげられる。但しSD14については3時期の重複があり、このうち古い14b・14cについてはⅢC期、14aについてはN期の遺構としてSD10につながる可能性のあることは前述の通りである。1区でのSD11・12はこれと重複する全ての土坑、ピットを切るものであり、これより新しいものは認められない。ⅢC期の屋敷跡の存続時期は溝跡出土の遺物から16世紀までは下らないとみられる。

屋敷は北辺をSD11、南辺をSD14により区画されているものとみられるが、西辺は不明瞭である。これらの溝跡からみた屋敷の規模は南北約45mで、東西は29T検出の南北方向の溝跡が関係するものであれば40mほどのものとなる。この中にはSD12によりさらに区画されており、その配置状況から屋敷の中心はSD11と12に囲まれた北東

部にあるものと考えられる。

溝跡以外でこの屋敷跡を構成する遺構の可能性のあるものは、1区南半部にあり重複する土坑群の中でも新しく、形態、堆積土からみてⅢB期の土坑墓とは異なる数基にすぎない。しかしこれらもまた、Ⅳ期遺構との区別が困難で、残念ながら時期を限定することができないものである。

7. Ⅳ期 屋敷跡（中世後半～近世初頭）

当該期の主な遺構はSD10・15・16とSD14の新しい時期のものがあげられる他、SD17・18がある。これらにより区画された屋敷跡の年代は、始まりがⅢc期の廃絶と同時に間もない頃とみられ、16世紀代を中心として、17世紀初めまで続いたとみられる。

屋敷は北辺、東辺、西辺の北半をSD10、西辺の南半をSD17により区画され、南辺はSD17より続くSD18が巡っている。これらにより区画された屋敷の範囲は南北約80m、東西は北半の幅の広いところで約60mとなり、南端部はやや狭くなるものとみられる。またこの中がSD14a、15により南北に二分される形となり、北辺よりSD15までは約55mであることから、北半部の区画はほぼ半町四方の方形を呈するものとなっている。

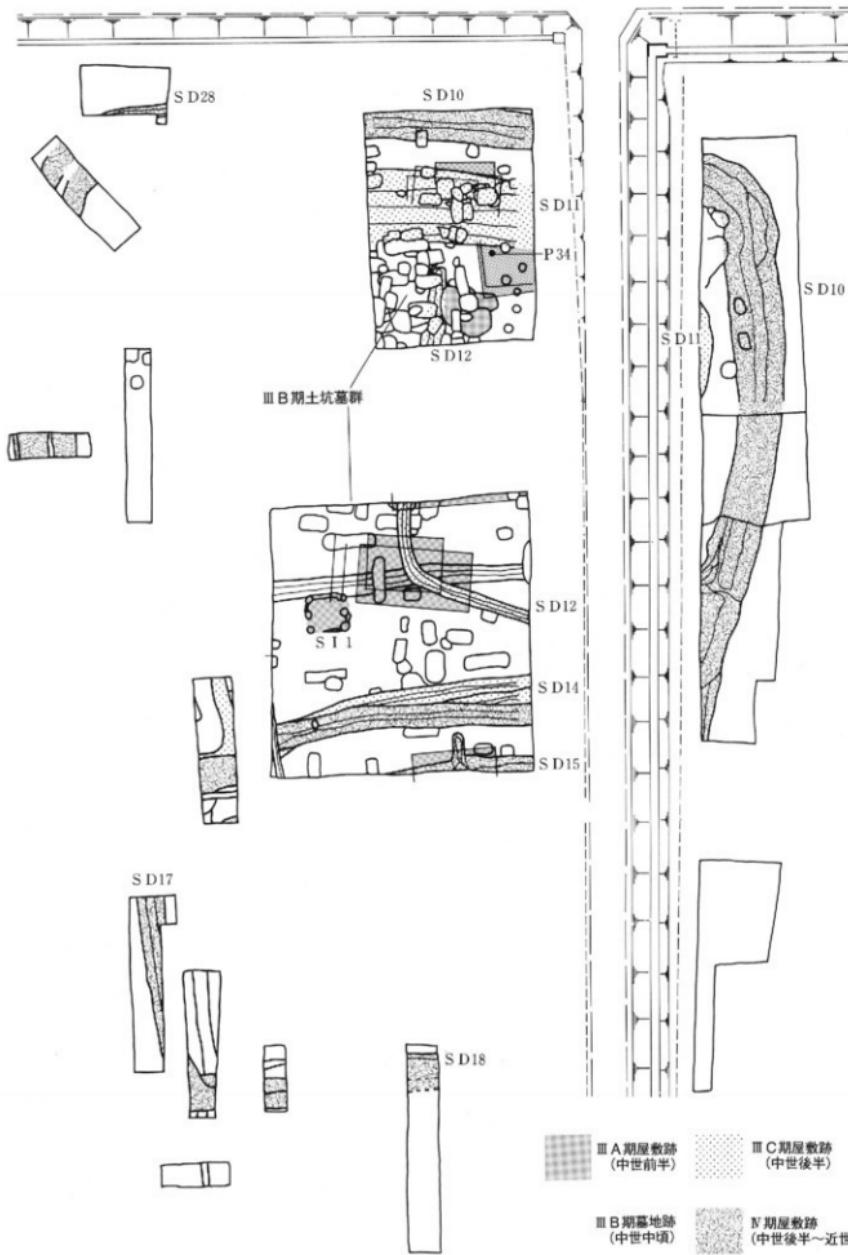
溝跡以外でこの屋敷跡を構成する遺構はⅢC期同様の理由で判別が難しく、前述の土坑をはじめ、SB10やSD14と並行するSA5などもあげられるが、明確な判断材料を持たない。

屋敷の立地はSD10による北辺がⅢC期のSD11のさらに外側の微高地上に位置しており、東および西辺の北半部では東へ向かって低くなる旧地形の変換点に沿った配置がみられる。またSD14・15は東から延びる旧河道がこの地区で狭くなる帶状の地区にあたり、この屋敷は地形を利用した選地がなされていることがうかがえる。但しこの屋敷跡についてもⅢC期同様に、旧河道を挟んだ立地は適切とはいひ難く、あくまでも溝跡の配置からみると、Ⅳ期の屋敷跡はⅢC期の屋敷跡の存在を意識した上で造られた拡張的性格のものである可能性が強いといえる。

墓地の被葬者については前述の通りであるが、各期の屋敷跡の居住者を考えた場合、これを示す直接的資料の出土や文献はみられない。ⅢA期屋敷跡は掘立柱建物跡、井戸跡、堅穴建物跡などで構成され、出土には在地産の陶器の量の多さが目立つが、地鎮具とされたとみられる古瀬戸瓶の存在や中国磁器が一定割合みられる。またⅢC期、Ⅳ期の屋敷跡は周囲に大きな堀を巡らし、遺物量は多くはないが、中には茶器である瀬戸・美濃産の天目茶碗なども出土していることを考えると、これらの屋敷の居住者は、いづれも一般庶民層とは異なった有力者層であったと考えられる。

以上みてきたような中世段階での、ⅡB期水田跡→ⅢA期屋敷跡→ⅢB期墓地跡→ⅢC期屋敷跡→Ⅳ期屋敷跡という変遷は、中世前半段階と後半段階の屋敷の構造や、社会の底辺を構成したであろう人々の土坑墓による共同墓地での葬送の在り方をうかがい知ることのみならず、これら全ての生活基盤である中世村落の在り方を考える上で、極めて貴重な資料といえる。

柳生・中田地区は市内では岩切地区と並び、数多くの板碑が存在し、特に柳生地区は名取の熊野三山に近いことから、その影響下にあったとみられ、遺跡西側には多くの板碑が残っている。仙台市域の板碑の造立は13世紀後半から14世紀の中頃までの間に集中している。これは本遺跡のⅢA期屋敷跡や松木遺跡Ⅱ期と時期を同じくしており、板碑の造立が下火となった頃、当地区では土坑墓による共同墓地が営まれ始めたと考えられる。このような現象については、当時の人々の信仰面に加え、より広域的な当時の社会背景を考慮した上で検討が必要とされるところである。



第49図 時期別遺構配置図

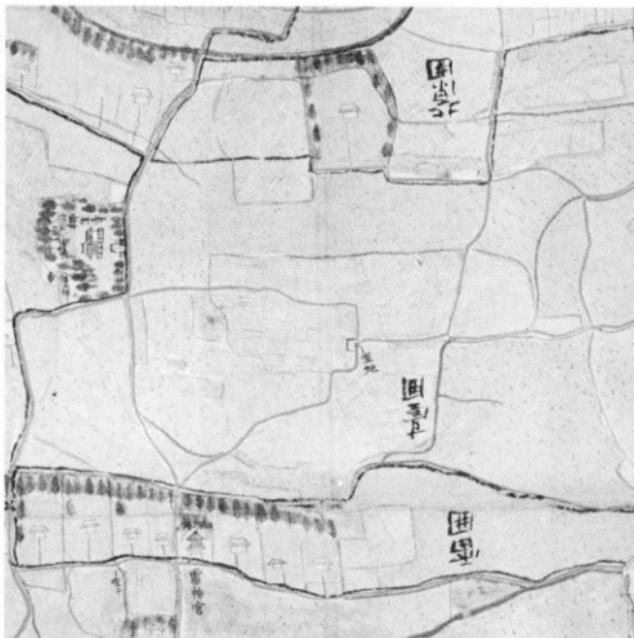
参考・引用文献

- 藤沼 邦彦：1977 「宮城県出土の中世陶器について」『東北歴史資料館研究紀要3』
- 加藤・阿部：1980 「觀音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書N』宮城県文化財調査報告書第72集
- 白鳥 良一：1980 「多賀城跡出土土器の変遷」『宮城県多賀城跡調査研究所研究紀要Ⅵ』
- 大河・安田ほか：1982 「早稻田古墳群」『母畠地区遺跡発掘調査報告Ⅹ』福島県文化財調査報告書第107集
- 渡部 弘美：1983 「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第55集
- 高橋 勝也：1983 「柳生台遺跡」『年報4』仙台市文化財調査報告書第57集
- 東北歴史資料館：1983 『東北の中世陶器』
- 佐藤 甲二：1985 『中田畑中遺跡－第2次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第78集
- 工藤 哲司ほか：1986 「松木遺跡」『御生』仙台市文化財調査報告書第95集
- 木下 密運：1986 「中世の墳墓」『日本歴史考古学を学ぶ（中）』有斐閣
- 渡部 弘美：1987 「元袋Ⅲ遺跡」仙台市文化財調査報告書第103集
- 寺島・飯村：1987 「八郎窯跡群」梁川町文化財調査報告書12集
- 恵美 昌之ほか：1988 「大門山遺跡発掘調査報告書」名取市文化財調査報告書第22集
- 佐藤 洋：1990 「南小泉遺跡－第16～18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集
- 荒井 格：1991 「鳴ノ果遺跡－第6次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第148集
- 中富 洋：1991 「山口遺跡－第9・10次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第151集
- 佐藤 洋：1991 「富沢遺跡第66次」『富沢・泉崎浦・山口遺跡（3）』仙台市文化財調査報告書第152集
- 藤沼・神宮寺：1992 「宮城県における一括出土の渡来銭」『東北歴史資料館研究紀要18』
- 木皿・平川：1992 「新谷地北遺跡」『下草古跡紹介』宮城県文化財調査報告書第146集
- 佐藤 甲二：1993 「下ノ内浦遺跡－第4次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第173集
- 恵美 昌之：1993 「名取熊野三山遺跡群」名取市文化財調査報告書32集
- 佐々木・藤田・大野：1993 「根城」八戸市埋蔵文化財調査報告書第54集
- 太田 昭夫：1994 「中田南遺跡」仙台市文化財調査報告書第182集
- 齊藤 弘ほか：1994 「田間東道北遺跡」板木県埋蔵文化財調査報告第149集
- 村田 晃一：1994 「土器からみた官衙の終末」『第3回東日本埋蔵文化財研究会資料』
- 齊藤 弘：1994 「中世墓地景観の一例事」『板木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要2』
- 渡部・吉岡ほか：1995 「伊古田遺跡」『仙台市高速鉄道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』仙台市文化財調査報告書第193集
- 竹田・渡部：1995 「四郎丸館跡」仙台市文化財調査報告書第200集
- 佐藤 貴志：1995 「安藤前遺跡」三本木町文化財調査報告書第6集
- 齊藤 弘ほか：1995 「横倉宮ノ内遺跡」板木県埋蔵文化財調査報告第161集
- 笠生 衛：1995 「東国における中世墓地の諸相」『千葉県文化財センター研究紀要16』
- 齊藤 弘：1996 「中世後期の墓地」『板木県考古学会誌第18集』
- 兵器埋蔵鉄調査会：1996 「日本出土銭總覽 1996年版」
- 佐藤 洋：1997 「義種園遺跡」仙台市文化財調査報告書第214集
- 佐藤 淳：1997 「相ノ原遺跡」『相ノ原・大貝中・川添東遺跡』仙台市文化財調査報告書第217集
- 平間 亮輔：1997 「四郎丸館跡－第2次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第218集
- 仙台市埋蔵文化財センター：1997 『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要5』
- 津野 仁ほか：1997 『金山遺跡V』板木県埋蔵文化財調査報告第187集
- 工藤信一郎ほか：1998 「南小泉遺跡－第30・31次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第226集
- 仙台市史編さん委員会：1998 『仙台市史 特別編5 板碑』

写 真 図 版

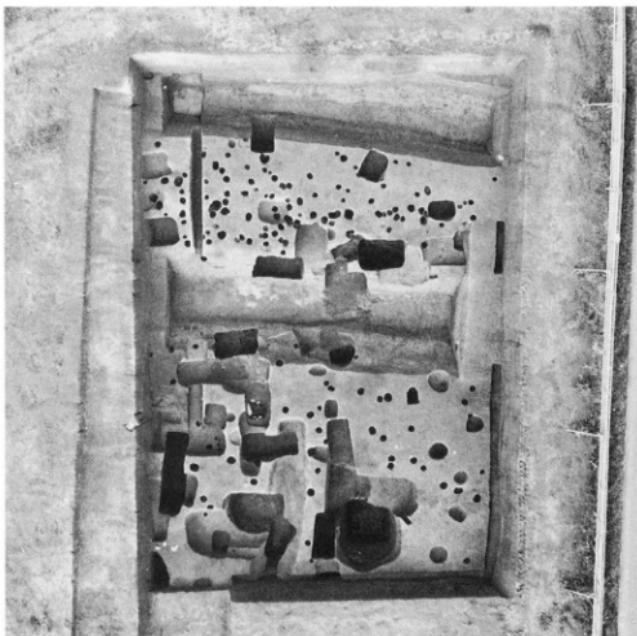


柳生台畠遺跡周辺の空中写真
(昭和31年 米軍撮影)

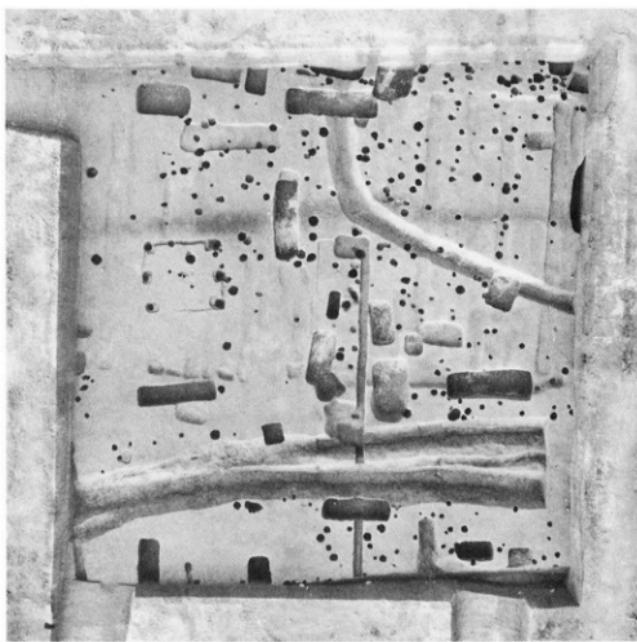


『名取郡北方柳生村絵図』(部分) (文政年間) 柳生寺蔵

写真図版 1



1区全景



2区全景



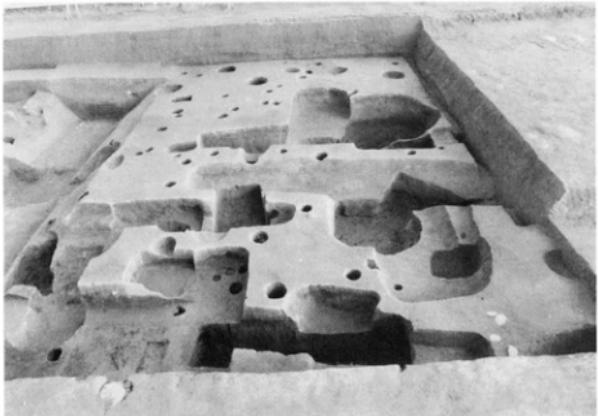
1. 1区全景（南より）



2. 1区遺構検出状況（南より）



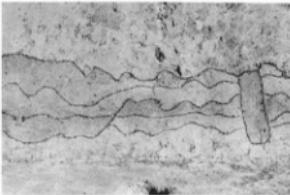
3. 1区南半部遺構検出状況（西より）



4. 1区南半部全景（西より）



5. 1区東壁断面状況（西より）



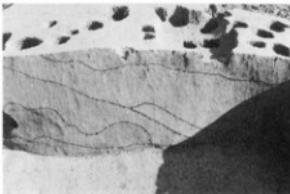
6. 1区東壁断面状況（西より）



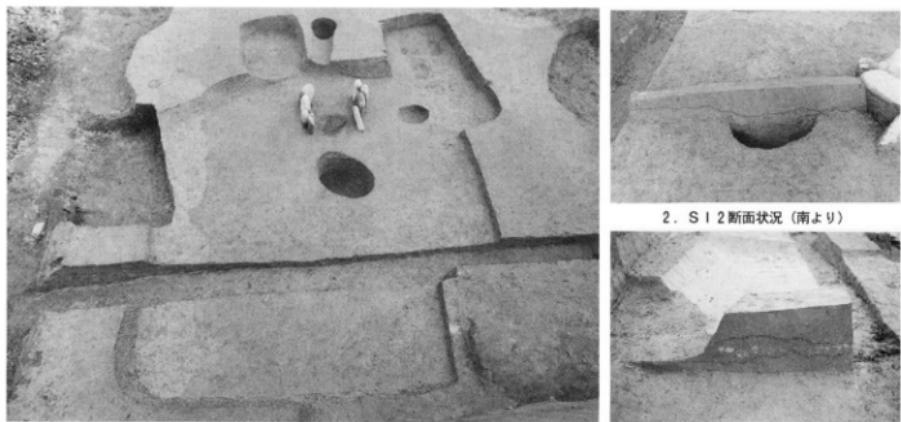
7. 1区北半部全景（西より）



8. 1区（6トレンチ）西壁断面状況（東より）



9. 1区深掘り東壁断面状況（西より）



1. S I 2 完掘状況（西より）



2. S I 2 断面状況（南より）



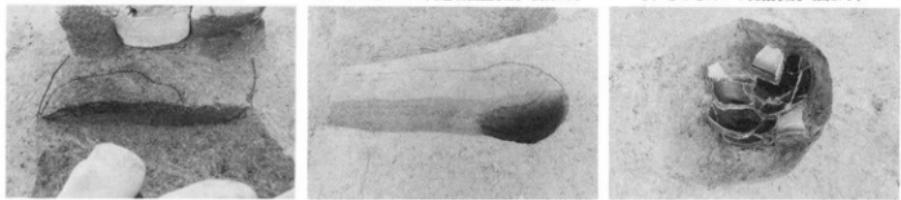
4. S I 2 完掘状況（東より）



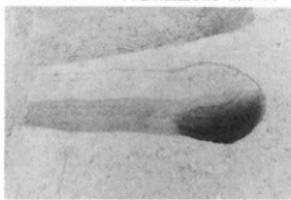
5. S I 2 カマド内遺物出土状況（東より）



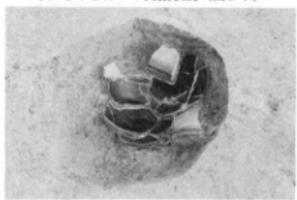
6. S I 2 カマド完掘状況（西より）



7. S I 2 カマド掘り方断面状況（南より）



8. S I 2 煙道断面状況（南より）



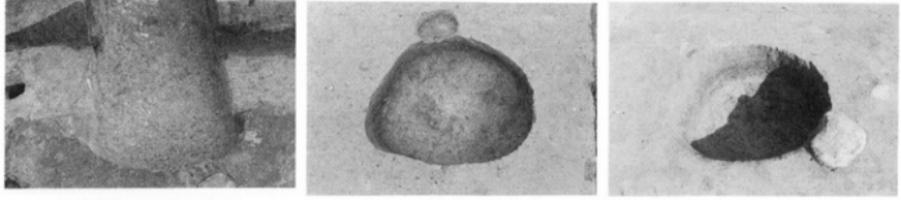
9. S I 2 P 1 遺物出土状況（西より）



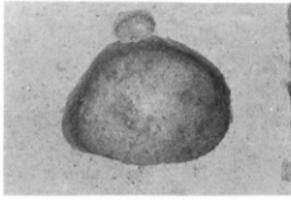
11. S K 17 完掘状況（北より）



12. S K 23 完掘状況（東より）



10. S K 16 完掘状況（西より）



13. S K 24 完掘状況（南より）



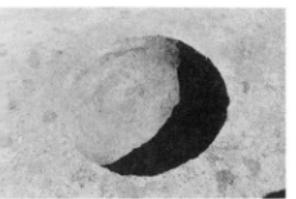
14. S K 25 完掘状況（南より）



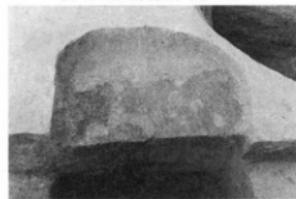
1. SK26断面状況（南より）



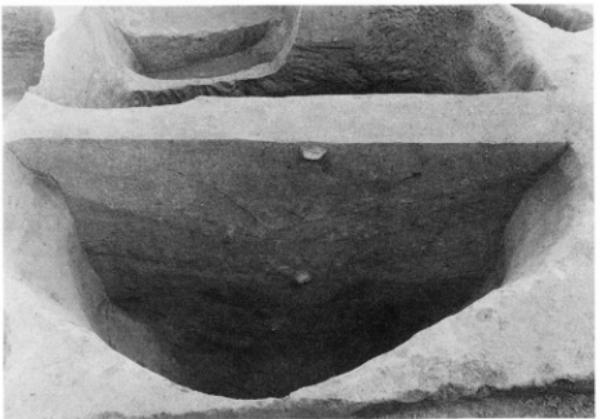
2. SK27完掘状況（南西より）



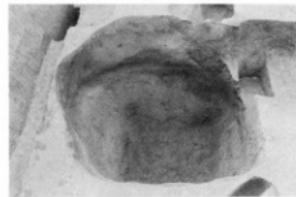
3. SK28完掘状況（南より）



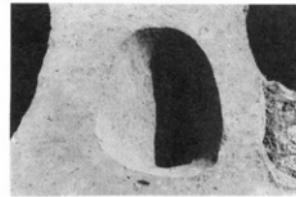
4. SK29完掘状況（南より）



6. SK30断面状況（南より）



5. SK30完掘状況（東より）



7. SK31完掘状況（西より）



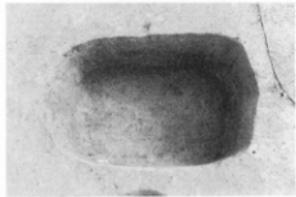
8. SK32完掘状況（東より）



9. SK33完掘状況（南より）



10. SK33断面状況（南より）



11. SK34完掘状況（西より）



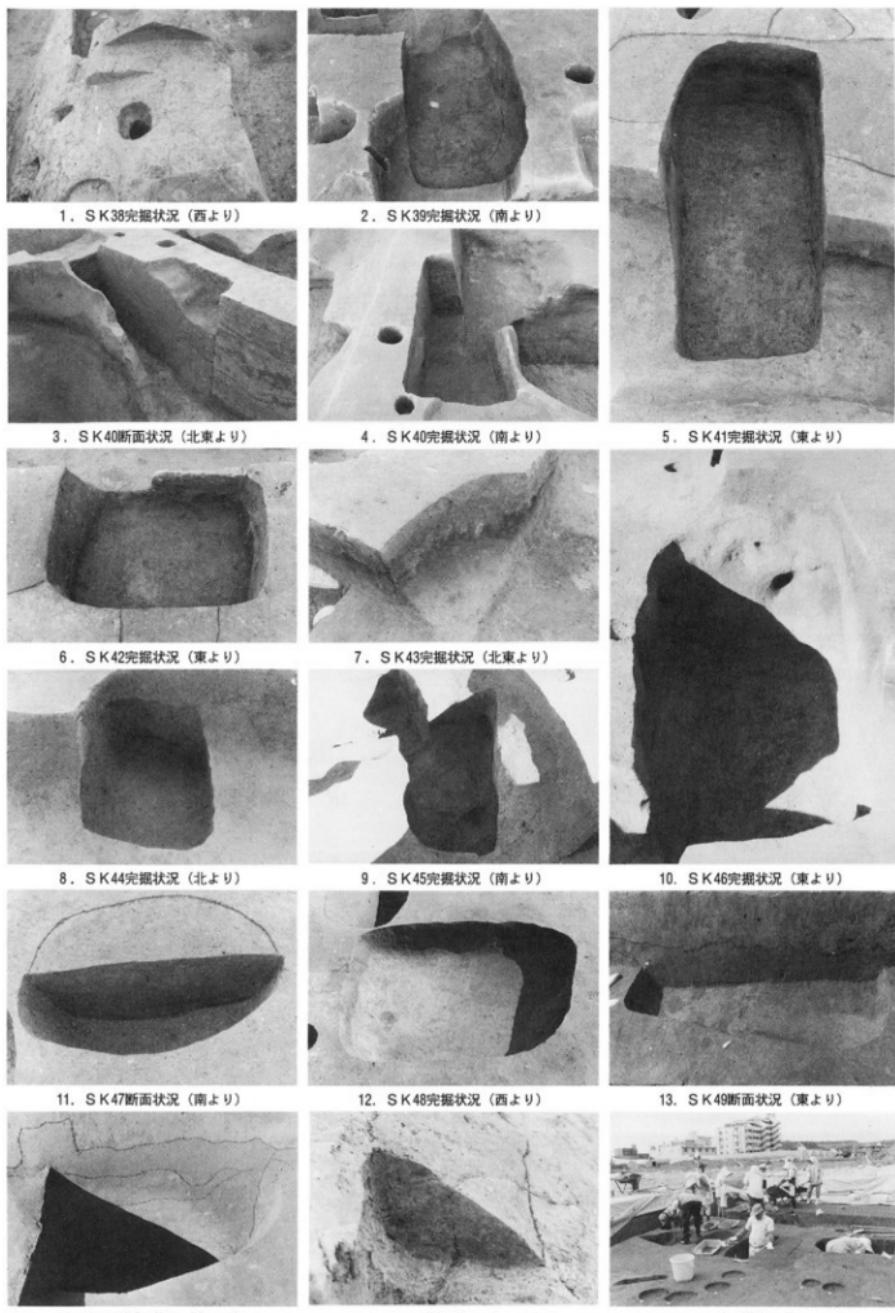
12. SK35完掘状況（南より）



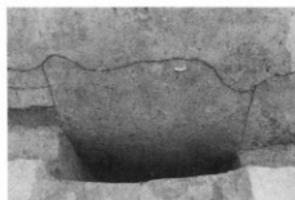
13. SK36完掘状況（南より）



14. SK37完掘状況（北より）



写真図版 6 (1区)



1. SK53断面状況（北より）



2. SK54完掘状況（西より）



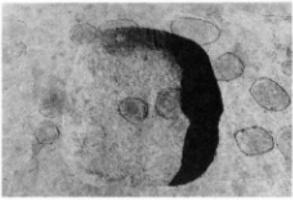
3. SK66完掘状況（西より）



4. SK68完掘状況（西より）



5. SK69断面状況（西より）



6. SK70完掘状況（西より）



7. SK71断面状況（東より）



8. SK72完掘状況（南より）



9. SK71完掘状況（南西より）



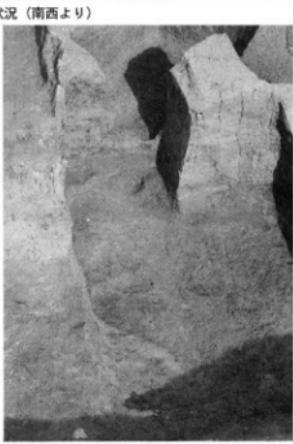
10. SK73断面状況（東より）



11. SK75完掘状況（南東より）



12. SK74完掘状況（南より）



13. SK76完掘状況（南より）



1. SK79完掘状況（東より）



2. SK80完掘状況（北より）



3. SK88断面状況（西より）



4. SK91断面状況（西より）



5. SK91完掘状況（北より）



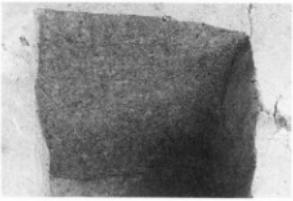
6. SK92完掘状況（南より）



7. SK92完掘状況（東より）



8. SK94断面状況（南より）



10. SK95断面（西より）



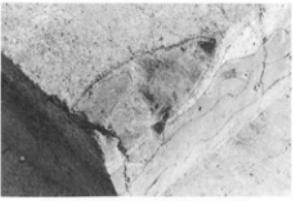
9. SK95完掘状況（東より）



11. SK95完掘状況（南より）



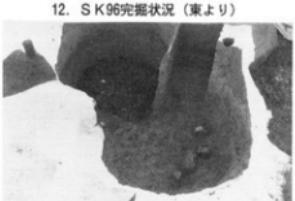
12. SK96完掘状況（東より）



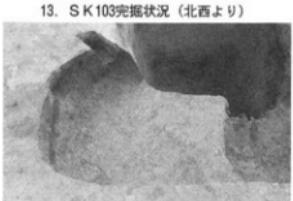
13. SK103完掘状況（北西より）



14. SK105断面状況（東より）



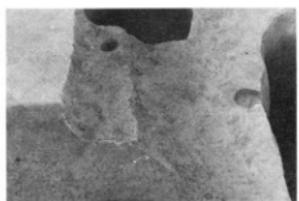
15. SK105完掘状況（北より）



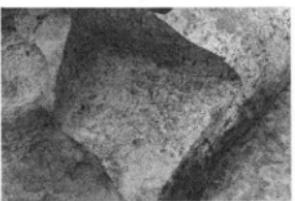
16. SK107完掘状況（北より）



17. 調査風景



1. SK108・109完掘状況（東より）



2. SK110完掘状況（北東より）



3. SK113完掘状況（南東より）



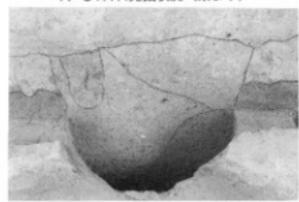
4. SK114完掘状況（東より）



5. SK115完掘状況（南より）



6. SK116完掘状況（南より）



7. SK117断面状況（北より）



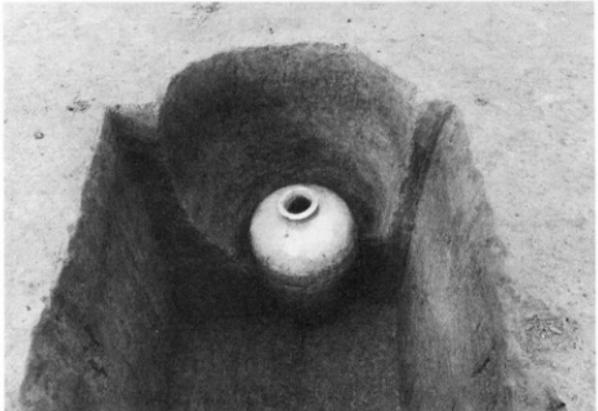
8. SK120完掘状況（西より）



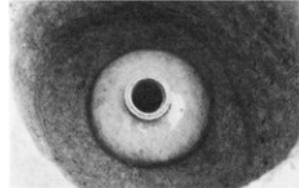
9. SK122断面状況（北より）



10. SK124完掘状況（南東より）



12. P34 瓶子出土状況（南より）



11. P34 瓶子出土状況（西より）



14. P34 挖り方完掘状況（南より）



15. 調査風景

13. P34 瓶子出土状況（南より）



1. 1区SD11完掘状況（西より）



2. 1区SD10完掘状況（西より）



3. 1区南東部II b層下面状況（東より）



4. 2区全景（南より）



5. 2区遺構検出状況（南より）



6. 2区北壁断面状況（南より）



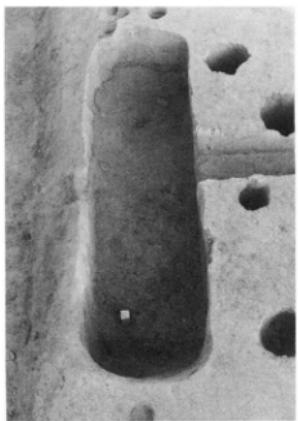
7. S I 1堅穴建物跡完掘状況（西より）



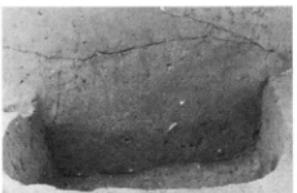
8. S I 1堅穴建物跡検出状況（西より）



9. 調査風景（2区）



1. SK22完掘状況（西より）



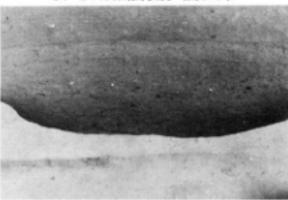
2. SK55断面状況（南より）



3. SK56断面状況（西より）



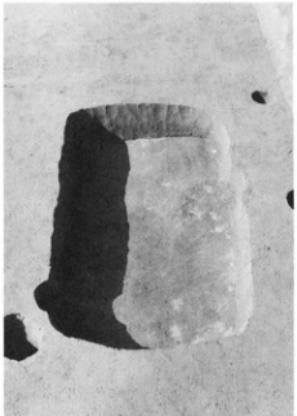
4. SK57断面状況（西より）



5. SK58断面状況（西より）



6. SK59完掘状況（南より）



7. SK60・61完掘状況（南より）



8. SK62完掘状況（東より）

9. SK63完掘状況（東より）



10. SK64断面状況（南より）



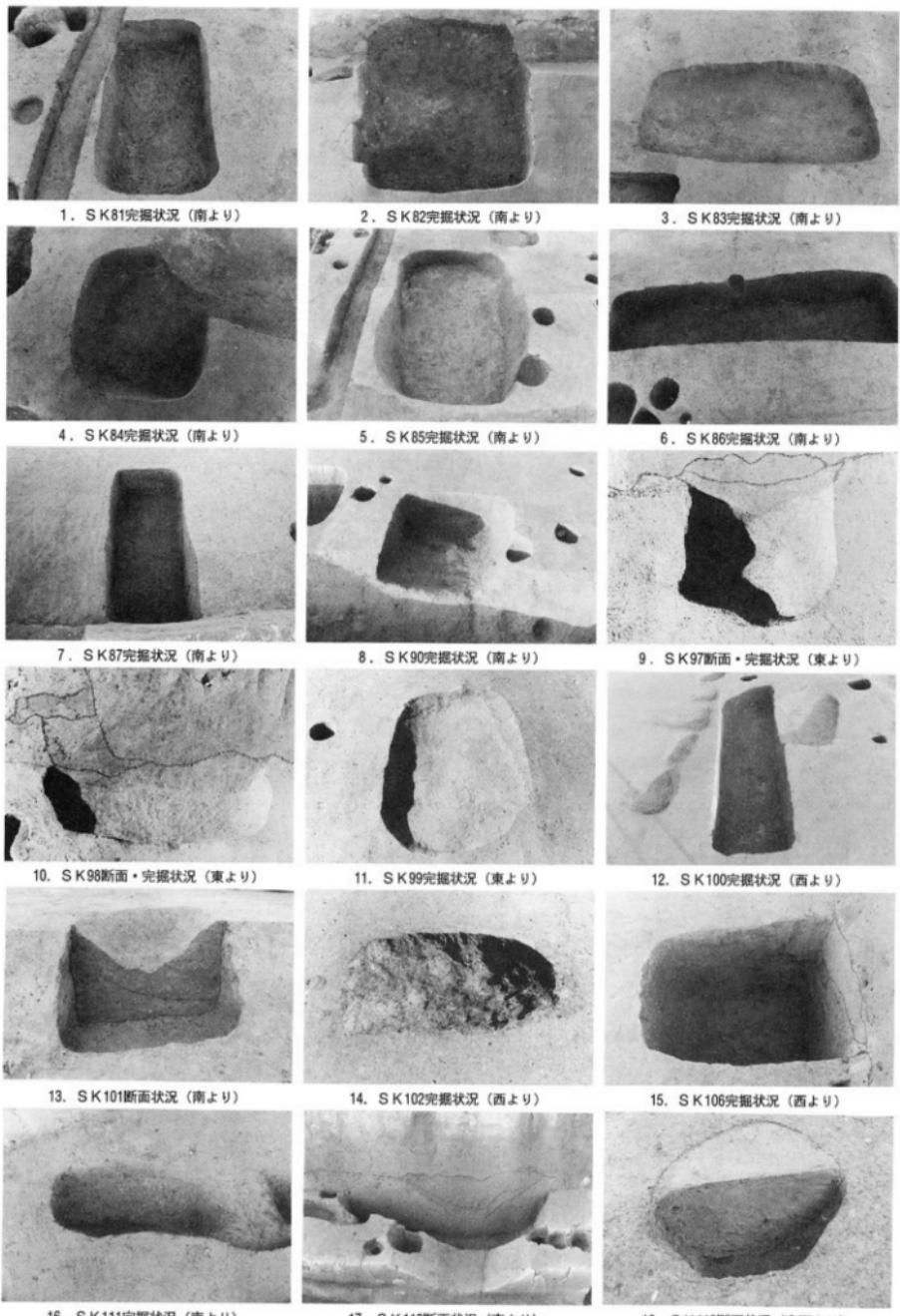
11. SK67断面状況（東より）



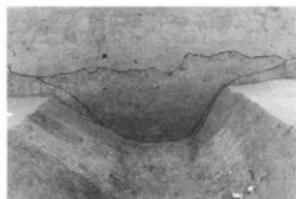
12. SK64完掘状況（南より）

13. SK65完掘状況（東より）

写真図版11（2区）



写真図版12（2区）



1. 2区SD12断面状況（南より）



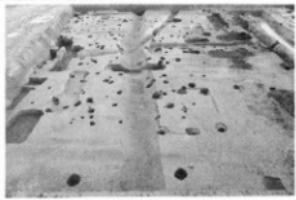
3. 2区SD13~16完掘状況（東より）



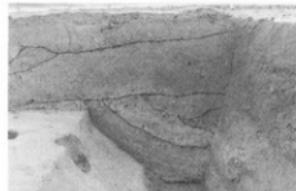
2. 2区SD14a・b・c検出状況（西より）



4. SD14a・b・c断面状況（西より）



7. 2区SD21完掘状況（西より）



5. 2区SD15断面状況（西より）

6. 2区SD15完掘状況（東より）

8. 2区SD21断面状況（西より）



9. 3区全景（南より）



10. 3区北壁断面状況（南東より）



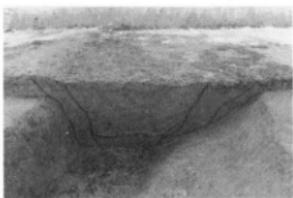
11. 3区北壁東端部断面状況（南より）



1. 小溝状遺構群完掘状況（南より）



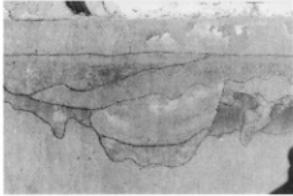
2. 3区SD23・25断面状況（南より）



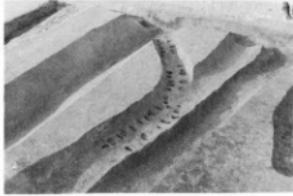
3. 3区SD23・25・26断面状況（北より）



4. 3区SD23・26断面状況（南より）



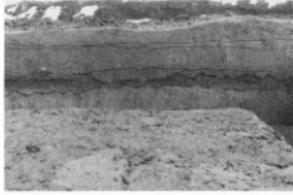
5. 3区SD25断面状況（南より）



6. 3区SD23底面状況（南東より）



7. 4A区東壁断面状況（西より）



8. 4A区東壁断面状況（西より）



9. 4A区SK125断面状況（南より）



10. 4A区SK126完掘状況（南より）



11. 4A区SX1碑出土状況（南より）



12. 4A区SX1断面状況（東より）



13. 4区SD10完掘状況（南より）



14. 4区北半部SD10検出状況（南より）



1. 4 A区SD10断面状況（南より）



2. 4 B区SD10断面状況（南より）



3. 4 B区SD10底面状況（東より）



4. 4 A区SD11完掘状況（南より）



5. 4 A区SD11断面状況（南より）



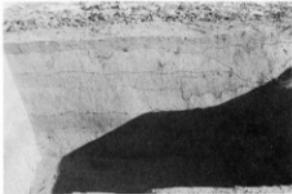
6. 4 A区小溝状遺構群完掘状況（南より）



7. 4 B区II層水田跡擬似畦畔完掘状況（西より）



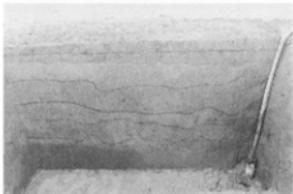
8. 4 B区II層水田跡擬似畦畔完掘状況（西より）



9. 5区東壁断面状況（西より）



10. 5区SD29完掘状況（東より）



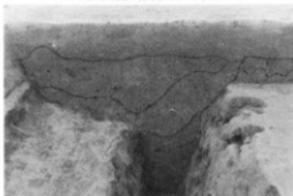
11. 6区西壁断面状況（東より）



12. 2トレンチSD1・SK1完掘状況（南より）



13. 3トレンチ全景（南より）

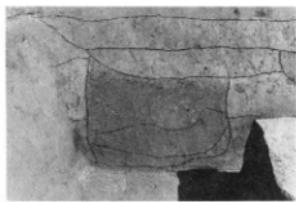


14. 3トレンチSD2断面状況（北より）



15. 調査風景（12トレンチ）

写真図版15（4～6区・試掘トレンチ）



1. 3トレンチSK 5断面状況（南より）



2. 3トレンチSK 7・8完掘状況（東より）



3. 4トレンチSD 3・4a・5・6完掘状況（西より）



4. 4トレンチSD 4a・b断面状況（東より）



5. 4トレンチ試錆区SD 5・6検出状況（南より）



6. 5トレンチSD 7・8・9完掘状況（西より）



7. 5トレンチSD 7・8・9断面状況（西より）



8. 6トレンチSD 10断面状況（西より）



9. 6トレンチSD 11完掘状況（西より）



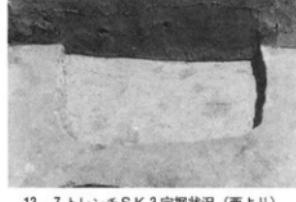
10. 6トレンチSK 10・11・12断面状況（東より）



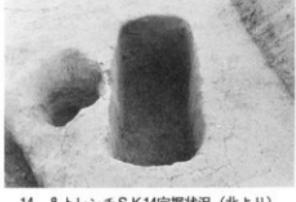
11. 6トレンチSK 123断面状況（南東より）



12. 7トレンチSK 2断面状況（東より）



13. 7トレンチSK 3完掘状況（西より）



14. 8トレンチSK 14完掘状況（北より）



15. 8トレンチSK 15完掘状況（南より）



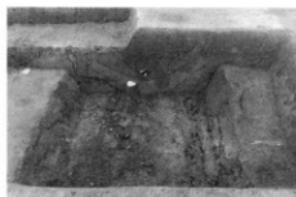
16. 8トレンチSK 22完掘状況（西より）



17. 9トレンチSD 17完掘状況（南より）



18. 調査風景（5トレンチ）



1. 10トレンチSD18完掘状況（東より）



2. 13トレンチ東壁断面状況（西より）



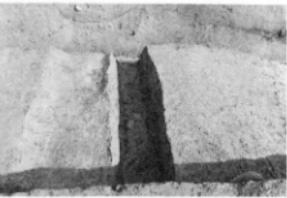
3. 13トレンチSD19完掘状況（南より）



4. 14トレンチⅢ層上面小溝状遺構群検出状況（南より）



5. 15トレンチ東壁断面状況（西より）



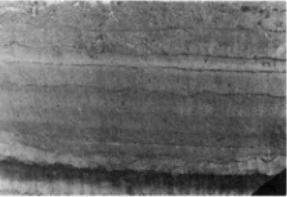
6. 15トレンチSD20・29完掘状況（西より）



7. 16トレンチ東壁断面状況（西より）



8. 16トレンチ小溝状遺構完掘状況（南より）



9. 17トレンチ東壁断面状況（西より）



10. 18トレンチ溝跡検出状況（南より）



11. 19トレンチ溝跡検出状況（南より）



12. 20トレンチ溝跡・土坑検出状況（南より）



13. 21トレンチ溝跡検出状況（西より）



14. 23トレンチ溝跡検出状況（南より）



15. 24トレンチ溝跡検出状況（東より）

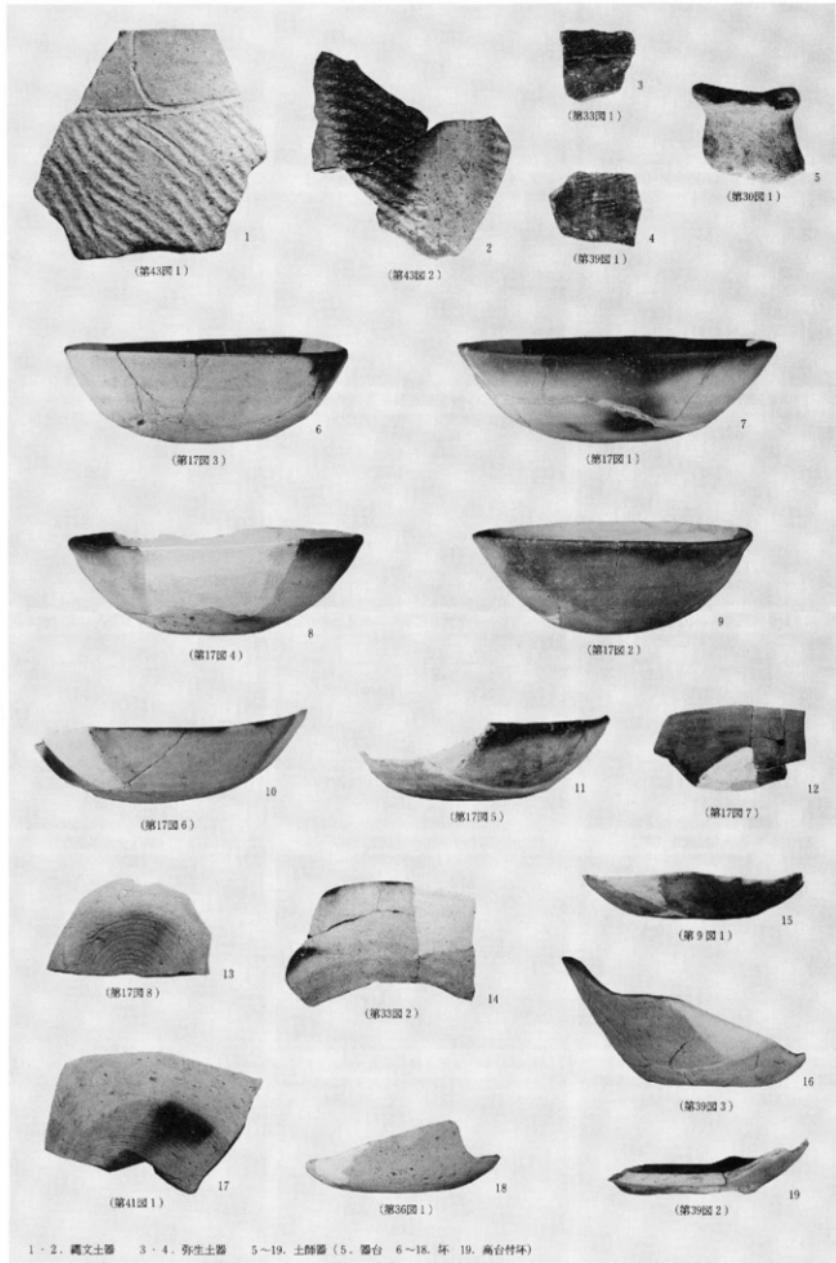


16. 25トレンチ溝跡検出状況（南東より）



17. 29トレンチ溝跡・土坑検出状況（南より）

写真図版17（試掘トレンチ）



写真図版18



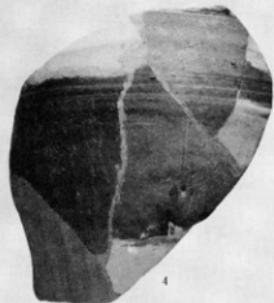
(第17図10)



(第18図2)



(第18図1)



(第17図9)



(第18図6)

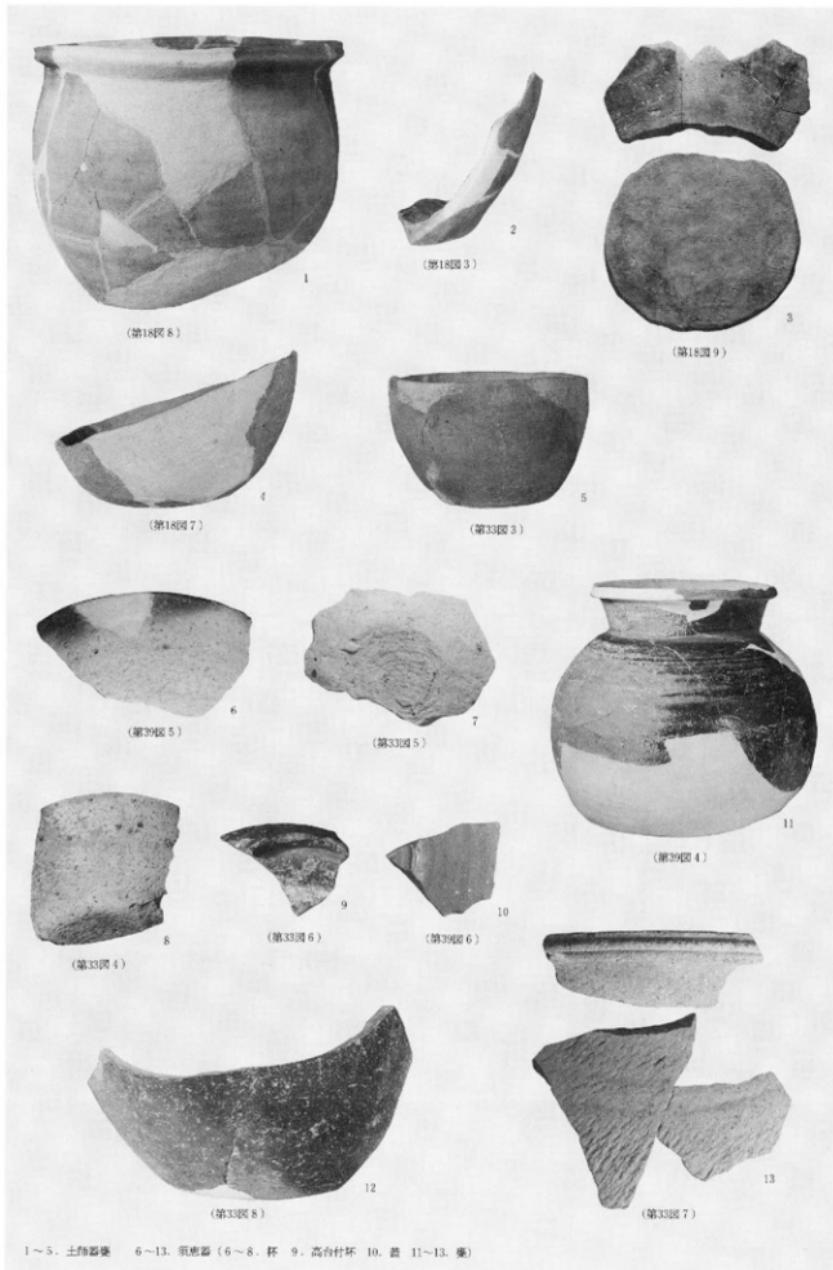


(第18図4)

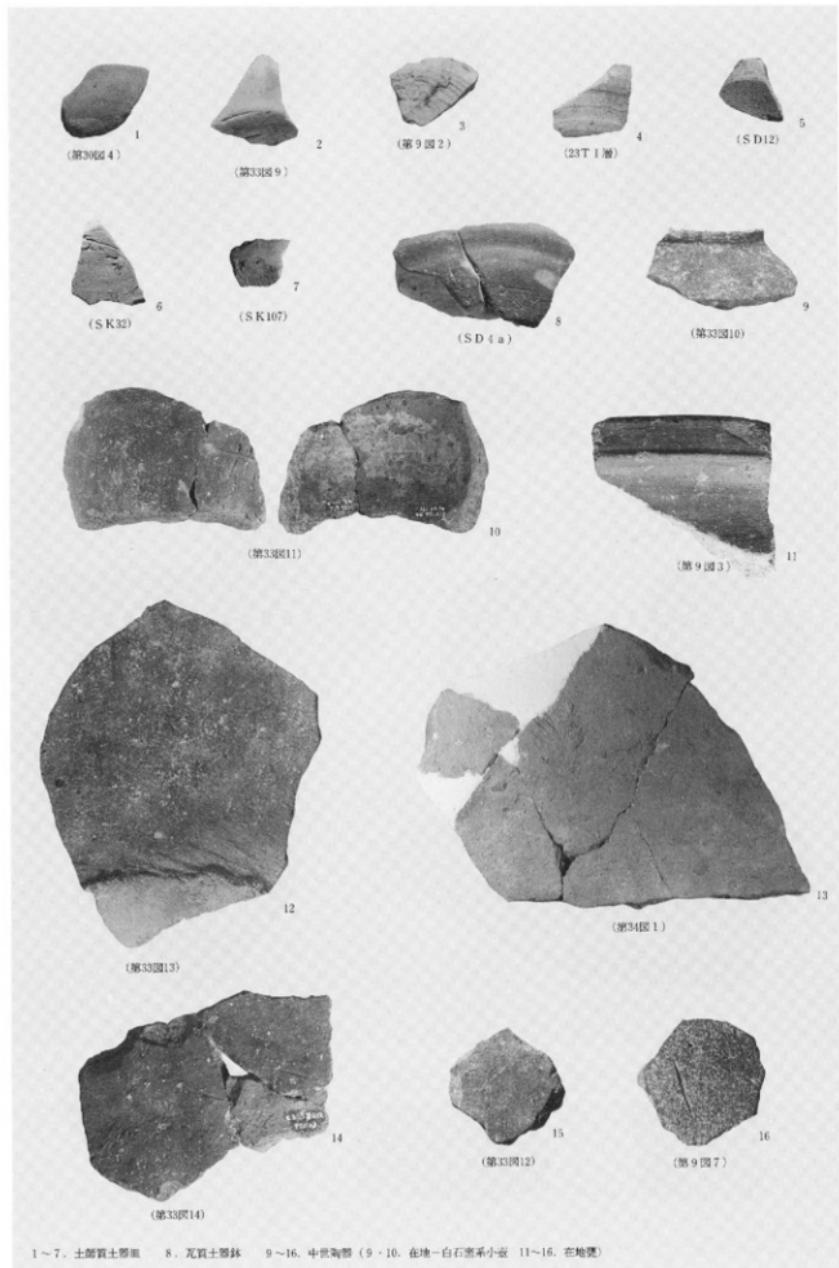


(第18図5)

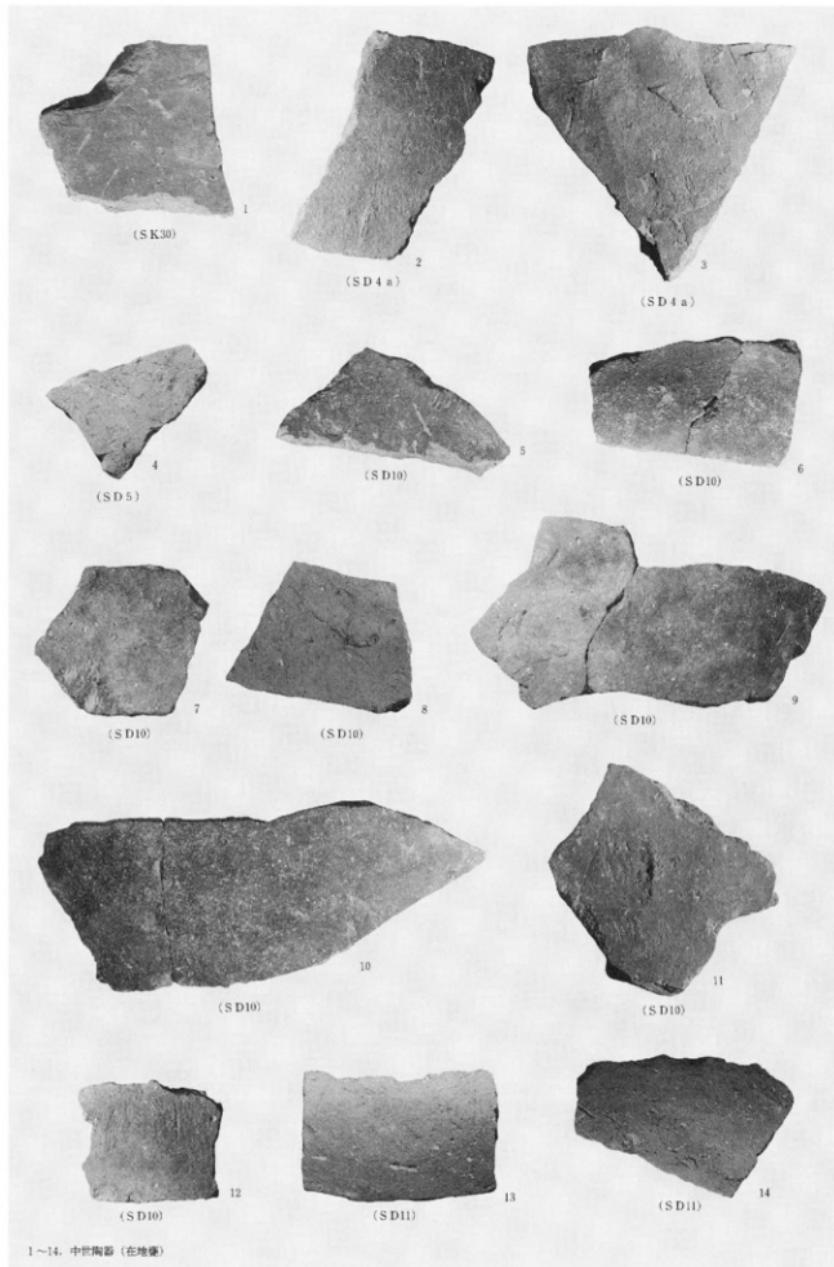
1～7. 土器



写真図版20

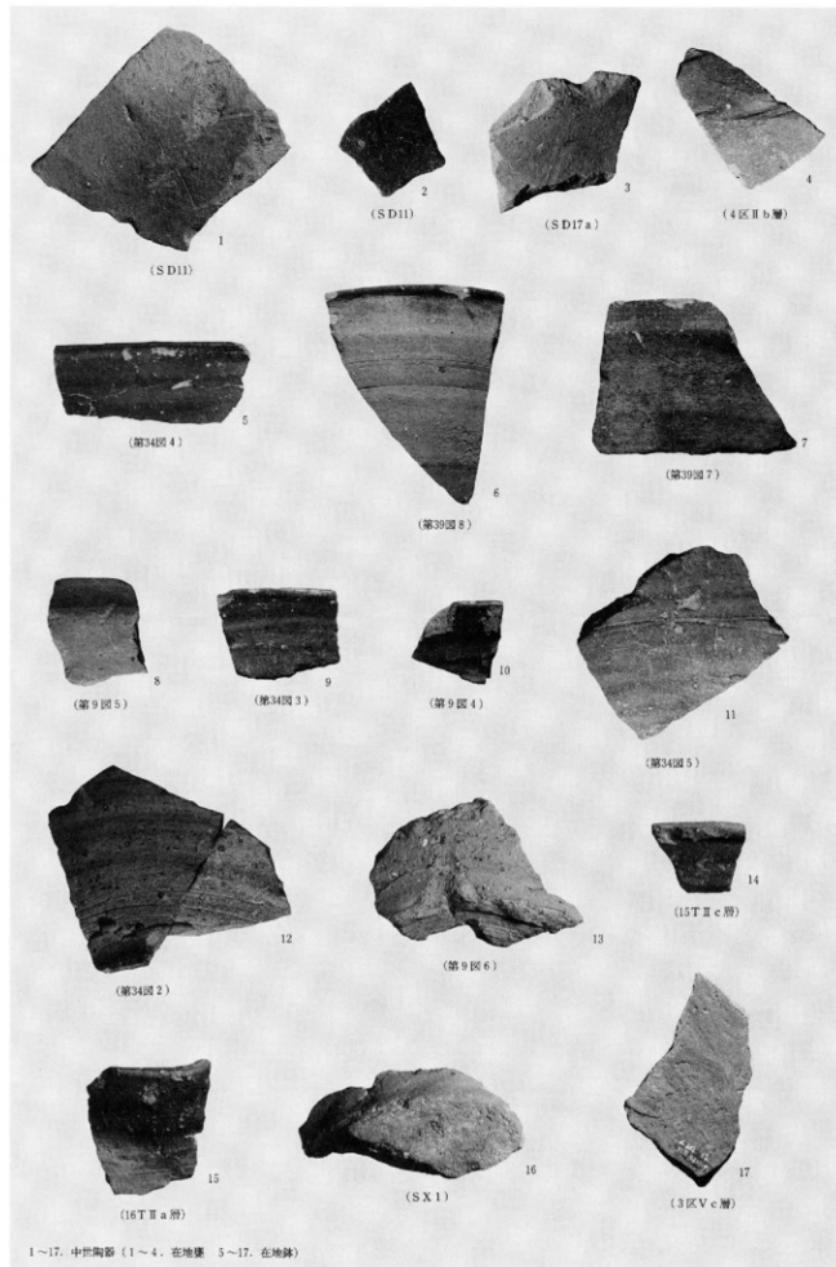


写真図版21

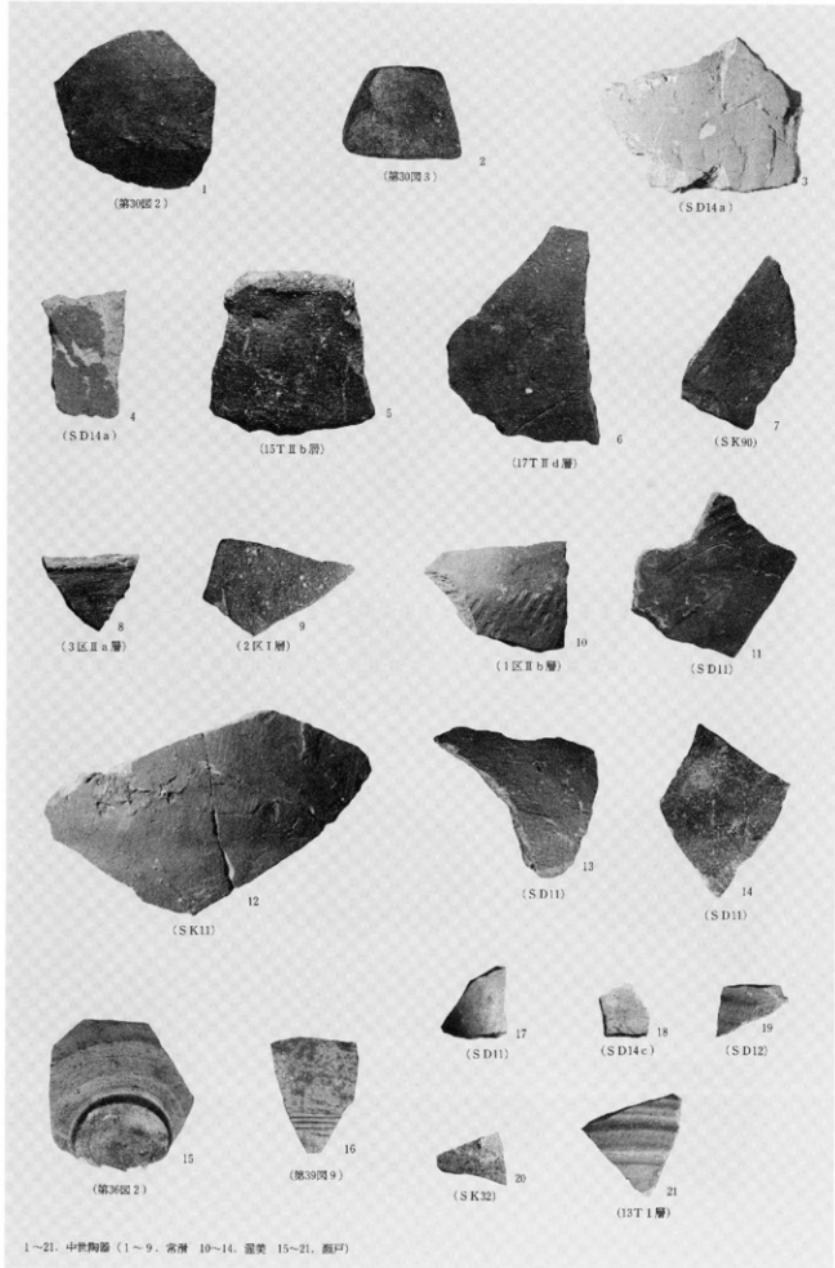


1~14. 中世陶器（在地蔵）

写真図版22

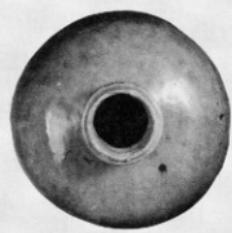


1~17. 中世陶器 (1~4. 在地層 5~17. 在地跡)



1~21. 中世陶器 (1~9. 常滑 10~14. 窓美 15~21. 鹿児)

写真図版24



(第31図1)



(第34図6)



2



(第39図10)



4

(第9図8)



(第9図9)



5



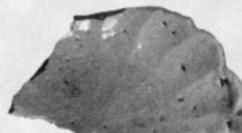
(第34図7)



6



(第9図10)



(第34図8)

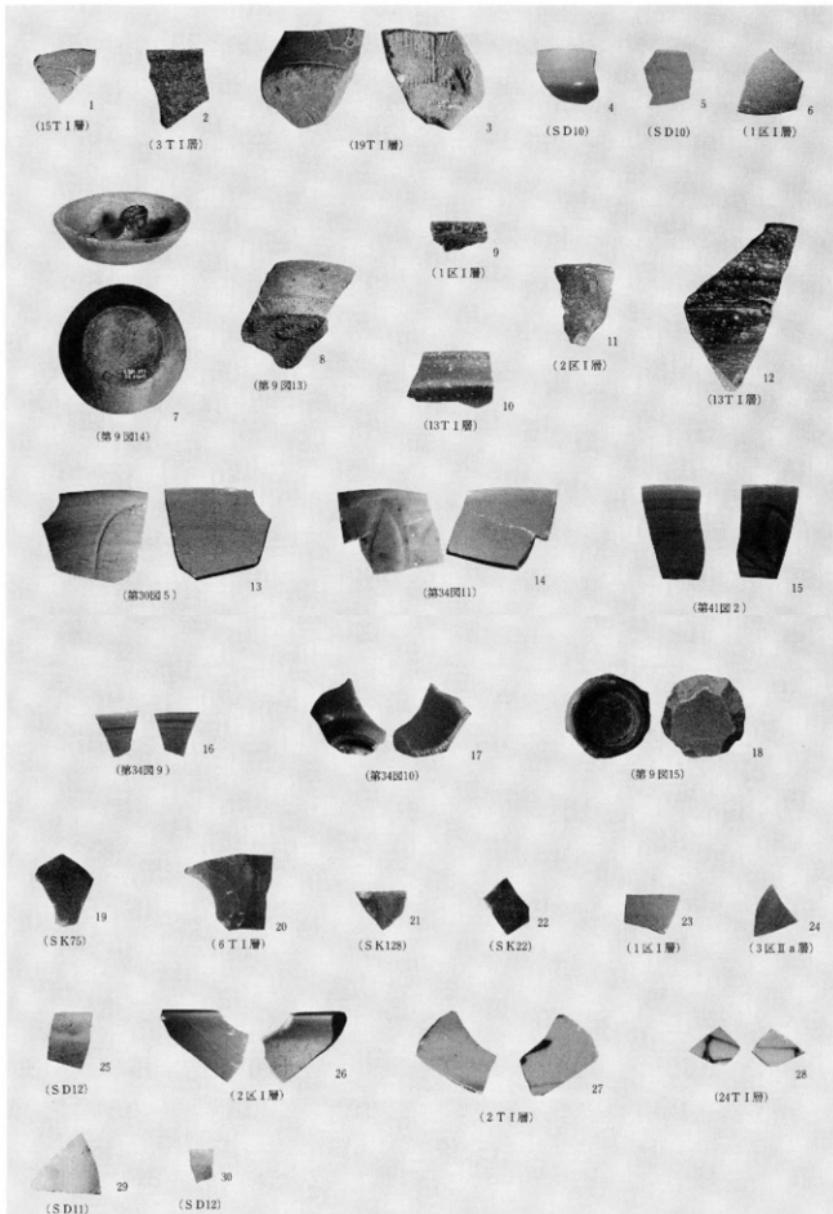


(第9図11)



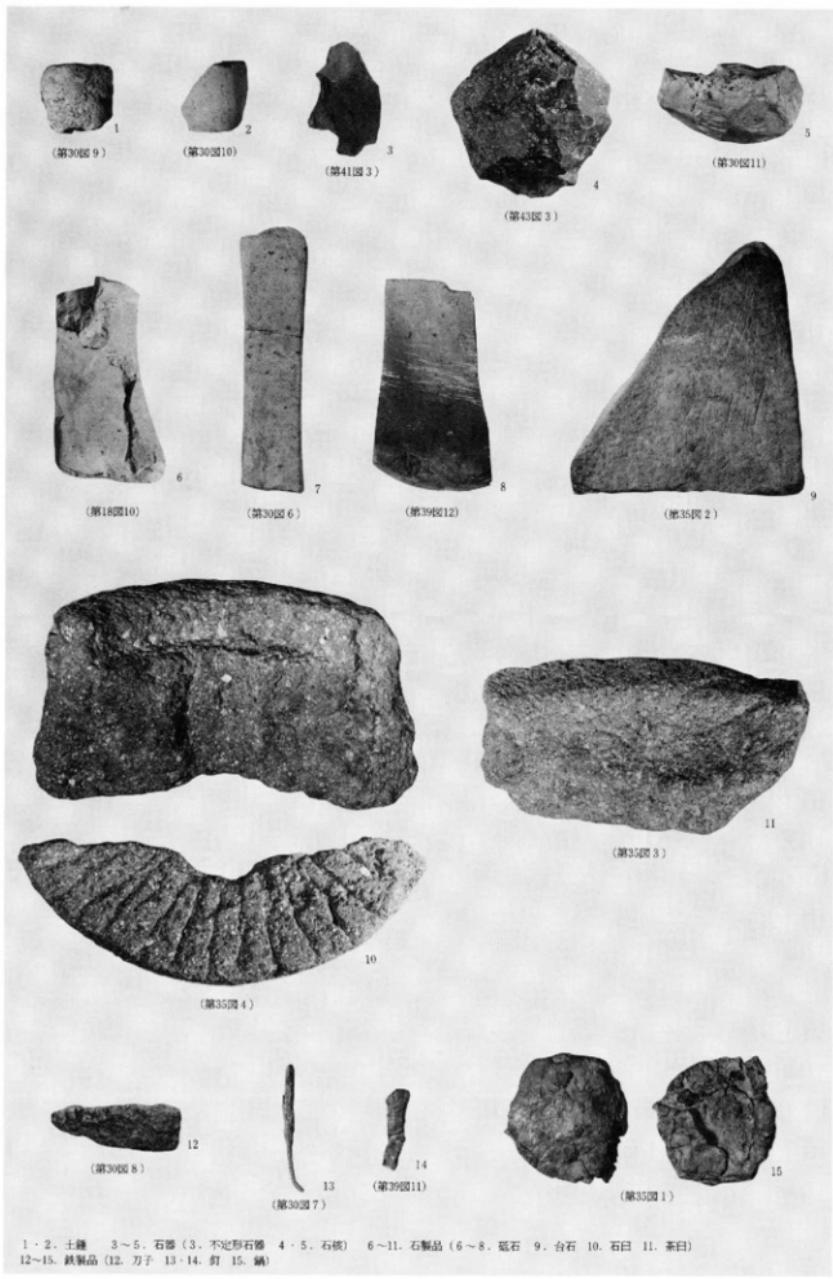
(第9図12)

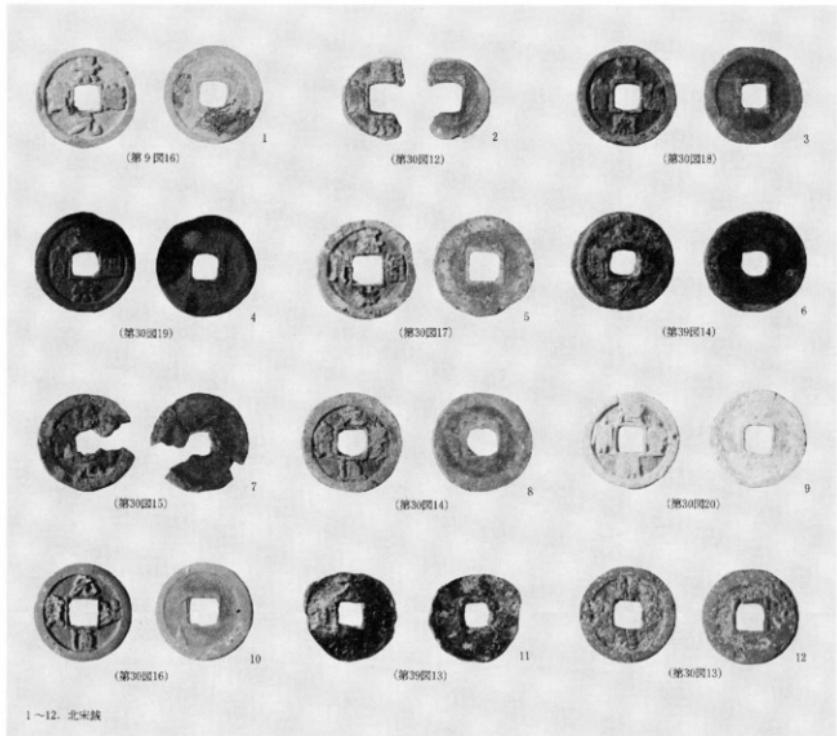
1~10. 胸器 (1. 肩片 2~6. 滅口・夷謨 7~10. 美濃-志野)



1～12. 近世漆器 (1. 唐津 2・3. 鰐田岸窯系 4～6. 大膳相馬 7～11. 梶 12. 產地不明)
 13～25. 中国漆器 (13～24. 青磁碗 25. 白磁盤) 26～28. 肥前 (26. 青磁 27・28. 染付) 29・30. 漆器 (產地不明)

写真図版26





1 ~12. 北宋錢

写真図版28

報告書抄録

ふりがな	やなぎゅうだいはたけいせき							
書名	柳生台畠遺跡							
副書名	(仮称)柳生小学校建設関係発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第230集							
編集者名	佐藤 淳							
編集機関	仙台市教育委員会							
所在地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL 022-214-8893~8894							
発行年月日	1998年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
柳生台畠遺跡	仙台市太白区 柳生字台畠	市町村 04100	遺跡番号 01363	38°11'50"	140°52'30"	1997.08.01 1998.01.20	2,200m ²	小学校建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
柳生台畠遺跡	屋敷跡 墓跡 水田跡 畠跡	縄 平 中	文 安 世	堀跡・溝跡 掘立柱建物跡 土坑・竪穴建物跡 竪穴住居跡		繩文土器・土師器 須恵器・土師質土器 陶器・磁器 古銭・石製品	さまざまな形態の土坑墓が密集している。小穴に納められた古瀬戸の瓶子が完全な形で出土した	

仙台市文化財調査報告書第230集

柳生台畠遺跡

—(仮称)柳生小学校建設関係発掘調査報告書—

平成10年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7番1号

文化財課 TEL 022(214)8893-8894

印刷 針生印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町1-38

TEL 022(288)5011

